(一一) ふたりーひつれ
(一二) にーの
(一三) 次に「是も神代の始めなり〳〵」と入。
(一四) あふーさつて
(一五) 今日ー今晩(四)
(一六) 舞殿ハーまいてんの御前のこはんは
(一七) 人ー御前
(一八) あたつて舞ひさぶろふー相あたりてまひ卟
(一九) はじめに「今晩の御前の御伴は」と入。
(二〇・二一) よいちーりやうじ(豐)・ヤウセ(四)・めうセ(白)
(二二) ならバーに相當て舞卟ハ、
(二三) ひやうーT
(二四) とゝのひてーおんそろへ(豐)
(二五) はやすべしーしつ〳〵とおんばやし卟へ(豐)・ひやうすべし(四・白)
(二六) ふひはあつたー「つゝみはきおん」の次にあり、熱田の明神とす。
(二七) 以下ーさべひやうしは北野の天ま天神の御役なり、鳴雷のごさそくなれは、たんたなれやさてもさかれや、おのゑの松とるいかつちも、こゝも高天の原なれバ、左ハ御天末、右ハ山王、うしろはゆわかみ、前ハかのこ。あつて、さかきハかみの木なれバ、おの〳〵とり〳〵そ、かんざしたりや。

(一五) 比立内本の天女

天　女

中うたひのはじめに、他にはない詞章がある。

七日行、はまのまさこの數々も、なを久敷神のみよかな。
中うたひ　むらくもや、や中のかねの、をとすきて、ひとつある身ハ二つにも、二つ有身ハ三つに四つ、神のをかくしよそなから、またよき事申そや。
さつて日本の神々ハ、せんかうじの女來の堂にこんりのす。女來をなくさめもさんとて、どんでんのにはに、ざをかざり、さんこの月もあきらかに、あらかね…

(一六) 富根本の天女

女

幕出　やう〳〵急き行ほとに、たかまのはらにつきにけり。
中諷　抑日本國の神々は、高天の原に集りて、神遊ひをなされけり、三更の月に、くまなく、庭に御座をかざり、からかみ、さいはらうたひつゝ、中にも諏訪の明神は、年は積りて、老の波、昔、久しきしやうこんを、かんがと上てうたふたり、始來て、高天の原に神遊び、あそばん神はさらになし。
扨こそ、今よひの舞は、いつくしまの明神御前に御はんにとつて舞さぶろふ。
さてはさよふにゆハゝ、ひよしに、ひよしとりそろへ、諷へははやすべし、太鼓は戸かくし、笛は熱田、金さゝらは北野の御神、天滿天神、鳴いかつち、髮も高天の神遊ひ、左は天ま、右は山王、後は石神、前はかのこ、さつて、榊は神の木なれは、をのいの鳥とてかさしたり。
鳥の海、いかなる神の誓ひにて、天の釣船かよわさるもの。

(一七) 幸屋渡の天女

かどを冠り、赤と青の二筋の布をより合せたものを片襷にした、振袖、女帶の支度のものが、扇二本を採つて出る、はじめ一本は、えりにさし、車扇を使ふときに二本になるといふ。

七、赤　間

あかまひと言つてゐる所もある。番樂にのみ詞章をのこしてゐる舞であるが、舞ひ方が難かしいためか、今は殆ど演じ得なくなつてゐる。たゞ、比立内には、まだ舞ふ人がゐるかも知れない。

これの舞そのものは、妙なことに、田子、江刺家、葛卷等の五拍子の神樂には、櫻子と稱して、それの詞章と共に傳へられてゐる。さうして田子では、その實演にも接し得たものであつた。櫻子といふ曲は別にある。何故この曲と詞章をとり違へたかは、思ふに双方に「筑紫人」といふ言葉が出てくるので、何かの拍子に間違へたものであつたらう。これも古い曲の一つであつたらしい。

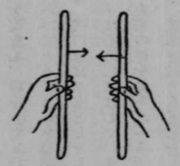
筋は、八月十五夜の月に、筑紫彦山ヶ嶽の天女が連歌を一とをり興行し、太鼓一番を演ずるといふのである。そして、桴の曲取りをしながら太鼓を叩きつゝ舞ふ。うつとりとする程、舞姿の美しい舞であつた。

(一) 田子の赤間 (田子では櫻子と稱す)

幕出しで、かざし、女面、振袖の天女が、桴を二本採つて出る。

ハラ、ハラ、
といふ胴取りのかけ聲。
(實は、はじめ袖をひろげて出、地舞一まはりあり、言立が濟んでから桴を採るのであるが、實演の折には地舞は略されてゐた。すぐに太鼓の段を演じてくれたのである。)

この桴を兩手にとつてかまへ、腰つきをやはらかに、右方に左方にと振あり、(このとき樂屋方のものが、太鼓を背負つて正先にうづくまる。胴取はその裏側を叩いてゐる。)扨て進み出、胴前で、



(イ)

(1)右桴を上げて順にめぐり、次に左桴を上げて逆にめぐる。(この順逆をまはりもどしと言ふ。このまはりもどしは一度ならず、二度三度、時には七度位もやることがあるといふ。)次に桴を前方に揃へて出し、右桴左桴を同時に逆り投げて左右を取かへる。(イ圖)そして太鼓を叩く。

(2)次に前同樣まはりもどしをし、右桴を內側、左桴を外側にしてロ圖の如く交差して立て、これを、右桴を押し下げて、上下を顚倒させ、(持つた手が上になる)次にこれをひよいと離して下をとる。拍子に合せてこれをしつゝ順にめぐり、又逆にめぐる。

(3)次に同樣まはりもどしをし、次に又同樣に、兩桴をハ圖の如く立て、今度は左桴を手前にまはして上下を顚倒させ、同じく下をとりつゝ順逆にめぐる。

(4)次にまはりもどしをし、太鼓を叩き、振あり、又叩き

(5)次にまはりもどしをしてから一の腕を交差し、桴を立てゝ持ち、兩桴を離して腕の交差をとき、桴を取ちがへてとる。これを順逆にめぐりつゝ拍子に合せてする。

(6)次にまはりもどしをし、桴を交差し(ニ圖)これを右手は左方に、左手は右方にまはして、腕をもねぢり(ホ圖)桴をはなし、腕をなほして左右の桴を持ちかへる。この樣にしつゝ順逆にめぐる。

(7)次にまはりもどしをし、桴を握つたまゝ右手をあげ、桴をはなして腕の關節のところまでころばしてとり、左桴も同樣にしてとり、これを交互にしつゝ順逆にめぐる。

(8)まはりもどしをして兩桴をかまへ、桴を合せて太鼓を叩き、かまへ、次に一本一本に叩く。

(9)次にまはりもどしをし、桴を二本揃へて右手に持ち、左手は腰にしこの兩桴を、右手でカツキ取にし、掌を上にして持ち、桴を離して、上から押へ取る。(これをしつゝ順逆にめぐること二度づゝ、あと、まはりもどしをし、桴を拜する樣にして置き、太鼓もなほし、次に扇をとつて、くづしを舞ふ。このくづしの舞も、型は大體いつもと同じ乍ら、特に美しい樣に感ぜられた。

この舞を舞つたのは稻村德松氏であつたが、桴をとり落す樣なこともなく、まことに樂々と舞つて居られた。

(二)　二階本の赤間

臺本のとゝのつてゐるのはやはり二階本である。

あかまひ

幕出　へよふ〳〵いそぎ行ほとに、赤間の關に著にけり。

中言立　へ月も月、ところもところ、つくし人、やらはつがしや田舍人、よふ〳〵急ゆくほとに、あかまのせきに著にけり。

へ爰に暫し、立やすらひて、當所の行客をも、待ばやと、そんじけ。

へしかも今夜は、八月十五夜のことなれハ、月もところも、さもおもしろげにてけが、連歌を一折、興行なさるべくにてけ。

へなに、哥連歌とハ、しらずよのふ。

へ唯々、如何樣にも、御掟されけへ。

へ實にや實に、さすれしことの、ありしもの、其昔、小野の小町の詠し歌をだに、女のよゝし哥なれハ、さけてちからは、よさきと聞、あかまのせきに月をこそ見る。

ほの〳〵と、明石か浦の朝ぎりに、島かくれゆく、ふねをしそおもふらんと、水にこふある、照る月波の、面にあそばんかゝハ更になし。

へあゝら、筑紫彥山が嶽の、天女御前にて、ましまさハ、大鼓一番興行なさるべくにてけ。

へ夫ハ左にてましまさバ、法と拍子を調へて、しづ〳〵と、御囃子けへ。

三五夜中は、新月の色。

二千里の外に、故人の心。

げにそのこゝろ、誠のことよ、有明月の〳〵、秋のよに〳〵、ながとのうらに、舟をとめて、船をともせぎ、ともせぎ宿、唯江に敷ける、蒼波颯々の、凉しゝをうけて、まことの事よ、實に其事よ、古事にたはふれて、よつきをよせて、琴の音ハ松風、有明月の〳〵、雲は殘りて、くも隱れして、面影はのこりて、出にけり。

(三)　西長野・豐川本の赤間

あかま　(底本は西長野本、傍書及考異は豐川本に依る。)

幕出　(旅の衣に鈴掛の露けき袖をしぼるらん)忍びがくれのわか姿〳〵、月にもかげはうつらざるらん。

謠處　月も月、處も處、つくしげの、あらはつかしのいなか人、日もかさなりて行程に、あかまの關にも付にけり〳〵。

(是もはやや〳〵急き行程に、あかまの關なかどのうらにも付たると存けい。)しかも今夜は、八月十五夜の事なれば、月も所も、さも面白げにけ程に、連歌を一トおり、かうぎやう可被成ニ而けい。

なに連歌、〳〵とはしらず〳〵ニてけ。

(いかやうにも御あそばせけへの。)

げにもげにわすれた事も有しもの、(其)そうれ昔、小野小町のよみし歌をだに、女のよみし歌なれば、わけて力はよわきと聞、そうれ上ゝほのぼんのと〳〵、あかしが浦の朝きりに、鳴かくれ行く舟

（考異）（一）うへにてましまさば―ヘソレつくし彦山ンがたけのてんにんにてまし〳〵ゆかや、つくし彦山がだけのてんにんにてまし〳〵ゆハ、

（四）富根・根子・比立内の赤間

富根、根子、比立内のは、妙な語が共通してゐるところを見ると臺本が同じであつたらしい。しかしやはり小異がある、次には富根のを底本にして誌しておく。尙根子ではこれを月見女と稱して居り、ばちもこちらではボンボリとて、綾ばちの兩端を總にしたものを用ひてゐた。比立内ではあかまひといひ、やはり桴を持つて太鼓を打ちつゝ、綾をとつて舞ふといふ。

山伏神樂・番樂

（影のあそばん神はさらになし）をしつゝ水のおもひに出る月なみの。

うへにてましまさば、太鼓一番御遊ばし卟への。

あら左樣にてましまさハ、はうど拍子をとゝのへて、しつ〳〵と御はやし卟へ。

三五夜中の新月の色、二千里の外に古人の心、實に其頃は、秋の夜の、長門の浦に、舟打とめて、舟のともへに、やとりて、しやうはうさつ〳〵のすとしみを、たもつ琴の音、松風吹きよせて、しんたんたんまにたまふれて、よぎをよろへし、有明月の、雲に登りて、雲かくれして、かたらはのこりて。うせにけりっ有の通り三五夜中よりくり返すなり。

（一）はじめに左の如くあり、「よふ〳〵いそき行ほとに〳〵あかまのせきにいそきゆくなり」（根）

（二）次に、「しんぱし立やすらひて、當所の道行人をまたはやとも存卟」とあり（比）

（三）この件りーひこさん天人こもりてまします、天人こもりてましまさば、大鼓壹ばんかうぎやう可被成（根）・比立内本には、

赤　間

（傍書イは根子本、比は比立内本とす。尙比立内のは、所々文字が不明なので重要な部分のみを參照す。）

幕出　（一）月も月、所も所、つくしみの、あらはつかしの、みなかみや、やう〳〵急き行程に、あかまの關につきにけり。

中うた　漸々急き行程に、（つくし）赤間の關につけば、ついたとも、存じ卟、（二）しかもこよひは、八月十五夜のこ

となれば、月夜も所もよも、（日頃イ）（さもイ）けにおもしろけにて卟ほとに、そふれによつて連哥一トおりこふきやうなされべく。（あそばされ卟へイ）

なに〳〵、うたれんがとは、知らすやのふ。

繪四十七圖

右　同

繪四十六圖

（子　田）　間　赤

「あのむらくもに(不明)つたる女郎ハ如何なる女郎と思召、むかしつくし彦山の天人にてまします云々」とあり。

(四) 以下を比立内本には、左の如く誌す。

「げにそのこゝろハなかとのうらに、ふんねをとめて、ともへをやとる、ともへをやとればぶつきをよろう、ふつきをよろハハ、たまにたまふれて、ていとさしつのししちみをたのむ、げにもげにあきのよの有明の月にくもにのぼりてくもかくれすればかたちものこらてうせにけり。」

た、いかやうにも、あそはされけへ。

けにも〳〵、わすれし事の、あるものかな、そのむかし、小野の小町の若盛り、女のよみしうたなれば、わけてちからは弱きと聞く、花の色は、うつりにけりないたつらに、我身世にふる詠めせしまに

と水にかふあるてる月なみのよにあそばん神はなきものよ〳〵

水のおもへを、照る月なみを、かそへば、こよひぞ秋の最中なり。

詞　けに彦山か嶽に籠りましまさば、大鼓一ツ曲、こふきよなされべく。

さては左樣にけ、ハ、、てましまさばしんつしんつと御はやしけへ。

拍子　三五夜中新月の色、二千里の外、古人の心。

げに、其頃や、長門の關に、船をよせて、船の、ともへに、舳綱を付り、やへがきつくる、ろくろ、

きんたちに、玉にたわふれ琴の音や、松風、ありかたや、有明月の〳〵、雲にうち乗りて、雲がくれしよや、すかたは殘りてうせにけり。

(五) 幸屋渡の赤間

こゝの臺本には簡單な型付が傍書してあり、舞の樣子がほゞ解るので、そのまゝに誌しておく。

尙、こゝの古老に據れば、この赤舞のふしは餘程難かしく、「四十食」もつゞけて習はねばならなかつたといふ。舞人が太鼓を叩くときには、胴取は休んでゐる。太鼓はたゞ立てゝおいて叩くのである。

その桴は、こゝでもボウボリと稱する綾桴を用ひてゐた。

赤舞

幕出　追々急キ行ク程ニ〳〵、赤間カ關ニ着ニケリ。

中うた　月モ月、所モ所、ツリスキノ、ヤラハズカシノ、イナカ人

追々急キ行ク程ニ、赤間ケ關ニ着ニケリ。

小ベッス

ヲヽヲヽ、赤間ケ關、長門ノ浦ニ、着ケバ着イタ　ココデハ、ヲヲギヲ、タダアテテル　モ　存ジけ。

スカモ今夜ハ、八月十五夜ノ事ナレハ、月夜モ所ヨモ、サモ面白

キニテハ、ソレミテ、レンガヲ一トヲリコヲギヲナサアルベクニテハ、何歌レンガトワ、スラズスラズニハヘスガ、只如何樣ニテモ、遊サルベクニテハ。

ソレ昔、小野ノ小町、ヨミス歌タニ、女ノ讀ミス歌ナレバ、ワケテカヲヨワクト聞ク、ソレ昔、長門ノ浦ニ、「小歌」舟打ツ留メテ赤間ガ關ニ、月ヲナガムルニ、ホンノボンノト、ホノボノト、明石カ浦ノ、朝霧ニ、島カクレヨノ、舟ヅラ、ナスズヨモ、水ノ思ニ出ル月ハ、波ノ上ニ遊バン神ハ更ニナシ、遊バン神ハ更ニナシ「小ベヲス」ヲヽヲヽツクシ彦山ケ岳ノ天人ニテマシマサバ、大鼓一バン、御打遊ビナサアルベクニテハ。

ココデハタダヲヲギデアラデルゲニモ左樣ニテマスマサバ、丁度ヘヲスヲトヽノエテ、スバスバト御バヤシ。

小ベヲス囃子

サンゴヤ中ノ、新月ノ色ニ、ポンポリデマハル、マタ、ダイコヲタタク二スジノホカニ、古人ノ心、ハアゲニ、其頃ヤノ〳〵、秋ノ夜ニ、長門ノ浦ニ舟ヲ留メテ、トモスニヤドル、心金丹、玉ニ玉フリテ、フキ夜ニアリアケ月ニ雲ハノコリテ、雲ガクレス、長メ　形ハノコリテ、ウセニケリ、　ポンポリヤメテアラマヒニウツル

（六）杉澤の赤間

山伏神樂、番樂ともに傳へてゐる傑れた曲の一つである。筋は、木曾殿の身内、今井四郎兼平が妹に、葵、巴、山吹とて姉妹三人の廢曲の一つとして、小寺氏が探られたこの詞章は、他とや、異つてゐる。勿論崩れてゐるのであるが、もし傳へて居れば、これと同じであつたと思はれる興屋にないのが殘念である。女の一人舞とだけ傳ふ。

赤舞（あかまひ）

かけうた　まくてはれ〳〵、この、や面白や、さしあけれ〳〵、この、や面白や、しまめぐり〳〵、この、や面白や、都めぐりの花車、浮世は車の輪の如く〳〵。

（かたり）　月を月、ところこの里へ、なりひら、たいを手に持て、天地さよと吹きよせて、しよじゆつの雲もきよ明けて、德をしゆせとうせにけりや。

（まひうた）　さんごやあじおんのしげつの聲をば、あかまぢしぐんのめんほくに、かんきすよに云すて、

笛と太鼓はいそげども、花の若子は舞をしづかに。

八、木　曾

山伏神樂、番樂ともに傳へてゐる傑れた曲の一つである。筋は、木曾殿の身内、今井四郎兼平が妹に、葵、巴、山吹とて姉妹三人の女武者があつたが、葵は本國栗柄ケ谷で討死し、山吹も行方知れずになつた。後に巴のみが一人殘つて、敗戰を歎いてゐる所に、敵方の者が現れ出て、これと火花を散らして戰ふといふのである。これに出る狂言は又古風な役割をつとめてゐる。

この三人の女武者は、直面で出る所と、葵面・巴面・山吹面とて、定つた面があり、これをつけて出る所とがある。岳はその前者であり、大饋や山谷はその後者である。舞の型がまことに美しく優雅に出來てゐるが、何となく陰慘で、亡び行くもの、悲哀と言つたものが強く感ぜられる。構想が能の「巴」ともやゝ似てゐる。

上　山伏神樂の木曾

木曾

扇三本の雲張りがあり、左の幕出しになる。

（一）我ハ是ー我等は是（大）・これハはや（晴）
（二）葵…女武者ー巴といへし女にて昇が（岳）・巴と申女ニて昇（羽）・葵、巴、山吹と申三人の女ニて昇へしが（晴）
（三）次に「葵は」と入（大）
（四）の懸しさよーに着にけり（羽）
（五）ハーの・大・晴）
（六）をーに（大）

〈我ハ是、（一）葵、巴、山吹とて、兄弟三人の女武者、（二）本國栗柄ケ谷の戀しさよ。（三）

と、囃子になり、幕を押出して前向に、あげまき、かんざし、女面、振袖の巴が、太刀をさして出、扇を前方に翳し、沈み、舞臺を一まはりし、扇を翳して沈み、左手に扇をとり、扨て正面に幕向になほる。このとき更に幕を押し出して、鬘、かんざし、女面、振袖、帶刀の葵、纖いて同じ支度の山吹が出、同樣に扇を翳し、その場にめぐり、又扇を翳しては沈む。次に皆々左手に扇の一端をとつて振あり、舞臺をめぐり、巴と、葵・山吹の二人とが入れ代りになり、扇を右手に翳しては沈む。次にその場にめぐり、又扇を翳して沈む。扇を左手

曾（菅原氏本を底本とし、岳小國氏本、羽山・大饋・晴山の諸本を參照す。）

にとり、扇を振りつゝ舞楽をあぐり、入れ代りになり、扇を右手に離して沈み、立ち、扇を左手にとつて振あり、右手に持ちかへ、振あつてその場にめぐり、沈み、足踏みあり、その場にめぐりの等の振がある。とゝ笑、山吹が幕前に、巳が舞前になはつたところで、鑓子を打とあ、楽屋の語りになる。三人は左足を出し、右手の扇を前方にし、左手は太刀の柄にかけてなほる。

（木曾殿へ、信濃を立たせたもふ時、五万騎崎にて立ゼ玉へし、今へはや、しのびが原を通らせ玉ふ御時に、主従七騎に打なるも、是も御運の末とかや。

木曾殿の身内のもんに、今井の四郎兼平か妹に、巴、山吹とて、兄弟三人の女武者、巴は本国栗栖ヶ谷にて失せにけり。

と、この間に、舞中より前同様の振を語りにつれて繰返し、舞楽をめぐつて入れかはり合ふが、この時巴は入る。

それを見て山吹も、行方しれずになりにけり。

と、山吹も入る。

今へはや、巴といつし女なる人ましますが、

と、巴は幕前にきまり。

木国栗栖ヶ谷のこひしさよ。

と、この時鑓子になり、これにつれて巴は舞つて出る。沈み、扇を左手にとり、その場にめぐり、扇を右手にとつて腰し、左手にとり、振あり、進み出る等のことあり、かくて幕向になつたとき、普段着の裾をからげ、両肩に振分けの荷物をかけた黒頭巾、直面の沙門とも道化ともゥキャともつかぬ者が出て巴と相對し、そのまゝこのものは巴の振を見まねで、同様に、但しやゝ不格好に舞ふ、入れかはりになり、同様に振あり、一しきりあると巴は幕前に、道化は舞前にゆつときまり、次の問答になる。

僧（さつて御身へいつくのもの。

と、前方に拍子を踏んで僧が言へば、巴は自ら答へる。

（七）時ーおん時へ（岳・大）・時は（晴）

（八）くしがーふ（大・晴）

（九）「今へはや」となし（岳・大）

（一〇）しのびが原ーあわじが原（岳）・しのぶがはら（大・晴）

（一一）御の字なし（晴）

（一二）主従七騎ー四十七騎（大）

（一三）に打なるもーにてうちなすものよ（大）・に打死なす者よ（晴）

（一四）御運の末とかやー弓矢の衰微なり（大）

（一五）「兄弟」となし（晴）

（一六）失せーなり（岳）

（一七）にて失せにけりー打死になす（羽）・にて討死となり（大）・で討死なるものよ（晴）

（一八）それを見て山吹もー山吹はこれを見て（大・晴）

（一九）なりー落（岳）

（二〇）なりにけりーむなしくなり（大・晴）

（二一）今へはやー我へ是（岳）・今が早や（大）

（二二）女童人ましますがーにて（岳）・女一人はしが（大）・おんな童人残りしか（晴）

（二三）本国…こいしさよー二人の

巴（木曾の者にてゝ、さつて御身へいつくの僧。

僧（木曾の僧にてそう。

巴（今へ何をかくすべき、今へ何をかつゝむべき、木曾殿の身内のもんに、今井の四郎兼平か妹に、巴、山吹とて、姉妹三人の女武者、巴は本国栗栖ヶ谷にて打死なる、夫れを見て山吹も、行方知れずになりたまふ、ひんじや御僧のくりきを以て二人の女の後をふくとぶらひたび玉へ。

と、語りの間、同様の振をくりかへす、語りがきれて囃子になると、僧は入れかはりきまに入る。巴は舞前に立つと、

「ヨウ、われはこれ、巴御前といひし女なり、うらもの、ゝ術はづして、これに待ちるにち。」（大意）

という合図かかゝり、右肩ぬぎになる。巴には二の肩衣なく、こゝらでは一しきりはげしく前の振をくりかへす、ぬぎ肩になる。

（二四）あとをとふてたびたまへ（大）・晴山本になし。

（二五）次の問答を大意では巴（きておむ身はいつくの僧僧（木曾の僧にて候、きておむ身はいつくの者

とし、次に十六・楽屋の語りとす晴山本にはたゞ「ヨウきつておんみは何国の者、ヨウきそうのそうにてそう」とだけあり。

（二六）「今へ…つゝむべき」となし（大・晴）

（二七・二八）きーし（岳・羽）

（二九）姉妹となし（晴）

（三〇）にてーて（晴）

（三一）彼者はマヤ、打死なりー落にけり（岳）・うせにけり（羽）・討死となり（大）・討ちをなすものよ（晴）

（三二）夫れを見て山吹もー山吹はそれを見て（大・晴）

（三三）なりたまふー落にけり（岳）なりにけり（羽）・むなしくなり（大・晴）

（三四）ひんじや…以てー今が早や巴といひし女一人候ひしは（大）ひんじや…たひ玉へー今へはやともいといしおんな童人はらくしが、いきあをート京のむし

（二）黒森本の本文

きそのゐひ（西口氏本及び岩氏本・和野本の諸本を参照す。）

我れへこれ、あをくといえし女むしや、ほつ國へくりからかたにつきにけり。

我れへこれ、ともくといえし女むしや、ほつ國へくりからかたに、つきにけり。

我れへこれ、やまぶきといくし女むしや、ほつ國へくりからかたに、つきにけり。

○きそとのゝ、しなのを立せたもふぶん峠へ、五万よき二両立せたまひしが、しのび川原を通りし時、主徒ときに立せたまいしが、これもいんくわの花さかり、これも月矢の花さかり、今八はや、きそとの、御身、今井の四郎かね平のいもふとに、あをゑ、ともゑ、やまぶきとて、兄弟三人の女むしや、あをゑといくし女むしや、ほつ國へくりからかたに、打死なす、それを見てやまぶきへ、のきかたしれすにうせにけら、いまハはゝ、ともゑといえし女武者、たゝ、家人幾しか、兄弟の人々、なにとかならせたもふや、たゝ、さあ〳〵となけきける。

○さつて御身はいつくの者。

まつだ我らハきそのゐひ。まつだ御身ハいつくのそふ。

まつだ我らへきそのそふ。

きそのそふ二両ましまさへ、いまハなにをかつゝむくし、いまハなにをかくすくし、きそとの、御身内、今井の四郎金平の三人の妹に、あをゑ、ともゑ、やまぶきと両兄弟三人の女むしや、あをゑといえし女むしや、ほつ國へくりからかたに、打死なす、これヲ見てやまぶきや、行かたしれすにうせにけら、ともくといくし女むしや、たゝ、家人のこりしが、きやうたいの人々の、あとよくとふでひたまひ。

○けに御道り、非とりかな、たゝ、さあ〳〵とおんなけかせたまひけるほとに、ほけきやうの大ほほんに、て、兄弟三人のあとよくとをてまひらすゑひ。

いつしや　ふくとく　二しや　たいし、三しや　まをふに　四しや　天ゐん、五しや　ふつ心うが、女じんそふ　とくちよふ佛なりたまひ。

兄弟のあとよくとむろふ両たひたまひ。

○しやたんの内ゑ　きうせんたしして出たまいへ、けに兄のまいの母となつて、やあらはんたんとも、をいけ取、こう明せんとなんのりしが、ともくハなたにも、ものハしやといまゝに、ほんたかくそくゑ、ゐたかみかひつかゑ、くゑひをほつすとねら切て、ともふかこう明、ほめんもの、そやかりけり。

○かもこの國へのはものよふいたかきなんぶしも國をさ上へくんたけた、おかさわらのきつはら上へ、七拾五人の力をなのつて、まつくらにおしよせて、おや十代のなんぶ打もの、さやうらはつして、にしから上ひかしへきと上ひとゐたり、きたからこゑんくに、ひとわたりゝもしかくゐわ　十文字やうはなかたに三上切附て、よふあらしを三上風にこのはのらうこゝ、四方にはつとおちらし上、いのしをさかひにたゝこうたり。

〔書誤〕岩泉本及和野本のは、戦の部分にやゝ大きい異同があつた。即ち左の如くである。（岩泉本を底本に選ず。）

おゝ南部下山、本たか力、七十五人の力となのつて、巳が前にまつしくらにかけりけり、やあらあ巳、ものハしやと云まゝに、ほんたが前のぐそくわたかゑかくつかゑ、くらの山形におし付て、首をほつすと、ねら切たり。

おゝかナシ（和）國へ　一丈板かきくんゑ武田おかさ原へ、キヤツがはやつはらバ、和　巳をゝけ夏原石せんやと云まゝ

やぶしん（嶋）

（三四）のくりきを以て一な（岳）

（三五）「女の」となし（岳・大）

（三六）もの字なし（岳）

（三七）とくとなし（大）

（三八）とぶらひーとむらふて（岳）とふて（羽・大）

（三九）大に大貳本には左の如くあり。

巳くまのわれはこれ巳こ前といひし女なり、うちものゝ稲はづして、これに待ちるたり。

（四〇）かたきの一四郎（大）

（四一）かーの（岳・嶋）

（四二）となりて出ーと名乗て出て（岳）・となりて出（羽）・なりく（大）・なり（嶋）

（四三）「ヤアー…名乗りて出」となし（岳）

ヤアー…と大にけり一巳は本田をいきとり功名しはやなむとゝこそ見えにけり（大）・ともいきいけとり成名せはや（嶋）

（四四）ヤアーやあら（羽）

（四五）りーふ（羽）

（四六）ヤアーやら（岳）・やあら（羽）

（四七）かーく（岳・羽）

（四八）「ちらの…と大にけり」となし（岳）

（四九）ニおしづけてーなしつけ（羽）

（五〇）のの字なし（羽）

（五一）兵非ハ一住人（大）・住人に〳〵（嶋）

（五二）兵非ハとなし（大・嶋）

（五三）西から…通り一大の「北から…通り」と入代る（岳）

（五四・五五）〳〵ーに（岳・嶋）

（五六・五七）ヒーヒく（羽・大）

（五八・五九）通りー通ふる（岳・大）

（六〇）兵非ハ一人方ひしかた（岳）なむもらひし切り（大）・なんぼひしかた（嶋）

（六一）でーに（嶋）

（六二）次に（岳・嶋）・と（羽）の字入る。

（六三）とーに（大）・の（嶋）・とふ達に（岳）

（六四）いのお…たゝかふたりー火花をちらしてこゝをきこむと

眼ひけり（大）

（六五）きかいーかきり（嶋）

（六六）ふたりーしたり（羽）・いけり（嶋）

三三三頁

（一）岩泉本には春出の記録なし

（二・三・四）ほつ國ーほんこく（上）

（五）「きそとの…花ざかり」を脱す（和）
（六）りし時ーりしそのときは（上）・らるゝ（岩）
（七）に—にて（上）・この字なし（岩）
（八）「これもいんくわの花さかり」ー次の「これも弓矢の花ざかり」と前後す（岩）
（九）今ハはやー我は是（岩・和）
（一〇）次ににの字あり（岩・和）
（一一）のーか（岩・和）
（一二）「あを糸…女むしや」となし（上）
（一三）ほつ國ーほんごく（上）
（一四）にーにて（岩・和）
（一五）なすーなし（上）・ヲナス（和）
（一六）るーり（上）
（一七）はやとなし（岩・和）
（一八）とも糸…殘しかートモエ壹人ソウライシガ、イサヤ（和）
（一九）たゝとなし（上・岩）
（二〇）しかー而ハ得しか、いざや（岩）
（二一）人々ー人々ハ（岩）・人ハ（和）
（二二）やなーや（上）・やら（岩・和）
（二三）たゝ…なけきけるー兄弟のおもいひにわすれさるなり（上）・何とかならせたもふやら（と先のを縦返す、岩）
（二四）きけるークナリ（和）
（二五）「まつた…者」となし（岩）
（二六）まつたーサッテ（和）
（二七）ほんたかートモエガマイノ（和）
（二八）をーの（上・和）
（二九）かひつかみーつかんて（上）。尙次に「くらのやまかたおしつけて」（上・和）と入
（三〇）くびを…切てーくひねすきてすにけり、
（三一）まつたーサッテ（和）・さて（岩）
（三二）らハーラモ（和）・ハ（岩）
（三三）そふーもの（上）
（三四）次にもの字有（和）
（三五）次に「ちこをこなたにたちよりておんもの」かたりそをらいかせのを」と入（上）
（三六）いまハ…つゝむへしー次の「いまハ…かくすへし」と前後す（岩・和）
（三七）つゝむべしーかくすべき（上）
（三八）かくすへしーつゝむへす（上）
（三九）先に「我は是」とあり（岩）・「きそとのゝ御身内」となし（上）。
尙以下「あとよくとふてたひたまひ」までを、和野本には「イママイノウタイカイシ」として略しあり。
（四〇）次にニの字入（岩）
（四一）のーか（岩）
（四二）ほつ國ーほん國（上）
（四三）にーにて（岩）
（四四）なすーせり（上）
（四五）やーは（上・岩）
（四六）先に「いまははや」（上）・「今ハ」（岩）と入
（四七）たゝとなし（上・岩）
（四八）しかーサッテ（和）
（四九）いざや（岩）
（五〇）の人々ー二人（上）
（五一）まつたーサッテ（和・岩）
（五二）らハーラモ（和）・ハ（岩）
（五三）そふーもの（上）
（五四）次にもの字有（和）
（五五）次に「ちこをこなたにたちよりておんもの」かたりそをらいかせのを」と入（上）
（五六）いまハ…つゝむへしー次の「いまハ…かくすへし」と前後す（岩・和）
（五七）つゝむべしーかくすべき（上）
（五八）かくすへしーつゝむへす（上）
（五九）先に「我は是」とあり（岩）・「きそとのゝ御身内」となし（上）。
尙以下「あとよくとふてたひたまひ」までを、和野本には「イママイノウタイカイシ」として略しあり。
（六〇）次にニの字入（岩）
（六一）のーか（岩）
（六二）ほつ國ーほん國（上）
（六三）にーにて（岩）
（六四）なすーせり（上）
（六五）やーは（上・岩）
（六六）先に「いまははや」（上）・「今ハ」（岩）と入
（六七）たゝとなし（上・岩）
（六八）しかーサッテ（和）
（六九）見ーめ（上）
（七〇）なつてーナノッテ（和）
（七一）よくとふてーとむらふて（岩）
（七二）おんなけかせたまひけるーなけかるゝ（上）・おんなけかせたもふ（岩）
（七三）次に五卷と入（岩）
（七四）まひらすべしーたひをべし（上）・マイラセソウ（和）
（七五）この經ー一しふくとく、二しや梵天、三しや魔王、四しや輪聖、五しや佛身、うんか如しんそくめく成佛（岩）・いちしやふかとく、にしやたいしや、さんさまをに、ししやてんりん、ごしやふちしん、うんがきよしん、そくとくちよふちとならせたまい（上）
（七六）先に「おゝ、五卷の大ばほんにて」とあり、又、「兄弟」の次に「貳人」とあり（岩）
（七七）とむろふ而ーとをて（上・岩）
（七八）たびたまひーをらする（岩）
（七九）岩泉本には、以下にやゝ大きな異同あり本文の後に誌す。
和野本にはこゝに「ナンブ下村本ダ」の出とあり、三人の武者が出たらしい。
（八〇）のーが（和）
（八一）「きうせん…出たまいハ」となし（和）
（八二）出たまいハーいてたまいしは（上）
（八三）見ーめ（上）
（八四）なつてーナノッテ（和）
（八五）「きそとの…花ざかり」を脱す（和）
（八六）りし時ーりしそのときは（上）・らるゝ（岩）
（八七）にーにて（上）・この字なし（岩）
（八八）「これもいんくわの花さかり」ー次の「これも弓矢の花ざかり」と前後す（岩）
（八九）今ハはやー我は是（岩・和）
（九〇）次ににの字あり（岩・和）
（九一）のーか（岩・和）
（九二）「あを糸…女むしや」となし（上）
（九三）ほつ國ーほんごく（上）
（九四）にーにて（岩・和）
（九五）なすーなし（上）・ヲナス（和）
（九六）るーり（上）
（九七）はやとなし（岩・和）
（九八）とも糸…殘しかートモエ壹人ソウライシガ、イサヤ（和）
（九九）たゝとなし（上・岩）
（一〇〇）しかー而ハ得しか、いざや（岩）
（一〇一）人々ー人々ハ（岩）・人ハ（和）
（一〇二）やなーや（上）・やら（岩・和）
（一〇三）たゝ…なけきけるー兄弟のおもいひにわすれさるなり（上）・何とかならせたもふやら（と先のを縦返す、岩）
（一〇四）きけるークナリ（和）
（一〇五）「まつた…者」となし（岩）
（一〇六）まつたーサッテ（和）
（一〇七）ほんたかートモエガマイノ（和）
（一〇八）をーの（上・和）
（一〇九）かひつかみーつかんて（上）。尙次に「くらのやまかたおしつけて」（上・和）と入
（一一〇）くびを…切てーくひねすきてすにけり、
（一一一）まつたーサッテ（和）・さて（岩）

（三）夏屋本の木曾

例によつて夏屋本には異同がある。もとは黑森本と同じであつたらしいが、これはずつと簡潔になつてゐる。

木　曾　合　戰

△マタ出　キソトノヽヲントモニ、アヲエトモエヤマフキトテ、ヲナ三人マシマスカ、ホツゴククリカラガタニソコヨシサヨ。

△キソトノヽ、シナノヲタダセ給ヲントキハ、五万ヨキニテ立セタマイシカ、今ワハヤ　シノビカウラヲ　シユウヂウシチキトトウラセタマイシカ、コレモインクワノハナサカリ。

サンテヲン身ワイツクノモノ、マツタ我ラワキソノモノ。

サンテヲン身ワイツクノモノ、マンタワレラワキソノ曾。

キソウノ曾ニテマシマサハ、今井ノ四郎家房カ妹トニ、アヲイトモエヤマブキトテ、兄弟三人マシマスカ、トモエワ北國栗カラガ谷テ打死ナラセ給シカ、ソレヲミテヤマフキワ、行方シラスニウセニケリ、今ワハヤ、アヲエトイエシランナイチニンマシマスカアドヨクトウテタビタマイ、是モ弓矢ノ花サガリ、コレモ因果ノ華サカリ、ヲウ法華經ノ五卷大提婆品ニテ御出イ有シカ、一者不得作梵天王　二者帝釋　三者魔王　四者轉輪聖王　五者佛身云何女身速得成佛ナラセ給イシカ、是モ弓矢ノ華盛、コレモ因果ノハナサカリ。

〈ナウガウニモ木田ワ、七拾五人カチカラトナノテ出、木田カグソグノワタカミツカンテ、クラノヤマガタヲシフセテ、二ノイキツイテソ　立タリケリ。

〈ヲウ甲ノ國ノ兵者共ワ、一條板カゑ、扁身武田ニ小笠原、ヤアラ巴エワ女ナレトモ、モノモノシヤトユイヨリハヤク、親拾代ノ波ノ打者、サヤヨリカラリト打ハツシ、西カラ東エワツテワトウリ北カラ南エワツテワ通リ、ランモンヒシカタ　雲ニカクナワ拾文そのとき（上）
（六九）かーの（上）
（七〇）んもの—なきかた（上）
（七一）和野本は以下を「ヲガサワラ」の出とす。寧ろ岩泉本のに近い。以下を本文後の岩泉本のと對照す。

字、ヤツハナ形ト言モンニ、命ナサカイニタダガイケリ。

（四）中妻・遠野本の木曾

中妻本には先の一部の謠が「木曾合戰」として誌されてゐるに過ぎない。

又遠野本は、八幡飯豊の兩本に見えてゐるが、やはり先の一部に過ぎず、誤脫も多いのでこゝには省く。

（五）檜木の木曾

檜木のは、巴と武者との番樂風な戰が主となつてゐるらしい。沙門も出ず、詞章も簡略にされてゐる。

木　曾

幕出へ漸々急ぎ行程に〳〵、木曾のごじんに着にけり。

〈御前に罷り立つたる女武者をバ、如何成る女武者と思召、我ハ是木曾殿の身内、今井四郎兼平か妹、あおへともへ山吹とて、兄弟三人ゆか、あおいか行末知られぬ、山吹ハ北國栗から谷にて打死し、ともへ壹人のこり、とむらひ軍お仕らんと存じゆ。

〈風にしなゞんならのはの〳〵、何とて風にしなゞんや。

〈甲斐國ニハ木田武田小笠原の人々、我も〳〵とのつかけたり、イヤ中にも木田の八郎か七拾五人の力を名のり、ともへうつ取りこふみようせんと、のゝしつたり、何に物々しや木田の八郎ゞたかけつかんでくる〳〵と付廻れバ、イヤ首ねじ切たりけり、今ハ何おか有るべきとふて、打もののさやぬぎはづし、西から東へゞつてハ通り、北から南へゞつては通り、くもでかく縄十文字、命ゞかきりと戰たり。

下番樂の木曾

（六）山谷の木曾

この舞は番樂では山谷に殘つてゐる。

「よう〳〵急ぎ行く程に、栗栖ヶ谷にとつきにけり」と幕出しで、後結びの鉢卷、直面、燭袢、襦袢、たつつけ、脚袢、帶刀の者が扇を開き持つて出、地舞一どほりを舞ひ、扇をつぼめ、又開いて色々に舞ひ、胴前の左の隅に坐す。次に語りになり「かう御前に罷り立つたる士は今田の八郎と申すものにて候、兼平が妹に、葵、巴、山吹とて云々」と、一まはりして反對の角にひかへてゐると、「巴と云ひし女武者」と、髪を蒜菁結びにした鬘をかぶり、燭袢、廣帶、襦袢、前掛（その裾をとる）、たつつけの支度の巴が、長刀を持つて出、これをくる〳〵とまはし、その場にめぐり、反對の隅に坐し、又立つて、色々に長刀を使ひ、又角に坐すと、武士が立つて太刀をふり、その場にめぐり、とんぼをきりなどしてひかへる。次に兩人は同時に立ち、背中合せにめぐり、向ひ合ひ、やつとかけ聲をかけつゝ巴は長刀を以て拂ふと、武士はそれを跳び越えて入かはる、武士はとんぼをきることなどあり、このとき巴の髪はとけて、バラ〳〵になる。これより長刀の使ひ方色々あり、又組合せが樣々あつて戰ひ、とゞ巴は武士をつかんでぐる〳〵とまはしつゝ入る。約十三分のものであつたが、實は最初に女武者が二人出て舞ひ、幕の兩わきに立ち、そこへ實演の如く武士が出、巴が出て、長刀の力ためしとて　女武者二人が巴に加勢をして共に長刀の押し合ひをし、巴と武士との戰の途中に二人の女は入るといふのが略さないやり方であるといふ。

山谷と同流である比立内では、はじめ女二人が出て舞ひ、次にしが團七の荒舞が出、これが長刀を持つた女と戰ふといふ。

（七）二階・荒澤の木曾

荒澤のには脫落が間々あつた、次には二階のを底本にして誌す。面をつけた女二人（仕合になれば面をとる）と、しやぐま、襠袢、袴（褲なし）、鎧の男一人とが出るといふ。（傍書は荒澤本による）

木　曾

幕出へ木曾義仲の御供に〳〵、よふ〳〵いそき行程に、栗柄峠の其中に、北國の谷に着にけり。

中言立へ木曾殿の、信濃を立せ玉ひし御時は、十万余騎にて、ましますか、伊津河、今市川を、とふらせ給ひし御時は、四十主從七騎に討亡され、今はたよりもなかりけり。

〈ハテ御身ハ何國の僧、木曾の僧。

〈ハッテ御身はいつくの女、きその女。

〈木曾の僧にてましまさハ、今は何をかつゝむべし、今ハ何をか隱すへし、木曾殿の御内に、今井の四郎兼平か兄弟に、葵、巴、山吹とて、我等兄弟三人の者なりしか、あほひと云し兄弟は、栗柄北國が谷にて討死なし、夫を聞、山吹ハ、行方しらずに失にけり

〈今ハはや巴ばかりの御供なり、餘りに〳〵心はさめ〳〵とせし程に、法華經の提婆品にて、兄弟の葵、山吹を、吊はばやとそんしゆ。

〈一者不得作、梵天王、二者帝釋、三者魔王、四者轉輪聖王、五者佛身、云何女身、速得成佛とハ說きたり。（編　總　運　加　入　道　と　唱　へ　つ　ゝ）

今田八郎幕出へ漸々急行程に〳〵、北國ヶ谷に着に鬼。

末言立へ我は是〳〵、巴と云し女武者、七十五人の力なり、今田ひし女なり、八十五人の力なり（ま）き、八郎を追とり込、火水になれと責られたり。

（以下ナシ）

我は是〳〵、あほひといひし女武者の事なれとも、八十五人の力なり、今田八郎追捕込、火水になれと責られたり。

（八）仙北諸本の木曾

今田の八郎の出が諸本とは少し異つてゐる。

木　曾　（西長野本を底本に、白岩・豐川の兩本を對照す。）

幕出　旅の衣は鈴掛の（に白）、つゆけき袖をしぼる（を白）らん。

○木曾殿は、信濃の國を立せ玉へし御時は、十万余騎にて、（立せ玉ふ）今井川原に扣しが、漸々七騎に打もらされて、今ははや、弓矢のなかれ（豐）くけん盛なり。

（なりよりくまんとたゝ）

偖御身は何國の僧（孫）、木曾の僧。（白）

木曾の僧（孫白）にてましまさハ、今は何をか隠すへき、今は何をか包むべき、木曾殿の御身内に、今井ノ四郎兼平か妹に、あをひ、ともひ、山吹迚、三人の女むしや有し時、あをひと云し女をば、北國栗柄（くりから）か谷ニて討死なす（し豐）、山吹是を見るよりも、行方知らずに成にけり、（今はは や（豐）し か（豐））巴斗り殘り居て、かよふにさめ〳〵（豐）となけかせ玉ふ程ならば、法花經の大場本にて弔ふべし。

一しや福徳しやもん天王、二しや大しやく王、（天（豐））三社魔王、四しやもんよ（天豐）天りん王、五社ふつしん王、うんかそくとぐ入心成佛ととむらへ玉ふ程に、しゆらのくげんをまのがれたり。

（我は是、今田の八郎と申者ニてゆ。

（以下待受ばやと存ゆ。豐川本になし）

木曾殿の御身内に、今井の四郎兼平か妹に、あをい巴山吹とて三人の女武者有し時、あをひと云し女をば北國栗柄か（の白）谷ニて我手に掛（けてうつてとふる白）うちとりし、山吹是を見るよりも、行方知（ら白）れずに成りにけり、巴斗りは殘り居て、我を打たんと詐定なす（ナシ白）と承りてゆ、此邊に待受ばやと存ゆ。

（七十五人力（豐））巴と言し女武者、力と申せば、七十五人力、こん田八郎も七十五（ナシ白）人力なり（寄人またんとつゝ、寄、おしならへてむつとくむ。）

（寄人（豐）（以下白岩本にのみあり）

（考異）（一）先に「承はればゆふれと被成、我等をうたんひよぢやうなすと承はり、いざ此邊にまたばやと存じ申」とあり。（豐）

九、汐汲

この曲も、舞は、岳、大償に傳へてゐるに過ぎない。番樂にも三ケ所程に詞章はあるが、舞の傳承は殆どなかつた。

この曲は能の松風のロンギの部分を獨立させたもので、舞は汐を汲む振を主として美しくつくられてゐる。この曲が能にとり入れられた古曲に脈を引くのか、或は能より出てゐるのかは簡單にはきめられない樣に思ふ。何れにせよ、現在の能の詞章の影響を受けてゐるらしいことは確かである。

上山伏神樂の汐汲

（一）岳の汐汲

左には羽山本のを底本に、菅原氏本を對照して誌す。

鹽　汲　（傍書は菅原氏本による異同とす）

幕出（松嶋や、お嶋ヶ濱の月をだに、かげをくむこそ心あれ。（〳〵）

と雛子になり、黑頭巾、かざし、女面、振袖、ぬきだれのものが、黄のしごきを卷いた棒の兩端から更にしごきを乘れてその先に二つの烏帽子を兩の桶に見立てゝ吊し、是を左肩に擔ひ、右袖をひろげ、浮き沈みの振あつて出る。壁の如くながしを舞ひ、幕の根に立つと、頭子が變ゝ、女は扇をひろげる。すぐ雛子がやみ、次に樂屋の語りになる。この間女は扇の振あり、時々太鼓がどんと打込まれる。

（松のむらだつ（立）かすむ日も、しずか（つ）しほぢをはこびしに、（か）しほぢハとほくなるみかだ（と扇を胸にあてたまゝ）なるおんの松蔭に、月ごそさわにやしろやの、貝今立出て、鹽汲事のうれしさよ。

うぎ水（身）ぞよと、人にはたれかつげのくし、さしくるしほを（と扇を振り、又これを櫛し）くみあげて（と、しやがみ、前後にかまへ、立つて扇の振あり）見れば月こそ（と前の桶のしごきをとり、これを振りつゝ小めぐりし）桶にあり、嬉しや（と扇を振り）月は桶にあり（と後の桶のしごきをもち）

胴前（へやあ月ハ一つ、（に）かげと二つ（ハ）（と雛子をかぶせ、兩桶のしごきを持ち、拍子をふみつゝ、桶を前後に振る）水鹽（三つ）のしほ車のよるの車（に）に月をのせて、おせどもうごかぬしほぢ哉、跡白（くる）波に、（ゆ）うらりこふる（い）、又くる波ニかつくれ、あと白波に（ゆられたつるゝ）かきけすよふにうせにけり。

と、こゞみ、小まはりし、扇の振あり、竿を扇よりとつて小めぐりし、前に捧げ、兩方に振りつゝ小めぐりし、退り、その場にめぐつて持物を幕内に入れ、右手に扇をとり、左手は無手で、タタタを踏み、退り、小まはりし、進み退つて一しきり舞ひ、とゞ幕前にきまつて入る。約九分程の舞であつた。

（二）大償の汐汲

こゝのは大體詞章がとゝのつてゐて、謠曲のもの、通りになつてゐる。殊に傍書しておいた晴山本のは殆ど謠曲通りである。舞の手はこちらのが崩れてゐるのか、岳程に美しくはなかつた。はじめ無手で出、途中から桶を持つ。その桶の擔ぎ竿は、太刀に布を卷いたものであつた。

潮　汲　（傍書は晴山本によるものとす）

女　裝束ーざい、かんざし、面、振袖。持物ー扇、汲桶（太刀の兩端にゑぼしを二つ吊し下げたもの。）

出し、雲はり（扇）

（松（こ）島や、お島のあまの月にだに、影を汲むこそ心あり。（れ〳〵）

次にかけうたあり。次に、

（しのぶは遠くみちのくの、その名やちかの鹽釜や、（はこぶれとうき）（ナシ）曉が鹽きを運びしや、はこねが浦にひくしほ、そのいせの二見の浦二たびよに（はこぶれとうき）（ナシ）（くうみの）

も出でばや、松のむらたちかしむしの、その名や遠くなるみがた
「それは」これもなるみ潟、こゝはなるおむの松かけの灘の潮汲む
憂きみぞと人には誰も月のくしさしくる潮を汲み
わけて、見れや月こそ桶にあり、これにも月のいれたるや、うれしや
これもつきあり」　あ　かも

〈月は一つ影はふたつ、水しほの夜の車に月をのせて、憂しとも思はぬ潮路かな、
ひくらばに、とふひとあらば、を嶋の浦にもしほたれつゝ、おと
づとこたへたり。

（考異）（一）椙木では幕出歌を左の樣に歌つてゐる。
〈松島や、おしまかあまの月をたに、影を汲むこそやさしけれ。

（三）黒森流の汐汲

何れも、なまりや數ヶ所の異同はあるが、大體謠曲のと同じで、「松嶋やお嶋があまの月をだに、かけをくむこそ、心有ものを」（黒森寛政本）を樂出とし、こゝでは「しつかしをきをはこひしは」から、月は一つ影は二つの項まで誌し、最後を「しほくるまのまたたつなゝにゆりとめられて、あと引しほて、かゑくれ、かへけすよふにうせにけり」（寛政本）ととめてゐる。そしてキリの歌として次の やうな歌を誌してゐる。

〈（一）松嶋や、かまやて、水くめは、しらぬゑか衆に、袖を引れる
ひとつをはなしやれ、かついた水か、ゆりたつる　（寛政本）

（考異）（一）はじめに「マツシマヤ！〈」とあり、次に「松島カマヤデ水ヲ」
とつゞける（和）（二）袖ーソンテ（和）（三）れるーるゝ（上）・レ（和）
（四）以下ーかついだミつを　ひとはなせば、ゆりたつる（上）

○松嶋や〳〵、かまやて水くめハ　しらぬゑか衆に　そんてを引かれ　かすひた水か　かたをけはなせハ　ゆりたつる　こほれしう
やと（西日氏本）

一、〈、へんや　松嶋　釜屋て　水くめば　しらん若衆に　そんてをひ
かれ　今壹時　おはなしやれ　かついた水が　ゆーるり　さらり
とたんふつく　（雲編本・イ下岩泉本）

（考異）（一）下岩泉本にはこゝに（段切）と小書あり。

一、松嶋沖て水汲ハ　しらぬ若衆に袂とられ　やあをはなしやれ
〳〵　かついた水か　ゆれたつる　はいふつ　と舞納ル、口傳有
（中妻本）

△マツシマ　カマヤテ　水ヲクメハ　寺ノワカシュニ　ソンテヲヒ
カレ　カツエタ水カ　ユルユルタツル（夏屋本）

（なほ夏屋本ではこの曲を「水汲」としてゐる。又左は黒森流ではないが。）

○松嶋や　尾嶋か釜屋て水汲ば　しらぬ若衆に袖をひかれた　こゝ
を一時おはなしあれ　かついたミつのゆたふるに（椙木）

尚黒森の寫木には、別に「鹽くみの道行」とて、沙門の詞章が殘つてゐる。黒森方に舞はすべて絶えて居るが、それはこの道行が長々しく退屈なので、演ぜられなくなつたものであると言ふ。この道行は松風松村のことを語つてゐる。

鹽くみの道行の哥ひ　（底本は西日氏本、傍書は上坂氏本による。）

○さん候、こう御前にまかり立たるしやもんをハ、如何なる沙門と思召すのふ、そふも我ハこれ、都にかくれもなき所國いつけんの僧にてそふ、此ほとハ都にゆへとて、百よふのめいしよ舊蹟訪ふて、日本な皆見めくり申てハゆへ共、これよりも西國方へと心さし、是は津の國、津ばの浦とハ覺たり、かの松にづひて、ふだを打ち、短册を懸られてゆへハ、あたりの人にもたつねばやとをもへそふ、あれこそや、古、松風村雨とめされしか、名ハのこりしよの方や、やらあかのまつについてゆゑれのなき事はゆまじ、ゆはれをたつぬるそのひまに、秋の日のならひとて、日はほとなくくれてそふ、あの山元までハほと遠ぐゆべし、これなるあまの鹽やに一夜もあかさハやと思ひそふ。

下番樂の汐汲

番樂には僅かに、荒澤、豐川、富根の三ヶ所に詞章が見えてゐる

に過ぎない。（もとは根子にもあつたらしい。）そしてこちらのは謠曲のが訛つたのではなく、わざと少し變へてつくつてゐるらしい。三本とも同樣であつた。そのうち富根のが一番と、のつてゐる。

（四）富根の汐汲

桶には、やはり烏兜を下げる。尚、根子では、長刀に帶を下げただけで、桶は吊さないと言ふ。次には富根本を底本に、豐川本（少し崩れてゐる）を參照して誌す。（傍書は豐川本に依る。）

鹽汲

幕出〈やう〳〵いそぎ行程に、濱のしほやに着きにけり。
○我も濱邊に住む女、人目を忍ぶ習ひとて、しつや、しつかに、し
ほきをはこぶ、あこきか浦に、ひくしほの、浪の、しほくむ、な
みたのしほ、みれば、月こそ、こゝにあり。
上是より拍子　月は一つに、かげと二たつ、女浪、男なミのあひこそ
「くんて」よけれ、まだくるしほをくみあけて、あとしらなみとうせにけ
り。〈〳〵是より唱拍子

（考異）（一）次に、「三つの車に月日をのせて、おすともゆかぬ引鹽の墟
おつかしや、墟うつくしや」と入る（櫻）

（五）荒澤本の汐汲

潮　酌

鹽路ハ遠く鳴海潟、女ハなるみかた、そレハ松風、さし來る潮を酌上て、見レハ月社樋に有り、女浪、男浪を分除て、さし來る潮を酌上て、見れバ月社樋に有り、ヤア、食るの車に、月を乘せて、後と引く浪にゆられながら、又來る浪に失せにけり。

一〇、をだまき

この曲は、山伏神樂にのみ見えてゐる。三輪山傳說を取扱つたものであるが、この舞を靜かに見てゐると、一種凄愴なものを覺える。

（一）みむろーよしの（菅・丹三）
（二）ニ着にけりーを志ざし（大・旭）
（三）めーを（岳・丹）・次に「置し」と入（大出）
（四）がーに（丹）・は（大）・や（旭）
（五）「あら…我妻よ」となし（岳・丹）
（六）あらーやら（大出・大）
（七）おそろしーなつかし（旭）
（八）しのびつまーを（丹三・菅）・しのび夫や（大出・大）・我つまや（旭）
（九）あらーやら（丹三・大出・大）
（一〇）おそろしーうらめし（丹三・大出・旭・大・菅）
（一一）我妻ーしのびつま（丹三・旭・菅）
（一二）よーや（大・旭）
（一三）「夜……玉はぬが」と脫（菅）
（一四）ひ玉はぬがーわじ（大出）・はず（大・旭）
（一五）ぬがーずや（岳・丹）
（一六）「いと……大ぎ事」となし（大・旭）・次の「夜…うばたまや」と前後す（岳・丹・大出）
（一七）大ぎ事ーおふぎ事よ（菅）・おきこどに（岳）・浮事に（大出）
（一八）夜るー書（菅）
（一九）をバなにとーはなに（大・旭）
（二〇）やーの（岳・丹・菅・大・旭）・（大出）
（二一）かの時…のたまへバー今宵こういふこほむつては候へども今宵ばかりと大・ちきりもこよひばかりとありければ（旭）
（二二）かの時ーかの年（菅）・この月（岳・大出）・此年月（丹）

（一）岳のおだまき

おだまき（羽山本を底本とし、岳口承、菅原氏本、丹内二本、大出、大貨、旭又の諸本及び圓萬寺本（部分的に）を參照す。）

みむろの山ニ着にけり。

幕出（よふ〳〵急ぎ行程ニ〳〵、みむろの山ニ着にけり。

と囃子。と、あげまき、かざし、女面、振袖、片襷の者が後向に出、「ほのぼのと」「立ち直れ」「浮き沈み」のながし歌で浮き沈みを舞ひ、やがて幕の根に立ち、扇を開いて靜かに振あると次の語りになる。

（むかしより、契りしことを誰かはじめ、と、この時幕の下より、ザイ、下に黑垂、鬼面、千早（大貨では、かつら、蛇面、千早、袴）の者が這つて出、黑帶の一端を女の手に持たせ、他の一端を自ら持つて胴前に坐す）彼樣の、はじめおかれしが、あらおそろしのしのびつま、あらおそろしの我妻よ、（と女はあたりにぢつと氣を配るこなしあり、扇を前方にする。）夜ハ通へど、晝ハ通ひ玉はぬが（と、女は向ふを見まはしつゝ扇を左右にする。この時ドンと胴を打こむと、蛇は、笛をヒューと鳴らす、）いとふしぎの大ぎ事、夜るをバなにとうばたまや、（と扇をよろしく振あり、このとき胴を打込むと、蛇は笛をならし、女は扇をちつとさす）かの時のむつ言に、契りをこむもこよひ斗りとのたまへバ、（と蛇は袖を使ひ、膝寄りに進み、女に添ふ、女は動かず、蛇はすぐ返る。女はしばらく扇を前にし、ぢつと立つ。）さすが別れの悲しさニ、おだまきに針を付、もすそにこれをとぢつけて、糸次第にしておいて、あとをしたふてひかへ行、糸繰りとめて見てやれハ、吉野の山を打越て、（と扇を大きく振あり、左手は腰にし、前を動かしつゝ進み出る、蛇は膝寄りのまゝ出て入れかはるゝみむろの山や神垣の、杉の下タにぞ、と、まれり（と、又入れかはりになり、女は靜かに扇の振あり）あらうらめしの（と正面向になほり、尙扇の振あり）忍びつま（と扇をとめ、やゝうつむき加減に、袂を折つた袖にぢつとなる。）あらなつかしの我がつまや、契りし姿ヲあらはして、語りたまへやわがつまや。

と語りがきれると囃子となり、蛇は、膝で歩いてそのまゝ入る。あとに女の扇舞あり、タタタをふみ、その場にめぐり、後退りし、小めぐりし等、尙色々に舞ひ　とゞ大きく扇をつかひ、幕前にひよいと扇を投げてとり、正面向にきまつて入る、約十四分。

圓萬寺本のは簡略になつてゐるので、要所のみを右に參照しておいた。大體は岳本と同樣である。

又、大貨のは、岳のと同樣であるにか、はらず、大貨のを寫した筈の晴山本のは、謠曲のクセをそのまゝ寫したものであつた。即ち「よふ〳〵急ぎ行く程に！〳〵みむろのやまに着きにけり」を幕出しとし、「その昔、足引の大和の國に年久しき夫婦の者あり」以下、「三輪のしるしの過ぎし世、語るにつけて恥かしや」までを誌してゐる。（これは明かに謠曲のを寫したものであらう。）

(三三) むつ言ーむつもろ(岳)
(三四) とのたまくべー浴暮に(大出)・とのたまいて(岳・丹)・この字なし(書)
(三五) ニーや(大出)・大に「ふくろ所を知らん爲」と入る(風)
(三六) 付ーひて(大出)・つけて(大)
(三七) もすそにこれをーこれをもつそに(大出・大・風)
(三八) とをーうつ(大出)・とり(大)
(三九) 「糸ニひかく行」となし(風・書)
(三十) 「あとをニひかく行」となし(大出・大)
(三一) ふてーいに(岳)・ひて(丹)
(三二) 糸ニやれーー糸をとめてひかくゆく(書)
(三三) とめて見てやれーーたまくや(大)・かくしたまくば(風)
(三四) をーも(丹)
(三五) やーを(大出)・の(書)
(三六) のーや(岳・大出・書)
(三七) 下タ―もと(岳・書・丹・大出・大・風)
(三八) ゼの字なし(大)
(三九) れをーリーリて(大)
(三十) あらニ…わがつまやーやらおそろしのわがつまよ、やらいぶか(なつかー丹二)・らめー丹二)しのしのびつまよ(岳)・あらなつかしの我業や、あらおそろしのしのび業や(風)・あらなつかしや我業よ、あらららめしのしのび業よ(書)・あらなつかしの吾業よ、あらららめしのしのの我つまやー(大出)・やらおそろしのしのびつまや、やらうらめしのわがつまや(大)
(四〇) 契りし…つまやーーちぎりし事かたらせ玉くや我業や(大出)・もとの姿とさまをかくて、ふる(風)ならはれたまくやわがつまや(大)・ちぎりの姿あらわして、かたらせたまいや我つまよ(風・岳・書)
(四一) ヲの字なし(岳・丹二・書)
(四二) やーの(丹)
(四三) やーよ(岳・丹・書)

(一) 下岩泉本のかく出「上かきの杉の枝にと懸りつ、糸へ池ニとしつみけるゞよふ〳〵そき行程ニ〳〵、早をたまきニ開ニけるゞ」
(二) げにもげにとなし(岩)、
(三) げにもげにふしぎやなームカシヨリ、チギリシコトヲガ始(和)
(四) のーな(和)
(五) がーの(岩)
(六) いつくともなん此君がーコヽノ君ガ(和)イクタトモナタ(和・イ岩)

(二) 黒森方のおたまき

黒森方のは、各本細かい異同があるが、裏絵本のが比較的とゝのつてゐる。それでこゝには裏絵本を底本とし、和野本の短い卜書をも添へて挿しておく。(西口・上坂両氏本のは誤脱や混誤が多いのでこゝには参照しない。)尚、和野では、はじめ女が出て舞ひ、次に若男が面をつけて出、この若男が入ると、これが蛇面の姿になつて再び出て舞を引く。蛇が入ると、女は舞ひ下りを舞つて入るといふ。

おたまきの字たい　(裏絵本を底本とし、和野、下岩泉の両本を参照す。)

一かんこえ　池の水。

一まくの出　ようよういもきのく程に〳〵　はやかゝがきにとつきにけゝ。

一けにもげに(一)ふしぎやな、ふしぎの事が(二)(三)(四)(五)有、いつくともなく此君が(六)、そんとかよわせたまいしが(七)

夜わかよはとも(八)ひるゝえつ、かいるとこゝろをしらさんや。

かはるとこゝろを　しらんなら、おはさまに　事ねんごろにおとこいやれ。

おはさまに(一〇)　こゝねんごろにいきけば(一一)、されば(一二)女のたはかりわ(一三)、おたまきに針つけて(一四)、むつそう(一五)

そてにとらつけて、あと(一六)をひかこしてあよび行(一七)。

やがてこの君が(一八)、そんとかよわせたまいしが(一九)、おはさまの(二〇)おゝせのこゝく(二一)に、おたまきに針つけて(二二)

むつそう(二三)そてにとらつけて、あと(二四)をひかはて　たつね行(二五)、ふしきやな(二六)、かゝがきの、杉の枝(二七)にとゝ

糸わ(二八)、かゝりたり(二九)、針わ池にと　しつみける(三〇)、えのけちよたつ　したにいなり(三一)(三二)。

○是を蛇ガ出ル所

○たとこは(三三)此いけの　主ちあらはあれ、出てすがたを　おゝせややれ。

是を蛇ヲおそいる所

△西ゝも　よさき(三四)そらが、にやかに(三五)かゝくらり、らの雨らの風ふき来(三六)、池の内ゝ、くれないのしたをま

きいたし、出てさせたうすがたやら(三七)、えのけちよたつしたにいなり(三八)、えのけちよたつはかりなり。

貳ばんうたい

○是をひとタタル所

一とくとくきかせたまいかせ(三九)、このよてらきりしわわ(四〇)、らいしやこてら(四一)、おたくうちにわ、おなしに人

間けんと生れおなせよわが君よ(四二)、に世とらきり(四三)をこめくきが(四四)、とくとくいらせたまいかせ(四五)。

(七) そんとーソント(和・岩)
(八) もの字なし(和・岩)
(九) かいるーおどいやれーコヽノ君ノカヨイシトコロヲシラスシテ(和)・かゝら所をチ知して(岩)
(一〇) おはさまーうはたま(岩)
(一一) 大に「其姿のかやう所をしらんなら」と入(岩)
(一二) きれば―サチキ(和・岩)
(一三) わーて(和)・に(岩)
(一四) つけてーテクケ(和・岩)
(一五) うーを(岩)
(一六) あとーー糸(和・岩)
(一七) 大にびーアミミ(和・岩)
(一八) 大に「いつく共なく」と入(岩)
(一九) たまいしがータモウトキ(和・岩)
(二〇) おはさまのとなし(岩)
(二一) にの字なし(和・岩)
(二二) つけてーテクケ(和・岩)
(二三) うーを(岩)
(二四) あと・糸(和・岩)
(二五) たつね行ーアミミタ(和・岩)
(二六) 大に「コノ糸ガ」(和)・「此糸ハ」(岩)と入。
(二七) えだーもと(和)
(二八) 糸わとなし(和・岩)
(二九) たりークム(和・岩)
(三〇) 針ー糸(岩)
(三一) みけるーメナタ(和)
(三二) したいーズカリ(和)
(三三) かのけちよたつしたいなりとなし(岩)
(三四) にの字なし(和・岩)
(三五) てもーミテモ(和・岩)
(三六) 西からよきーイヤ、チリナミトモナキコヽ(和)・しおそろしや、今迄八何共なき是そらか(岩)
(三七) やータ(和・岩)
(三八) いーを(岩)
(三九) ちの風ふき来ーシキリトフリキタリ(和)

しきりなり（岩）

（四〇）池…まきいたし―イケノ水ヲバクレマイテ、五シキノ水ノアイタヨリ（和）・来沼の水ハくれないの五色水の間ゑ（岩）

（四一）すがたやら―コノツマ（君）ノ、スガタヲミテノオソロシヤ（和・イ岩）

（四二）みのけもよだつしたいなりとなし（和・岩）

（四三）とくとく―シノビノツマヨタ―（和・岩）

（四四）せ―し（岩）

（四五）て―にて（岩）

（四六）ちぎりしわわ―モチギルナリ（和）・ちきるなら（岩）

（四七）らいしやうても―マタライショテモムスブベシ（和）・又来世ニ両もむすむべし（岩）

（三）夏屋本のをだまき

夏屋本のは例によつて少し變つてゐる。

尾　太　巻

△マタ出　ヨウヨウイソキュクホトニ、ハヤヲバタマニ、ツキニケリ。

△フシキヤナ、コゴニヒトツノ、フシキアリ、イツクトモナキ、ヨキキミカ、ソトカヨワセ、タマイシガ、ヨルワカヨエト、ヒルミエス、サテモフシキノ、シタイナリ、此ノコトヲ、ヲハタマニ、コトヲンコロニ、トエケレハ、ヨルワカヨエド、ヒルミエヌトノコニワ、ムツソラハリニ、ツケタマイ、シノブトノコノスソニツケ、アトヲヒカエテ、タツヲユキ、ヨクヨクミレハ、ヌマノソコニソ、イリニケリ。

ヲンナホト、ヨニアサマシキモノワナシ、ハツカシヤ、此ノコトカウキヨニキコエテ、アルナラハ、ナラハツカシキシタイナリ、シノビノナミタワセキアエス、サレトモ、シノビノツマヨ、少シ出テ、スカタヲミセテ、タビタマイ。

ヲソロシヤ、ヌマノ水、コキクレナイニ、チノアメ、チノカゼ、フキケルワ、ミノケモヨタツ、メモクルヽ、ウシロニ、アシヲヒキケルカ、亦タチヨリテ、シノビノツマヨ、コノヨノ、チキリワ是マテソ、ライシヤウニテモ、チキルヘシ、亦クル世ニハ、ヲナヂニケント生キテ、ニセノチキリヲナスベキカ、是ヨリトクトクヲンモトリソウラエヤ、アラハツカシノ我身カナ、ヒトノミルメモ、ハツカシヤ、コレヲボタイノ、タヲトシテ、テイハツナシテカエルベシ、サラハウキヨノ、ヲモイデニ、ミチユキフミテ、カエルベキヤ。

（四八）またーノウ（和）

（四九）おなせよわが君よーアイ（和・岩）

（五〇）とーの（和・岩）

（五一）をーも（和・岩）

（五二）がの字なし（岩）。次に「能々聞せたまいかし」と入（岩）

（五三）せ―し（岩）

（四）桧木の糸手巻

こゝのもそのまゝ誌しておく。

糸　手　巻

巻出　漸々急き行程に、はや神垣に着にけり。

不思議やな、我が妻は、夜は通ゑと、書るミゑす、不思議の事は壺つ有り、此事を姥玉に、事念比におとひある、をはたまの仰せには、歸る所をしらんなら、むすそをすそに針をつけ、後を慕ひて尋ね行け、神垣の、杉の下ゑとたつね行く、沼の内ゑととゝめたり。

次　蛇　出　る　也

古しゑ久敷我が妻は、今こそおもいしられたり、此夏がもれて浮世にきこゑなば、猶恥ヶ敷夏やらん、何となく此沼は、唯くれないに擬成り、身のけもよだつ斗なり、此沼の主し有らは、少し出て來て妻をおミせやれ、しのび妻　とかたりけり。

古しゑひさしき我か妻は、今こそおもいひしられたり、上旬此夏は、もれて浮世にきこいなは、猶恥ヶ敷事やらん、今生にても契るへし、來世にてもむつぶべし、又來る世には、同し人間と生れなし、さて万劫をへんへき也、なこりおしきの我か妻や、とく〳〵歸ゑり給へかし、名殘惜しきの我かつまや、とく〳〵かゑり給へかし。

二、定　家

これは黒森諸本及び桧木本にのみ傳へられてゐる曲で、舞は今何れにも絶えてゐる。大體「機織」の燒なほしの樣な所がある。

都に美しい神子があつた。藤原の左大臣がこれを見かけて、九十九夜まで通つたが、つひに靡かなかつた。けれども人の念力は岩をも通すで、この神子は遂に神の前のかつら木となり、藤原の左大臣はかみかつらとなつて、この木にまつはりつき、神子の苦しさはひまもなく、その妄執にあらはれ出るといふのである。

「人ひかば、なびけや峯の山櫻、咲いての後や散るぞかなしき」或は、「なさけ知る戀しき人があるならバ、問はれべし、たゞいたづらに朽ち果つる身を」といふ歌を引いて、沙門が、見物の若き女房や、めらしらに忠告して言ふ。「人呼ぶとあらば、五度に一度はヽナビキあれ」と。

本文の謠は、やはり謠曲の「定家」からとつたらしい。前段のロンギと、中入後の大部分とがそれになつてゐる。今左に謠曲の關係部分を誌してみる。（觀世流に據る）

地ロンギ　古りにし事を聞くからに、今日も程なくくれはとり、怪しや御身誰やらん。シテ　誰とても、なき身のはては淺茅生の、霜に朽ちにし名ばかりは、殘りても猶よしぞなき……地　この上は、われこそ式子内親王、これまで見え來れども、まことの姿はかげろふの　石に殘す形だに、それとも見えず葛葛、苦しみを助け給へといふかと見えて失せにけり〳〵

（中入後）後ジテ……昔は松風蘿月に言葉を交はし、桒帳紅閨に枕を並べ、地　樣々なりし情の末、シテ　花も紅葉も散り散りに、地　朝の雲、シテ　夕の雨と、地　古事も今の身も、夢も現も、幻も、ともに無常の世となりて跡も殘らず、何なかなかの草の蔭、さらば森の宿ならで、外はつれなき定家葛……シテ…身はあだ波の立居だに、亡き跡までも苦しみの、定家葛に身を閉ぢられて、かゝる苦しみ際なき處に、ありがたや、唯今讀誦し給ふは、藥草喩品よなう、ワキ　なかなかなれや、この妙典に、洩るゝ草木のあらざれば、執心の葛をかけ離れて、佛道ならせ給ふべし、シテ　あらありがたやげにもげにも、これぞ妙なる法の教へ、ワキ　普き露の惠みを受けて、シテ　一つもなく、ワキ　三つもなき……地　露と消えてもつたなや葛の葉の、葛城の神委、恥かしやよしなや、夜の契りの、夢のうちにとありつる所に歸るは葛の葉の……

（一）くる西…あとを―フリニシアトヲ（夏）
（二）も―の日も（西・上）
（三）次にかへしあり（夏）
（四）敷―シヤ（夏）
（五）次にニの字入（夏）
（六）あらすーヤラン（夏）
（七）いつれ……あだちよの―西ニムコウル、カタチアメ（夏）
（八）よ―ヲ（夏）
（九）たぞ以下―カトミエテウセニケリ（夏）
（一〇）雜有さよ―おそろしさよ（西・上）
（一一）かハし―合（夏）
（一二）ん―ウ（夏）

（一）黑森本の定家

本文は寛政本を、沙門（寛政本になし）は西日氏本を底本にして誌す。（西日氏・上坂氏・夏屋の諸本を對照す）

て　い　か

△くる西ハ、こよ敷あとを、聞からに、今日も、無程くれはつる、あやしやな、あや敷御身、たれあらす、いつれ無き、君のはでをも、あだちよの、それとハミゑぬ、つたかつら、くるしみよ、たすけてたハと、ゆうたぞ、みへる、雜有さよ。

△けニもけニ、むかしハ小風ら月ニことはヲかハし、水上、こうけんニ、まくらヲ拜べ、樣々有し、なさけ之道、花ももみちも、ちり〴〵ニ、ゆんべの雨と、あしたのつゆのふる事ハ、今の身ニ、けニ中々事、けニ中々之、くさのつゆ、さらハむくらの宿幷へ、やいろ波之立入迄、無きあと迄もをもれぎト成て、今讀誦し玉ふも雜有さよ、今讀誦玉へとハ、釋尊や半よ半よと、よいニす上上本上菜、かの名てんニもれたるきさきが、有ればこそ、しゆい仙の、かつらヲかけはつし、仙道ニ入せ玉へける。

沙門の哥ひ

○さんけ、こう御前に罷立たるしやもんをハ、いか成しやもんとおほしめす、そふも、我ハこれ、ミやこにかゞれもなき、なにうらや、なにゼのうらの、そてふりの大御子にて御座ゆか、此御子と申ハ、いるにせんたん、たつにせんだん、なびぐにせんたん、三せん反の、かたちをもたせたもふ御子ニ而ましますか、ふち原のさたひちんハ、これを見かけて、のミかけて、あめのふるよもふらぬよも、まつた風のたつよもたゝぬよも、ないし九十九食かその間、御かよゼせゆへ共、そふしいちたんきの御子ニ而ましませハ、ついにおんなびき無御座ゆ、人のねん力ハ岩をとふすと申す、此御子は、神の前てのかつら木となつてたゝせたもふ、まつたふちゼらのさたひしんハ、神の前ての、かミかづらとなつて、とらやからまりや、あらむかしやひまもなき、なんとゞ見へゆか、かの御子ハ、いつしゆの哥をあそはるゝ。

なさけしる、こよしき人かあるならハ、とハれべし、たゝいたつらにくちはづる身を、

まつたかさねて二しゆの哥、

人ひかハ、なびけやゝねの山櫻、さひてのゝちや、らるそかなしや。

これを見てから、聞からに、こゝ元の若き女人方ハ、人がなびかハなびかせたまへ、十二人のかぐらひようしを合て、ちよしゆうハなりをしつめてごちよふもん。

男、八人のりふどふ女、てひどふむつをのしらへのこゑ、さあ〳〵ふゑ、すゝのよそこへハ、ひようとく、三も無く、一座に祈レば、草木國土、しつかい成佛、中ニぬるゝハ、ていかかつらか、神の前で

二番舞のうた

△けニもけニ、けニもけニ、か程ニえたる、森かしらつゆ、あま行クつゆニ、めぐみを請で、一一も無

（一三）ハ―モ（夏）
（一四）ニけニ中々事―ニ中々のこと（西・上）ノ共ニ無常トナツテ跡モノコサス（夏）
（一五）次に「ゲニナカナカノコトヤラン」と入（夏）
（一六）井ベ―ナラテ（夏）
（一七）やいろ―トワユウ（夏）
（一八）波―のもミみ（西・上）
（一九）立入―タチイ（夏）
（二〇）「今…よいニす上」となし（夏）
（二一）も雜有さよ―ゑ（西・上）
（二二）玉へ―ない（西・上）
（二三）釋尊―君のはて（西・上）
（二四）衆―てん（西・上）
次に「今讀誦シタモノ雜有サヨ釋般若、尊者、如如品、如意り衆生、上恩上衆」と入（夏）
（二五）かの名てん―此ノ明庭（夏）
（二六）きさきが―さぎさか迄も（西・上）
（二七）「道行の哥ひ」とす（上）
（二八）先に次の幕出あり（夏）
△ワカ神子カ、カノカウテイノリヌル、イノリモ叶、幸モヨシ
（二九）さん仆―ヲウ（夏）
（三〇）そふも我ハとなし（夏）
（三一）我ハこれとなし（上）

(三三) ミやこ－日本(夏)
(三四) もの字なし(夏)
(三五) なにうらやなにひのうらの
　となし(夏)
(三六) 此御子と－形ヲ(夏)
(三七) 「せんたん」を「千駄」とす、以下同(夏)
(三八) 御子－コミコ(夏)
(三九) ます－ゴザツウロウ(夏)
(三十) 先に「ヲウ」と入(夏)
(三一) さたひちんハ－シヤタイトノツ(夏)
(三二) のミ－キキ、(夏)
(三三) まつたとなし(夏)
(三四) せ－レク(夏)
(三五) そふし－シヤウヂ(夏)
(三六) 御子－コミコ(夏)
(三七) 無御座ル…かミかづらとなつて－アラン
　ニヨツテ、フチツラノ舎弟トノツ、神ノ前ノ
　桂キトナツテ、立タセタモウ、コミコツ佛ノ
　前ノツタトナツテ(夏)
(三八) りや－れや(上)・り(夏)
(三九) あらむかしや－クルシキ(夏)
(四十) もの字なし(夏)

の、神かつら、なつしハ、吉野、よいの、らきりハ、ゆんべの内に、引する所ヲ、かいせや、くつの
は、はりまと、成る〳〵、ていか、かつらが、きろり、かつかり、をもないや、をもれき、かたろや
うつもれて、難有さよ。

(四一) 見へル か…あそはるゝ－説給(夏)
(四二) なさけしるこよしき人かあるならハ－
　問人アラハ(夏)
(四三) をー ツ(夏)
(四四) 「まつた……かなしや」となし(夏)
(四五) これを……なびかせたまへ－ヲウコレヲ
　見カナ、開カナ、コゴナイノツカキ女房メラ
　シ、カタカタツ、ヒト、ヨウト、アラハ、五
　度ニ一度ツ、ヲナビキアレ(夏)
(四六) 以下なし(上)
(四七) りふどふ女－八女メ(夏)
(四八) をー ツ(夏)
(四九) さあ〳〵－サアサアツノ(夏)
(五十) 以下－アヲバノフエノヨツゴエヲモツテ
　シンズ、シズト、ヲハヤシ、ハイサア(夏)
(五一) 先に沙門のそれと同じ暮出歌あり(夏)
(五二) けニとなし(四・上・夏)
(五三) 森－モウリ(夏)
(五四) 行－れ(四・上・夏)
(五五) ニ－ノ(夏)
(五六) 請で－あれハこそ(四・上)・ウケ(夏)
(五七) 一座に……ぬるゝハ－ヒキツル、トコロ
　ニ、ハイマトナルツ(夏)
(五八) 次にハの字有(四・上)
(五九) 以ド－メノ、カミカスカタ、ハツガシヤ
　ロシロ、ユンメノ、ウチワ、カタチワ、ウツ
　モレテ、ナミタヲ、ソツグ、キユル、キユ
　ル、ジヤウカイ上佛、ツユニ、キユユル、カ
　ツカリ、アリサマヤア(夏)
(六十) す－つ(四・上)
(六一) ま－は(四・上)
(六二) 〳〵－ゝハ(四・上)
(六三) いの字なし(四・上)
(六四) 難有－おそろし(四・上)

(二) 檜木本の定家

前者との異同は、殆ど詞章の出入に過ぎないけれども、今全文を誌しておく。

暮出　ふりにしあとを、きくからに、今日も、程なく、暮れはつる

定　假

あやしや、御身誰やらん、いつれなき身の、人は、見ゑぬ、つたかつら、苦るし身を、たつけ給へと、行方知らすに失せにけり。

文　舞　所

實にも昔は、せう不食月に、詞を合せ、すいきやう、かうけんに枕をならへ、さま〳〵有りし、なさけの道・花のもみちも、ちり〳〵に、ゆふべの雨と、朝の露のおつる夏も、今の身の、友に無常よとなつて、跡ものこさす、失せにけり。

げに中〳〵の草の露、〳〵、さらばむぐらの、宿なくて、とは、いや、あらなミの、立居まて、おもれ木となつて今讀誦し給ふの有りかたさよ、釋尊、女品、女々品、如意利衆生、上品上生、かの妙見にもれたる、きさきハあらはこそ、しうしんのかつらを、かけはつし、佛道に入らせ給いけり。

定假之沙門

神歌　しつかなる、おの、社のたまり水、澤川の水て影を見るかな。

おう、さんそう御前に罷立たる沙門をは、いかなる沙門と思召、我ハこれ、そうも都にかくれなき、そてふりの大神子ニ両御座ル、かたちを申ニ、立千段、居千段、靡に千段、三千餘段の、形を持たせ給ふ小神子ニ両御座ル。これ藤原の、左大殿ハ日かけ、めかけ雨の降ル食も、ふらん食も、まつた風の立食もたゝん食も、乃至、九十九食は、御通ひし ル共、はうじし、たんきの、上廣之事なれハ、終に御暇き、ます、男之念力、岩通すと、藤原左大殿ハ、彼の小神子ば、神の前てのかすらとなし、左大殿ハ、つたなり、とぢからまり、苦しき、隙なき何そと見ゑ ル、その時、一種の哥を、讀れて ル、おもいしを、とふ人あらはとゐるへし、たゝいたつらにくらはつる身社そ、つらけれ、おうこれを、見より、きくからに、こゝないの、若き女房衆、人月と有るならば、晩にも、おんなびき ルへ、十貳人の神樂男子、八人のやうとめ、さつ〳〵の鈴のやき聲ふりあゐせ、しんつ〳〵と御拍子、御聽聞 ルへ。

神　哥　ニ

若神子に、鈴取添ゑて、拜むには、四方の神ハ受て喜ふ。

舞　詞

定假葛ら、上の目の、髪姿、はつかしや、よしの、夜るのちきり、夢の内とに、みんする所に、かゑせやくつの葉、はゑまどゐるゝやていかかつら、かたちはうすもりて、ありがたさよ、打返し〳〵三度。

三、櫻　子

これは主として番樂に傳へられてゐる。謠曲の櫻川の一部をとつたらしい。舞は今は殆ど演ぜられてゐない。僅かに、比立内、幸屋

渡の古老によつて記憶されてゐたに過ぎない。

又、田子、葛巻等の五拍子の神樂で櫻子と稱して傳へてゐる舞は實は赤間であることは、赤間の章に述べておいた通りである。然し乍らその詞章はやはり櫻子であるが、極く斷片的のものに過ぎない。

これの舞は、比立内及幸屋渡の古老の記憶によれば、はじめ女が出て舞ひ、次に子供が出、再び女が出て、子供と手をとり合つて舞ふといふ。

詞章は二階本のが最もとゝのつてゐた。荒澤本には、やゝ脱落があり、幸屋渡本のは、大體二階本のと同じと思はれるが、言葉のなまりが多く、且つ崩れて居り、富根本にも詞章はあるが、これは、支離滅裂のものであつた。

又、眞澄翁採集の「夷舍奴安裝婢」所載のものは大體二階本に同じく、たゞ若干の脱落があつた。

（一）二階本の櫻子

次には二階本のを底本にして誌す。（傍書は荒澤本による）

櫻　子

幕出へ春くれバ、梅もさくらも咲みだれ、花についても我心、聞（ナシ）につけてもなつかしや、見るにつけてもなつかしや。〻〻

中言立へヲ、斯ふ御前に罷り立たる女をバ、如何成女と思召す、我ハ是、櫻の宮の、氏子なりしが、去年三月十三日に、筑紫の國の、人商人に、我か子壹人盗とられ、か樣に狂亂申ゲ。

へさくら川に戻り、さくらの花をすくひ集めて、己が子のさくら子、見バやと存ゲ。

へ櫻花ノ〻、すくひあげて見たれども、ワが子のさくらごハ未見へぬ、さくらバな〻、ヤアすくひ上、ヤアゆすい集て見たれども、我が子のさくらごはまだミへぬ、あらなさけなの御事や、哉かなし いやな、さなきだに、行ことやすき、春の水、流るゝ花をやさそふらん、櫻川、瀬々の白波しげければ、霞の間にはかばざくら、霞を流す、しだの浮島の、うかめ〻の水の花、實に面白き川瀬かな〻。

さくらこ（ヲ）ヲ、斯ふ御前に罷出たる兵をバ、如何成ものぞとおぼしめす、我ハ是、さくらのミやの氏子なりしが、去年三月十三日、筑紫の國、人あき人に、我身をあきなされ、母の恩を送りてゲ、櫻川に戻り、母に對面申さばやと存ゲ。

へいかにや如何に、狂人の言葉聞バ、不審儀やな、もしも筑紫の人やらん、つくし人との玉ふハ、何の御爲にとひ玉ふ、我子なりけるさくらごや、木ノ花さくらごと、心地よし、櫻子や〻〻、見れば中々涙なりける、さくらごや〻〻、三歳の日數程ふりて、親と子にあふぞかな。

ヨイサアサノ〻〻。

はやし へさくら木は、うちつり見れバ、何もなや、ハるのたねにはなにがなるらむ。

〔考異〕（一）こゝに「よふ〻〻急行程に櫻の宮に着にけり」と幕出あり（荒）

（二）幸屋渡・比立内の櫻子

幸屋渡では「櫻ば」と言ふ。

女が出て舞つて入ると、櫻子が出、再び女が出、二人で中歌につれてさつと舞ふ。次に二人で手をとり合ひ、小拍子で、そちふみこちふみする。

又、比立内でも同樣であつたが、子どもは、常の服裝に鉢巻をし扇を持つ。女も常の女舞の姿で扇を持つだけといふ。

櫻　ば　女　舞

幕出へ追々急キ行ク程ニノ〻、櫻ノ宮ニッキニケリ。

中歌へアラ櫻ガ宮ニ花モチリ、ナリチリガタニナリタリヤ、花チリガダニナリタリヤ、悲シヤナ、サナキダニ行ク事ヤスキ春ノ水ヤ、サソヲラン、サクラ川、セゞノ白ナミ、シゲケレバ、ウカビウカビハ水ノ花、カスミノ前ヤ、カバ櫻、フモト見エスヤ、芳野オノ、ヤラナツカシノ、ミヤントヤ、ヤラナツカシノ御子殿ヤ。

子幕出　追々急キ行ク程ニノ〻、櫻ノ宮ニ急クナリ。

中歌
櫻子曰ク　（これで見ると櫻子は沙門に出たらしい？）コ御前ニマカリ立タルサムラエハ、トノ國ノ住人、タレヤノ人トワ思召ス、我ハコレ、櫻ガ宮、氏子ニナリス、去年三月十三日、筑紫ノ國、アキ人、ワガ身ノ商、親ノ恩ヲ送リ候。

幕元　イカニモイカニ、狂人ヤ、事ノハキケバ、フシギヤナ、モチスモ筑紫ノ人トヤラン。

△ヲヽ筑紫人トワ、トエタモヲ、ナンノタメニテ、トエタモヲ、イサエ今ダ知ラネドモ、子ハ子トナレス櫻子、スクリ集ベテ見タレバ、我ガ子ノ花櫻子トモミバヤトモ御覽ゲ。

小ベソス

サクラバヤノ〻、スクリ集ベテ見タレモ、我ガ子ノサクラゴトヲ見エバコソ、ヤラナツカシノ御子殿ヤ、ゲニナツカシノ御事ヤ、短△サスガヲ見タレバ、モヽダテノ、ヨクヨク見タレバ、我ガ子ナリ、川ノサンバセニ子ハ子トナリシ、ウグエスネヲトキネヲダシ、ハネタルコノ如ク、ヤラナツカシノ御子殿ヤ、ヤラナツカシノ御事ヤ。

（三）田子の櫻子

尚次には念のため、舞を赤間とともりちがへて演じてゐる田子の櫻子の調章を誌しておく。

櫻　子

幕出し　漸々急ぎ行く程に、やう〳〵いそぎ行く程に、筑紫の國に着にける。

幕がゝり　實にげに忘れし事もあり、今年の六月十三日、（一本）に筑紫の國の商人に；我が子の櫻子をひろひとられしが、こずい集めて救へども我が子の櫻子を救へて、あらなつかしの櫻子よ。やら美しの櫻子よ。

ハれや〳〵。

一三、みるでら

この曲は、女鹿本にのみ傳へてゐる。構想は前曲の「櫻子」と同樣で、筋は謠曲の三井寺に出てゐるらしい。

みるでら

あれ〳〵御覽じ給へかし、我は御身の嬉しさに、それは誠のちようぜんか、今は何をか包むべき、我は駿河のきよみづの者なるが、人あきびとの手に渡り、げにも姿は恥しや、もれてあまるゝ涙かなげに有難の親と子は、緣はつきせぬ契りとて、常の契りと別れの鐘のいとしさに、今この寺にありながら、よそめの時によるものか、おん喜びにありながら、鐘ゆえに逢ふものか、嬉しき鐘の聲やらんゆきやらで、山路くらしつ、ほとゝぎす、いまひとこえの、きかまほしさよ。

一四、堀　川

女鹿及び小瀧にあり、これは舞の木の堀川夜討に出てゐるらしい。關係の部分を引いてみると左の如くである。

頃はいつぞのころぞとよ。文治元年卯月二十日の夜の事なり。とうくわは松にかゝりて、いろ〳〵の草花ば、かたきのひに色をます。らんでんしたるありさまは、錦をさらす如くなり、池のみぎはにのぞむ時、靜がすがたは花に似て、未だ秋にてあらねども、女郎花かとうたがはる。

女鹿本には語りが先にあつて、謠が後になつてゐるが、小瀧本のはその反對である。どちらが正しいのであるかは一寸判じ兼ねる。こゝには小瀧本のを底本にして誌しておく。

堀　川（傍書は女鹿本によるものとす。）

△謠　靜が姿を花と見て、いまだ秋にはあらねとも、卯月二十日のこるがていかの松にはさきかゝり、いろ〳〵のくさばなとなれば、色々の草花にてかざまつにとさきかゝる女郎花かと疑ふに、雷でんしげる有樣は、錦を晒すが如くなり、錦を晒らすが如くなり。

△詞立　アラ御前に罷り立つたる女をば、いかなるものと思召、（御所の御内に隱れなき）我はいそのぜんじがむすめ、靜とは自らがことにてゆ、鎌倉勢の方々は、獅子象の牙をはみ、はんくわいきうりうあんのくさんを勢なすとは申せとも、餘すまいかと存ゆ。

（女鹿本の最後に左のキリの歌あり）

まだみゆる、あまのかはらに秋たちて、紅葉をわたる、なみのうきはし。

一五、重　安

番樂の二階本にのみある曲で、舞は今絶えてゐる。

重安

〈重安の、ゆくすゑしらぬ、あらなゝの、浦風ふきて、なきたより聞につけても、なつかしや、きくにつけてもなつかしや。

〈ナヽコ御前に罷たつたる女をば、如何成女と思召、われはこれ、しけやすとの、妻、人麿御前にてましますか、鎌倉殿の御内に、梶原源太景季、かゝるざんげんによつて、由井かはまに落下り、ひとのひざのふしよりも、こまのあしのふしたかき、夫をあつめて塚に築、其中に、重安とのゝしゐしは有ならハ、うかばせ玉へやしけやすとの、天あけて鳥類畜類も、はやひきめとハ見へにけり。

幕出〈よふ〳〵いそきゆくほどに、是ははや由井のはまに着にけり。

中言立〈高きやに〳〵、登りて見れハ風かはやし、ゆゝやの身より見へにけり。

女末言立〈ヲヽコ御前に、罷立つたる女をハ、如何なる女とおほしめす、我ハ是、重安殿妻、ひとまろ御前にてましますか、しけやすとのにてましまさハ、由井か濱、度々合戰の樣子をことねんころに、語申ゆへ。

〈由井かはま、度々合戰の樣子、宇治三千餘騎に、追拂込られ、火水になれと、責られて、何かハもつてたまるへき、あしたの露と成にけり。

〈有難し、ありかたやな、人の妻より我妻ハ、後世をとゐる、有難し〳〵、たのもしやな〳〵、人の妻よりワかつまハ、御世をとわる、有難し。

一六、野の宮

岳本にあり、謠曲「野宮」の中入後の車爭ひの一節をとつたもの

らしいが、是だけでは何のことか解らなくなつてゐる。謠曲文は、左の如くである。

シテ　思ひ出でたりその昔、賀茂の祭の車爭ひ、主は誰とも白露の、ワキ　所狹きまで立て竝ぶる、シテ　物見車の樣々に、殊に時めく葵の上の、ワキ　御車とて人を拂ひ、立ち驕きたるその中に、シテ　身は小車のやる方もなし。

野の宮舞哥

幕出し（急げバよふやく行程に、野の宮に付にけり。

（夫昔、加茂の祭りおん車、主（ぬし）をハ誰としらじよの、白露（輸）宮を車のやる方無きとこたへてハ、はつとよりてな人々ならへにとりつへたりやああめ風ほほたり、野の宮の池の露、打拂（身は小）〳〵、たじおふあるくるま前後よふ。

一七、おかね

遠野の八幡本にあり。

おかね

けさのひわ、山のたかねを照らしより、いゃ田子（たこ）のおかねニかけやどり、いゃいでわの月のわがれまてい。

IV　番樂舞

いいばんがくの語原は明かではないが、大體武士といふ程の語感を以て、殆どその同義語の樣に用ひられてゐることは前にも述べた通りであるが、今、便宜上、例の幸若がゝつた、戰語りをなしつゝ舞ふ武士の舞を、總てこの名の下に一括しておく。

この番樂舞は、山伏神樂には、黑森派のものに多く、番樂に於ては大體に於て、何れにあつても特意とする演目とされてゐる。

これらの武士の舞は、舞も美しいが、その拍子もいゝ。その樣式は、幸若舞と通じてゐる所がある。即ち、語りの地の謠があつて、そのうちの抒情的な箇所が所謂フシになり、これに囃子が冠せられ、この囃子につれて舞や仕草がある。（或は囃子のみでも舞ふ。）然し乍らその舞は、幸若などのとは異つて、非常に手の込んだ華やかなものである。

尙、露拂の「番樂舞」に關しては、式舞の章參照。

一、信夫

番樂舞中、最も好んで上演されるのは、この信夫と、次の鈴木と

であらう。殊にも信夫は、式舞の中にも選ばれてゐる程である。

信夫、鈴木共に高館合戰のさまを語り舞つたもので、前者に、別に「太鼓取舞」の名があるのは、舞つてゐる最中に、胴取の叩いてゐる太鼓をやをら取上げ、前後左右にくる〳〵とまはしつゝ舞ふことがある故である。又、大手の櫓にかけ上りと言つては、この太鼓を据ゑて、これに腰を下し、遙かに見やる振などがある。二間四方若しくは一間四方の狹い舞臺に、凡そこれ以上の花やかな表現は出來まいと思はれる程の思ひきつた工夫である。番樂中、鈴木の舞に太鼓をとらせてゐる所もあるが、これは混同したものであらう。

又、西長野の「信夫」に於ける胴とりの役は、特に注意に慣する。（其項參照）

信夫の太郎景時といふ人物は、何に據つたものかは不明である。流布の本には、この名は見當らない。或は舞の本の「八島」に出てくる佐藤忠信が傳、しのぶの十郎みつとほなどから作つた名であらうか。

上山伏神樂の信夫

（一）黑森神樂の信夫

老手上坂氏が舞はれたのを見ることが出來た。山伏神樂・番樂を通じて、こゝの信夫の型が最も美しい。とんぼを切つたり、太刀を早業に使つたり、太鼓をとり上げたり等の振がある。

しの　ぶ

（黑森の寛政本を底本とし、西口氏、上坂氏、和野の諸本、及田子本（要所のみ）を參照す。）

雲張りあり、「エンヤハーエーさむらひはー」と神樂、「伺ふべきものは庭のとり」と胴の受辭あり、一囃子あつて幕出しになる。

幕出し（よふ〳〵急き行程に、信夫が里に着にける。

（一）この幕出しは西口氏本に依る。
（二）が里に＝山ニト（和）
（三）先に次の如くあり（和）
「サンゾウロウ、コウオンマイ、ニマカリタツタルサムライヲバイカナルサムライトオボシメスノウ、ワレワコレ、ソオモ宮古ニカクレモナシ、シノブノ太郎カゲトキトワ、ゲニワガコトニテ侍ガ」
（四）おをとなし（和）
（五）まどろむ＝マタラノ（和）
（六）草＝クサハ（和）
（七）しやう＝シユ（和）

（八）しよせきーしじよせき（西）しうせき（上）・シユセキ（和）・すいき（田）
（九）帶すハータメシ（和）・帶もせず（田）
（一〇）景時となし（和）
（一一）ゆはれー所縁（田）
（一二）明日ハ高上にーあれなるはたか城に（西）・明日は高館の城に（田）
（一三）この幕出しは口承による。
（一四）次に「スエニハモレテスソニュク」とあり（和）
（一五）おふとなし（和）
（一六）「何時もに…はたに取てハ」となし（和）
（一七）西口本に「しのぶ」が二通り書きとめられてゐるが、一は寛政本に同じく、他は少し異同があつた。即ちこの「直垂に」の次に、左の挿入あり。
「うの花をとしの大鎧、五枚しころの甲の緒をしめて、むらしげとふの弓をハまん中取て横たへて」
（一八）乘り…なんしも寄せるー乘つて、眞先かけて乘つたる有樣は、後はがかんとそ見へしか、おろしの風に目がさめて、たつと、幕下より扇が出て一振あり、次に幕下で足踏があり、幕を大いに振り動かす。次に幕を押出し、戻すことがあつて、やがて信夫の太郎が出る。烏帽子、武士面、縞袴、帶刀、袴の仕度に、帶を前に結び、赤襷を右肩から左脇にかける。
出るとタタタを踏み、はげしく振あり、坐し、又立つて振あり、かくて胴取の語りになる。黑森では胴取が總ての語りをする故。
△おを（西）、信夫の太郎景時は、まどろむ草のかけゑも、かつしやうを鎧ひ、しよせきを帶すハ、信夫の太郎景時か、ゆはれと聞く、明日ハ高上にこもり、合戰の有樣を見せ申さはやと存ゆ。
と、タタタを踏みつゝはげしく舞ひ、やがて入る。囃子はそのまゝつゞける、神歌あり、やがて扇が出、囃子はやみ、幕出しになる。
幕出し（一三）何とつゝみしせきの水、何とつゝみしせきの水。
と再び囃子がおこり、かくて、面をとり、ぬぎだれ姿になつた信夫太郎が、再び扇を開き持つて出、幕前にタタタを踏む。
次に太刀をとつて置き、扇も置き、無手で舞ふ。兩手を前にタタタを踏み、トンボをきる。次に胴前に到つてやをら太鼓をとり上げ、是を左右に振りつゝ一舞ひあり、（この間胴とりは、舞臺板を叩く。太鼓をとつたままトンボをきり、とゞ太鼓を胴前に置き、これに腰を掛け、太刀をさし、扇もとつてなほると、胴前の語りになる。
▲おふ、信夫の太郎景時か、打立其日の裝束ハ、何時もにすくれて花やかなり。はたに取てハ、紺地の錦の直垂に、如何にも早ふの駒に乘り、あれ成る原を見渡せば、敵はしぐらに寄せ來り、寄せば寄せろ、なんしも寄せる。然も矢頃に成しかば、大の中ざし取つてすこふて、ゆつ引しめて兵と離す矢かな。其矢もたまらす走り渡つて、たかとふか胸板にはつしと當ると見えければ、其矢もたまらず、するりとくけ、遙かに控へたてるひか馬のふとはらに、はふぐらせめてぞ立たりけり。痛はしやな、てるひたかどふハ、諸共に、馬ゑ下へだうと落ち、今は何にか有へきとて、なんみの打物鞘打はつして

たよせろ、かけよせろ」（西）
この前後を田子本には左の如くあり、「後にハかんがんおろしに目がさめて、川原表を見渡せば敵はしぐらに寄り來り云々」
（一九）せばーセラバ（和）
（二〇）しーチ（和）
（二一）るーロ（和）
（二二）しかばーケレバ（和）
（二三）取ってーモツテ（和）
（二四）すこふてーや、すかひ（西）
（二五）ゆつ引ーのつびき（上）・ロツビキ（和）
（二六）かーは（上）
（二七）其矢も…有へきとてーはしりわたりて、かの矢もとまらち、なもてに逢む强者を、胸板ちよふとゆばつたり、後に控へし强者を、こてのあまりて射とめたり、今はなんにかあるへきとて親重代の（西）・遙かに控へた强者の、こてのくされさいとめたり、やあらア矢先のものとも、その矢も返しもせず、後なるかんがんさみしき、なひく嵐の風に目かさめて、弓をばかしこにかからりとすて（上・ナカラ・ナカ・トチオキ・集作ノイ和）
この前後を田子本には左の如く誌されてゐる
「彼の矢も留らず、はしり渡りて、表にしらむ兵の袖からみにまじかく立たりけり、やさうしや者どもなりけり、とうの矢をも返さず
と、この間、太鼓に腰をかけたまゝに、扇の振あり、胴取は太鼓の緣をたゝく。とゞ信夫は立上り、太鼓を返し、左足を前に、右膝を折つて坐し、振あり、立つて一まはりし、又坐し、振あり、さらりと扇を捨てゝ太刀を抜く。
西から東へ一とわたり、北から南へ一とわたり（と切り）八方菱形、蜘蛛手かくなわ十文字、八つ花形にとゆふまゝに、命をさかひに（と太刀をかざしてきまり、）戰かうたり。
となほり、再び舞ひ出す。
タタタを踏み、ひよいと跳び、右膝を折つて坐し、又立ちなど。太刀を水車の如くに振り、ひよい〳〵と跳びつゝ一めぐりし、太刀を右手に振り、左手に振り、腰を落したまゝ跳びつゝめぐり、太刀を綾に振り等、とゞ、立つてきまると再び胴前の語りになる。
△おふ信夫の太郎景時は、大手の櫓にはせあがり、我身をつく〳〵みてやれは、つまきりほとも手ハ負はず、弓矢に花を咲かせたり。
と、太刀を收め、扇をとり、左無手で幕前にタタタを踏み、尙舞ひ方が色々あつて入る。約十分。
×
和野では宙返りをしきりにし、又太鼓に腰も下すといふ。

馬より下に堂と落ち、今は何か有るべきとて櫓より飛びおり云々」
（二七）たーと（西）
（二八）りーる（西）
（二九）西から東へ—北カラ南ニ（和）
（三〇）北から南へ—西カラ東へ（和）
（三一）「八方菱形」となし（和）
（三二）以下—に切つけて、小高き所にかけ上り、我身をつく〳〵見てやれハ、我身やそつとも手やをはす、しのふか持つたる弓矢に花をさかせたり（西）
（三三）とゆふまゝにとなし（和）
（三四）おふとなし（和）
（三五）「大手…あがり」となし（和）
（三六）はせーかけ（西・上）
（三七）つまきりーツマギレ（和）・すがきり（田）
（三八）ハ負はずーヲヌラツ（和古本）・ヌカズ（和新本）

（二）田子の信夫

「しのぶがくれの若奏、早や高館に着にける」の幕出しで、兜をかぶつたものが、はじめ扇をとつて出、色々に舞ふ。とゞ幕前に立ち、語りとなり「明日は高館の城に籠りて懇に雜談申べし」と、中入になるのであるが、實演にはこれを略して、一續きに演じた。即ち、扇をつぼめ、太鼓をとつてかつぎ、（こゝの太鼓は黒森などのよりもずつと大きい）舞臺をめぐり、太鼓を幕前に立て、拍子歌となると、その歌に合せて、太鼓の前に左右をきつて舞ふ。扇をとつて振あり、とゞ太鼓に腰を下し足踏みしつゝ左右をさしつゝ振あり、とゞ太刀を拔き、一振あると太鼓を胴取に返し、これより太刀をもつて色々に舞ふ。

次に太刀を鞘に收め、扇を開いてくづしを舞ふ。約十四分程のものであつた。

その詞章は大體西口氏本と同じであつたが、誤讀と覺しい箇所が多いので、要所のみを前に對照しておいた。

（三）夏屋本の信夫

夏屋本のはやはり言立が少し異つてゐる。

志　信

△マク出　ヨウヨウイソキユクホトニ、シノブノサトニツキニケリ

△ヲウ、シノブノ太郎ワ、マドロムクサノ、カゲヨリモ、カツセンヲヨロイ、スエキヲタツルワ、志信ノ太郎カユカレトキク、明日ワタカジヤウニコモリ、カツセンノナリシナ、ミセモウサハヤトゾンジソウ。

△マク出　シノフガクレノ、ワカスカタ、ツイニワカクレ、ナキモノヨ。

△シノブノ太郎カ打立、ソノヒノシヤウゾグニ、ハンタニ、トリテワ、コンジノニシキノ、ヒタダレニ、ウノハナヲトシノヲウヨロイ、ゴンマイシコロノ、カブトノヲウシメ、シケトウ弓ノ、マンナカトツテ、ヨツコウダイテ、イガニモハヨウノ、コンマニノツテ、ユクアリサマワ、イツヨリスグレテ、ハナヤカナリ、ウシロノ、ガツガンソメタル、アラシノ風ニ、メガサメテ、カワラヲモテヲミワタセハ、マツシグランギト、ヨセキタリ、ヨヅセハヨセロ、カツキヨセロ、シハシ矢コロニ、ナルナラバ、弓ノ本ハス、ウラハス、ヒトツニナレト、ヒキシヲリ、エツヤトユウテ、ハナスヤカ、ハシリワタテ、ユクホトニ、ヲモテニススム、ツワモノノ、コデノアマリテ、イトメタリ、ヤアラ、ヤサシノモノドモカナ、ソノ矢モカイレモセテ、馬ヨリシモニ、トウドヲチ、インマ

第四十八圖

信　夫（田子）

ワ、ナンニカアルベキトテ、チヤヂウタイノ、ナミノ打モノ、サヤヨリカラリト、打ハツシ、西カラ東シエ、ワツテワトウリ、北カラ南ミエ、ワツテワトウリ、ランモン、ヒシガタ、雲テ、カクナワ、ヂウモンジ、ヤツハナガタト、ユウモンニ、イノチヲサカイニ、タダカイケリ。

チウ、シノブノ太郎ワ、弓矢ニトリテワ、クワホウノ武者、チウデノヤクラニ、ハンシリアカリテ、我身ヲ、ツクツクミチヤルニツマキリホトモ、チワヲワス、弓矢ニハナワ、サガセタ。

（四）中妻本の信夫

中妻本のも小異がある。

しの　ふ　但早舞

かく出の哥　花咲ハ、古郷へ歸れ梅の花、物うき里に、散のおしさよ。

漸〳〵急き行程に、花の都に着にけり。

中の哥　しのふ太郎かけ時ハ、出立の其日の裝束、いつに勝れてはなやかなり、はたに取りてハ赤地の錦の直垂ニ、五枚しころの甲の緒をしめ、重藤の弓の眞中握り横たへて、うしろのかんくそめし、嵐のかぜに目が覺て、河原表を見てあれハ、敵ハしくらによせけり、寄はよせよ、かきよせよ、しかも矢ころとなりしかは、大の中さしとつてつかふて、よつ引しめて、てふとはなせは、矢もたまらす、はつしりとたりてゆくに、表にすゝむつハもの具足のむな板ほすといをるると見しより今ハはや、弓も矢もなけすて、親重代の浪のこし物、さやはつし、西より東へ割て入、北より南へ十文字、八つ花形と言玉ふ儘に、こゝを最期と戰ふたり。

但弓矢太小をさし舞ゆう口傳有。

（五）檜木の信夫

烏帽子、紋付、袴の武士舞の裝束の者が、扇と太刀とを持つて、十番切同樣に舞ふといふ。太鼓をとることはない。はじめ直面で出て一旦入り、後に面をつけて出る。

（六）大償の信夫

この舞はもと大償にもあつたらしく、「しのぶの太郎かげときは」といふはじめの詞章を古老が僅かに記憶してゐた。

下番樂の信夫

（七）西長野の信夫

こゝの信夫には又變つた型が工夫されてゐた。亂戰のさまをあのやうに表現したと見える。面白い工夫である。

（七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（一九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（二九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（三九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（四九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五四九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五五九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五六九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五七九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五八九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（五九九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六〇九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六一九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六二九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三四）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三五）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三六）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三七）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三八）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六三九）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四〇）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四一）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四二）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四三）ヲハ＝ヲハ＝あら（白）
（六四四）ヲ

の里に着にけり。

中言立（ヘヲ）信夫の太郎景時は、まとろふ草の影よりも、八處に鎧引たをすハ、甲冑をよろひ、すへきをたやすも、しのぶの太郎、ゆかたときく、明日は、前の高館の城に籠り、合戰の樣子を、こと慇懃に、かたり申へくにてゆ。

末言立（拍子）（景時ハ）信夫の太郎、其日の出立、裝束には、肌にとりては紺地の錦の直垂に、卯の花縅の御鎧、五枚綾の、かぶとの緒をしめ、重藤の弓の眞中、ナミつしともつて、持滿しめて、ヒヤとはなせば、す、ミ出たる兵の、てふのたばねに、はつしと中と見得ければ、血煙はつと打立て、うしろの草摺、するりとくけて、遙の白洲に立たりけり。

（ヘ今は何をか、射るべきとて、打物の鞘うちはづし、北からミなミに一渡り、西から東にひとゼたり、くも手かくなゼ十文字、八花かたなに、斬伏たり。

（著異）（一）以下「立たりけり」迄一角的程なく射て取れハ、今ハはや進み出たる兵者、後の草摺するりとぬいて、遙の濱邊にはふ鞍しめて立ッたりけり。（宮澤）

（一〇）興屋の信夫

こゝのは、しのぶが、佐藤織信の最後のさまを語るといふことに

語りなほされてゐるが、これは本が別なのではなく、高館の信夫に一寸手を加へたのであつたと思ふ。

志の　ぶ

幕掛　志のぶかくれの山すかた〳〵

云たて　おふふしきやな、ふしきやな、まとろの草の影よりも、かつちうをたゑす、むらさきすその、ほろかけし、人ハたれ、たそ、夫も志のぶのよかれ也、夫もしのぶのよかれ也、おふ、しのぶの太郎かげときなら、つきのぶ殿の、御さいごふのところ御まねき、しのふの太郎かげときなら、つぎのぶさいごふまねき

（さとふ次のぶ其の日の出立、しよぞくハ、はんたにとりてハ、こんぢのにしきのひたたれに、卯の花おどしの御よろい、五枚かぶとの、しころのおふをミんぢとゞて、いかにもはやき駒に打のり、いつもにすぐれて、花やかに、前の原を見渡せば、くらきにてきハよせきたり、よせらハよせれ、たいづよせれ、しかもよくれニなりしか、しけとふ弓のまん中ヵ手ニみんぢと打持、ろつひきゞて、ひよとはなせば、かの矢もたまらず、おもてにちすのすら物具束のむな板はつしとあたり、其矢もやたまずちんはしり、うらにも、ちすの、すふら物、こ手のあまりをいふてハとふる、いまハ何とてやゼらきだて、弓も矢もなんけ捨、波ミの打もの、するとぬき、西から東にゼつてやとふる、北から南に、ゼつてやとふる、四方四角、くもに角籠十文字、八つはのかたなに、こふろも川原、さゝ波立てきりふせたり。

次の歌

あゑふ、おふての屋倉ニ、走り上カリ〳〵、三方をつくづく、見てやれば、手をばおゼんと、見たりけり。

（一一）杉澤のしのぶ

杉澤のひやまでは、胴取が幕前に出ないので、胴取から太鼓を取るといふことはなく、はじめから小太鼓を持つて舞ふ。

「たにやみこしの藤の花さつさつさ」と、烏帽子、直面、胸當、襷掛、裁著、手甲、脚絆の者が出て、小太鼓をとつて舞ふ。片足を伸し、片膝を折つて坐しさまに太鼓を一つトンと叩くことなどあり、とゞ幕前に太鼓を置き、これに腰をかけ煙ふと語りになる。

しのぶは腰を下したまゝ、足でトン〳〵と拍子をとる。又、扇をひろげて振がある。（扇を前にし、左手をあげて失敬手をすることなどもある。）

しのぶ

かたり　まどろふまくらの上よりも、よろひかぶとをかんずる人は誰やらん、是は信夫のよかりとて、信夫の太郎かげ時ならば、最後のところをちよとまねろうかへ、さんゆ。

しのぶの太郎かげ時は、その日の出立ち、裝束は、肌に取りてはくさりかたびら打着し、上には紺地の錦の直垂に、五枚かぶとの緒をしめて、いかにもはやき駒に乘り、眞先かけしありさまは、人にすぐれし、はやり武者、うしろの原を見渡せば、敵はまつしくらに押寄せたり、寄せらばよせれはやよせれ、しかも夕ぐれになりしかば、大滋藤の弓の眞中、手にむんずと打持て、よつひき引いてひやうとはなせば、かねでもたまらず、よろひのむな板、はつしと射たり、それでも矢先は止りもせず、うらなる士卒兵も表の士卒兵も、おほ手にあまりていとめたり、今は何とてあらげ立て、弓をも箭をも投捨て、（と立上り）浪の打ちものするりと拔て（と太刀を拔き）西から東へ（と囃子が入り）わりては通り、北から南へわりては通り、四方四角くもてかくなわ十文字（と、太刀を以てなぎ、仰いで太刀をふり）衣川とて波をたゝへて、きり伏せたり、大手の矢ぐらに走り上り（と、左足を伸し、右膝を折つて坐し、太刀をふり）我身をつくづく見給ひて、手をば負はずと見せたりしが（と太刀を鞘に收め）弓矢に花を咲かせたり、ハイエー（二）

「サッサッサ」と、以前の振にかへり、一舞あつて拜して入る。

（著異）（一）女鹿丈の終にはキリの歌として左がある。

（二）七六　お鳥海のみたらせなかをそこみれば小石やまなごの黃金花咲く。

（一二）富根本の信夫

富根本のは、とゝのへられてはゐるが、詞章は簡略になつてゐる。

「中入」のところに「おもてかけて」と誌してある所を見れば、舞ひ方がやはり根子と同樣らしい。又「紺地の錦のひたゝれに、卯の花おとしの大鎧、五枚兜のおふゥしめて」の次に「○是ヨリタンセン」とあり、次に「しけとふまきの弓のまん中おつとり云々」の詞章がある。

（一三）山谷其他の信夫

山谷では十郎面を冠る。太鼓をとらず、束几に腰を下して、扇でのみ振がある。

けれども山谷のを移したといふ比立内では、鎧を着て出、やはり太鼓を採つてまはり、又太鼓に腰を下すこともある。

石神でも太鼓に腰を下す。鉢巻、鎧、袴、帶刀のもの、扇と太刀との舞といふ。

二、鈴　木

「鈴木」は「高館」ともいふ。その詞章は、幸若舞の「高館」を巧みに要約（そのまゝ一節を拔萃したのではなく）したもの、樣である。但し母の件りは幸若にも、義經紀や古淨瑠璃にもない。多分はこの舞曲の創作であつたらう。詞章は神樂・番樂の双方に殘つてゐるが舞は神樂側では、檜木に殘つてゐるのみである。

上山伏神樂の鈴木

（一）檜木の鈴木

こゝのは、詞章は母との訣別の段のみを傳へてゐる。母の件りの舞が殘つてゐるのは、恐らくこゝのみであらう。しかもその詞章は他に比して簡潔に、哀れ深く緩られてゐる。

鈴　木　（鈴木氏本を底本とし、杉山氏本を參照す。）

五拍子の囃子一しきりあつてやむと、次の幕出しになる。

幕出（漸々急ぎ行く程に〳〵、はや高館に着にけり。

と幕を押出し、なほし、又押し出して、武士姿、武士面の鈴木三郎がつぼめ扇を持つて出る。一舞あり、次に扇を開いて舞ひ、左の手は太刀の柄にかけてその場にもめぐる。扇のとり樣、體のかまへ樣、首のふり樣等にも色々あつて、角々をかけて順逆にめぐる。とゞ幕前に立つと、次の幕出になる。

（幕出）（旅の衣ハ鈴掛の〳〵、露なき袖をしぼるらん。

と囃子となり、鈴木は胴前に出て、扇を前にかまへてなほる。（次の間中なほつたまゝである。）次に下り羽となり、幕が持ち上げられると、黑頭巾、絲色の鉢卷、女面、振袖、廣帶（前に結ぶ）、うちかけ仕度の鈴木の母が、扇を持つてそこに坐してゐる。そのまゝ持物を左右に振あり、次に扇を開き、左手はその袖口をとつて振がある。次に立つと、浮き沈みあつて、靜かにその場に順にめぐる。（さあよい〳〵）と幕かげの掛聲あり。女は角々をかけて一まはりし、かくて幕前に來るとなほり、次の語りになる。

（おう御前に罷り立たる女をば、如何成る女と思召、我れハ是、紀州藤城の住人、鈴木の三郎重家の母にて御座ゐ。

と、以上の詞に合せて、進み退りする。

誠なるかな、（と左方にこなしあり）承りゐ得ハ、今度高館へ御下りのよし（と右方にこなしあり）道陸路ハ遠けれハ、御止りゐ得（と囃子が入る）重家殿。

と、重家は次の詞で持物を上げ下げし、驚いた樣なこなしがある。

（やあら道陸路か遠き辻、（と太鼓をド、、、と打込み）君に奉公申さずして、如何面目ゐべしのふ（と又太鼓を打こむ）

次に母のこなしあり。

（やあら汝高館え下らずとも、御前に西藤の武藏坊辨慶、弟の龜井の六郎重清とて、數多の侍附き添ひ申に、何の愚がゐべしのふ。

と、きまり、その場にめぐる。次に重家のこなしあり。

（やあら龜井が申せし奉公ハ、我れが奉公になるべきか、まつた我れ等が申せし奉公ハ、龜井が奉公に立べきか、道陸路が遠ふきとて、君に奉公を申さずして、如何面目ゐべしのふ。

と持物を上下させる。次に母のこなしあり、

（ヲ、さんにでもましまさハ、御下りゆへ、重家どの。

と母はその場にめぐる。以下ふしになる。

（長々　瀧本のにんざん、親子の道を守らせ玉ふ神ならば、

と、母は扇を收め、數珠をとり、謠に合せて靜かにもむ。

唯重家が行末をあんおんに（と振あり）守らせ給へと御祈念ましまして、と袖をとつてしほり、御袖をしぼり、桂の里に入りにけり（と扇をひらき）〳〵。

と囃子になる。

「イヤーヨイ〳〵」と掛聲あり、母は幕前になほり、扇と數珠とを以て振あり、はじめ幕前の向つて左の角にもどり、これより順に角々をかけて進み出る。拍子は下り羽である。かくて胴前に至つたとき、重家は母の肩に手をかけ、共に母について進む。母が右方に振あれば、左方によつてかまへ、若しくは後方にこなしがある。かくて一まはりあり、再び胴前に至つたとき、重家は胴前に殘り、母は一人でめぐり越し、幕前で、幕をとつて、正面をきり、扇を伸し、これを逆手にとつて、坐し、又扇のとり方あり、名殘惜しげにして、つと入る。

次に拍子が早目になると、重家は、跳んで出て、中央にかまへ、こなしあり、以下立ち、坐し等色々に美しい振があつて舞ふ。中に、右手で失敬手をし、左手に扇をとつて、つと水鏡を見るやうな型もあつた。すべてゞ約二十分を要した。

(一) この幕出歌・旅ニ衣ノスマカケヲツユナキッテヲシヲラルゝ(和)・裳縫本では、「さむらいハ」とかんごえ、「たびの衣の鈴かけて〳〵、ついなるそてをしおらるゝ」と幕出。
(二) に一の(上)
(三) 露一いろ(上)
(四) にしのかれん一をしぼるらん(上)
(五) さん候…重家にて御座ル一ソレ高館ニサムライ八人、大将共ニハ九人ナリ・明ル日の御合戦ニ、サムライ九人、大将共ニハ十人ナリ、十人ノユライクワシクタツヌルニ、紀州熊野フジシロノ住人、カツラノ黒ニ人目ヲシノブ、スヾキノ三郎シゲイエトワ、ゲニワカコトニテソウロウ(和)
(六) のふとなし(上)
(七) そふも都にかくれもなき一我は是(裳)
(八) 高館一ひて平(裳)
(九) 殿の字なし(上・和・裳)
(一〇) 若一きみ(上・和)
(一一) のに(上・和)
(一二) を申一もなす(上)・ソナス(和)

(二) 黒森の鈴木

舞は殘らなかつたが、詞章はこゝのが最も詳しい。即ち、鈴木、母(一本女房)、高館、辨慶の四段に分れてゐる。番樂の多くはそのうちの高館の部のみを傳へたものである。

黒森流は各所ほゞ同じであるが、和野本のが幸若通り女房に暇乞をすることになつて居り、最初も幸若流に、「翌る日の合戦には、大將共に十人の由來を云々」(考異參照)からはじめてゐる。今は便宜上西口氏本を底本に、諸本を參照して誌しておく。

す、きの哥ひ

(西口氏本を底本とし、上坂氏・和野の兩本及裳繰本(訛謬が多いので要所のみ)を參照す。)

(一) 旅は衣の篠懸に、露なる袖にしのかれん
○さん候、こう御前に罷立たる侍を、如何成侍と思召すのふ。そふも都にかくれもなき、紀州ふじしろの郡、かつらぎの里に、十二人、人目を忍ぶ鈴木の三郎重家にて御座ル、奥は奥州高館殿ハ、今ハ子供の世となつて、御若さまの心變りを申由よも承しが、早速申さハはせ參りて候が、かゝる母の望よふニは、都に堂人止るによつて、これに暫くやすらひ申、道中ゝちろくの暇もご取申さんはやと存じル。

母の謠ひ

○さん候、こう御前に罷立つたる女をバ、如何なる女と思召のふ、そふも我ハこれ、都にかくれもなき紀州ふちしろの郡、かつらきの里、十二人、人目を忍ぶ鈴木が母にて御座ル、承はつてゝへハ、鈴木の三郎重家は、奥は奥州高館殿に下りと聞、奥州高館とハ、南部といふことをもふらん、三年ばんじハたびの道、をもへ立すこゞ遙かなるのふ。おゝ遠きとて、君に御奉公申さんな、如何面目あるやらん

(一三) よも・をも(上)・ヲ(和)
(一四) 承しが一承り(上)・ツタイ承ツテ只が(和)
(一五) 早遠き申さハ一はやくもきゝ申さハ(上)・ハヤクモキカバ(和)
(一六) 只下一ケサニモマイリ申バヤト存只ノウ(和)
(一七) 望よふニは都に一ろうとは是に(裳)
(一八) 次にのの字あり(上)
(一九) 道中 それによつて(上)
(二〇) も一を(上)
(二一) んの字なし(上)
(二二) 先に女の樂出しの歌あり、「コウノ〳〵イツギ行人ニ、カウラノサトニウキニケル(和)
さん只…高館殿に下りと聞一ムイカニニヨボ、キクカトヨ、ソレ明日ニナルナラバ、奥州ヘクタルナリ、(裳)ゲニ〳〵、ソサマ奥州ニ下ルカ(和・イ同新本)
(二三) 都にかくれもなきとなし(裳)
(二四) 次ににとあり(上)
(二五) がーの(上)

のふ。汝堂人參らんとても、數多の強者附添ひ申ハ、皆たもんとかやのふ。たもんの申御奉公が、自申御奉公に罷立とふかやのふ。まつた自ら申御奉公にたもんの申御奉公と罷立とふかやのふ。かめひや〳〵某や〳〵、た、重家ハ、母のとむるにと、まらで、御袖をひきと、め、こなたに入らせ給ひしか、たきもどのりんさんなをや子の道を守る御神なれハ、弓矢を安穩に守らせ玉ひしか、かつらの御所に下向あり。

高館の謠ひ

○鈴木の三郎重家ハ、奥は奥州高館殿に下ると聞、判官この由御覽じて、鈴木なるかや珍らしや。鈴木なのめに喜んで、奥州ハ度の家とて、小櫻縅しの大鎧、打物添て玉はれば、取つてさつゞと着る儘にゆつてうヒを帶上、大手をぴちよふとバ、五枚甲の緒をしめて、むら重藤の三人張、眞中にきつて潰たへて、をふてからみを取廻し、大手の櫓に駈上り、四方をきつと見渡せハ、鎌倉勢は、しくらに関をどふと上にけるかめひの六郎重清ハ、五人張に十五束、取つてからりと打すがひ、しゞきり〳〵と引しめて、ゞきにこびしを引かけて、ゑんやつとゆつて離す弓か、たがとふがむないたにはんじど當り、その矢もをしつけ、するりとくけ、遙か後に控ひたる、てるひか馬の太腹に、はぶくらせめて立つたりとこそ見へにけり。てるひたかとふハ諸共に、馬より下にどふと伏す。今ハ何にかあるんへきとて、親重代の波の打物、鞘打はづして、西から東へ一渡り、北から南へ一渡り、八方菱形、くも手かくなる十文字、やつ花形にと切附て、命をさかひに戰ふたふたり。

○べんけいやゝ〳〵是を見て、櫓の上ゑゆらりとをれ、衣川をもさんぶとこゑ、大勢中々大文らよふを、ゝつて入、彼方に押寄せひしと切、此方に押寄せ、はたとハ切、ひら、はた、ちよふと切て廻るは、亂紋菱形、蜘蛛手かくなる、十文字、八花形にと、命をさかひに戰ふたり。

（二六）先におくはとあり（上）・コ、ハとあり（和）
（二七）との字なし（上・和）
（二八）と一て（上）
（二九）ハの字なし（和）
（三〇）立すこそ一たゝせたもをが（上）・立セ給コソ（和）
（三一）なるのふ一ナリ（和）
（三二）おゝ一（悪）ヲウユワレタリ〳〵（和）
（三三）御の字なし（上・和）
（三四）申さんな一もをさなか、きミにほをこをもをさなば（上）・申サン者カ、キミホウコウモウサルヤ（和）
（三五）のふとなし（上・和）
（三六）汝一おんミ（上）・（悪）ゲニ〳〵ソサマ（和）
（三七）んとても一すと（上）・ズトテ（和）
（三八）のふとなし（和）
（三九）先に「イササ」と入（和）
（四〇）申御奉公が一もをせすこをこをが（上）・申セシホウコウハ（和）
（四一・四二）自申一それかし（上・和）
（四三・四五）御の字なし（上・和）
（四四）かやのふ一となやの（上）
（四六）に一か（上）
（四七）申一もをせす（上）
（四八）御奉公と一ほをこをに（上）たもんの申御奉公ととなし（和）
（四九）のふとなし（和）
（五〇）「かめひや〳〵、某や〳〵」となく、却つて左の文が入る。
「さんにても以ハハ、亀井の六郎（シゲイ）すけきよハ、おんミたもんておはしますガ、いやさ亀井はおはしはそれかし、君も目出度亀井、それかしはそ、あるならば、來年の花う、亀井もけんごて、（ヘシ）（マ）
の頃にハ、たよりの文もつかはすべし、それもなんなく過き行かば、夏の頃を待ち申（ヘシ）、秋（キヽ）のころをまち
それもしたいに過きゆかば、浮世は申（ヘシ）、それもなんなく過きゆかば、
不常の苦、ミちのほとりの露霜と、消へゆるよなと思ナバ、亀井ともに後生をば、よつくとをてたびたまい（ナガ・ヨ・シ・ワカムヨボ）（上・イ和）
（五一）たゝ重家ハ……とゝまらで一ナガワタイニヨボノト、ムルニト、マラテ（和）
（五二）こ一あ（和）
（五三）に一へ（上）
（五四）しか一ア（和）
（五五）リ一ニ（和）
（五六）をや子一フウフ（和）
（五七）以下一守ラセタマヘト、タ、祈念シテ、カツラノゴショニツキニケル（和）
（五八）御の字なし（上）
（五九）れ一ら（上）
（六〇）次に「かめいとともに」と入（上）
（六一）しか一ときねんして（上）
（六二）奥は奥州一ハヤ（和）
（六三）に下ると聞一エ參リツ、（和）と聞一とき（上）
（六四）「鈴木なのめに喜んで」は、「打物添て玉はれば」の次にあり（和）
（六五）さつぐと一ザックト（和）・さくり（上）
（六六）つ一う（上・和）
（六七）緒一シコロノ緒（和）
（六八）ての字なし（和）
（六九）むら重籐…を取廻し一三人バリキニ十三足、セキガヒメツルヨツテカケ、マンナカ右リヲヨコタイデ（和）
（七〇）きつて一きりを（上）
（七一）み一め（上）
（七二）脈一はせ（裏）
（七三）次に「ヤグルマヲバ、ソバニオシタテ」（和）・「やくるまをばとりまはし〳〵」（裏）と入。
（七四）見渡せハ一見テやれば（裏）
（七五）次に「大手、カラメニトリマワリ（ナ）」（和・イ裏）と入。
（七六）にけるとなし（和）
（七七）「カメイ」と傍書あり、「オウ」と入る（和）
（七八・七九）五一四（和）
（八〇）取つて……すがひ一マチニコブシヲヒツカケテ（和・イ同新本）・下の同句なし。
（八一）しめて一シヲリ（和）
（八二）已き一まつ（上）
（八三）び一ふ（上）
（八四）つ一ウ（和）
（八五）弓か一矢は（上・和）
（八六）次に「オモテニス、ミシ」と入（和）

（八七）はんじど富り一ハッシトアタルモミエケレバ（和）
（八八）をしつけ一とまらず（上）・タマラズ（和）
（八九）くけ一かけて（上）
（九〇）「遙か…控ひたる」となし（和）
（九一）たる一し（上）
（九二）て一てぞ（和）
（九三）とこそ見へにけり一シガ（和）
（九四）ハの字なし（和）
（九五）伏す一おつ（上）・フシ（和）
（九六）親重代のとなし（和）
（九七・九八）へ一に（上）
（九九）八方一八ッガタ（和）
（一〇〇）にと切附て一トキルマ、ニ（和）
（一〇一）たふとなし（上・和）
（一〇二）こゝに「ヘンケイ」と傍書あり（和）
（一〇三）や一は（上・和）
（一〇四）の上方ゆらりとを れ一よりとんでおり（上）・ヨリトンデオレ（和）
（一〇五）も一ば（上・和）
（一〇六）こゑ一ひたり（上）・コイテ（和）
（一〇七）中方大文ちよふを一が中に（上・和）・の中よりも、たいもんて一と（裏）
（一〇八）入一入セ（和）・行、風に、このはのちるごとく、ばんとおいちらし（裏）
（一〇九）に押寄せ……はたとハ切一へ親重代のなんミの打物、さやうちはつして、あなたへひきよせ、はだとはきり、こなたへひきよせ、ひちとはきり（上）
（一一〇）ひしと一ハタトハ（和）
（一一一）ひちはた……亂紋一ヤッガタ（和）
（一一二）以下一きる太刀は、秋の木の葉の散ること、四方にばんとうせにけり（上）
（一一三）廻るは一めんぐる（裏）
（一一四）にと一トキルマ、ニ（和）

下番樂の鈴木

（三）根子の鈴木

こゝでは高館の件りを傳へてゐる。舞は、先にも述べた如く信夫のとりちがへてゐるのではないかと思はれる。

鈴　木（傍書の異同は富根本による）

〈旅の衣ハスゞかけの、旅の衣ハすゞかけの、露なき袖をしほるらん（富根本の暮出一旅の衆はすゞかけの露なき袖をしほりけり）〉

と、暮を兩手にとつて一振あり、又足蹈みもあつて、烏帽子、直面、裃袴、襦、袴、帶刀の鈴木三郎が、扇を莟め持つて出る。一振あり、扇を開き、四股を踏む樣にして色々に舞ふことあり、再び扇を莟め、一振あると入る。囃子をそのまゝつゞけるo沙門は出ないゞ

〈あふこふ前に立たる沙門をは、一の臣下に、いかなるものとかおもふらん、我は是、紀州熊野の末孫にのふ大臣しけ高とて、十六代の末孫、鈴木の三郎重家（おふみの大臣、重家）の末孫に、鈴木の三郎しけ家（てまし）也。（ます）まことや今朝ゆく道者の申さるゝハ、君ハ奥州高館に御たてこもると聞て有、いざや奥州に下り君に御奉公申さばやとそんしゝ。〉

と、このとき鈴木が面をつけて再び出る。一舞あると扇を開き、同樣にはげしく舞ふ。ふんばり足で扇を色々にとることあり、とゞ扇をつぼめ、胴取の太鼓に右足をかけると、やをらこれをとり上げ、これを持つ

たまゝ足拍子を踏む。又、太鼓を置き、これを斜に傾けて、顎をまはし扇をまはして、ドン〳〵〳〵と太鼓を打つ。又、太鼓を振りまはしつゝ足拍子を踏む等の振を繰返す。（胴取はこの間舞臺板を叩く）とゞ太鼓を幕前に置き、扇を開くと次の語りになる。この間ふんばり足をして扇を前にくる〳〵とまはす。

紀州山川義經殿ハ、たへざ久しく見奉らんによつて
へあふ、きしゆさんぜん義經殿ハ、たへざ久しく見奉らんによつて
繼しくも思召、三千萬里の旅の空、思ひ立べきはるかなり、夕
べの夜に入て、奥州高館に下り、内かた案内と問へければ、たそ

第四十九圖　根子の鈴木（一）

ととかむる聲ハまた、弟の龜井が聲とも聞て有る。「是ヨリタンセン（當惑ノ小唄）聲を聞だになつかしや、ふしゝけ家と名のらば木戸あけよ、我はほの〳〵と明しかば、前の高館見渡せは、敵はさまにとよせかけたり。（と早目の振になる）

よせらばよせるたゝよせれ、やくらぶもとんでおり
打物の、さや打はづし、てきをにらんだそのいきほひは
た　る　有　様（とその場にめぐり）
天に鳴神、地にはかぶ惡神、中にもてる井の太郎ハ
おくれはせにかけ来る、てる井の太郎ハ、ゐたかみ
つかんて、宙に指上（と太鼓を差上げ、胴前にかへす。）
片手打にうちこけり、ヲゝてるいも二つに成りけ
れば、本のやくらに走り上り、我身をつく〳〵見て
あれば、つなきりほとも手はあはず、弓矢に花をさかせたり。

と、拍子になり、面をとり、太刀を採つて、色々に振り、足ぶみもあつて舞ふ。約十二分のもの。面をかけて舞つてゐる間は、一種の夢幻の境地に誘はれてゐる樣な感があつた。不思議な効果である。やはりさういふ効果を意圖してゐたものらしい。

〔考異〕（一）次に、「雲にうつるは、かつくから竹わりと名を付て、波をた、へて、衣川へと打すつる」と入（富）

（四）富根の鈴木

富根のは、詞章も舞も大體根子のと同じであつたが、はじめから面をつけて出、くづしになつて、面をとり、疇形のついた烏帽子の冠りものもとつて、鉢巻だけになり、太刀を色々に振つて舞ふ。太鼓はとる日ととらぬ日とがあり、多く中の日にとることにしてゐるといふ。

（五）山谷の鈴木

こゝでは高館と言つてゐた樣である。臺本は、根子や富根と同樣らしく、又舞ひ方も、型はちがふが、順序は同樣であつた。

こゝでははじめ小太鼓を胴前に準備しておく。幕出しで、幕を前後にゆるがし、なほし、又大いに振つて、兜、鈴木面、頬當、帶刀のものが出、扇をとつて、角々にきまりつゝ舞ふ。とゞ小太鼓をとると、足踏あり、扇でたゝくことあり、これを角々にする。トン〳〵トン〳〵〳〵と叩くので、太鼓を前後に伸し、色々に振あり、とゞ正面に太鼓を置き、その場にめぐり、びつこ引で順にめぐり、太鼓に右足をかけ、びつこ引で逆にめぐり、又足をかけたまゝ順にめぐる、次に太鼓を幕前に置き、同じく右足をかけて、順、逆、順にめぐる。次に太鼓を胴前に置くと、その場にめぐり、太鼓はひつこめられる、かくて語りになり、後、面をとり、扇で一まはり舞ひ、太刀を拔いてとんぼを切り、又逆ぐ振などが色々ある。約十一分の美しい舞の型であつた。

上田體でも太鼓をとつたり、これを打つたりするといふ。

（六）西長野の高館

仙北では高館と言ひ、高館の部だけを傳へてゐる。太鼓はとらな

第五十圖　同　上（二）

第四十九圖　根子の鈴木（一）

たまゝ足拍子を踏む。又、太鼓を置き、これを右に傾けて、頭をまはし扇をまはして、ドン〳〵〳〵と太鼓を打つ。又、太鼓を振りまはしつゝ足拍子を踏む等の振を繰返す。（胴取はこの間舞臺板を叩く）とゞ太鼓を幕前に置き、扇を開くと次の語りになる。この間ふんばり足をして扇を前にくる〳〵とまはす。

「あふ、紀州（きしゅう）山川（やまがわ）我經殿（がきょうでん）ハ、たゞへざ久しく見奉らんによつて慕（したう）しくも思召、三ぜん方里（さんぜんほうり）の道（みち）の旅の空、思ひ立（たつ）べきはるかなり、夕べの夜（よる）に入（いり）て、高館（たかだて）戒に忍び入り、奥州高館に下り、内かた案内と問へ（ナシ）ければ、たそとかむる辞（ことば）ハまた、弟の鮑井が辞とも（ナシ）聞て有る。「是（コリヤ）クシセン（語り）ぞ」ふしたに家と名のらば木戸あけよ、夜はほの〳〵と明しかに、前の高館見渡せは、敵はさまにとよむかけたり。（と早目の振になる）

よせゝはよせるた、ふせれ、やくらるもとんでおり打物めさや打はつしてきをにらんだをのいきほひはた（ナシ）る右（ナシ）様へとその場にめくり。

天に鳴雷、地にはかふ惡鬼、中にもてる井の太郎ハ（が）おくれはせにかけ来る、てる井の太郎ハ、ひたかみつかんて、宙に指上（ゆびあげ）て、と太鼓を差上げ、胴前にかへす。片手打にうる（こちらうとろ）こけい、ゝ、てゝ（其）いも、つに成りければ、木のやくらに走り上り、我身をつく〳〵見てあれは、つなきりほとも手はあはす、弓矢に花をさかせたり。

と、拍子になり、面をとり、太刀を採つて、色々に振り、足ぶみもあつて舞ふ。約十二分のもの。面をかけて舞つてゐる間は、一種の夢幻の境地に誘はれてゐる様な感があつた。不思議な効果である。やはりさういふ効果を意圖してゐたものらしい。

（考異）（一）次に、雲にうつるは、かつくから皆わりと名を付て、波をた、へて、衣川へと打すつる」と入（宮）。

（四）富根の鈴木

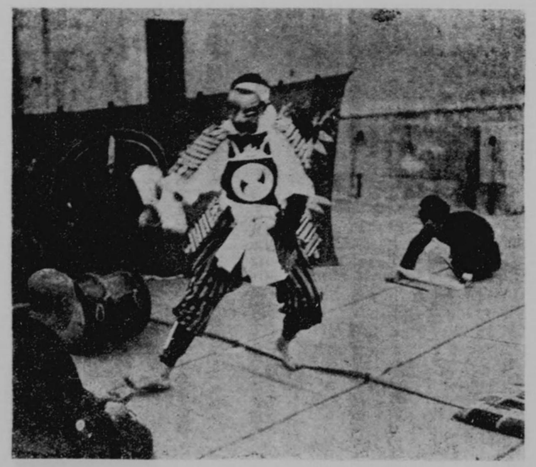
富根のは、胴堂も舞も大體根子のと同じであつたが、はじめから面をつけて出、くつしになつて、面をとり、鍬形のついた烏帽子の冠りものもとつて、鉢巻だけになり、太刀を色々に振つて舞ふ。太鼓はとる日ととらぬ日とがあり、多く中の日にとることにしてゐるといふ。

（五）山谷の鈴木

こゝではまづ小太鼓を胴前に準備しておく。幕出しで、幕を前後にゆるがし、なほし、又大いに振つて、兜、鈴木面、頬鬚、帶刀のものが出、扇をとつて、角々にきまりつゝ舞ふ。とゞ小太鼓をとると、足踏あり、扇でたゝくことあり、これを角々にする。トン〳〵トン〳〵〳〵と叩くので、太鼓を前後に伸し、色々に振あり、とゞ正面に太鼓を置き、その場にめぐり、びつこ引で順にめぐり、太鼓に右足をかけ、びつこ引で逆にめぐり、又足をかけたまゝ順にめぐる。次に太鼓を幕前に置き、同じく右足をかけて、順、逆、順にめぐる。次に太鼓を胴前に置くと、その場にめぐり、太鼓はひつこめられる、かくて語りになり、後、面をとり、扇で一まはり舞ひ、太刀を抜いてとんぼを切り、又並ぐ抜などか色々ある。約十一分の美しい舞の型であつた。

上目體でも太鼓をとつたり、これを打つたりするといふ。

（六）西長野の高館



第五十圖　同　上（六）

仙北では高館と言ひ、高館の部だけを傳へてゐる。太鼓はとりな

いゝ。左は西長野の實演に據る。

幕出しで、鉢巻、直面、鍔、胸當（菊の紋あり）。背當、黒襟、袴、小手、帶刀のものが、扇をつぼめ持つて出、坐して扇を開くと すぐ語りにつて出て相對し、棒を互に打合せる。この打合せ方に色々あり、場所をかへては相對し、打合せをつゞける。とゞ一人が棒を打落され、無手でその場に順逆にめぐり、一人が打下すと身をかはし、兩人で一本の棒を持合ひ、うばひ合ふことなどがある。とゞ先に出たものがこかされて入ると、後に一人が殘り、棒を色々に使ふ。水車の如くまはすこともある。とゞ胴前に拜して入るのであるが、この棒の使ひ方がこの舞の見どころで、美しい工夫があつた。約七分のもの。次に詞章を誌しておく。

（舞と詞章とは必ずしも一致してはゐない樣である。）

第五十一圖　同　上　（三）

なる。語りの間振あり、語りが切れて囃子になると、くる〳〵とその場にめぐつてさつときまり、美しい姿態をつくる。とゞ扇を捨てて棒をとると、下り藤の紋のついた胸當をつけた同じ支度の武士が同じく棒を持

高　館

（底本は西長野本。傍書は豐川自岩の兩本による異同とす。）

幕出　漸々急行程に〳〵、高館御所に付にけり。

○鈴木の三郎重家は、高館殿御所に參らる、判官是を御覽じて、鈴木成かや、珍しや、奥州は旅の上迚、小櫻をどしの御鎧、打物添へて給はつたり、鈴木斜に祝両、依両上帶丁とゞ、五枚甲の緒をゞて、重藤卷の大弓を、まん中握りに横たへて、大手のやくらにかけ上り、矢車をはそばにおつ立しか、四方屹度見渡せハ、鎌倉勢は、大手捕手取廻し、しゞらに時をどつと上げ、中にも龜井六郎重家ハ、心がう成武者なれは、四人斗りに、十四束、松にこふしに豐とひつかけて、すはきりきりと引しぼる、ゑいやと言てはなす矢は、高濃か胸板にはつしと當ると見得にけれハ、後ろに扣し、照井か乘たる馬の太腹に、はふくらせめて立たり鳥、照井高濃もろ共に、馬ゟ下に倒と落ち、今ハ何をか有べき迚、腰の打物、さや打はづし、命境に、たゝかふたり。

（考異）（一）この先に、「其矢もたまらず」（豐）、「たおし付其箭はするりとくけ」（自）と入る。

（七）二階の鈴木

二階本のは大體根子のと同樣であるが、詞章がやゝ詳しい。これも全文を收錄しておく。

鈴木三郎

幕出　紀州下りの長の旅〳〵、はや高館に、着にけり。

中言立　ヲヽコをんまひに、罷立たる兵をは、との國の住人、如何なるものと思召す、それハ是、紀州熊野、ゆ屋權現の一の臣下に、野見の大臣重高より、重家まで、十六代の末孫に、すゝ木三郎重家と申者にて候。

（まことやら、今朝ゆく道者の申せし樣ハ、君ハ奥州高館に、秀衡殿の子息三人心變をなすゆへに、今眞最中の、軍眞中と承る、我等も奥孫にくだり、君を見つき、もふさばやと存候。

（ヲヽ、紀孫三千義經殿絶て久しく、見奉らぬによつて、こえしく思ふ、三年万事旅の道、をもひ立こそ遙かなれ、夕の夜に入て、七十五日と申にぞ、人目をしのぶたびなれハ、破れた堂守、庭の洞、宿なきまゝ、を、宿として、奥州高だちに、忍び着き、笈をば梅花に打掛て、うちかた案内とひけれハ、内より誰と、とがむる聲は又、弟の龜井の六郎が聲と聞、こゑをきくだになつかしや、重家と名のれは、城戸をあけ、

（夜ハほのゞ〳〵と明けれは、兄弟二人の人々は、表の矢倉にはせあがり、前の河原を見渡せば、敵は蟻直よせかゝる、寄らはよせれ、たゝよせれ、中指堂前、まいらせんと、はや矢束を、おしくつろけ、指詰引詰、射る程に、はや矢種も、盡けれは、

（アヽやぐらの上より飛んて下り、打物の稽うちはづし、北から南にひと渡り、西から東に一とわたり、くもでかくなる十文字、瓜割胴切竹ゐりと、猶も續けて、浪をたゝへて、衣川に切伏たり。

（中にもてるいハ、おくれて見へけれハ、てるいの綿鬘、つかんてきしあげ、ヤア片手討に、丁とうてハ、てるいも二つに成たりけり。

（ヲヽ、殘りし敵をハ、四方にはつと追散し今日の弓矢に花を咲したり。

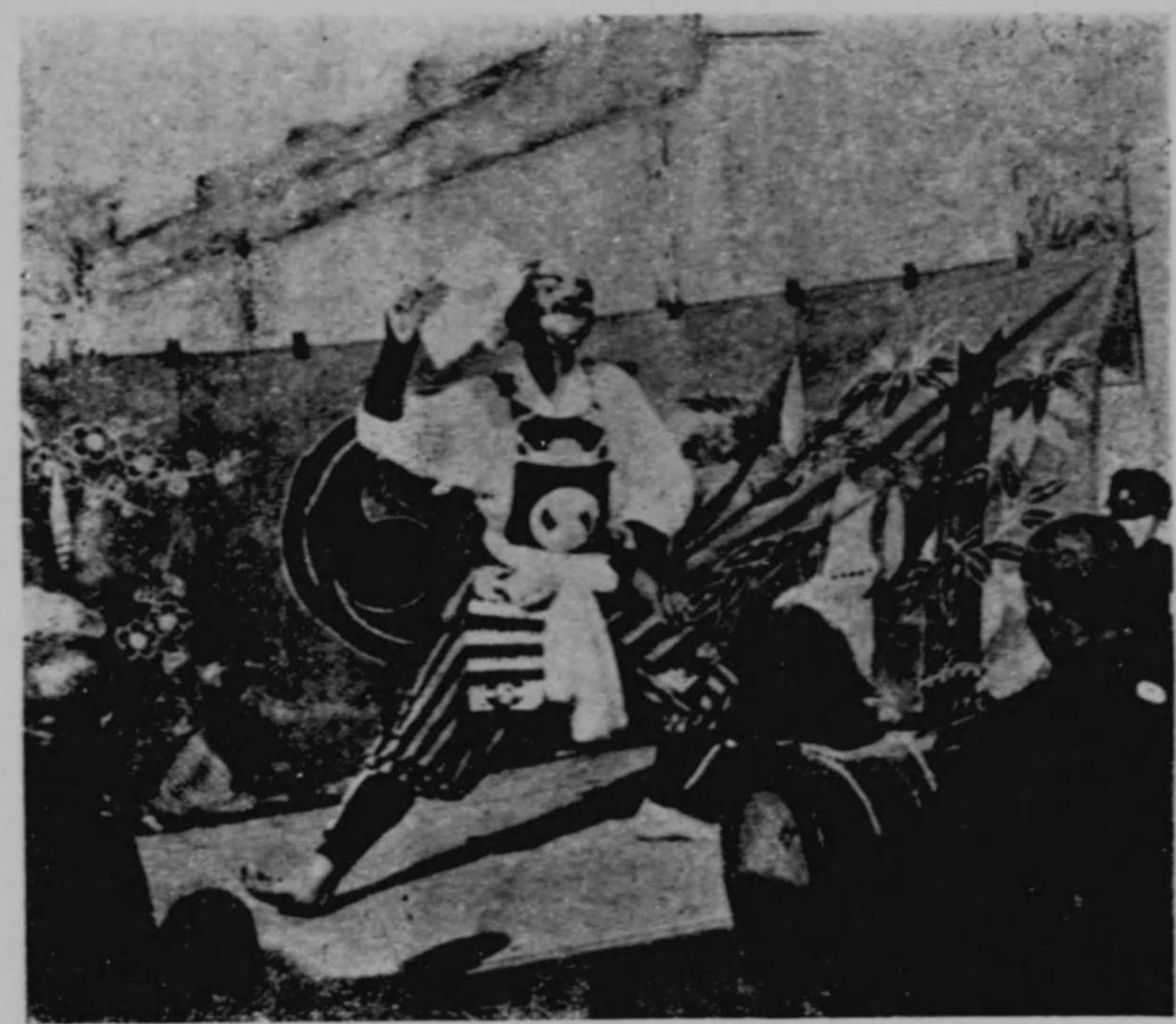
（八）輿屋の鈴木

輿屋にも詳しい詞章を傳へてゐる。その仕組はむしろ黒森本のに

い。左は西長野の實演に據る。

幕出して、鉢巻、直面、鎧、胸當（菊の紋あり）。背當、黒襷、袴、小手、帶刀のものが、扇をつぼめ持つて出、坐して扇を開くとすぐ語りになる。語りの間振あり、語りが切れて囃子になると、くる〳〵とその場にめぐつてさつときまり、美しい姿態をつくる。とゞ扇を捨て棒をとると、下り藤の紋のついた胸當をつけた同じ支度の武士が同じく棒を持つて出て相對し、棒を互に打合せる。この打合せ方に色々あり、場所をかへては相對し、打合せをつゞける。とゞ一人が棒を打落され、無手でその場に順逆にめぐり、一人が打下すと身をかはし、兩人で一本の棒を持合ひ、うばひ合ふことなどがある。とゞ先に出たものがこかされて入ると、後に一人が殘り、棒を色々に使ふ。水車の如くまはすことなどある。とゞ胸前に拜して入るのであるが、この棒の使ひ方がこの舞の見どころで、美しい工夫があつた。約七分のもの。次に詞章を誌しておく。

（舞と詞章とは必ずしも一致してはゐない様である。）



第五十一圖　同　上（三）

高　館

（底本は西長野本。傍書は豐川白岩の兩本による異同とす。）

幕出　漸々急行程に〳〵、高館御所に付にけり。

○鈴木の三郎重家は、高館御所に參らる、判官是を御覧じて、鈴木成かや、珍しや、奥州は旅の上迚、小櫻をどしの御鎧、打物添へて給はつたり、鈴木斜に暇申、依而上帶丁とゞ、五枚甲の緒をしめ、重藤巻の大弓を、まん中握りに横たへて、大手のやぐらにかけ上り、矢車をはそばにおつ立しが、四方蛇度見渡せハ、鎌倉勢は、大手搦手取廻し、しぐらに時をぞつと上げ、中にも龜井六郎重家ハ、心がう成武者なれは、四人十りに、十四束、松にこぶし、とひつかけて、すはきりきりと引しぼる、ゑいやと云てはなす矢は、高濃が胸板にはつしと當ると見得にけれハ、後ろに扣し、照井が乘たる馬の太腹に、はふくらせめて立たり見、照井高濃もろ共に、馬より下に倒と落ら、今ハ何をか有べき迚、腹の打物、さや打はつし、命境に、たゝかふたり。

（考異）（一）この先に「其矢もたまらず」（豐）「たおし付兵筒はするりとくけ」（白）と入る。

（七）二階の鈴木

二階木のは大體根子のと同様であるが、詞章がや、詳しい。これも全文を收録しておく。

鈴　木　三　郎

幕出へ紀州下りの長の旅〳〵、はや高館に、着にけり。

中言立へ扨も其後、羅立たる兵をは、との國の住人、如何なるものと思召す、これハ是、紀州熊野、ゆ屋權現の一の臣下に、野見の大臣重高より、重家まで、十六代の末孫に、す、木三郎重家と申者にて咋。

へさることやら、今朝ゆく道者の申せし様ハ、君ハ奥州高館に、秀衡殿の子息三人心變をなすゆへに、今貳最中の、軍半と承る、我等も奥州にくだり、君を見つき、もふさばやと存ずる。

へナゝ紀州三千義經殿絶て久しく、見奉らぬによつて、こえして思ふ、三年方事旅の道、をもひ立こそ遙かなれ、夕の夜に入て、七十五日と申にぞ、入日をしのぶたびなれハ、破れた堂守、庭の祠、宿なきまゝを、宿として、奥州高だちに、忍び着き、笈をば梅花に打掛て、うちかた案内とひけれハ、内より誰と、とがむる聲は、父、弟の龜井の六郎が聲と聞、こゑをきくだになつかしや、重家と名のれは、城戸をあけ、

へ夜ハほの〳〵と明けれは、兄弟二人の人々は、表の矢倉にはせあがり、前の河原を見渡せは、敵は雲霞よせかゝる、寄らはよせれ、たゞよせれ、中指立ち、まいらせんと、はや矢束を、おしくつろけ、指詰引詰、射る程に、はや矢種も、盡けれは、

へアゝやぐらの上より飛んで下り、打物の鞘をはつし、北から南にひと渡り、西から東に一とわたり、くもでかくなど十文字、瓜割劔切竹巴りと、鍔も縮けて、浪をた、へて、衣川に切伏たり。

へ中にもてるいハ、おくれて見へければ、てるいの綿襟、つかんでさしあけ、ヤァ片手討に、丁とうてハ、てるいも二つに成たりけり。

へアゝ殘りし敵をハ、四方にはつと追散し、今日の弓矢に花を咲したり。

（八）興屋の鈴木

興屋にも詳しい詞章を傳へてゐる。その仕組はむしろ黒森木のに

似てゐるが、後の方にやゝ目立たしい異同がある。

き　ゞ　き

幕掛　きゞきの三郎しけいへと名乗レ〳〵、さら〳〵〳〵とも出たりけり。

云たて　おふこふ御前に罷立たるつはものおば、いかなるものと思召、我きしゆう藤しろのぢゆう人ニ、よの人めをしのぶ、きゞきの三郎重家ニ両ゆ。まごどやら、今朝行道者の申せも、奥ハおふしゆう藤しろかあきりけつぢよを仕、今ハ子共の世と成りて、ねつかんも其ために、罷り下りゆが、げにみやこのひゑ山に、母壹人とゝめおきしは〳〵、立あすらゑニてゆ。

二

おふこふおんまいニまかり立るつも物をハ、いかなる者と思召、我きしう藤しろの住人ニよの人めをしのふきゝきの三郎重家か母ニ両ゆか、まことやら、重家か東國ニ下タるよふきをうけたまはつてゆか、白川やあなたなんほとふくにあらんときみニほふこふもふさんも、何にかめんぼくニ両ゆ、龜かたおかいせつるかひたち坊海常陸鷲ぼふかゑそんもしの尾のこ郎どてかねてのつわもの八人付そゑもふせ共、弟の龜のほふこふをハたしんのほふこと思ふ〳〵是ゟふしニ両　たゞし重家ハ是ニ両とゞまりて親のよこゑヲよけニ見て、本よりもおはか瀧の明神ハ、弓矢にしきたる神なれば、重家も能々末までも弓矢もあんのんきりひらくかつらかさとニ付にけり。

三

おふきちよ三年よしつねハたいせ久しく見たてまつらんニ依両戀しくもさんせんはんりのたひの道、ゆんへのよふハおふしゆう高たてしのび入、夫内方あんないとい聞けハ、たれたそととかむるこゑハ又龜の六郎かこゑときく、こゑを聞たになつかしや、重家と名乗れハきと明、おふてのやくらにはしり上り、食ハほのほんのと明ニけり、とふくてハおとゝも聞ゟ今ハめちこにてきハ見へ、やぐらより飛両おり、てるいかきたか、てるいをにらむるゑしハ又、天ニハなり神地ニハよふやく神、くもニうつるハかくもらちしけれハもろ〳〵せはめはおゑ切り、どきりからたけ割ニちやうと打ハ、てるいもはるかニ逃のひたり。

四

たゝ〳〵御前ニまいりつゝ、かつせんしゆうちはことねんころに御物かたり申共、龜も心こふなるむしやなれハ、ひをとしのよろいに打物そゑてたまもつた、うれしき心ハそゝろきたつて、葉武しを打てハ、なニもなし、てるいかきたかてるいを追かけ、かた手打ニちやうと打は、てるいも二つになつたりけり。

（九）小瀧の鈴木の三郎重家

小瀧にも母の段を傳へてゐるが、最後のキリを左の樣に謠つてゐる。

△重家名のれば木戸もあき、食はほの〻〳〵と明けにけり、天にはなりかゝみ、地にはよやくのかたわかに、それやぐらよりとんでおり大きエ物のさや打はづし、逃れば追かけ、ころべばのつつめ、追ればもろ〳〵瓜切りどんぎり唐竹割に、なゝみをたゞへて衣川にと切すてたり。

（一〇）幸屋渡其他の高館

幸屋渡では、はじめに二人が太刀をとつて出て、互に切り合ふ。後から辨慶が長刀をとつて出、一人に代つて、他の一人と戰ひ、これを退けるといふ。

比立内でも、二人の鎧武者の切合があつた。

又、石神では二人の直面の者が出て戰ひ、終りには鎧を抜ぐといふ。

（夜討）曾我の部分を傳へてゐる。

三、曾　我

これも大體幸若舞の詞章の要所をとつてゐるらしい。ひろく分布してゐる舞である。山伏神樂では、やはり黒森方のものに詳しく、伏木曾我、紋そろひ、十番切等があり、番樂では主として、伏木

（一）以下ーフジノ、スッニツキニケリ（夏）
（二）ちーつ（上）
（三）よーッ（夏）
（四）きーり（夏）
（五）見ーニ（夏）
（六）しんか……すみかにてートウヤ拾五ニナリシトキ、ノニフシサトニカタレイテ（夏）
（七）こぐほてーこふて（上）
（八）をーは（上）

上山伏神樂の曾我

（一）黒森本の曾我

（西口氏本を底本とし、上坂氏・夏屋（十番切なし）・和野（伏木曾我と十番切とあり、譲脱多き故要所のみ）の諸本を參照す。）

しきそがの哥ひ

ふ

よふ〳〵いそき行ほとにそがふるさとにつきにけり。

○お、我らかちぐばになりし時、弓の本はづうらはづしらずして、ちゝをいとこに打たれしか、うたれしとこハとこ〳〵よ、あをきあをさか見から山、しんかこぐほて、うたれしか、我らをさぎころより

ものにふし、山をすえかにて、かたきのかよひしより〳〵、つねゝ〳〵やこかたきをうたんとねらひ共、かたきハ大勢、そがハ兄弟二人なり。

うつあひの〳〵、きくてからんよの中に、人にむこうる、はつかしや、すきし〳〵のとしつきて、そが兄弟てと、あたり。

三はん哥ひ

かまくらとのハ〳〵、とふきいならぬ、なつの、しかのどふまんとふをと、めんと、六月一日のかんのこまたらをなかあつ〳〵、ひよくれんりの人々ハ、くんもをかすえにたゝひたり、うき嶋が原のくんもをくさはも、ひんびきよらさるかたもなし、そが兄弟ハ川立しが、ふじかすそのにつきにけるこ。

〇そがの兄弟の人々ハ、出立その日のしようぞくハ、はたに取てハ、をふかしわけのひたゝれに、からすの黒なるこまを打のつて、いつゝ心へそ、ぬきぬき立て、すゝめ立て、うんのきるめに、兄十郎ハ、ふしきに駒をとふとかけ、ひようぶかひしにかつはとふし、こまを引よせて、のらんとすれハ、ちよてきハもの、あいはらかにくたらける。

お、か、らはしなきおやのきようふをとふも、兄弟一人なきしらかはんとふけれが、をらのしけた、弁すををされハにをいそく、十や十五のちゝはのもの、秋のよの、いろつゝ山のもゝらはを、まちて見うやといつしのの哥にゑひしたらぶ。

もんそろひの哥ひ

よふ〳〵いそきのゝぼとに、はや御所方ニつきにけり。

〇さんは、うの御前に置立たるさふらひをハ、いかゝ成さむらひとをほしあすの、そふも我ハこれ、ゝやこにかくれもなき、さむらひ中のまくのもんのひろのはやとそんじ、ある家方をミてやれハ、男とものつ上をしたてならべ、ひしめく家方もあり、まつたあ、る家方を見てやれハ、明日はかまくら人とて、馬のゆあらひして、ひしめく家方もあり、まつたあ、る家方を見てやれハ、しばのいをりよたんだひとにゆひ廻し、いはりにもつこう打つたるハ、あれこそ我らが家の紋、しはらくなかあて立にけるゝ、かたきのちやくし戸坊ハ、まくをつかんてかたにかけ、十郎とのを見まいらせ、ちゝ前にかしこまり、十郎とのを、ひと、きに御入ハ、ハ、十郎とのとハたが事よ、ふらの十郎が、そがの十郎が、かね、この十郎が、たきはの十郎が、此度をともの十郎ハ、たしかのかつはしれんなり、戸坊ニにて、さんは、いつこやを、いそのの寅が家方に面有の面上にて舞さはせたもふ十郎とのゝ、けれハ、其十郎こそ、我れらかたのにやいとこ也、なんじがたのにやいとこをらそれよせて、ひとつもれとゝ、けれハ、かたきのちやくし戸坊ハ、まくをつかんてかたにかけ、十郎とのやひと時に、御入ハとのハ、さしもはやしこの十郎ハ、てきに言葉をかけられて、ふんゝをぶんて立たりけり。

二はん哥ひ

よふ〳〵いそき行程に、はや御所方ニ陣にけり。

〇やらさらしろのもん〳〵や、先ゝはんにくきぬき松川、三浦の平六兵衛が御紋なり、きつこうはらかひ花、うおつほ水にくるまへこゝらくゝじ、あゝのてやはすはのひけ共、ひとつ平次や、川こゑとの、二つ平治やはゝ高橋とのゝ、四つ目のひや、佐々木の紋、富原上左衛門をふゝきあさえの奥市とのゝ、つなき馬ハ、打駒紋をかゝの左衛門、三本からたらのきをれたけ、白一文字に黒一文字ハ、御所の御紋、しかも今日やはんなりニなりしかハ、もつたらに松ふり立〳〵、助つねかねやの御座につんと人られ、十郎まくらに参りつゝ、時ねあとにとまりつゝ、いとふ十代もんてひらいてちよふと打、今こそ本望とけたるとゝ、こしはのかけにさつと引、二のいきつゝ立たりけり。

十はん切の哥ひ

たけハこうもの す、かけの、袞成神にしのぼれん。

(七) ヒヨ(上)
(八) ヒヨ(上)
(九) ヒヨ(上)
(一〇) レーシヲ(夏)
(一一) ヤ…ねらひ共ー見時ヲ、ヲクケレドモ(夏)
(一二) 共ーレが(上)
(一三) 大勢ーモウセイヲ(夏)
(一四) かいらんーカイナイ(和)・カイナキ(夏)
(一五) むこうるームコウモ(和・夏)
(一六) ヤーさヤ(上)
(一七) のーヲ(夏)
(一八) つきてーつきの(上)・スキテ(夏)
(一九) 次に「マタタヒノ、アツトマムル=、ソカ兄弟ヲ、トドメタリ」と入(夏)
(二〇) とふぎいーとをくゝ(上)・トヲキ(夏)
(二一) ぬーノ(夏)
(二二) のメーコノ(夏)
(二三) のーヲ(夏)
(二四) をーの(上)
(二五) どふまんとふをとめんとてートンメニトヲテ(夏)
(二六) 一日のーヒトエヲ(夏)
(二七) をーに(上・夏)
(二八) ひよくれんりーシヲコクレシヲ(夏)
(二九) いたりーキテ(夏)
(三〇) のーに(上)
(三一) をーも(上)
(三二) くんもをくさはもークヲモクタキモ(夏)
(三三) ハー貳人ハ(夏)
(三四) 出立ーイテタリ(夏)
(三五) ふすそのーノ、スツ(夏)
(三六) るーリ(上・夏)
(三七) そふ…しようぞくハ一ニ…ムカアタキツ、モウセイガ其中ニ(夏)
(三八) をふふしわけのーコンチノ(和)・ヲウカシハキノ(夏)
(三九) たるこま打ーノコンマニ(夏)
(四〇) そゝぬきーソロキ(夏)
(四一) すゝめ立てーヨンタイスレハ(夏)
(四二) にーン(夏)
(四三) 兄十郎ハとなし(夏)
(四四) 次に「ヲクケレドモ」ハ(夏)
(四五) えもゝーメモヲ(夏)
(四六) ちよこきーキヨヒキ(上)・カアタウキ(夏)
(四七) くたちけるーハセノヒタ(夏)
(四八) よしたきとなし(夏)
(四九) とふかもートヲンヨリ(夏)

（五〇）なの字なし（夏）
（五一）いふけれがーせいえければ（上）・イウケレハ其時（夏）
（五二）次にノの字入（夏）
（五三）すよをーサレシワ（夏）
（五四）「されハに…ちぐはのもの」となし（夏）
（五五）にーニハ（和）・この字なし（上）
（五六）ぐーぐや（上）・ケヤ（和）
（五七）次に「ユウクレュ」と入（夏）
（五八）ろやとールヤト（和）・ヨノト（夏）
（五九）にーを（上）
（六〇）ゑひじたもふーレンジタ（夏）
（六一）「我打曾我」とす（夏）
（六二）はや御所方ニ…フシノ、スツニ（夏）
（六三）さん只こう御前にーヲウカヨウニ（夏）
（六四）のふ…かぐれもなきーニホンノ（夏）
（六五）のーヲ（夏）
（六六）ある家方以下を夏屋本には左の如くあり
「イジヤウヤカタノカスワ、八千屋ナカレツロナリ、マツタアウル屋方ヲミテヤレハ、明日ワ鎌倉入トテ、コマノュアラシテ、ヒシメク屋方モアリ、マツタアウルヤカタヲミテヤレハ、明日ワ、カマクライリトテ、矢ノ子ヲミカキテヒシメクヤカタモアリ、マツタ、アウル屋方ワ、ミテヤレハ、明日ワ鎌倉入トテシバノイヲリヲ、タンタヒトエニ、ユイタントシテイヲリノシタワ、モツコウシテ、カンコフコウシテ、トリヲドロガサントノミヨトカヤ、重郎ドノワ、タチメグリ〳〵ゴランジテ、戌坊ツバワ、コレヲミテ、重郎ドノ、トウラセタモウトカヨニモウセハ、重郎名字モカズカズナリ、伊豆ノ重郎カ、スツノ、重郎カ、金房ノ重郎カ、豐後ニウスキノ重郎カ
イツツヤ箱根ノ山ニテ、シヤクトツテマイモウタル重郎カ、シヤクトデ、マイモウタル重郎ワ、我ラトモニワ、イトゴツキ、戌坊ワンハニ、イトコヲチ、ソウレヨセテ酒呑セントイウケレハ戌坊ワンハワヲウテノヤグラニ、ハシリアカリテ、重郎ドノニワ、ヒト時キヲン入リソウライト、テツキニ、コトハヲカケラレテ、エンミヲフクンテ、タタリケリ」
（六七）はや御所方ニーフチノ、スツニ（夏）
（六八）かーの（上）・この字なし（夏）
（六九）きつこうは…ゆきをれたけーアンミノテワ、チカイドノ、ウロコガタワ、タカハシドノ、月ニ星ワ千葉ドノゴモン、キツコウワ、チカイ花、ウツボワ扇キアサリノ興市ドノ、ヒタツヘイジワ、宇作見ノ左衛門、ウチワノ紋ワ、小玉トウ、三本カラザサ、ユキヲレダケニツナキコマワ、サウマドノ、水車ワ、エヒノダイヂダイサカ、サトウノ紋、水色ワ、時ドノ御紋（夏）
（七〇）御所のーこちんのまい（上）・御所（夏）
（七一）次に「なり」と入（上）
（七二）今日やはん斗りーやはんのころ（上）
（七三）御座にートコロエ（夏）
（七四）られーリ（夏）
（七五）に坐りつ、ートタチマワリ（夏）
（七六）とまりつ、ートマワリケリ（夏）
（七七）次に「サヤヨリカラリト打ハッシ」と入（夏）
（七八）もんてーもつ（上）・モッテ（夏）
（七九）こそーは（上）
（八〇）たるとてーけると（上）・タリシカ（夏）

○先壹ばんに、（八一）ひら平ェ馬の承（八二）打たりける、二はんにや、おの、小太郎打たりける、（八三）三はんにや、そかにや（八四）兄弟妹（八五）むごさいきやうをふが三郎をふか多んぎのより合、我はつかしぐ引なとなのつて打たりける、四ばんにやたけたの四郎を打たりける、五ばんにやご所の彌（八六）五郎我（八七）そとなのつて出けるか、五郎にもろひざなかされて太刀（八八）をかつひて、（八九）うせにけり、（九〇）六ばんにや、むさしの四郎（九一）を打たりける、七ばんにや、むさしの太郎（九二）を打たりける、八ばんにや、原の九郎を打たりける、（九三）九ばんにやいせに（九四）いつるはだかしら、もつたるむしやをハたつと（九五）ふ五郎となのつて打たりける、十ばんにや、とゞをみ（九六）のうすひか源（九七）ば、ふかてを申せハ十七ケ所、これもそかの十ばん切となのつて打たりける。

（八一）てーチヅ（夏）
（八二）にしのばれんーをしほるらん（上）
（八三）にーゞや（上）・ニハ（和）
（八四）平ェ馬の承ータイラ熊平（和）
（八五）るーリ（上）
（八六）やーモ（和）
（八七）次ににやと入（上）
（八八）五ー九（和）
（八九）そーこそ（上）
（九〇）太刀をーおほたち（上）
（九一）リール（和）
（九二）四ー六（和）
（九三）をの字なし（上）
（九四）太ー七（和）
（九五）るーリ（上）
（九六）いーイセ（和）
（九七）つの字なし（上）
（九八）とゞをみーとをミ（上）
（九九）か源ばーノケンバン（和）

（二）田子本の曾我

田子本のは詞章が他のと少し異つてゐる。

曾　我

幕出し　遠國連枝の人々やゝ〳〵、浮島が原へと急がるゝ、浮嶋原にと靡くに洩れたる方もなし、曾我兄弟は、富士の裾へと急かるゝ。

幕掛り　小弓と小箭の本筈うら筈知らん時、父は從弟に討しか、討れし山はどこ〳〵ぞ、靑にす坂みから山、父や小久保で討れしか、それ侍は、十や十五に余る迄、本望遂んも無念なり、打も甲斐なき世の習ひ、人に向ふも辱しや。

工藤左衛門助常は、連れたる時は五百余騎、連れざる時は三百余騎、曾我兄弟の者共は、連たる時は兄弟二人、連ざる時は唯一人遠くのものは音てきく、近くの者は、目でも見る、身に添ふ物は影斗り、先立つ物は泪斗り、書は野に伏し山に伏し、折々常々覗めども、敵は大勢討つべきやう社更になし。

おう明日は富士の裾野の巻狩とて、鎌倉ど八ケ國が其間、觸れの御狀は廻れども、曾我兄弟の者共が、不見なる者と思召、觸の御狀も給らず、工藤左衛門助常は、唯側目で見た斗りとなぐさみける。

中入幕出し　女鹿一ッ男鹿二つ、女が一ッ男が二ッ、三頭揃へて掛け下る。

幕掛り　おう工藤左衛門助常は、柏木の直垂に、あきふたいのむかばきに、白瓚磨きの鐙當に、からす黑なる駒に乘り、駒さら〳〵と乘ければ、女鹿一つ男鹿二つ、三つある鹿に目をつけて、曾我兄弟は是を見て、嬉しき心はそゞろし立て、ほんぐの駒に鞍打掛て、むじに鐙に手繩をもみそいて、そゞろがけに乘けれバ、運の

極に屏風返しにどうと落つ、赤駒引き寄せ打乘て、敵の行方を見渡せば、谷嶺へだてて乘ける、おう斯程嫉たき親の敵を打たんなり、いざ兄弟差し違へて死なんとすれば、和田重忠立寄りて、先々暫しまて、此に一首の哥を演述す。

〈色有山の紅葉花、先づ其日の夜さをまて

と云ふ、然も其日の夜半なりけれバ、灯提付竹持たるたい松打ふり打ふり、助常屋方にしのび入り、十郎は前に廻り、五郎は後に廻り、彼の男を四つたに切つて捨てにける、おう斯程嫉き敵を打て捨、曾我の十郎五郎を名乘て、軍に花を咲かせたり。

十　番　切

幕出し　漸々急ぎゆくほどに〳〵、箱根の山に着にける。

同　二　段　目

お、斯う御前に罷り立たる者をばや。如何なる者と思召、我社や箱根別當の身内の者にて御座ゝ、今迄はさだん松はん六の九丈ひが事かや、忠孝の松に腰をかけ、東西はらりと詠めたり。

同　中　入

幕出し　花宮寺花をと云〳〵、影に花をぞ詠めたり。

幕掛り　○一番に討たれし人は、武藏の國、曾我の妹聟。

○二番には、我はづかしや、眞向討し太刀逆手につき、太刀引にける。

○三番には、宇佐美の三郎。

○四番には、伊勢の國、加藤五郎と言ふ者、久敷き太刀を、杖についたりけり。

○五番には、五所の矢五郎。

○六番には、高間の三郎。

○七番には、日向の國の臼井の源太。

○八番には、武田の太郎。

○九番には、遠江の源の九郎。

○十番には、伊勢國五郎丸、力と申せば七十五人の大力、彼を急度見渡せば、運の極めに押並べてや、無手と組で押並べたや、無手と組み、數多の武士打寄りて、ついに君の取子と成たりけり。

（三）檜木の曾我

檜木にも、伏木曾我と、十番斬とを傳へてゐる。十番斬はその實演にも接し得た。

曾　我　（底本は鈴木氏本、傍書は杉山氏本に依る異同とす。）

幕出　漸々急き行程ニ〳〵、富士の下野に着にけり。

〈物の憐を止るに〳〵、曾我兄弟にとゝめたり、小弓と小矢の木はつ末はつを知らさりし時、父をいとゝに打れしハ、侍ハ十五や廿に餘るまて、本望とげん無念さよ、埋火の、消ゑて甲斐なき世の習、人に向ふも恥しや、イヤ敵の通、野に臥し里に隱れつゝ、敵の常々折々見る時ハ、敵ハ大勢也、我等兄弟貳人なり、叶ゼずしてしゆぐせ〳〵とする時ハ、曾我兄弟ハ敵也、ヲ、明日ハ富士の下野の巻狩迚、觸の御狀も廻りしに、我等兄弟貳人の者共ハ、びんなるものと思召、觸の御狀も給はらず、いさや兄弟貳人の者共ハしのびのかりとなぞらへて、大勢に走からまつて、敵の工藤祐常を、一目見ばや。

〈ヤア太鼓付　遠ぐハ矢一ツ、近ぐハ一刀、夫ニものふも間近くハ、腰の刀で勝負せんと、親敵と思ふへし。

〈鎌倉の寺々ハ〳〵時ならぬ夏の野鹿を獵らんとて、

〈ハア六月雪のかのこまだらに詠つゝ、近國れんじの人々は、雲かすみのごとくにたなびけば、浮島ヶ原の艸も木も、靡洩さる方もなし、曾我兄弟ハ出たりつゝ、富士の下野にゆかんばやとそんじゝ。

〈ヲ、遙に富士の下野を見渡に、男鹿ハ一ツ、女鹿ハ二ツ、三頭揃へて落向行、射手ハ千騎の其の中に、大柏木の直垂ニ、アケイフタエノむかばぎに、

〈イヤ烏黑成る駒に乘り、見れバ敵の祐常なり、嬉しき心ハそゝろに立つて、駒に鐙をぬり掛に、とんどり懸にかけて行、不運ハ來りけん、節木に駒を乘掛て、

〈イヤ屏風返しにかつばと臥、妻手ハ御引立て又引立て、敵のおぐれを見てあれバ、敵ハすかをへたて谷峯へだて乘り貫けたり。

〈しかも其の夜ハ、夜半斗りと成りしかバ、まぶしの板に立て塞つて、敵をやし〳〵とうつたりけり、たとひ我が身、不二の下野迚か本に死するとも、名をハ雲井に揚げて富士下野に、十郎五郎と名乘られたり。

十　番　切

實演には左の前段は略された。これは直面の者が扇をとつて出て、「番樂」の舞を舞ふといふ。

幕出　漸々急き行く程に〳〵、箱根の山に着にけり。

〈御前に罷り立たる者おバ、いかなる者と思召、我ハ是箱根の別當身内のものニてゝが、今迄ハしやだんの松葉を拂ゐんとて、六苦の九じやうひか事かや、しばし御待ちゝへかし、葉都の松に腰を掛て、遥ふ〳〵と詠メばやとぞんじゝ。

と、中入になる。實演は以下。

はじめ五拍子の一囃子あり。

幕出〈花見の寺の機音や〳〵、木彫て花を詠メけり。

と早拍子になると、幕を少しあげて押し出し、幕をゆすり、幕下に足踏のことあり、幕を押し出し、又押し出して、出る。鍬形のある兜、面、紋付、下に鎧、廣帶、太刀の仕度、扇を開いて右手に持ち、左手は太刀の柄をとる。首を振りつゝその物にめぐり、扇を上下し、掛聲をしつゝ

角々をかけてめぐる。地天の振や、左手に扇を持ちかへ、かまへる等のこともある。とゞ振色々あつて順に小まはりをし、舞臺の眞中に立つと、語りになる。

〈先一番に打たれし人は誰たそふのふ。

と、次よりふしになり、囃子をかぶせ、これにつれて振がある。

武藏の國の住人ニ、平の平馬之承打たれしや。イヤ

と、小まはりをし、扇をつぼめ、太刀を拔き、扇は左手に持つ。

二番にハ、曾我の妹聟、伸身よりハ、我れ恥敗しや引くなと招ぐハあいきやうが三郎か、イヤ拜ミ打に打程ニ眞向ゑられて引きたりけり。三番にハうさみの三郎、四番にハ伊勞の國の早頭五郎、〈五郎に膝ながされて、（と坐し、又立つて振がある）劒をバ杖に引たイヤ諸りけり。五番にハ御所の彌五郎、六番にハ高間の三郎、七番にハ大野の小太郎、八番にハ竹田の太郎、九番にハ遠江の國の原の九郎、拾番にハ日向の國の臼井の源太、淺手を申せバ十七所と名乘〈られたり。（とその場にめぐり）イヤ

と中に出て足ぶみをし、太刀をかつぎ、その場にめぐり、

五郎ハ彼方を見たりしハ〳〵、御所の御門に追掛られ、御所の五郎ハ何とて力を申せハイヤ（と右足をのべて坐し）七拾五人の力と名乘り、薄絹をかつぎて（と、太刀をかつぎ、その場に順にめぐり）立たりしハ、運のきゑめハ狂女と見へて、かへそハ向て通たりしハ、イヤァ（と右足をのべて坐し、立つて左足をのべてかまへる）押並べハむつと組〳〵、其外數多の侍ども、イヤ（と立膝になり）打ち合ひ〳〵（と膝をかへ）組程に（と囃子がやみ）いよ〳〵五郎は勞れと成つて、やがて御所へ參られけり。

と再び早拍子の囃子になる。伸べ足をして坐し、足をかへ、立つと太刀を收め、扇をひらき、幕前胴前に行き來して色々にこなしあり、とゞ一舞はげしく舞つて入る、約十二分。後五拍子を靜かに囃子。

（一）がーハ（晴）・この字なし（金）
（二）ち―つ（晴・金）
（三）ずして―さる時（晴・金）
（四）ハとご〳〵ぜーハどこ〳〵（羽）・ハいつぐ也（晴）・をたつ

（四）岳本の曾我兄弟

烏帽子、面、ぬぎだれ、袴、帶刀、扇のものが二人出て、相對して舞ふ。

曾我兄弟舞（岳本を底本に、羽山・晴山・金次郎氏の諸本を參照す。）

幕出〈やう〳〵急ぎ行程にふじのすそのに着ニけり。

ぬるに（金）

（五）菅原本には、こゝに「野所」とあり、以下鎌倉殿ハの前まで節付がある。

（六）ら―さ（晴・金）
（七）居てとなし（晴・金）
（八）を―も（晴・金）
（九）次ににの字入（羽）
（一〇）時ハ―たびも（晴・金）
（一一）ど―ども（晴・金）
（一二）次に「てきに向ふもはつかしや」と入る（晴・イ金）
（一三）過し過にし歳月を―すみいししけいし年つけて（晴）・すぎしすみしとしつけて（金）
（一四）「曾我…又」となし（晴・金）
（一五）を―に、ひよくれんり（晴・金）
（一六）以下左の如くあり。（晴・イ金）

「うきしまか原の雲草のひゞきをいたる事ハなし。曾我兄弟にていたりしかぜい、おうかしわんぎりひたゞれに、からす黑の駒にうちぬりて、よそのひすればうんなきわめに、ふしきに駒どうとふし、びよぶが石にどうとふし、駒ひきたてゞぬらんとすれバ、おけきうは者をひはるかに

〈我らがちくばになりし時（一八）〈弓の本はつうらはつしらずして（一九）〈父をいとごにうたれしか〈打れし所ハとご〳〵ぞ（二〇）〈青き、青坂あをさかみから山、十や十五になりぬれバ〈野に臥し里にかくれ居て（二一）〈敵の通路を折々常々見る時ハ（二二）〈あれど敵ハ大勢なり〈曾我は兄弟貳人なり（二三）〈うつめ火の、消へてかへなき世の中ニ〈過し過にし歳月を（二四）〈曾我兄弟にとゞめたり。〈又物のあはれをととめしは〈曾我兄弟にとゝめたり。

〈鎌倉殿ハ〳〵、時ならぬ夏野の鹿を止とめんとて、六月ひとへを、（二五）かのこまたらに詠めつゝ、北國源氏の人々ハ、雲霞にたなびぎわたつて、浮島か原の草木の上も谷々も、すんち羽ぢつきハさらになかりけり、そが兄弟貳人ハ出立て、富士之すそ野にいそがばやと存ル。

〈敵ハ大勢か其中に〈はたに取てハおふがしま大かしわ羽〈きんのひたぢれにからすぐろなる駒に打のりて〈よそおへすればいつよりも〈心ハそゞろぎたて〈うんのきはめハふしきに駒をとふとふし、びよぶかへしにかばとふし、駒ひき立てゝのらんとすれバ、ごふてぎハそのあへはるかにはせのひたり。

〈おふ親のきやうよふとふよりも、兄弟貳人して、差違はんと言ふければ、其時おぢの重忠申されけるは秋の夜の夕暮に（羽）「つぐ山」羽色よぎ花のもみちばを、まつて見よと一首の哥に詠じたり。

（五）大償の曾我

大償では、五郎、十郎面を夫々に著けた、烏帽子、ぬぎだれ、帶刀の二人の者が、扇を持つて舞ひ、後で面をとつて舞ふといふ。

はせのぼり、おゝ兄弟二人ハ、さしずがはんとうひければ、〈おふぢのしげたゞ申さるよ

（一七）〈秋のよのいろつくやまのもみち葉を、まはして見るに（一八）一首の哥にれんちたり。（一九）兄弟二

人ハさしちかはんとい、ければ、兄弟貳人ハ、親のあとをとゝのんハこそ」

（一七）菅原本にはこゝに「たいこ」とあり。節付はないが、以下「はるかにはせのひたり」迄、哥所であるらしい。

（六）圓萬寺本の曾我

ずつと簡略になつてゐる。

曾　我

〈仇は大ぜい、御中にはんたにとつては、おんはしまきのはらまきに、くろなる駒に、我身かるさにゆらりとのり、駒引立て乘らんとするに、仇に、はるかにはせのびて、おいかけんとおもしが、仇を一目見るよりも、次第の人々わ、とてもかなわのその御中にさやうちはじしあやうくぞ見へにけり。

〈うんちのしげたゝもされけり、秋の世の、いろつく山のもみちはも、心こそや、あるべけりと申れけり、次第の人々とはあはれあきしくもすぎにけり。

下番樂の曾我

番樂には、大抵の所に殘つてゐる。主として夜討曾我（臥木曾我）を演じてゐるが、二階本のが、大體完備して居り、杉澤のひやまのだけが、詞章に目立たしい異同がある。

根子、富根、西長野等のは、簡略にされたものであつた。實演に接し得たのは、杉澤及び山谷、根子のものである。

（七）根子の曾我

曾　我

幕出　曾我のそりはし打渡り〳〵、富士野の裾野にいそぐなり。

と、幕を振り動かす。と、前結びの鉢巻、直面、赤糸縅の鎧、胸當、背當、草摺、青摺（前に結ぶ）、裁著、帶刀、手甲、脚袢の者が、幕を兩手にかゝげたまゝ大いに振ることがあつて中央に出る。つぼめ扇を右手に持ち、一舞あつて右足を前に伸べて坐し、扇を開き「ハヤツサ」といふ掛聲で、四股をふむやうにして激しく色々に舞ふ。とゞ舞ひつゝ扇をつぼめ、胴前に坐して扇を開き、なほつてゐるところに、「曾我の反橋打渡り」と同じ幕出しで、黑糸縅の鎧を著た、同樣の支度のものが、同樣にして出、一舞あつて扇を開き、兩人は向ひ合ひになり、相對しつゝ前合せに又背合になり、扇を右手にとり、又左手にとり、入りかはりになつたりなどして色々に舞ふ。とゞ囃子を打とめると、左の語りになる。

中歌　おゝ曾我兄弟の者なりしハ（と、相對し、扇を夫々右方にくる〳〵とめぐらして振り、左手は刀の柄に手をかける。）夫なりわらし有し時、小弓と小矢の本末も知らぬ時、父を工藤に討たれしや、討たれし處はどこ〳〵ぞ、あをきあふさか、みかとやま、十や二十になりしかば、仇の本望とげんとて、（と以下節になり、囃子をかぶせ、）

ふしへ野に伏し山に隱れつゝ、（と入れかはりになり、）仇の樣子見てあれば（と又入れかはり合ひ、）仇大勢、我等兄弟二人なり（と囃子をとめる。）

語り　オゝふるさとの曾我に歸り、語り慰むばかりなり、おゝその時、おふちのしげ高は、壹首の歌にかく斗り（と以下節になり、囃子をつけ）

ふしへ其日の秋の夕暮を、待つとひかひしなんと、一首の歌にかくハかり。

その夜の夜はんの比より、持ちたるてんたへ打ふり〳〵、祐經館へ忍び入り、にほんの太刀を打たりけり。

と、これで立膝となり、太刀を拔き、切合になり、太刀を打合せては火花を散らす。とゞ先に出た赤糸縅しの鎧の者が入ると、黑糸縅しの他の一人が、大太刀をとり、一しきりの太刀舞を舞つて入る。以上約十二分。

〔考異〕（一）富根本は、根子同樣大體簡略にされてゐるのであるが、以下になほ、次の一節を殘してゐた。

「ヲゝまことやら、明日は富士の裾野のまき狩と聞、われらまて、おふれなけれとも、明日は富士の裾野のまきかりに候いざ〳〵出てゝ目てみてなくさまばやとそんじ候。

中入　それせんきがたいしやう、からすくろの駒に乘て、出で立たる裝束見れば、敵の祐經なり、祐經見るより嬉しき心、そゝろきたつて、おふきにあぶみもみあわせす、ふしきに駒をはせかけて、びやうふかへしにかつばとふす。」

（二）富根本は以下を左の樣に謠ふ。

「是ヨリ番ンセン　その夜もやはんの頃なるに、てんだへうちふり〳〵祐經やかたへ、忍び入り、むほんの大太刀うつたりし、はせくるてきをおかみきり、又くるてきを車きり、どふばをたゝへて、いのちをさかへとたゝかつたり、名をば、雲井の、十郎五郎となのりたり。」

（八）山谷の曾我

幕を打振つて幕出しあり、幕をなほし、又打振り、十郎、五郎が續いて出る。烏帽子、面、繩袢、襷、帶刀、ふんごみ、脚袢、著め扇の仕度。十郎面には、頬鬚がある。相對しつゝ靜かな振あり、背中合せになつて足踏をすると扇を開き、離れて、又振がある。角々にきまつて振あり、扇を左手に持ちかへ、背中合せに足踏をし、手をひらくなどあり、その場にもめぐる。とゞ「それなにはにありし時……打たれし所はどこ〳〵……十や二十の……おやの仇をねらへども」と語りになり、以下語りの間、一人は二と三の角、他は一と四のすみを、扇を前方にくる〳〵させつゝ行き來して相對す。途中囃子歌になり、振がある。とゞ面をとり、拜し、面を幕内に收め、（本統は二人とも幕に入り、面をとつて改めて出るといふ。）扇をちつとかまへつゝ一まはりあり、次に太刀をぬき、太刀

を振つて、順にめぐり、トンボを切り、その場にめぐり、入れかはり合ひ、背合せになり等の振を繰返し、色々變化ある立まはりがある。とゞ太刀を振り合ひ、兩人は拜して入る、約十二分。

（九）西長野本の曾我

第五十二圖　根子の曾我

こゝのも詞章は簡略になつてるが、やゝ變つてるた。

曾　我（傍書は白岩本に依る異同とす。）

○小弓と小矢の本末を知らさる迚、我藤原に有し時、兄の十郎助成ハ、十一歳に成ぬれは、弟五郎時宗ハ、八歳の明の頃、父をは從弟の祐經に被討つゝ、打れし所はどこ〳〵そ、青木青坂みから山、ゆんでの脇に而うたれつゝ、其時敵と思へとも、敵は大ぜいの事なれば、さもなぐさめに斗り成にけり。不思議やなノ〳〵、尋ね尋ねる祐經は、日本國々嶋々尋ね見得さる祐經は狩にて、黑皮おどしの鎧着て、烏丸のひし甲、ほそ身の打物はけ永に、黑毛名馬に打乘て、勇立てぞ

敵の祐經二人を見るゞいさみ立、はや瀬の川に飛おりて、時に三度の垢離をかき、日本佛神三方の加護を祈りて、夫より松火ふり立〳〵、ぬぎつる太刀をうちふり〳〵、祐經の陣所に入にけり。大をのこを四つだに切りて、名を万天に上げ（られ）にけり。

（一〇）二階本の曾我

食　討　曾　我（傍書は荒澤本に依る異同とす）

暮出へ曾我の反橋打渡り、不二の裾野（野の裾）に（出）著にけり。

中言立へヲヽ、曾我五郎（の十郎）十郎（五郎）は、兄弟二人の者なりしか、昔夫業平にあり（る）し時、吾妻路に下（へ）りつゝ、時ならぬ雪をハ、鹿子斑に詠（なが）めつゝ、夏野の鹿をも（なし）掬めんとて、富士の裾野に出（にけり）てある、（聞け）されは鎌倉の人々は、近國隣家（州）の人（者）までも、雲霞のことくに（隙）棚引て、うき島か原の洲崎（さき）まて、靡（なびき）もれたる方はなし。（靡き洩れたる方ハ有らは迚）我等（なし）は小弓と小矢の、左右（もとうへ）をもしらさるとき、父をハ從弟に打れし（ヤ）か。

へ思（も）への色の、血汐（氣色）に流るゝ、双涙、なゝたの露（とも）程聞て有。

うつめ（み）ひも（の）、うけてかひなき身をもちて、十や（や）二十日余りしか、親の本望遂んとて、野に伏山に隠れつゝ、敵の通路（かよひ）見る時（なし）は、敵は大勢なり、我等（なし）兄弟二人なり、古郷の曾我に歸り、語り（かたき）なく（磨）所へ（に）と歸（り来）られたり。

大力（ちから）さむ、大勢（おほせひ）かな。

末言立へヲヽ、（なし）はや七日（しちにち）の、牧狩（まうかり）にもなりしかハ、男鹿（ぬれ）は一つ（ひとつ）、女鹿（めか）ハ二つ、三頭（みつしら）連てうち来り、めての三家（か）の其中に、大星（おほほしひたれ）の直垂（なし）に、已き總緒（ふさかりの）の行騰（あさがはき）に、烏黑（よさな）なる駒に打乘たる老武者は。

（〇）（暮て間）へ見れ（なし）ハ敵の祐經なり、祐經見（をへ）るより、このかたハ（なし）、うれしき心（なし）はそゝろき立て、すつくと（駈）鐙踏（あぶみふもみ）あはせ、弓打かけて、引んとす（持あ）泪（兩）三二本

れハ、不運（中陰）のきはめかな、臥木に駒を馳かけて、ヤア屏風返し（中ヲン三本）にかつはとふし、手綱にすがり、駒打引（上）立乘んとすれハ、敵の馬武者、其間遥に見へたりけり。（物あひ）

へチヽかほとすぎなき、親の（中）（陰）ちうらうとふよりも、いざや兄弟指違（少）（この）へんとハ思（申せ）ひしか、其時叔父（武將）の重忠（重）ハ、（恩）まてしも山の紅葉は（申せも）文つく色つく紅葉葉を見て、其日の明の夕暮を待て問ひ歸スハ、來る秋の夕暮を待て、とび返すなと、一首の哥に（一首の歌にもれんしあり）もれんじあり。

（〇）（暮て間）・・ヤア其夜の夜半になりぬれハ、もつたる天炬打振〳〵、祐經屋形に忍び入り、

へヤア斯て、敵は打たりしか、四十の男を四づだに切て、やがて御所へと歸（り来）られたり。

を振つて、順にめぐり、トンボを切り、その場にめぐり、入れかはり合ひ、背合せになり等の振を繰返し、色々變化ある立まはりがある。とゞ太刀を振り合ひ、廣人は拜して入る、約十二分。

（九）西長野本の曾我

第五十二圖　根子の曾我

こゝのも詞章は簡略になつてゐるが、やゝ變つてゐた。

曾　我（傍書は白岩本に依る異同とす。）

○小弓と小矢の本本を知らざる迚、我藤原に有し時、兄の十郎助成ハ、十一歳に成ぬれは、弟五郎時宗ハ、八歳の明の頃、父をは從弟の祐經に被討つ、打れし所はどこ〳〵そ、青木青坂みから山、ゆんでの脇に痛うたれつゝ、其時敵と思へとも、敵は大せいの事なれは、さもなくさめに引り成にけり。不思議やなゝ、幸ね幸ねる祐經は、二日本國々鳴々尋此度富士の卷れ見得さる祐經は狩にて、黒皮おどしの鎧着て、烏丸のひし甲、ほそ身の打物はけ永に、黒毛名馬に打乗て、勇立てぞ敵の祐經二人を見るがいさみ立、はや瀬の川に飛おりて、時に三度の垣籬をかき、日本佛神三方の加護を祈りて、夫より松火ふり立〳〵、ぬきつる太刀をうちふり〳〵、祐經の陣所に入にけり。大をのこを四つだに切りて、名を万天に上げにけり。

（一〇）二階本の曾我

後　詞　曾　我（傍書は荒澤本に依る異同とす。）

發出へ曾我の反橋打渡り、不二の裾野に著にけり。

中言立へヤ、曾我五郎十郎五郎の十郎は、兄弟二人の者なりしか、夫業半にありし時、吾妻路に下りつゝ、時ならぬ雪をハ、鹿子斑に詠めつゝ、夏野の鹿をも捕めんとて、富士の、裾野に出てある、聞けは鎌倉の人々は、近國隣家の人までも、雲霞のごとくに棚引て、うき島か原の洲崎まて、暫もれたる方はなし。（傍き洩れたる方ハ有らは迚）我等は小弓と小矢の、左右をもしらさるとき、父をハ從弟に打れしかゝ。

へ思への色の、血汐に流る、双涙、なゝたの露程聞て有。

うつめひも、うけてかひなき身をもちて、十や二十日余りしか、親の本望遂んとて、野に伏山に隠れつゝ、敵の通路見る時は、敵は大勢なり、我等兄弟二人なり、古郷の曾我に歸り、語りなくして大力さむ、大勢かな。

本言立へヤ、はやじ日の、牧狩にもなりしかハ、男鹿は一つ、女鹿ハ二つ、三頭連てうら來り、めての三家の其中に、大星の直乗（樫ばんかひ）に、已き總緒の行騰に、烏黒なる駒に打乗たる老武者は。

へ見れハ敵の祐經なり、祐經見るより、このかたハ、うれしき心はそゝのき立て、すつ〳〵と鎧踏あはせ、弓打かけて、引んとす汨三本

中陰のきはめかな、臥木に駒を馳かけて、ヤア屋屋返し

にかつはとふし、手綱にすがり、駒打引立乗んとすれハ、敵の馬武者、其間遥に見へたりけり。

へヤ、かほとすきなき、親のうらうらとふよりも、中陰恩いざや兄弟指遣

ハんとハ思ひしか、其時叔父の重忠ハ、まてしも山の紅葉は又つく色つく紅葉葉を見て、其日の明の夕暮を待て問ひ歸へ、一首の哥にハ、來る秋の夕暮を待て、とひ返すなと、一首の哥にもれんしあり。

へヤア其夜の夜半になりぬれハ、もつたる天炬打振〳〵、祐經屋形に忍び入り、

へヤア斯て、敵は打たりしか、四十の男を四つだに切て、やがて御所へと歸られたり。

〔考異〕（一）こゝに傍書して「拍子」とあり（荒澤）。（二）傍書して「切」とあり（同上）。（三）傍書して「拍子」とあり（同上）。

（一一）興屋本の曾我

曾　我

幕掛　曾我のそり橋かけ渡り〳〵

さら〳〵〳〵とも出たりけり

言たて　おふあつてあり原ニありし時、小弓と小矢の木末へをもしらぬ時、父をはいどごにうたれしや、うたれし時のたゝかいハ、あふき逢坂御笠山、十や廿チに成りぬれハ、野にふし、山に隱れつゝ、親の敵をねらへ共、敵ハおふせなり、我等兄弟貳人成、古さとにかゑる方ハなくさまれ。

二　番

明日ハ富士のしそのゝまきがりに、かねて御觸ハ（ふれ）得共、我等持たる所領ハなし、たとへ所領ハ無キとも、富士のしそ野ニ出て親の敵をめてもめはやとそんじゆ。

それ鎌倉の方々ハ、時ならん夏野の鹿をもとらん時、六月雪おはかのごまたら詠めつゝ、近國りんごの人々ハ、雲や霞にたな引ハうき嶋や原のしさき迄も、なひきもれたる方はなし、なひきもれたる方はあれハとて、曾我兄弟も出たつたり日が富士のしそ野といそかれたり。

三　番

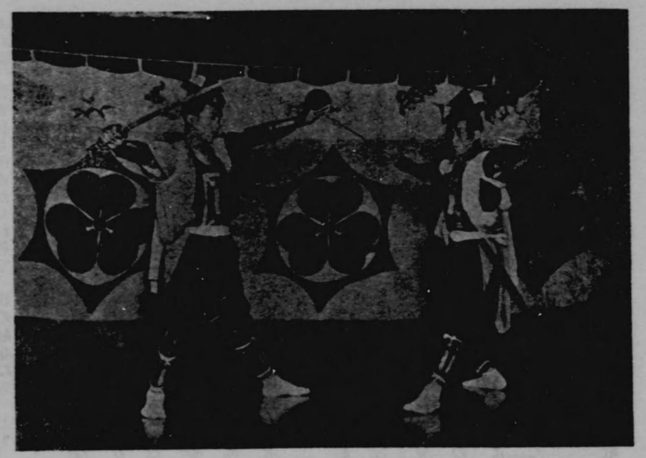
おふせんけや霞の其中に、おふかしゟきのひたゞれに、脇房りよのむかはきに、からす黑成る駒に打や乘たるろふ武者ハ、たつねて聞ハ親の敵の助經成り、くどふを見るより、こゝろハそゞろきなつてくおんな極メかな、やふに駒をはしらせ、ふしきに鎧をもみ合、屏風かへしかかつはとふし、ゆんてニハ飛立チ、駒引立テ乘らんとせハ、葉武者ハゑきにあしからまる、もろやはるかに廻（めぐり）だりけり。

四　番

おふ曾我兄弟貳人の者の申せしハ、くゟほと過きなき親のきよよふとるよりも、いさや兄弟貳人して、さしちかゟんとハ申せ共、其時王ぢの重忠ハ、またしきに色付山の紅葉哉、この世くれを待て見よかし、なんどと一首哥ニもゑじあり。

そんのふよふハ、夜半ニ成りぬれば、持たるてんたい打ふり〳〵助經か家方ニ忍ひよせ、むほんの太刀をときなにとつてしめ込たるし、むらおとし、らんほうたゝ以て命をさこふとたゝこふたり。

唱　ヤア〳〵、四拾の男を八つたにきり、名をば雲井の十郎五郎と名乘りたりけり。



第五十三圖　杉澤の曾我

（一二）杉澤の曾我

「曾我のそれはし」の幕出で十郎、次の「サツサツサとも」で五郎が出る。立烏帽子（元は侍烏帽子であつたといふ。挿入の寫眞は古風に從ふ）、直面、左肩ぬぎ、襷、胸當、手差、袴、脚絆、帶刀、扇の仕度「ヨイヨイヨー」等の囃子言葉で足踏あり、振一しきりあつて語りになる。この間兩人は左右に向ひ合になり、扇を左右にする。節になると互に入れかはり合ひ、又入れかはりになつて、同じく扇を左右に振る。語りが切れると、一しきり向ひ合ひに場所をかへつゝ振色々あり、左手の失敬手などもあり、その場にもめぐり、足踏みもする。

「その夜も夜半になりぬれば」より再び謠ひになり、扇をつぼめ「むほんの太刀をするりと拔て」で太刀を拔き、互に打ち合せ、逆まはりに場所をかへつゝ振あり「日頃の本望遂げたりけり」と太刀を鞘に收め、扇を開き、一人きまつて坐し、拜して入ると、先の一人はなほ殘り「名をば雲井に」云々と兩手をあげ、一舞あつて入る。（囃子は笛、太鼓、銅鈸子が主で、笛はいつもの樣に最後になつて入る。）約二十三分のもの。

これの詞章は他と異る所が大分ある。

曾　我

（十郎）曾我のそれはし、かけてや渡れ〳〵、ハイエー。

（五郎）サツサツサ、とも出でられたや、ハイエー。

（語り）こゝに出でたる者は、曾我の十郎五郎なり、夫、工藤祐經は、いとこの河津に意恨あるによつて、我郎黨の近江やはたに、かはづを射よと仰せあり、あふみやはたハ、河津ねらひし所はどこゝ〳〵ぞ、かしはが峠、おきかくぼ、ながくら渡、くち木澤、心つくしてねらひしが、おくのゝかりの返りがけ、あか澤山の麓にて、あへなく最後、遂げさせし、その時河津が子供らは、兄の一

（考異）（一）こゝに傍書して「拍子」とあり（荒澤）。（二）傍書して「切」とあり（同上）。（三）傍書して「拍子」とあり（同上）。

（一一）興屋本の曾我

曾　我

幕掛　曾我のそり橋かけ渡り〳〵
さら〳〵〳〵とも出たりけり
言たて　おふあつてあり原ニありし時、小弓と小矢の木末へをもしらぬ時、父をはいどゝにうたれしや、うたれし時のたゝかいハ、あふき逢坂御釜山、十や廿チに成りぬれハ、野にふし、山に隱れつゝ、親の敵をねらへ共、敵ハおふせなり、我等兄弟貳人成、古さとにかゑる方ハなくさまれ。

二　番

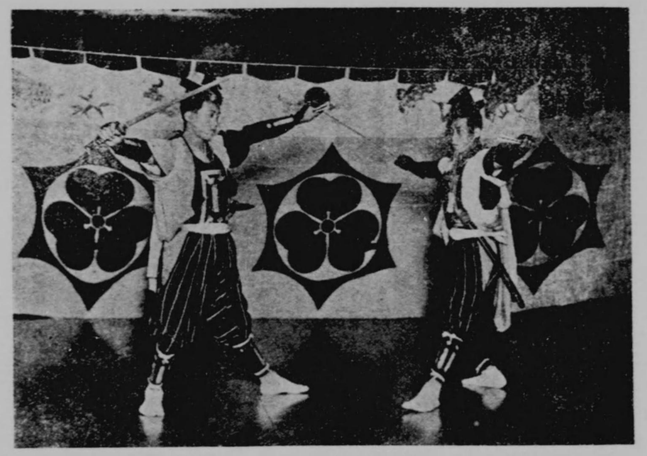
明日ハ富士のしそのゝまきがりに、かねて御願ハ叶得共、我等持たる所領ハなし、たとへ所領ハ無ともに、富士のしそ野ニ出て親の敵をめてもめはやとそんじ叶。
それ鎌倉の方々ハ、時ならん夏野の鹿をもとらん時、六月雪おはかのごまたら詠めつゝ、近國りんごの人々ハ、雲や霞にたな引ハうき嶋や原のしさき迄も、なひきもれたる方はなし、なひきもれたる方はあれハとて、曾我兄弟も出たつたり日が富士のしそ野といそかれたり。

三　番

おふせんけや霞の其中に、おふかしゞきのひたゝれに、脇房りよのむかはきに、からす黑成る駒に打や乘たるろふ武者ハ、たつねて聞ハ親の敵の助經成り、くどふを見るより、こゝろハそゞろきなつてくおんな極メかな、やふに駒をはしらせ、ふしきに鎧をもみ合、屏風かへしかかつはとふし、ゆんてニハ飛立チ、駒引立テ乘らんとせハ、菜武者ハふきにあしからまる、もろやはるかに廻だりけり。

四　番

おふ曾我兄弟貳人の者の申せしハ、くゞほと過きなき親のきよよふとるよりも、いさや兄弟貳人して、さしちかゞんとハ申せ共、其時王ぢの重忠ハ、またしきに色付山の紅葉哉、この世くれを待て見よかし、なんどと一首哥ニもゑじあり。
そんのふよふハ、食半ニ成りぬれば、持たるてんたい打ふり〳〵助經か家方ニ忍ひよせ、むほんの太刀をときなにとつてしめ込たるし、むらおとし、らんぼうたゝ以て命をさゝこふとたゝこふたり。
吼　ヤア〳〵、四拾の男を八つたにきり、名をば雲井の十郎五郎と名乘りたりけり。



第五十三圖　杉澤の曾我

（一二）杉澤の曾我

「曾我のそれはし」の幕出で十郎、次の「サツサツサとも」で五郎が出る。立烏帽子（元は侍烏帽子であつたといふ）挿入の寫眞は古風に從ふ）、直垂、左肩ぬき、禪、胸當、手蓋、袴、脚袢、帶刀、扇の仕度。「ヨイヨイヨー」等の囃子言葉で足踏あり、振一しきりあつて語りになる。この間兩人は左右に向ひ合になり、扇を左右にする。節になると互に入れかはり合ひ、又入れかはりになつて、同じく扇を左右に振る。語りが切れると、一しきり向ひ合ひに場所をかへつゝ振色々あり、左手の失敬手などもあり、その場にもめぐり、足踏みもする。
「その夜も夜半になりぬれは」より再び謠ひになり、扇をつぼめ「むほんの太刀をするりと拔て」て太刀を拔き、互に打ち合せ、逆まはりに場所をかへつゝ振あり「日頃の本望遂げたりけり」と太刀を鞘に收め、扇を開き、一人きまつて坐し、拜して入ると、先の一人はなほ殘り「名をば雲井に」云々と兩手をあげ、一舞あつて入る。囃子は笛、太鼓、銅鈸子が主で、笛はいつもの樣に最後になつて入る。約二十三分のもの。
これの詞章は他と異る所が大分ある。

曾　我

（十郎）　曾我のそれはし、かけてや霞れ〳〵、ハイエー
（五郎）　サツサツサ、とも出でられたや、ハイエー。
（語り）　こゝに出でたる者は、曾我の十郎五郎なり、夫、工藤祐經は、いとこの河津に意恨あるによつて、我郎黨の近江やはたに、かはつを射よと仰せあり、あふみやはたハ、河津ねらひし所はどこ〳〵ぞ、かしはが峠、おきかくぼ、ながくら淺、くら木澤、心つくしてねらひしが、おくの、かりの返りがは、あか澤山の麓にて、あへなく最後、遂げさせし、その時河津が子供らは、兄の一

まん五つなり、弟の箱王三つになる、五つになりし一まんは、大人となりて我親の、敵を取りて見せんづと、言ひしも、まこと恐しや、兄弟心を一致して、片時も仇を忘れかね、十や二十になりぬれば、野に伏し山にかくれ居て、親の敵をねらへども、敵は大勢なり、味方兄弟二人也、古里の曾我に歸り、語り慰め、又明日は、富士のすその、まき狩と、かねて御觸はゝへども、味方は持ちたる所領なし、あらずとて親の敵を見ても、みばやと存じゝ。それかまくらのかたゝは、時なれば、夏の鹿をば取らんとて、雪をば鹿の子まだらに跳めつゝ、近國近所の人々は、雲やかすみとたな引いて、浮島が原の地境まで、なびけや急げ、弓矢持ちたる方もなし、曾我兄弟も出られしが、富士の裾野といそがれたり。

千きやかすみのその中に、ふせんれうのひたゝれに、大まだらなるむかばきに、きりふの矢を負ひふきよせ、籐の弓を持ち、からすくろなる駒に、打や乘つたる樣子をたづねて聞けば、見ればかたきの祐經也、祐經見るより、心はそゞろき立つて、兄の十郎、臥木に駒をはせかけて、あぶみをはづし、ぴやうぶ返しにかつばとふし、弓手に飛立つ、駒引きよせて、又打乘て、はむしやはいけぬはしからまはる、敵ははるかにのびたりけり。

ハエー　曾我兄弟二人の申す言には、かほど緣なき親の敵をねらふより、いざや兄弟二人して、さしちがはんと申しけり、その時おぢの重忠は、一首のうたにてひいきあり、ヤアラー　未日もくれぬ、まだしきに、色つく山の紅葉かな、この夕ぐれを待ちて見よかし、なんど、一首の歌にて仰せあり、その夜も夜半になりぬれば、明松うちふり〳〵、祐經館に忍び入り、むほんの太刀をするりと拔て、兄弟喜び、工藤の臥したる前後にまはり、兩方たゝいて、三太刀つゝこそ切りたりけるは、日頃の本望遂げたりけり、工藤内をば四つにぞ切て、名をば雲井に十郎五郎と云ひ捨てたり。ハッサッサー

四、鞍　馬

この曲は、山伏神樂に多く、夏屋、中妻の兩本を除いては、何れの寫本にも書とめられてゐる。番樂には、本海坊流のもの、及び山谷、根子に見るだけである。これは牛若と天狗の兵法較べをつくつたもので、謠曲の「善界」や「鞍馬天狗」の影響が見られる。

上山伏神樂の鞍馬

牛若兵法比べともいふ。各本にありながら、山伏神樂の舞は大出のもの、外は見ることが出來なかつた。

(一) 大出の鞍馬

馬 (一)（大出本を底本とし、菅原氏、羽山の兩本を參照す。）

幕出　ようゝ〳〵急ぎ行く程に〳〵、鞍馬の山にぞ着きにける。

　と、幕をゆすり、烏帽子、直面、ぬぎだれ、大口(二)、袴、帶刀のものがつぼめ扇をとつて出、幕前に坐し、片膝を伸して幕向に、次に正面向にきまり、次に立つて扇を開いて舞ふ。扇を兩手にとつて、タタをふみ、扇をまはし、踏みはだかりになり、踏みかへ足をする等があり又片膝を立てゝ扇を鞍にとり、小まはりをし、前後に向いて振がある。と、幕前になほると、次の言立になる。

牛若言事　ヲ、かく御前(三)に罷立(四)たる侍をハ、如何なる士と思召(五)の、（と舞つて出、きまる。）ヲ、我ハ是、源氏左馬之守義朝には(六)八男、常盤腹には三男、一ニ今若、二ニ乙若、三ニ鞍馬之山ニ住居をなす丑若とは某(七)が事にて(八)ゆ、ヲ、善海坊殿(九)は宅に御入(一〇)升てかのふ。

天狗言事　ヲ、左樣なる人は宅に(一一)御わさぬそよの(一二)ゝ牛若は舞つて出、又すさる。

牛若言事　ヲ、何と陳じ玉ふとも、聞けば(一三)、善海坊殿の御聲とも聞受申て(一四)ゆ程に、出て(一五)兵法くらべをなさるべしのふ(一六)。

　と、この時、幕下に長い棒が出る。

天狗幕出　大唐の〳〵、天狗の御供には(一七)誰たそう、先一番には(一八)、筑紫彥山のぶぜん坊、九州には(一九)白方の(二〇)さが美坊(二一)、前鬼(二二)ハ一(二三)等勝利、勝人(二四)恐しやな〳〵、愛宕(二五)鞍馬の天狗たに、之を日本之天狗とひたつけ、七拾貳貫の天狗の兵法、心のまゝにぞまかせ入はや何とゞ存じ候。

　と、幕をゆする。牛若は舞つて出る。と、幕をあげ、ザイ、天狗面、千早、袴の天狗が、棒を持つて出る。兩者は相對し、天狗は棒を振りつゝ入れかはり合つて職ふ。天狗が棒で拂へば、牛若は跳び上る。このこと兩

(一) 菅原、羽山の兩本は「牛若兵法比べ」とす。
(二) 菅原、羽山の兩本では、後の天狗の幕出し「大唐の〳〵」以下を最初にし、こゝの牛若言事以下をたゞ「言立」として一つゞきに書いてゐる。
(三) かく＝こふ(菅・羽)
(四) 罷の字なし(菅・羽)
(五) のの字なし(菅・羽)
(六) には＝の(菅・羽)
(七) 某が＝我(羽)
(八) にて＝なり(羽)。この字なし(菅)
(九) 殿は＝〳〵(菅・羽)
(一〇) 宅に御入升てか＝御内にましますかよ(菅・羽)
(一一) なる＝の(菅・羽)
(一二) 宅に＝是に(菅)。是ニハ(羽)
(一三) よのとなし(菅・羽)
(一四) 聞けばとなし(羽)
(一五) 殿の字なし(菅・羽)
(一六) もの字なし(菅・羽)
(一七) 受＝取り(菅・羽)
(一八) 出て＝そう〳〵(菅)。いて〳〵(羽)
(一九) 菅原、羽山の兩本には、次に、左の如くあり。

「天狗　今は何をかくすべし、今は何をかつゝむべき、見刀のンッタクタクテンノ〈」（三〇・三一・三二）はの字なし（菅・羽）

度あつて、牛若は鞭をぬき、又入れかはり合ひつゝ持物を打合せてたゝかふ。間にその場にもめぐる。とゝ、天狗が入ると、牛若は坐し、なほり、太刀で一舞あり、太刀を收め、扇を開いて、色々に舞ひ、タタタと踏んで扇をつぼめ引しこと入る。

（三一）自分ー自くわらほら（菅）
（三二）夫に大業と入（羽）
（三三）ハーか（菅・羽）
（三四）夫にとの字入る（菅・羽）
（三五）以下ーあたこ山の天狗を下タつけ、又タ日本の天狗の兵法、心のまゝに相傳せばやと存じたり（菅・羽）

（二）大償流の鞍馬

大償では牛若は烏帽子、直面、ぬぎだれ、千早、袴、扇、太刀、天狗は、かつら、天狗面、ぬぎだれ、襷、袴、棒の支度で出る。詞章は、晴山、旭又の兩本に殘つてゐる。岳のとはずつと異る。こゝには晴山本を底本に、旭又本をこれに對照して載す。（晴山本には脇と手殿名のみで讃されてゐるが、こゝには便宜上、旭又本によつて、適當の漢字を宛てゝおく。）

〈鞍馬の舞〉

〈いよ〳〵いそきゆくほとに、くらまのやまにつきにけり。

こてんうちいてゝまをなり（小天狗は牛若）

〈くもちをしのくたびのそら〳〵とよあしさらにつきにけり。

（以上は旭又本になし。）

〈をふ〉ゼカエ〈いそき小程に、是はやひのもくらまさんにてありけに小。

〈いかに案内申ハ。

〈たれにて渡り小そ。

〈我を〈ふこれ唐し天狗の首領澤坊ニてハ、日本天狗達のましますかよの。

〈をふ是に小もの〈、くらまさんの相正愛宕の太郎坊、平の三郎、彦山の鷲ぜ前坊、大峯の前鬼なんと、申天狗ともニてハ、もうしよりはるく〈おのんぢ出ハ〈、なんのためにハそ。

〈をふもうしよりはるく〈参り小〈〈さんもハ、たゝいまいらことよのきにてハハず、日本天狗達の兵法けんらつ手なゑのほとをしらかんかゆ左め、夢まいつてハ、御名をきこふずるにてハそ。

〈をふ是に小もの〈、これ、源氏左馬守義朝の九男、牛若丸と申ハ、常盤腹ニハ三なんくらまニて山ニ住居をなし、冠ひし手と申せは、差やあ〈、浮船、浦波、浪、飛龍風、飛、陰の手なんと、申ハてハ、これこそ飛龍なりハといふて、おゝ太刀をぬき、松の小枝に飛上る。

三はんきり

差ぶ平坊うハ是を見るより、たちまちくうくもをひきおこし、八尺あまりの手比の鰐の棒を風車のにゝとぶにうり廻し、其の兩眼をにらみいつれば、稚妻とこそ見くにける。

〈平さ平若ますがぜかんぼうら、らつるかつきて、人も地にたゝくとおちにけるつ、そかのまゝゆきかたしれ暇つにうせにけりそ。

うしわかのこつてまおふ。

（三）國高寺本の鞍馬

國高寺本のは、極く簡略になつてゐる。

くらま

春出し　よう〳〵いそきゆくほとに、くらまの山につきにけり。

天狗言葉　〈まつ天狗の御供にたれたれ、つくしのひこさんの父澤坊大ゑねにハ善鬼、いつとうからさたかまのおふいそまてもあるまじ、大あらしハあらしてんくをあつめておけ、しくも見くに

けり。

（四）遠野諸本の鞍馬

遠野諸本のはまら〳〵でありつた。そのうち、八幡本のと、附馬牛本のとは大體似てゐるが、これらは、岳本のと同樣である。

くらま舞（八幡本）

やまはたや、つくりあらしのをの、こさ、あわのなゐと、たれかゆうらん。

〈よう〳〵いそきゆくほとに〳〵、くらまのやまにつきにけり。

〈おうまかりいてたゐそれかしハ、よしともの三なん、くらまの山ニて學文なし、丑若とハわかゝと、太良坊へうちにをんいりましますかのう。

くらまの山ニハ太良坊、あたこの山ニハ次良坊、ひこしにひこさん、しやかゝたけにハとかくし坊、をしつけひきつれ、けんさんつかまつらん。

くらま舞（野崎本）

春前　おう御前に罷り出でたる其を、如何なる者と思ふらん、そうもう部にかくれもなき義朝八男、常盤腹には弟に今若丸に乙若三ニ參男くらまの山の牛若とはけに我が事なり、くらまに住ありはとて、あたこそらねか天狗にらかき、四拾弐卷の天狗の兵法心山す

にそでかせばやと存じゆ。
天狗の名はたれ〳〵、同ミちくすのひこさの軍勢法天とにおいては。
あからせたからせ瀧の音、幼少迄ひゥかせおびたゞしや、はゑう
此間番かくびやうし。
へいなやしぼう〳〵、内に御入ましますかやのう　へおうさような
る者は内に御入ましまさぬかやのー　へおふみの神司をたまりて
出で〳〵、くらべなさんかやのー　へおふ左樣にて候てそこそう
と御仰ゆ、吾もなきなたのさやをはずして見舞をすて參りゆ、い
で〳〵けん參仕らん。

（一）この幕出しは西口氏本に據る。はじめ「さむらいの」とかんどえ（岩・裏）
（二）次にとの字入る（上・裏）
（三）はの字なし（岩）
（四）次にのふと入る（西・上・岩・裏）
（五）先に「我レハ是」と入（岩・裏）
（六）宮古ニかくれもなき―我ハこれ（西・上）
（七）先に「清和天皇第六ノ王子サタミツシンノウノオン子六ゾンノウヨリ七代ノコウイン」と入る（和）
（八）ハーや（西・上）
（九）八幡殿ニハ五代之孫―和泉ノしやうの御腹ニ（岩・裏）。次に「おゝミの國多かミがゆとのにてをんはらをめされしが」と入（西・上）
（一〇）次にさまと入る（西・上・岩・裏）
（一一）ハの字なし（裏）。次に「ときひばら三男」（西・イ上）と入る。
（一二）ときひばらにて―三に（西）・この句なし（上・岩・裏）
（一三）山の―山にすみ、かの（上）・この字なし（西・岩・裏）
（一四）けニひか―けニ〳〵なにかしか（西）・扨みつからか（岩・裏）
（一五）ニ両ハなりーを申也（西）・を申そう（岩・裏）・にて（上）
（一六）れ・り（西・上・岩）
（一七）付―つきにける（西・上）
（一八）ひらね―ひらど（岩・裏）
（一九）天くを近付となし（岩）
（一〇）天く之兵方四拾貳卷ヲ―四拾貳卷の天くのひよほう（西・上・裏）。四拾貳卷ヲとなし（岩）

（五）黒森方のくらま

こちらでは辨慶と牛若の舞と言つてゐる。

藏　間　之　う　た　い　（黒森の道政本を底本とし、西口氏、上坂氏、下岩泉、雲鳥、和野（部分的）の諸本を參照す。）

よふ〳〵いそき行ほとに、くらま山ニつきにける。
△さん候、こう御前ニ罷立たるさふらいをは、いかなるさふらいと、思召、惣も宮古ニかくれもなき、八幡殿ニハ五代之孫、よしとも之御子ニハ、一チに今ゆか、二ニ弟ゆか、ときひばらにて三男、藏間之山の、丑ゆかとハ、けニゆか事ニ両ゆなり。あまれ藏間ニすめハとて、しやうちやうか谷ニ付、あたこ、ひらねの、天くを近付、天く之兵方四拾貳卷ヲ、心之まゝに、惣てしはやと存ゆ。
先々天くの御供ニハたれ〳〵ぞ、つくしに彦三、ぐんぢん兵衛、大峯ニ両、かつらき高間ヵ原ニふんぢ太郎、しやう〳〵かたにに付。
おかうし、こかうし、たつきの水、てんくヲなをして、事さみ、しいくハ、惣ははつと、つきニけり
へんけいの哥ひ　（底本西口氏本）
○ぜかひの坊ハ〳〵、内におんにてましますかやのふ、さよふなる者は内におんにてましまさんのふ、なんとちんちたまふ共、こゑへて聞のりそふほとに、いて〳〵ひよほうくらべをなさんとかやのふ、
さんにてもゆハハ、そこ〳〵ひと太刀をんぬけやれ、なんき刀のさや打はつして、見がまひいたして
つきニける。

（一）ようよう（西・上・岩・裏）
（二）先々天くの御供ニハたれ〳〵ぞ―ぞふてん（西・上・岩・裏）
（三）惣て―そふてん（西・上・岩・裏）
（四）とーとも（岩・裏）
（五）先におゝと入る（裏）
（六）ハたれ〳〵ぞ―ヤとふれ〳〵（西）・ヤたれ〳〵（上）・ハたれ〳〵（岩・裏）
（七）「つくしに…兵衛」となし（西・上）
（八）ぐんぢん兵衛―ぐんぜん坊や（岩・イ裏）
（九）以下を次の樣に謠ふ。「きつそうにやはつおノさんがい大峯にハ善喜が壹とかつらき高まンふんじたろうや、そんてにおいてハひらしやうがいしやうちう用たにつき、おひらしこひらし、たきノうつとう、てんこおなおしておびたたし」（岩）
（一〇）両ーや（西・上）・ひ（裏）。次に「せんきかいつとふ」と入る（西・イ裏）
（一一）惣てしはやと存ゆ―カ原ニハ（西）・の（裏）
（一二）ふんぢ―ふち（西）
（一三）以下を次の樣に謠ふ。「つくしに彦三、くんぜん坊、そへてにをいてや、をふよふか、平よふか、天くを猶してをびたゝしぐ」（西・イ上）
（一四）付―つきにける（裏）
（一五）裏綱本には以下なし
（一六）以下は西口氏本を底本とす。（上坂氏本にもなし。後から附加へられたものか。）
（一七・一八）「丑若言」と傍書す（岩）
（一九・二〇）先におふと入る（岩・裏）
（二一）の坊ハ―坊（岩）・の坊（裏）
（二二・二三）おんにて―御入レ（岩・イ裏）
（二四）やのふとなし（岩）

(四二)「ぐんけい音」と傍書す(岩)
(四三) きんのふーきゾ(岩)
(四五) ちんちたまふ共ーいふても(岩)
(四六) 以下を次の如く誤ふ。

「こいから、さきのり、もうしは、出出、兵賓くらべ、なされ、そうらいかせのー、おーさとけ、お待やれ、なんぎらばそこそこ、ひととけ、なたの、さやうちはつして、身がまえして出せ。

〈先しばし御待ゆかせ。

(七) 田子のくらま

田子本のはずつと簡略になつてゐる。

鞍間の山天狗舞

幕出し　漸々急ぎ行く程に〳〵、鞍間寺に着にける。

幕掛り　おう是れ是、御前に罷り立る者をばや如何成者と思召、一に乙若、二に今若、三に牛若とは我事なり、天狗の供添へ誰々ぞ奥院には一角坊、筑紫には軍天坊、あらしにあらし愛宕山には太郎坊、かんの倉には次郎坊、倉間山には千壽丸、おうか程なるものはますますか、天海坊内にましますか、かやうなるものは内にましまさん、なんとちんぢ申ても聲で聞知ゆ。

下番樂の鞍馬

詞章を得られたのは、二階、荒澤の兩本のものだけであつた。けれにける」(畏)「こゑてきゝぬるせかへ坊ノ出テ御くらべおなされや、せがつ場　おふさんにても外ハ、(以下二十一、二字程不明)」(岩)

ども、山谷、根子にも舞は傳へられてゐて、實演に接することが出來た。

(八) 二階本の切合

切合(荒澤本を對照す。)

幕出〈僧正ヶ谷に着き、僧正がたにつき、愛宕比良根の天狗を近付、四十二卷の天狗の兵法、心の儘に、相傳せばやとそんじ候。

(荒澤本の幕出ー衆生ハ他人に付く、嵐風波の音、天鼓(狗一本)に直して夥し)

第五十四圖　根子の鞍馬

中言立〈ナヲ、我はこれ、是界坊にてゆか、僧正坊は、内に在かのふ。〈ナシ左樣なものはましまさず、〈何と陳じ玉ふとも、聲をば聞しり申ゆ、〈唯一時御待ゆへ、〈(ここの)先御供の天狗は誰々ぞ、筑紫には、彦山の岑前坊、四洲にハ白峯の相模坊、大山の伯耆房、アゝ飯縄の三郎、富士太郎、大峯の善鬼が一とふ、葛城、たかま、比良、横川、如意か嶽、我慢高雄の峯に、すんて、人のためにはあたご山、霞とたなびき、雲となつて、月は鞍馬の〈僧正が谷にゝらゝ〳〵、嵐こがらし瀧の音、天狗だをしハ、おびたゞし。

(考異)(一)以下を荒澤本では左の樣に誌す。

「先天狗の御供にハ誰々や、白ウ海(タタウ)の三勘坊、筑紫にてハ愚禪坊(愚想)、拍子伊豆名の三郎、藤井太郎ハ父の爲メとて愛宕屋(地)に、衆生ハ他人ニ付、嵐風波の音、天鼓(狗)に直して夥し。」

(九) 山谷のくらま

囃子歌一しきりあり、一よう〳〵急ぎ行く程にと幕出しあり、拍子に合せて幕をふるはせ、烏帽子、けんびき、赤鉢卷、直面、褌袴、礫、裁著はゞき、白足袋、帶刀の牛若が扇を開き持つて出、一度引込み、又出る。出ると大まはりをする。このまはりは美しい型を伴つてゐた。幕前に右足をのべて坐し、振あると、扇を翳し、左足を伸べ、振がある。足をかへ、立つて角に行き、刀の柄に手をかけて振あり、ハヤサ、の囃子で足踏みがある等、色々あつてやがて語りになる。この語りを終ると、よい

（四四）「くんけい言」と傍書す（岩）
（四五）さんのふーさゝ（岩）
（四六）ちんちたまふ共ーいふても（岩）
（四七）以下を次の如く書ふ。

「こいから、さきのり、もうしふ、出出、兵賣くらべ、なされ、そうらいかせのー、おーさらばそこそこ、ひととけ、お待やれ、なんぎなたの、さやうちはつして、身がまえして出にける」（岩）「こゑてきゝぬるせかへ坊ノ出テ御くらべおなされや、せ[illegible]ノ坊おふさんにても汝ハ、（以下二十一、二字程不明）」（岩）

（六）檜木の鞍馬

こゝのもまゝに寫しておく。

くらま

幕出（漸々急ぎ行程にノ〳〵、くらまの山三者にけり。

〈御前に罷り立つたる者をバ、いかなる者と思召、それハ是源氏左馬の頭義朝の三男、くらまの牛若丸とハなんじか事にてけなり、四拾貳本の兵法指南せばやとそんじけ。

〈漸々急き行程にノ〳〵、しやうぞうか谷に着にけり。

〈先宮番に天くの御弟子にたれノ〳〵、つくしに彦山ぐんぜい坊、大泉坊、正泉坊、大雪おろしのふのかけ坊、あらしこからし富士の天上、源氏の一ぞう花やかなり、四拾貳本の兵法指南相傳ばやと存じけ。

〈内に永海坊ハましさかのふ。

〈ヨヽ左樣なるものハましさんのふ。

〈何とするせず共御かゝき、知り申け、出で兵法くらべなされけせ。

〈先しばし御待けかせ。

（七）田子のくらま

田子木のはずつと簡略になつてゐる。

鞍間の山天狗舞

幕出し　漸々急ぎ行く程にノ〳〵、鞍間寺に着にける。

幕掛り　おう是れ是、御前に罷り立る者をはや如何成者と思召、一に乙若、二に今若、三に牛若とは我事なり、天狗の供添へ、誰々ぞ奥院には一角坊、筑紫には軍天坊、あらしにあらし愛宕山には太郎坊、かんの谷には次郎坊、倉間山には千壽丸、おうか程なるものはますますか、天海坊内にましますか、かやうなるものは内にましさん、なんとらんお申でも聲で聞知け。

下番樂の鞍馬

詞章を得られたのは、二隈、荒澤の兩本のものだけであつた。けれども、山谷、根子にも舞は傳へられてゐて、實演に接することが出來た。

（八）二階本の切合

切合（荒澤本を對照す）

幕出〈僧正ヶ谷に着き、僧正がたにつき、愛宕比良根の天狗を近付、四十二張の天狗の兵法、心の儘に、相傳せばやとそんし候。

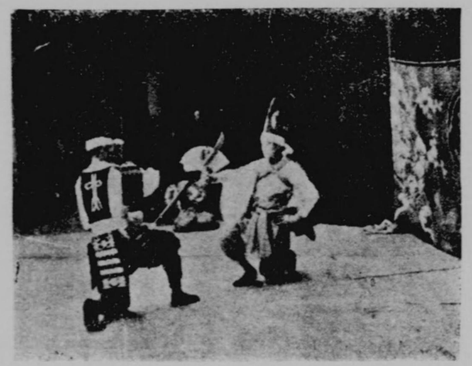
（荒澤本の幕出ー衆生ハ他人に付く、嵐風波の音）
（天鼓（狗）に直して夥し）

中言立〈チヽ、我はこれ、是界坊にてけか、僧正坊は、内に在かのふ。〈左樣なるものはましさず、〈何と陳じ玉ふとも、聲をは聞しの申け、〈唯一時御待けへ、〈先御供の天狗は誰々ぞ、筑紫には、彦山の岑前坊、四洲にハ白峯の相模坊、大山の伯者房、アゝ、彼繩の三郎、富士太郎、大峯の善鬼が一とふ、葛城、たかま、比良、鞍馬、如意が嶽、我慢高雄の峯に、すんて、人のためにはあたで山、霞とたなびき、雲となつて、月は鞍馬の　〈僧正が谷にミらノ〳〵、嵐こからし瀧の音、天狗だをしハ、おびたゞし。

（荒澤本では左の樣に誌す。）
「先天狗の御供にハ誰々ぞ、白峯の三勝坊、筑紫にてハ悪鬼坊、伯耆伊豆名の三郎、熊野太郎ハ父の爲メとこ愛宕屋に、衆生ハ他人ニ付、嵐風波の音、天鼓に直して夥し。」

（九）山谷のくらま

嚙子歌一しきあり一ようノ〳〵急き行く程にと幕出しあり、拍子に合せて幕をふるはせ、烏帽子、けんびき、赤鉢卷、直垂、袴桂、襷、鼓著はき、白足袋、帶刀の牛若が扇を開き持て出、一度引込み又出る。出ると大まはりをする。このまはりは美しい型を作つてゐた。幕前に右足をのべて坐し、振あると、扇を翳し、左足を伸べ、振がある。足をかへ、立つて角に行き、刀の柄に手をかけて振あり、ハヤサ、の嚙子で足踏みがある等、色々あつてやがて謠りになる。この謠りを終ると、よい



第五十四圖　根子の鞍馬

四、鞍馬

さつさの囃子あり、順に大まはりをして、二の角に坐す。このとき幕出しで、ざい、鬢髮、面、襦袢、襷、ふんごみ、脚袢、黒足袋の辨慶が長刀を持つて出、長刀をくる〳〵と振まはし、その場にめぐり、一舞ひあると牛若とは相對の四の角に坐す、次に牛若が立ち、太刀を拔いてくる〳〵と振まはし、とんぼをきり、左足を伸べて坐し、かまへる、次に兩人共立ち、進み出、背中合せになり、順に少しまはり、牛若はとんぼをきると辨慶は一人で、その場にくる〳〵とまはり振がある。かくて坐すと、こんどは牛若が又立つて、とんぼを切る。又兩人が進み合ひ、背中合せにまはり、離れ、次に切り合の振になり、牛若はとんぼをきる　右樣の振を繰返してゐるうち、とゞ牛若は、辨慶の長刀をとると、辨慶はとたんにとんぼをきつて入る。牛若は長刀をとり、かまへて振あり、跳び、坐してきまること等あり、又とんぼをきり、色々に長刀を使つて入る。樣式化した美しい舞ひ方であつた。約十分。

（一〇）根子の鞍馬

はじめ幕出しで、劍烏帽子、鉢卷、直面、白襦袢、ぬぎだれ、襷、赤の裁著の少年、牛若が太刀のかはりにボンボリを腰にさし、扇をとつて出、その場にめぐりつゝ四股を踏む如くにして、いつもの地舞を舞ふ。次に語りになり、きれて一舞ひあると、幕出しがかゝつて幕下より長刀が出、左右にはらひ、次に、幕を排して、鉢卷、直面、鎧、裁著、脚袢の辨慶が長刀を持つて出、牛若と相對し、長刀をもつて牛若の足を左右にはらふ。牛若はその都度に跳び、とんぼがへりをする。

これを繰返し、とゞ、牛若は、辨慶の持つてゐる長刀の上に跳び乘り辨慶は牛若を乘せたまゝ順にその場にめぐり、牛若は降り、辨慶は又その足を拂ふ。とゞ、牛若は長刀に足をかけてきまり、入ると、辨慶は後に殘つて、長刀の使ひ方が色々あり、長刀を兩手に一文字に持ち、下げて、ひよいとそれを跳び越え、長刀を後にし、又跳び越えてもとに直すことなどもある。とゞ、とんぼを切つて入る。約七分のものであつた。

五、八　嶋

詞章は謠曲の「八島」の、文句のい、所を拔いてつくつたらしい。この舞もひろく分布して居り、又好んで演ぜられてもゐる。

上山伏神樂の八嶋

（一）大償の八島

掛合の仕方は、適宜に句を分け合つてゐるに過ぎず、シテ、ワキの關係にあるものではない。

八　島　合　戰

（底本は晴山本、傍書の異同は岳日承（菅原氏本と殆ど同じ）に據る）

幕出へよふ〳〵急ぎ行く程に〳〵、八嶋の浦に着きにけり。

と囃子となると、幕を押出し、甲、鉢卷、直面、ぬぎだれ、襷、帶刀袴の者が一人、扇をとつて出る。その場にめぐつて胴前に立つと、同じ支度のもう一人の者が出て、前の者と向ひ合になり、扇を左手に、又右手に持ち、互に入れかはりになり、足踏をし、びつこ引でめぐり、背中合せに足踏みをし、中向に扇を合せ等色々あり、とゞ左右に向ひ合になるると、語りになる。

樂屋へ爰は八嶋の浦傳ひ
胴取へ爰は八嶋の浦傳ひ
樂屋へ釣のいとまも浪の上
胴取へ霞み渡りて沖行くや
樂屋へあまの小舟の夕暮に
胴取へ見へてのころハほの〴〵と
樂屋へ浦風までもほのかにて、春や心を誘ふらん
胴取へ春や心を誘ふらん
樂屋（こゝは）へおふ出家の身にて、似合はん
胴取へぞうたんにてハ候らへ共
樂屋へそれ八嶋だんの浦、舟合戰の樣子をそと御物語候へ
胴取へおゝこなたへ近ふ、おんより候らへ
樂屋へ頃はいつぞの頃よの
胴取へ文治元年閏三月十八日の事なれば
樂屋へ源氏の方につゞきしつはもの五拾騎斗り、平家の方には惡七兵衛景清と名乘つて、眞先かけて戰へしが、
胴取へ景清は、美尾の屋はきたる甲のしころを掴んで、後へ引、美尾の屋は（と以下囃子をかぶせ、振になる。）身を逃れんとて、前に引、ゑんやあつと引ちからに、左右へくわとぞのけにけり、判官とのハ御覽じて、なぎさに駒をどうとかければ、纖信殿の矢先にかけて、馬より下にどんとおち、

と、この間足拍子を踏みつゝ、入れかはり合つて振がある。

樂屋へ舟にハ菊王丸も討れしかば、ともにあはれと思ひけり。
胴取へおふ今日の修羅の大敵たれたそう
樂屋へのどのかみのりつねとな（と、以下に囃子をかぶせ、振になる。）何ものものしや、手並も知れつる思ひもいたせる壇の浦、此舟軍ハかけひき□やみ朝あらしとのたまひけり

と入れかはり合ひ、扇を收めて太刀をぬき、向ひ合に振あり、跳び上り、タ、〻、〻とめぐり、臥し、切先を合せ等あり、次に太刀を收め、扇を開き持ち、一舞あつて入る。約十分。

この舞は、大償のも岳のも夫々に舞ひ樣あつて、美しく出來てゐる。

（考異）（一）以下馬より下にどんとおち迄「兵家は海の表へ舟十艘ばかりでうかび上つてたゝかひしが、中にも惡七兵衛景清と名乘つて、五十騎ばかりにて、眞先かけて進んでいで、たちうちおつとり力なし、くがの仇を待ち居たり。早口のうたひへ中にもみほがやが〳〵、きたる甲のしころをしぜんと引いて行く、えんやつと相びきに引く力をもつて、八そうえん

ぱつと引きしぎてぞのきにけり、それを判官どのはごらんじたまへて、清に駒をかけ上げて、駒より下へかけ下し」（岳）

（一）るーり（上）
（二）しーち（上）
（三）夏屋本にはこれよりあり、この幕出しを「△ヨウヨウイツキュクホドニ、ヤシマノイソニ付ニケリ」とす。
（四）「あまのお船もゆうくれの」となし（夏）
（五）やーば（上・夏）
（六）なるーニテ（夏）
（七）としてーニ（夏）
（八）にてーニテヲ（夏）
（九）是ー四國（夏）
（一〇）次に「カツセン」と入（夏）
（一一・一六）すーソウ（夏）
（一二）つとーちと（上）・ソツト（夏）
（一三）ヤへかしーアレ（夏）
（一四）是ーヲウ四國（夏）
（一五）船いくさーノカツセン（夏）
（一六）りきこふーレ（夏）
（一八）次に「ノウ。サンゾウロウ」と入（夏）
（一九）よとーとかや（上・夏）
（二〇）なりしかーなれば（上）・ナ

（二）黒森のやしま

夏屋本のも大體は西口氏、上坂氏の兩本と同樣であるが、細部の異同は多々ある。

（西口氏本を底本とし、上坂氏、夏屋の兩本を參照す。）

やしまの哥ひ

いそきにいそくよしつねハ、やしまか浦につきにける
いそきにいそくつきのぶハ、やしまか浦につきにける
いそきにいそくたゝのぶハ、やしまか浦につきにけり
○のどのかゝハ、のどのかゝハ、あれを見るよりきくからに、てきハしくらによせきたる、よせハよせろなんしもよせるのどのかゝ、ゑつばの菊王丸ハ身かまひ致而つきにける
○つきそ南の船橋引　やしまがうらに津きにけり
こゝハやしまの浦のつたひ、つりのいとまもなゝのうへ、あまのお船もゆうくれの、見ゑたし見れや
ほの〳〵と、うら風迄ものとかなる、はるや心をさそふらん
お、出家の身としてにやはぬぞふたんにてゆへ共、是八嶋だんの浦、船いくさのよふすを、つと御物語叶へかしのふ。
是八嶋だんの浦船いくさのよふすをかたりきこふとの仰かや、ころハいつそのころよと、元暦元年閏三月廿日あまりの事なりしか、をごる平家ハ海のをもて、船五十そふ斗り打上てたゝかひしか、そふし惡七兵衛かげきよとはわれとなのりて、五十き斗りのまつ先かけて出てし者、なゝにあらそふてき

（一）るーり（上）
（二）しーち（上）
（三）夏屋本にはこれよりあり、この幕出しを「△ヨウヨウイツキュクホドニ、ヤシマノイソニ付ニケリ」とす。
（四）「あまのお船もゆうくれの」となし（夏）
（五）やーば（上・夏）
（六）なるーニテ（夏）
（七）としてーニ（夏）
（八）にてーニテヲ（夏）
（九）是ー四國（夏）
（一〇）次に「カツセン」と入（夏）
（一一・一六）すーソウ（夏）
（一二）つとーちと（上）・ソツト（夏）
（一三）ヤへかしーアレ（夏）
（一四）是ーヲウ四國（夏）
（一五）船いくさーノカツセン（夏）
（一六）りきこふーレ（夏）
（一八）次に「ノウ。サンゾウロウ」と入（夏）
（一九）よとーとかや（上・夏）
（二〇）なりしかーなれば（上）・ナルカ（夏）
（二一）「をごる」となし（夏）
（二二）をもてーうえ（上）・表ニ（夏）
（二三）打上てーウカビイテ、源氏者ミキワテ（夏）
（二四）しーノミキヨリ（夏）
（二五）とはーとの（上）・ワ（夏）
（二六）とートツ（夏）
（二七）りてーつて（上）・リ、御馬（夏）
（二八）きー疋（夏）
（二九）のの字なし（夏）
（三〇）次ににの字入（上）
（三一）出てし者ーツツイテ出テ（夏）
（三二）なゝに……まへびくータカノカタキヲ待タリシガ、タチウチヲウテワ、チカラナシ、ミツノヤワ、ミツノコサゼイト、マイエヒク、カゲキヨワ、ミワノゴサゼイト、ウシロエヒク（夏）
（三三）んの字なし（上）
（三四）ちーつ（上）
（三五）をの字なし（上）
（三六）ゑんーエイ（夏）
（三七）とートツ（夏）
（三八）ちこうにーチカラニテ（夏）
（三九）やつけのーハチツケ（夏）
（四〇）ふゑむづとそのけにけりーソウエバツトゾノキニケル（夏）
（四一）やーやな（上）
（四二）次にワの字有（夏）
（四三）のの字なし（夏）
（四四）りーリシカ（夏）
（四五）馬より下ゑとふとをちとなし（夏）
（四六）やーモ（夏）
（四七）しがータリ（夏）
（四八）どのとーのかゝは（上）・ドノワ（夏）
（四九）松風…のけにけるーウラカセナリシ、タウカウマツニ、アサラシクノツキニケリ（夏）
（五〇）ゐーや（上）
（五一）ちーつ（上）
（五二）やーモ（夏）
（五三）しがータリ（夏）
（五四）どのとーのかゝは（上）・ドノワ（夏）
（五五）松風…のけにけるーウラカセナリシ、タウカウマツニ、アサラシクノツキニケリ（夏）
（五六）ゐーや（上）

見方、弓打取て力なし、皆の矢にほりあはせ、かぶとのしころをおんかんて、身ハのがさちとうしろ人ひくみををのやたすけのかさちとまへびく、ゑんやつと合引に引ちこうに、かぶとのやつけのいたより切てぞ、ふゑむづとそのけにけり。
いたゐしやをふしうの、さとふつきのぶとの　のど、のの矢さきにかゝり、馬より下ゑとふとをち、舟にやきくをふ打たれしが、のとゞのと御らんじて、ともにあゐれとおほしめし、松風斗りゐのこりさゝしくものけにける。
よふ〳〵いそき行ほとに、八嶋か浦につきにけり。
やさかびのをとハしんどふらひてんしてそれをきを廻るハかもゝのこゑ、又今日のくかの大的ハいつれたれ、いつのとの神のこりつねなり、又今日のくかの大的をこそいつれたれ、くろふほふくゐんよしつねそや、者々しや、かねて手なみをしりつらん、をもひもこゝにだんの浦、それ船いくさハいまがゑんぶゑかへるうきしらなゝか立て山の内にしんどふして、向にひかるはつるきのひかり、うしろにひかるハかぶとのほしの、ひかりゝかづうハ五そう十そうのいろひかけしずむ春の夜の、あけもはてぬやゝのうち、いそにかもゝのときのこゑ、うら風なりけるたかまつや、あさあらしにとのけにけるつ。

（五二）田子本はこゝに「中入」と傍書す。
よふ〳〵…ほとに｜△マヽ月ヲ南ミノフナバタニ〳〵（夏）
（五三）か浦｜ノイツ（夏）
（五四）前にヲウと有（夏）
（五五）らひてんとなし（夏）
（五六）それとなし（夏）
（五七）を｜ニ（夏）
（五八）ミ｜メ（夏）
（五九）又の字なし（夏）
（六〇）大的ハ｜大將（夏）
（六一）いつのとの…よしつねそやークロウホウクワン、ヨシツネ、マツタ今日ノ、シユラノ大將イツレタレ、ノドノカミノリツネ（夏）
（六二）との神｜かミ（上）
（六三）かねてとなし（夏）
（六四）をしりつらん｜モシリツル（夏）
（六五）こゝに｜イツル、ソウレイ（夏）
（六六）それとなし（夏）
（六七）ハいまが…山の内に｜レンブニカエルワウキシマノ、海山カイチドニ（夏）
（六八）向｜物（上）
（六九）かぶとのほしの｜ホウシノカブトノ（夏）
（七〇）ミかづらハ…ときのこ五｜ミツヤエ、ユツクモ、ユツクウ、サアシチコウテ、カツキヒツキウ、ウツキウシツムトセシホトニ、ハルノヨノ、ナミウチアケタル、モレダカモトノ、トウキノコエ（夏）
（七一）いろの次に「こゝろ」と入（上）
（七二）しーた（上）
（七三）けるー シ（夏）
（七四）や｜ニ（夏）
（七五）にとのけにける｜クノツキニケリ（夏）

田子本のは大體黒森諸本のと同樣であつた。

（三）裴綿本の八嶋

裴綿本のは極く簡略になつてゐる。

八　嶋

さんざうろう、こう御前にまかりたつたる侍をば、いかなる侍とおぼしめすのう、我は是そも宮古にかくれもなし、八嶋壇の浦かつせん船いくさのようそうをかたれとのおうせかや、さんざう、そうれ船いくさのようそうをかたれとのおうせなら、頃を申せば元暦元年閏三月廿日あまりの事なれば、おごる平家海のおもてに船五十そうばかりうちあがれば、たたかいしが、あくしちべうえかけきよとなのつて、まつさきかけてわつ、いて出、まつさきかけてはつ、いて出、みねたか松にちんをとり、くがにかたきを待られける。

（四）檜木の八島

こゝのは比較的崩れてゐない。

八　島（底本は鈴木氏本、傍書は杉山氏本による異同とす。）

幕出　漸々急ぎ行く程に〳〵、八島の磯に着きにけり、妥は八嶋の浦傳ひ、海士の家居も數々に、釣のいとまも浪の上、霞渡りて沖行くや、蜑の小船の帆の見得て、のこるハほの〳〵と浦風迄でも長閑なる、春や心をさそふらん〳〵

ヲ、是れ〳〵出家の身てに似合ぬ所望にても叶得共、そも八島壇の浦舟軍の合戰の有樣をそつと御物語り申さん、しかふこなたへ御入ましまさバ

いでその頃ハ元暦元年閏三月十八日の事なりしに、平家ハ船五拾艘斗りにて、潮の表に浮び上ケて戰ひし〇たへご中にも悪七兵衛景清ハ、みをのやを目に掛けて、みおのやハ身をのかれんと前へ引き、景清ハ後へ引き、ゑいやつと相引きに引、力を以、はつ付の板より引きちぎつて左右へくゞつと退にける、其時判官殿ハこらんじて、汀に駒をざつくとおろし、佐藤の次信ハ、能登殿の矢先に懸けて、イヤ馬より下へどうと落つれば、舟にハ菊王丸もうたれしハ、供に哀れとおほしけり

〈月も南の舟原や〳〵、八島の浦に着にけり

〈また修羅道の鬨の聲、矢さかびの音ハ震動せり、今日の修羅のかたきハたれたそのふ、能登の守教經〇たへごあらもの〳〵しや、手並ハ知れぬ、思へぞ出る壇の浦、其の舟軍、今ハはや、圓浮にかへる生き死の、海山一同に震動して、舟よりハ鬨の聲ぞときこへけり、陸にハ波を立て、月にしらむハ劍の光り、潤に移るハ甲の星の影、水やそら〳〵行くも又、むれ入るかもめの時聲ぞと聞えけり、高松の浦風なりけり、高松の朝嵐ハ、きりにまきれてうせにけり

下番樂の八嶋

番樂では、仙北及び興屋に傳へてゐるが、前者は殆ど黒森本に同じく、後者は又極く簡略になつてゐる。

（五）興屋の八嶋

屋　嶋

ハヤソラ〳〵〳〵　ハヤソラ〳〵〳〵ヤー
ハヤソラ〳〵〳〵ヤー　ハツサツサー　ササヤー

と囃子言葉にきほひをつけ、

幕掛　こゞふハ屋嶋のうらのだん

と、囃子をかぶせ

ハヤソラ〳〵〳〵　ハヤソラ〳〵〳〵ヤー
ハヤソラ〳〵〳〵ヤー　ハツサツサーサ

と、幕を押出し

こゞふハ屋嶋のうらんだん、さら〳〵〳〵とも出たりけり

と、烏帽子、面、襦袢、ぬぎだれ、袴（大口モ）、帶刀のものが、右手に扇を持ち、左手を太刀の柄にかけて出、扇を振りつゝ一まはりあり坐して扇をとり、左に右に扇を持ちかへ、又これを投げとること等があり、とゞ、その場にめぐり、坐し、又同樣ある。とゞ幕前に左足をのべて坐し、ぢつときまると、語りになる。

云たて　つりのいとまの浪のうゑ、（と振あり）あまの大おふねの數々ハ、もれてハ（と、囃子をかぶせ、ぢつとなほり）よそにしられまゑ、雪ふりて、（と囃子はやみ）來ル春ハ（と振あり）村風のどか也、春ハ心をさそふらん（と足踏みあり、その場にめぐる。又左手を柄にかけ、足踏みあり、又その場にめぐる。）

こゞふハ屋嶋のうらのだん〳〵、屋嶋が屋方タに付にけり（と扇をおくり、一振あり）おふ出家の（と正面を向きぢつと立つたまゝ）ぞふだんにゐにやはん事にてゆか、夫屋嶋だんの浦、ふなかつせんのよふすをそつと御物かたりなされゆ

ころハなん時、ころハ元やく元年閏四月廿八日の事なれば（と以下に囃子をかぶせ、）佐藤つきのぶ、のどふ殿矢先キにか、りし、あしたのつよふときり拂たり。

ハッとその場にめぐり、拍子が早くなり、幕向に坐し、太刀をぬき、扇をおいて、太刀をとり、正面に進み出、退り、切りはらひつゝ優雅に舞ふ。進み退り、太刀をかつぎ「よいさ、はいさ」と太刀をふりつゝ、又太刀をかい抱いてその場にめぐり「よいさはいさ」で進み出、小足に踏みつゝ太刀をくる〳〵とまはし等あり、幕向に坐すと、拜して太刀を置き、扇を開き持ち、「ハヤソラ〳〵〳〵ヤー」と、扇を上げ下して舞ひ扇を色々にとり、その場にめぐり、正面向に左足をのべてぢつときまり幕前に坐し、振あつて入る。と、又幕を押し出し、打止めとする。約十分。

（六）仙北本の八嶋

八　嶋　（西長野本を底本とし、豐・白・川岩の兩本を參照す。）

幕出　よふ〳〵急ぎ行く程に、八嶋の磯につきにけり

○月は南の砂原に〳〵、八嶋の磯にぞつきにけり

○雲は八嶋の浦つたひ、連りの暇も波の上、もれてはよそへ知られんと、浦風迄も除きしが、春や心をさそふらん〳〵

チヽ出家の身には似合ンぞふたん一本にゆ得共、夫れ八嶋段の浦、船軍合戰の樣子をそつと御まねゆへ、ちかふこなたに御入ゆ

（一）の＝に（白）
（二）砂＝嶋（豐）
（三）り＝る（白）
（四）次にに＝の字有（白）
（五）へ＝に（白）
（六）ん＝ず（豐）
（七）除きしが＝のどかなる（豐）
（八）に＝には（豐）
（九）次にの＝の字有（白）
（一〇）次にの＝の字有（豐）
（一一）ゆへ＝ゆへ＝の（豐）・にゆ（白）
（一二）ち＝い（白）

比ハいつぞの頃とかや、元暦元年閏三月十八日の事なるに、平家はあの海の表より、舟五十双斗り浮び上つて、戰ひしが、中にも平家の兵に、惡七兵衛景清と名乘て、五十騎余り、まつさきかけて、連出る、太刀打打ては力なし、そうや敵はよせ來る。

（中にも身尾のやの着たりし甲のしころをつかんで後に引も、身尾のやの前に引も、身尾のやの身をのかれんと、ゑんやはつと合引に、引力を以て甲のはつ付の下ゑも引ちぎりて、そふやばつと押ちらす。

判官殿は御覽じて、汀に駒をさつくとよせ、佐藤の次信殿は、能登殿の矢先にかゝつて、馬より下に倒と落、舟に菊王うたれたり、供あはれを催しけり、浦風なりけり、高松の朝あらしとぞ成りにけり。

チヽ今日のしらの仇は誰たそう、能登守のり經あゝもの〳〵し、手なみも知つる段の浦、舟軍は今は早や、いんぶに歸るも、生死の皆一度に震動す、舟ニハ鯨波、くがには波の音、後に光るは甲の星の光、前に光るは劍の光、ゑんやそふら〳〵、行も歸るもうら波の、合引せんと思召、腰の打物さや打はつし命境に戰ふたり。

（一）ぞの＝ぞ（豐）
（二）ぞの字なし（豐）
（三）とかや＝ぞかし（豐）
（四）つの字なし（白）
（五）五十騎余り＝船五十そふばかり（豐）・此句ナシ（白）
（六）る＝り（豐・白）
（七・一〇）身尾のやのとなし（白）・のの字なし（豐）
（八）ん＝し（豐）
（九）ゑんやはつと＝ゑんやと（豐）・ゑひやつと（白）
（一一）「合引に」となし（白）
（一二）つ＝ち（白）
（一三）はつ付の下ゑも＝おふを（豐）
（一四）り＝つ（豐）・此字ナシ（白）
（一五）や＝へ（豐）
（一六）のの字なし（白）
（一七）に＝へ（豐）
（一八）に＝には（豐）
（一九）供あはれを催しけりとなし（豐）
（二〇）けり＝しは（豐）
（二一）の…成りにけり＝あざらし（豐）
（二二）り＝る（白）
（二三）先に「へおふ今日のしゆらの仇は」と入（豐）
（二四）あゝ＝なに（豐・白）
（二五）しし＝や（豐）
（二六）舟軍はとなし（豐）・は＝も（白）
（二七）次に「花いくさの」と入（豐）
（二八）に＝も（豐）
（二九）皆＝海山（白）
（三〇）光＝かげ（豐）
（三一）ゑんやそふら＝水や空（豐・白）
（三二）行＝引（豐）
（三三）歸＝もど（豐）
（三四）ら＝の（豐・白）
（三五）引＝せき（豐）
（三六）以下＝かたきと見へしハむれ入かもめ、鯨波と聞えたり（白・イ豐）

（七）石神其他の八島

石神では鉢卷、直面、ぬぎだれ、袴、扇のものが二人出て舞ふ。最後に角力をとる。

上毋體では、これを「車角力」とも言ひ、後で面をとつて角力になる。

富根でも「車角力」といふ。二人相對し、袴の股立をとり、四肢を踏みつゝ、ハッ〳〵と掛聲もして舞ふ。だきかへり、さかだちかへし等がある。

六、那須の與市

扇の的（荒澤本）ともいふ、二階・荒澤の兩本にあり、本海坊流ではこれを式舞にかぞへてゐる。左には二階本を底本にして誌す。（傍書は荒澤本との異同とす。）

尙、二階では、兜、直面、襦袢（擽なし）、袴のものが出て舞ふ。又坂の下では、右の支度に鎧をつける。

那須ノ與市

まく出へよふ〳〵いそき、行程に、是ははや、沖の汐やに、着にけり。

中言立へヲヽ、源氏と、平家の、境の的を、たてばやなと、そんじけ。

へ陸に立ては、めつらしからす、沖のしほやに、たてばやなと、そんじけ。

へ沖の汐やに立るまとハ、船の上にも、筏をゆひ、筏の上に、たつるともきいてある、波ハ浮つ、沈つせしほとに、射取るべきものハさらになし、實に〳〵忘れて有る、下野の國の住人、那須ノ與市宗高こそ、弓は小兵なれども、手まつ人とは、聞て有ル、いざ〳〵や、かの人呼出し、彼的ほどなく、射とらせ申さばやと、そんじけ。

中言立へ源氏と平家の、さかひの的、たつたときく、いざ〳〵、御覽け得と、げんじの氏神、正八幡の守にて、かのまと程なく、いとりたり。

へ常陸の國、八百町を、かさねて、授題に、賜はつたり、所持入、なすこそめでたけれ。

（傍書）（一）次に「なミの上にハ筏をむすび、筏の上に立るとも聞て有る」と入る（荒）

（二）傍書に「拍子」と有（荒）

（三）正八幡の守にて―正八幡まんむり玉ひと重籠ゆんミの眞中をよつ引しめて兵と放せハ（荒）

七、敦盛

この曲は、山伏神樂の黑森諸本と、二階本及最上の釜淵にある。然し三者は夫々異つてゐる。黑森のは謠曲から出てゐるらしいが、詞章が大へん崩れてゐる。又、釜淵のは甚だ簡略なものになつてゐる。釜淵のは今も行はれてゐるが、他のは絶えた。

（一）黑森本の敦盛

敦盛之うた　（寛政本を底本とし、西口氏、上坂氏の兩本を參照す。）

△面白き、上野の野より、笛のとを戀、しさらハそも、御身の中に、持たせ給ふ、笛にてもけか、まつた、笛の御とがめにても候か、笛の御所望にてもけか、さんざんにてハけ得共、かの行が、しらなみまちるの西たしなみ持る、笛にてけ、こうれいこれ御覽じけへかしのふ。をふ我めん〳〵、かつがぐ壹人をたに、かよをの仕業をたしなむこそ、かへす〳〵の優しさやのふ。それ笛と申ハ、しやうか福德とて草刈の笛、又しやうか福德とて、草刈りの歌、かのふが道にもつくりおかれて、有り、さつて御身は、浮世をめぐるハ、一トふしき、昨日や、今日の、よきしゆづけとハ、みのり申而ハけか、近ふこなたへ御よりけ而、有のまゝに、そつと御物語りを語りけ得かしのふ。

今は何をか、かくすへし、今ハ何をか、つゝむべし、扨一之谷の合戰に、嫡子の小次郎打たれしか、それかおりふし痛はしさに、其名を改へて、蓮生坊とは、愚僧が事を申也。

ながゝうたうなりへあのみきわに松か三本見へけか、さあしいも、敦盛殿の、病所、所、日頃ハ、かたきなり、今ハ供、ふんにんさなりて上

か、供をやすろをとて、百用の波をふり合せ、たんた心にふりとゝめ、南無阿彌陀佛、せしふ者と、一戀たにも、たのむべし、まして万日萬食の御とむらい、申さんとても、あけふけて向而回向申そうや、向而回向申そう。

二番うたひ

△面白き、上野の野より笛のとを戀、しさらバそも、さあしいも、敦盛殿の笛たげ、なも一戀と、戀も一戀、調子を揃て、戀を并て、こゑこへに、一もんな、我も我もと乘つたりしが、道中西同者も、御座船も、遙かの沖にこき出し、痛はしやな、敦盛殿ハ味方の船に乘りをくれ、おんまつる、駒を引かいて、立たる有樣ハ、熊谷之治郎直實バ、鹽やか崎におつかけしが、痛はしやな、敦盛殿ハ、駒引戻して、波の打物、さや打はづして、一打、二打

打とハ見へで、遂に打たれて消へしもの、同しはちすの蓮生坊、後よくとうて、たびたまいとゆふなんみに、かつくり、かいけすよふに失せ玉ふ。

（二）二階本の敦盛

敦　盛

幕出へ漸急行ほとに〳〵、鹽屋をさして落にけり

くまがいへよふ〳〵いそきゆくほとに〳〵、渚をさして出にける。

へヲヽコ、御前に罷出たる兵をハ、どの國の住人、いかなるものそと思召、我は是、門脇修理太夫經盛の三男、無官の大夫敦盛と申者ニてゆ、今朝一の谷の上檀に、青葉の笛と、肌の守をとり忘れ、それを取に歸りしか、彼邊此方の時刻にて、同道の船に乘おくれ、汐屋をさして落にけり。

末言立へヲヽコ御前に、罷出たる兵をば、どの國の住人、いかなるものとおほしめす、われハ是武藏の國の住人、熊谷の次郎なをざねともふすものにてゆ。へけさ、一の谷の合戰に、我子の直家を平家に討とられ、それを無念にそんずる故に、平家の方の、落人にても有やらん、あれに見へし幌掛武者、能き大將とミへにける、追駈高名なさばやとそんしゆ。

（三）最上釜淵の敦盛

敦　盛

（四方固めの後に左の言立かかゝる）

敦盛よ、敦盛や、よき駒にと召されつゝ、鎧け高く、乘り高く、沖を遙かに眺むれば、波はおんじやにゆんでくる、笛を忘れて、青葉の笛にもあはつとや。

八、橋　辨　慶

富根本にあり、謠曲の橋辨慶を要約したものらしい。

橋　辨　慶

幕出　やう〳〵急き行程に、五條の橋にそ着にけり

辨慶中うたひ　そも〳〵むさしぼふ、べんけいは、熊野のべんしんかもとに生、それより書寫山にのぼり、人となり、それより惣塔のかだわらにけるに、ある時宿願ありて、夜な〳〵詣でけるに、ある人のいふやうは、この頃、五條の橋に、十二三歳の少人出てあまたの人をなやます、聞より、今宵我いて、こゝろみばやと、それより五條の橋に急きけり、橋にもなれば、ものおしけに立る向より、女の姿に、薄衣をかつぎ、ゆきちがひけるに、長刀の、石突をゝはたと打ッ、すわしれもの、こざんなれと、なぎはらひば、飛あがり、打かくれば、かひくゞり、飛鳥の如き、はや業なれば、辨慶、あぐみ果て、うちもの、捨て、降參す、その時、互ひの、性名を、明し、牛若君に、隨へ、忠義を、後世に殘しける。

九、舟　辨　慶

二階、荒澤の兩本にあり。荒澤本のは簡略になつてゐる。

（一）二階本の舟辨慶

舟　辨　慶

幕出へよふ〳〵急行程に、駿河の濱に、着にけり

へヲヽコ御前に、罷出たる者をハ、何の國の住人、如何なるものそと思召す、我ハこれ、紀州熊野の別當、辨眞が御坊に、西塔武藏坊辨慶と申すものにてゆ、今度、我君義經を、梶原かかる讒言によつて、鎌倉殿と御兄弟の間中へだち、申さるゝについて、如何に義經辨慶は、いかなる月日に生れ來て、天にハこうの網を張、地に逆茂木の關すえて、五尺に足らぬ境、堺を、隱しかねたる口惜や、一先奥州に下り、秀衡をたのミ、兎にも角にもなるべきと用意せよと有ければ、かしこまつてゆと

へ武藏坊辨慶始として、龜井片岡伊勢駿河、常陸坊海存權之守、熊井太郎源八郎、同鷲尾已上八騎の人々は、山伏姿にさまを替、兜巾珠數かけ、法螺の貝、金剛杖を突そろひ、はや六條堀川御所御立ある、夫より音に聞えて、名を得たる大津の浦をもはや過てするがのはまに成ぬれハ、小船一艘もよふして、沖をさしてぞ出にける、はや沖にもなりぬれハ、櫓權樹をも取直し、奥州さして下らるゝ、其後の食半バかりの頃なるに、君は辨慶を近附仰ける樣は、あれ見玉へや、北の方より黑雲さつと出けるは、常の雲にはゆはず、唯今颱風參るべし、汝ハ紀州生れの者なるが、祈りて見よやとありけれバ、

へ辨慶答て暫ゆ、居たる座敷をすつと立、船底につつと入り、笈の片蓋はねあけて、珠數錫杖を取出し、鉦につつ立あがり、大音聲に祈らるゝ。

東方にハ除三世、南方軍荼利夜叉明王、西方威德、北方金剛夜叉明王、中央には大日聖不動明王、上には梵天帝釋、下には天照大神、熊野ハ三所の權現、羽黑の權現、山々嶽々八天狗も唯今納受垂玉へ

へ大海の中ニハ龍神、船魂龍王、貝今納受たれ玉へ

へ如何に申さんとか君樣、今宵の颱風こそ數多亡し平家の惡靈にてそましますが、斯申辨慶祈り伏せ、いのりて叶はんものならば、

大刀薙刀にて、打はらひ申べくにてゆ。

（二）荒澤本の船辨慶

船　辨　慶　（傍書は同所の他の一本による異同とす。）

幕出　漸々急き行程に、はや高館に着にけり。

中言立　斯ふ前に罷り立つたる者ハ如何なる者と思召、我社ハ、紀州にも隱れなき、齋塔の武藏坊辨慶とハ扨て某が事にてゆ、今度聞けハ鎌倉殿と御兄弟の間中を隔申さるゝに付、奥州に下り、秀衡を頼はやと存ゆ、はや堀川にて御立あひ、（ナサルベク迚）拾三人の人々ハ、沖をさしてそ出にけり、最早沖にもなりぬれハ、両方互に梶を執直し、（急キ発ラレテ卧既ニ）其日も夜半斗になりしかバ、（俄ニ風風海上ヲ覆シ、サット黑雲舞下リシカバ牛若君）辨慶を近付、君の仰せけるよふハ、アレ〳〵北よりハ、ザッと黑雲出きたり、常の雲とはゆ半ン御身紀州生れの者なれバ、祈り申せと有りけれハ、辨慶對て、参ゆ、居たる座敷をスット立、舟底にスッと入り、笥の堅箱蓋はね明け、珠數錫杖を取り出し、船の纜（舳綱）一本につつ立上り、大音聲に祈ル。

拍子言立

東方には降三世、南方軍荼利、西方大威德、北方金剛、中央にハ大日大聖、伊勢神明天照大神、熊野の三社權現、羽黑權現、山々嶽々八天狗、海の上には船玉龍神、只今納受垂玉ひ、如何にや申さん我君樣、今宵の亂風八島の浦にて數多亡し平家の亡靈にてゆ斯ふ申辨慶ハ是て叶ハん者あらハ、此太刀長刀にて切はらひ申べくにてゆ。（祈リフセ）

番　所

ヤア祈ル利生の有かたさよ、船ハなんなく跡白浪によりふせたり。（にけり）

一〇、關　破

杉澤のひやまにあり、今は廢曲になつてゐる。

關　破

袈は關々、山伏姿に身をやつし、ときん篠かけ法螺の貝をば腰にさげ、關を離なくおしとほり、やい、ハサッサッー

二、名　馬　揃

興屋本、並に杉澤のひやま本にあり。ひやま本のは梶原と題され今は廢曲になつてゐる。幸若舞曲の「馬そろひ」などをもとにし、その馬揃の部分だけを綴りなほしたものであらう。

（一）興屋本の名馬揃

名　馬　揃

梶原や〳〵、君の御前にかしこまり、承はつての御狀ニハ、一番ニ判官殿の太夫黑、二番ニ鎌たかい普のふち、三ンにぬゑながとらつきけ、四番ニしふやかこんの栗毛也、五番ニなすの與市ハふちしらけ、六番ニおふずのくもんしやひしよふか毛、是ハふし七番ニしゝなかしろ玉すだれ、八番ニ半くわん殿の岩下り、九番ニ奥州つきのふ殿の花いかた、乘出スこゞろの面白や、十番ニたゝのふとの、初ほどゝぎす、さよつる聲の面白や、内てかきたて、酒向キ引ハやくいを打てハ引井へ、い國のはんくわい張良も、いかて是ニハまさるまい。

（二）杉澤の梶原

梶　原

梶原は〳〵、君の御前に畏る、承れと仰せあり、夫一番に、九郎判官鰤くり毛、二番に和田が闇の星、三に大ばがとらつき毛、四番に淺谷がくり毛なり、五番に奈須の與市はふちしらげ、六番大津くわじやが美人かげ、是も劣らぬ名馬なり、七番にいつた四郎玉すだれ、八番に北條が岩下り、是も劣らぬ名馬なり、九番に次郎ほと、ぎす、これも劣らぬ名馬なり、十番に忠信花いかだ、是も劣らぬ名馬なり、うちかひたて引きならべ、矢先をそろひまち居しは、異國のはんくわい張良も、これらによもや勝るまじ。

三、鎧　揃

小瀧に傳ふ「君をはじめて……」の幕出で、甲（烏帽子風のもの）、鎧の二人の武士が出て、はじめ扇をとつて番樂の舞あり、次に鎧ずりの舞あり、後に太刀を抜きつれて舞ふといふ。

鎧　揃

△次信殿（マヽ）も忠信も、此度鎧を揃ふるに、先つ一番に黄金さねの腹卷に錦のほろをかけたるは義經殿の鎧なり。

△二番に　重忠殿の鎧には、紫すその物の具も（「ハッ」と掛聲をして殘りの謠の間にその場にまはり振あり、左足を前にしてかまへ、扇をもつてあふぐ）是も劣らぬ鎧なり。

△三番に　佐々木殿の鎧には、小櫻威の物具も、（と前同樣）是も劣らぬ鎧なり。

△四番に　次信殿の鎧には、赤色威の物具も（と同前）是も劣らぬ鎧なり。

△五番に　忠信殿の鎧には、卯の花威の物の具も（と同前）これも劣

らぬ鎧なり。

△この人々のありさまは、ものによく〳〵たとふるに、まさかとかすみ、ともがげに、よりちかゞ勢は、これにはいかでまさるべきこれにはいかでまさるまい。（と扇を捨て、太刀をとつて一舞ある。）

最後に囃子歌があるが、これは藁本には誌してなく、口承によつてゐるのは、番樂舞のキリの一種のきまり文句とされてゐた故であらうか。

○やす〳〵仇を打ほろぼし、心にかゝるものもなく、我が家をさしてぞいそがるゝ。

一三、幡　揃

小瀧に傳ふ。但し舞は絶えてゐる。

幡　揃

△よし信殿も義高も、味方のせいをたてたるは、先づ一番にいれぞかたにすそくろの金のついをたてたるは、大山の判官時行よ。

△二番に、ふたつかしはに三つ巴、銀のへいを立てたるは、右近の大夫時正よ。

△三番に　三つ輪ちがひの帆かけ船、百なり瓢尊つけたるは、佐々木の四郎高綱よ。

△四番に　四ッなるすみのおんはたよ、上に三日月つけたるは、柴田の三郎景政よ。

△五番に　月に星の御はたよ、下にたつなみつけたるは、新田の四郎つねろじよ。

△この人々の勢は、めんぼくたいじや百だんだありつな金時の勢は是にはいかでまさるまい、是にはいかでまさるまい。

一四、清　重

小瀧に傳ふ。これも舞は絶えてゐる。

清　重

△たかたぢ御所で某は、ありなしなんど、ぢんぼいにすてきみにはあらねとも、我君樣と某は、運の末かと存するに、我君樣と某は御運の末かと今一度は存するに、おかみ申すものなれば、かほどに名殘惜しからん、樣を替えたる甲斐もなく、あらはれけるも我君の、よんもひとよも葛の葉の、恨みべきにはあらねとも、さしもいたけき清重は、涙くみにて立ちにけり、涙くみにて立ちにけり。

△言立　ヤラおん前にまかり立たるつはものは、如何なるものと思召我は都にかくれなき、義經のおん身うち、駿河の次郎清重と申すものにてゆ、目を忍ぶとは申せとも、梶原源太景季に、みらいいること不運なり、鎌倉勢の方々は、清重を打とり、其名を擧げよと存候。

△源太出る　源太それを聞くよりも、あますまいかと云ふまゝに、勇んで勇んでかゝりけり。

（一）雲綿本には、はじめに左の神聲、幕出あり。

一かんこえ　さむらいの
一まく出　よう〳〵いそき行ほ
とに〳〵、羅生門にとつきにける。

檜木本には、神聲に當るうたを左の樣に誌してゐる。

五拍子ヘハイレ羅證門ニ於テ春ハ來ニける〳〵

（二）さんゆかうとなし（檜）
（三）をばとなし（檜）
（四）のふとなし（檜）
（五）もの字なし（檜）
（六）とハげに我が事にてゆーと申スモノニテ御座ゆ（雲・イ和）・にてゆ也（檜）
（七）ればールニ（檜）
（八）魔性變化の鬼神ー鬼神か（檜）
（九）聞ー耳（雲）
（一〇）りーりて（檜）
（一一）「鬼神見屆ケのために」となし（檜）

一五、羅　生　門

渡邊綱が、羅生門に於て鬼の片腕をとつたことをつくつたもので、山伏神樂、番樂とも、その詞章はまち〳〵である。

（一）下岩泉の羅生門

山伏神樂では、下岩泉、斐綿、和野、檜木の諸本に詞章を傳へてゐる。次には下岩泉本を底本とし、他の三本をこれに參照して誌す。尚、檜木では、はじめにお婆さんが出、次に鬼が出、次にグンゾウ、ワタナベが夫々直面で出るといふ。

羅　正　門

△（一）さんゆ、（二）かう御前に罷り立つたる士を（三）は、如何成士と思召のぶ。（四）我れは是れ、そふも京（五）に隱れも無き、攝津の守源（六）の雷公の家臣、渡邊の源悟綱とハげに我が事にてゆ（六）、然れば（七）此頃、羅正門に於て、魔性變化の鬼神（八）出て、洛中の人をなやます由、我が君の聞（九）に達し、某軍命（十）蒙り（一〇）、鬼神見屆（一一）ケのために、印の金札給りゆて、是迄參りゆが（一二）、いざ〳〵（一三）金札押たて、（一四）罷り歸らんと存ゆ。

鬼神　おふ我こそはハノ〳〵、丹波の國、大江山ニ住家ヲなす、酒呑童子のけんぞく（一六）、茨木童子とハ實に（一七）

(二二) 卦の字なし(檜)
(二三) が―也(檜)
(二四) 次に印のとあり(檜)
(二五) ての字一字なし(檜)
(二六) 次にニてとあり(檜)
(二七) ハ以下―申なり、渡邊見かけてまつさリトビカヽリ(檜)
(二八) この項なし(檜)
(二九) 東西然はとなし(檜)
(三〇) 頃月―此頃(豐・檜)
(三一) 有樣…奉バ―芝武者、君ぐんぜう、きみよりをせにハ(檜)
(三二) 次に「君方の仰せには」と入(豐)
(三三) 次に「先つ鬼神は變化のもの也」(豐)「依テ鬼神は變化のものなれバ」(檜)と入。
(三四) なるばけ物―のものなれば用心こそ第壹也(各本、イ檜)
(三五) 次に「壹七日が其間」と入(各本)。
バの字なく、次に「一七日其間」とあり(檜)
(三六) かろとゐ―からとに(檜)
(三七) 次に「まつた」と入(各本)

(二) 西長野の羅生門

我が事ニてゆが、見屆け抔とは片はらいたし、出てひつさげ捨てんと云ふ儘ニ、渡邊をめがけてまつしくらニ飛びかゝる。

こゝで渡邊、鬼神の腕を剪取るなり。

△やらおそろしやく、いばらき童子こそ我が兜へ取付、引下げ捨んと云ふまもなく、つかんだる腕を剪おとし、公の御前ゐ念がるゝ。

△東西東西、然は、頃月、羅生門に於て、鬼神の腕を取たる有樣、新堅、君ニ言上奉バ、あつはれなんじが手柄、前代未聞の功名也、顯れんとする時ハ、千丈が嶽にも身をくらべ、又しのばんとする時ハ芥子の中ニも身をかくす、じん變不思議なるばけ物、とつたる腕ヲバ石のかろとゐ仕まひ置べし、一七日が其間。門々内に人ヲ一人も入れざる樣ニ用心きび敷致せとの仰也。依而家來共ヲ呼出し、門戸を築ク云付申さバやと存候、やい軍藏、

△鬼ノ腕、石ノからとゐしまい置

△右ノ鬼ハ木ノ國ときハが里のおばと成りたたなヘヲだます、み腕を取り飛にげる鬼也。

△いばらぎ童子ニたばかられ、口おしや無念さよ。

鬼ヲおい矢、刀ヲ切かケ、鬼ハ飛にける也。

(三八) 人ヲ一人―虫壹疋(檜)
(三九) 也―かな(檜)
(三〇) 共ヲ以下―ものに門々堅く守らせんと存じ卦(以下ナシ×檜・イ同一本)
(三一) この謠の代りに左の如くあり。(豐・和)
きの國ときわが里母組のうたひ
うれしやな〳〵、今こそ思ひの雲はれて、にしきてかいる古郷かな

番樂では、仙北諸本及び富根本に傳へてゐる。而して兩者は異り又、夫々山伏神樂のとも異つてゐる。

西長野のは、實演にも接し得た。

羅生門

(西長野本を底本とし、これに豐川・白岩の兩本を參照す。)

暫出へ　やう〳〵急ぎ行く程に、早羅生門に付けける。

と、しやぐま、鉢卷、素面、鎧、胸當、襷、袴の渡邊綱が出て、めぐつてめぐりかへし、扨て扇を開いて右手に持ち、諸み樣色々あつて、一わたりを舞ふ。

○こ前に進み出でたる侍を如何なる者と思召、我社は、攝津守源頼光の家臣、渡邊綱と申者にてゆ。

(と語りの間、扇をとつて色々に振がある。)

羅生門と申は、桓武天皇の御建立、是又天下の御祈禱しやうに立置かれし大伽藍、中頃弘法大師大藏界のまんだら七百餘萬卷しやうし奉る、かゝる貴きまの前に、鬼神は住み、往來の人を惱す事、是天下に隱れなし、さるに仍て、我ら打手に向つてゆへ共、鬼神變化の者なれば、塵や木の葉に打乘りて其形更に見えず、天の岩戸に引籠り、御託宣次第に打て御目にかけばやと存じゆ、けんがしんしや。

と、その場にめぐると、囃子になり、武士は中央に座し、扇を置いて太刀をとり、これより四方を拜し、さて兩手をひろげて立上ると、その場にめぐつてめぐり返し、再び坐し、次に扇を左手に、鈴を右手にとつて、左右を拜して立上り、一舞ひある。次に扇を開き、兩持物を合せ開きしつゝ舞ふ。次に鈴を置き、扇を右手に持ち、投げてとることがあり、又左手に、右手にと持ちかへる。次に太刀をとり、順逆にめぐり、次に太刀の鞘を外して拔身と鞘とを持つてこれを色々に使ふ。これは兩刀の積りらしい。次に鞘を置いて四の角に拵へてゐると、ピーく〳〵と笛をならしつゝ幕をかゝげ、ざい、鬼面、纖衣に、褌一つのものが、幣束を持つて出てきほふ。武士はこれを追ひまはす。と、鬼はすぐころんで幕に入る。これは石火の樣な早さである。舞臺に未練などは少しもなく、姿を見せたと思ふと、早業があつて、すぐ入る。この舞約十四分。

(一) にーにぞ(豐)
(二) るーり(豐)
(三) こ前に―抑こゝ元に(豐)
(四) 侍―つわもの(豐)
(五) 思召―思ふらん(豐)
(六) 我社は―吞も(豐)
(七) 次に源吾とあり(豐)
(八) 先に抑此と入る(豐)
(九) しやうとなし(豐・白)
(一〇) れし―せたる(豐)・せ玉ふ(白)
(一一) 次に「かの寺にちうじして」と入(豐)
(一二) 大藏―胎藏(豐)
(一三) 萬―卷(白)・そんの(豐)
(一四) 卷しやう―勸請(白)
(一五) 次に「眞言の秘みつの道成なりと入(豐)
(一六) さるに仍て、我ら―某(豐)
(一七) 次にはの字入(豐)
(一八) に―ト(白)
(一九) 乘りて―まじわり(豐)・なつて(白)
(二〇) 引の字なし(豐)
(二一) ぱやと存じゆ―申さん(白)
(二二) 次に尙「ほつほ大しんもんか明しやだんたぐしゆちやう」とあり(白)

（三）富根本の羅正門

○羅　沙　門

幕出　漸々急き行ほとに、らしやうもんに急ぎける。

そも〳〵、源の頼光の一ノ臣下に渡邊の源五綱、化生たへじのため、マ、ける、吹來る風に駒マ、るへして、立たりけり、その時馬より飛て下り、君よりたまはりたる印の札を、石段に立置、立かへらんとする所に、鬼神は怒れる姿をあらわす、ひきさき、くわんと飛てかゝる、飛ちかひて、ちやうときる、鬼神は片腕切落され少ひるみて、ついちに上り、ついには、其腕取かへさんものをと雲の内にて、呼る聲あつて、行方しれすに、なりにけり、打もらしたる、口惜やと、鬼神の片腕、左手にさけ、馬引寄て、ゆらりと乘り、御所を指して急きける。

一六、大　江　山

小瀧、杉澤及び女鹿にあり。詞章は殘つてゐないが、山伏神樂の黒森にもとあつた。女鹿本（俚謡集）のは酒呑童子と題してゐる。

（一）小瀧の大江山

大　江　山

幕出歌で、侍烏帽子、鉢卷、鎧、草摺、襷、帶刀、小手、脚袢、草鞋ばきの者が扇をとつて出、番樂風の舞を一舞あり、舞臺を逆に狹く角々をかけて一まはりし、「よいさ〳〵」の掛聲で振あり、とゞ幕向に右足をのべてきまつた所に、更に幕出歌がかゝつて、同じ支度のものがもう一人出、相對して舞ふ、この舞が色々あり、「よいさ〳〵」のかけ聲もかゝり、とゞ幕と胴前を背にして、向ひ合ひに、夫々右足を前にしてなほると、次の語りになる。

△言立　アラ御前に罷り立つたるつはものは、如何なるものと思召我は都にかくれなき、源の頼光渡邊の綱にて候、然るに君の詮議にて、大江山酒呑童子を平らげんとし、安全になすべしとの宣旨を蒙りて、只今大江山指して急がばやと存じ候。

と振になる、とゞ兩人が幕と反對の座に、幕向に並んで立つた所に、「君をはじめて」の幕出歌がかゝり、かつら、鉢卷、女面、肌抜、絲色の襷、手差の姫が出て、この兩人と向ひ合になり、振あり、互に入れ代りになり、又戻ることもあり、とゞその場にめぐつた拍子に次の座になほり、かく、同じ振を各座にくりかへす。かくてもとになほると、次の問答になる。この間女は左手を腰にして立つたまゝ。武士兩人は右足を前にしてかまへ、扇で振がある。

△アラ御前に罷り立つたる女をば、如何なるものと思召、吾は都にかくれなき、池田中納言花園姫にて候、ある時鬼人にさそはれ是まで來たりそろ、如何に夫れなる客僧だち、何人にて候。

△我は都にかくれなき源の頼光渡邊の綱に候、或時君の詮議にて、都より鬼人にさそはれし姫どもを都に返さん其爲に今は是まで來り候

と、以下節になる、皆はそのまゝ

△誘ありがたやありがたやな、夫れはまことか、うれしやな、その儀ならば（と笛も入り、以下ずつと節をつゞける）語るべし。この川上にのぼり給ひて御覽ぜよ、いらかを並べたてをつき、黑金にてやかた建て、てつの御所と名をつけて、四節のせつをまなびつゝ、るりの宮殿玉す垂れ、其内よく〳〵見給へば、酒呑童子の有樣は色うす赤く背を高く、髪はかもりてみだれ髪、髪のおえさに角おえて、見れハなか〳〵恐ろしやな、能く〳〵忍び入り給へ、暇を申すぞさらばとて、奥をさしてぞ歸りける、奥をさしてぞ歸らろゝ。

と振になり、その場にめぐることあり、女はそのまゝ入る。武士兩人は扇を捨てゝ「えー」と太刀をぬきつれ、その場にめぐり、舞臺を大まはりすると、

△酒呑童子が幕出の時の言立　茨木それと聞くよりは、あますまいかと云ふまゝに、勇んで勇んでかゝりけり。

と、歌になり、鬼が二頭出る。白髭、鉢卷、鬼面、ぼろ〳〵のチャン〳〵樣のものにづぼんといふ半ば道化の仕度である。これが長刀及び棒を持つ。武士兩人と相對し、互に持物をとり合ひ、跳び上つては切り合ふことあり、とゞ鬼は伏し、その場にめぐり、又鬼は體を振り〳〵めぐり、大まはりをし、再び向ひ合つては持ちものをとり合ひ、「おーい」といつて互に臥し沈み、舞臺をたゝき、或は「よいさ〳〵」と足踏みあり、かうした振をくりかへす、この持物をとり合つて沈む振が、何となくエロテイックであつた。とゞ鬼どもはころんで入る。

後、武士兩人は扇をとつて一舞番樂をまひ、相對しつゝ大まはりをして、一人は入り、一人は尙しばらく舞つて入る。約二十分の舞。

（二）杉澤の大江山

大　江　山

「みなみ嵐に北嵐……」のかけ歌で、女面のものが出る。一舞あつて正先に立つと、同樣のかけ歌で、兜巾、鉢卷、直面、腹卷、ぬぎだれ、襷のものが出て、相對し、三人同じ振で舞ひ、入れちがひになると、次の語りになる。

かたり　語りけものは、源の頼光、渡邊ノ綱にてけ、然るによつて丹波の國大江山さして急がばやと存じけ。君の御諚を以て鬼神を平らげ、年安全になすべきとの命にて、只今たんばの國大江山に付いてけ、それなる女は何人や仰けへ。

自らはいかなるものと思ふらん、花園中納言の一人姫にてけが、鬼神に取られ、是迄參りけ、こゝは鬼神の岩屋にてけが、それな

第五十五圖　杉澤の大江山（一）

る客僧たち、急でとく〳〵おん戻りゆへ。

ヤアラー我をば誰と思ふらん、都にかくれなき、源頼光、渡部の綱にてゆが、鬼神に捕られし姫共を、都に返すその爲に、これ迄參りゆほどに、鬼神のあり所を言懇ろに仰せゆへ。

と、この間に女は幕前に立ち、二人の武士は中央に相對しつゝ扇をふり、踏みかへ足をして場所をかへることがある。

それはまことかうれしさよ、その儀ならば語るべし、この川上をのぼり給へてごらんぜや、るりの宮殿玉すだれ、いらかをならべ立ち給ふ、しせつのせつを學びつゝ、てつの御所とぞ名をつけて、くろがねにて館立て、その内よく〳〵ごらんぜよ、酒呑童子の有樣は、色うす紅く背大きく、かみはかむろに押みだし、髪の

第五十六圖　杉澤の大江山（二）

あひだに角生えて、見れば中々おそろしや、身の毛もよだつばかりなり、よく〳〵忍んで打ち給へ、おいとま申す、さらばとて、奥をさしてぞ歸りけり。

と女は入る。「ヤッサッサ」と、二人は扇を置き、太刀を抜き、前一文字にし、左右ときるところに、鬼が出る。しやぐま、二本の角のある鬼面、胸當、袖無羽織風のもの、まはしの仕度で、腕も、脛もむき出してあるが、兩腕を布でわざと縛つてゐるのは、昔の舞の仕度の床しい點を殘してゐるのであらう。

鬼は「ワオー」と叫びつゝ相對し、二人は太刀を右肩にして、逆に大まはりをする。三人とも同じ型に舞ふのであるが、鬼はわざと型を崩して荒びつゝ舞ふ。

と、鬼は追ひこまれる。二人は刀をかついだまゝ舞ひつゝめぐる。

と、幕前にならび、太刀を收めて扇をとる。

（一）いばら木それを見るよりも、惡きわつぱの言事かな、人めづらしき折からに、あますまじとぞ懸りけり、ハイエー

と、一舞ひあり、きまつて入る。

（考異）（一）このキリのうた「ほとゝぎす、なきつるかたをながむれば、たゞありあけのつきぞのこれる」（女鹿本）

尙女鹿本のは、或箇所は小瀧のに近く、又他の箇所は杉澤のに似てゐる。目立つた異同はキリの歌だけである。

（三）黒森の大江山

詞章は殘つてゐないが、こゝにも「大江山」はあつた。

はじめ直面の武士が四人出る、これらは後で衣裳をかへて白衣白袴になる。姫一人、それから鬼は都合で澤山出る。酒呑童子、とらくま童子、茨木童子などと各々名乘る。これらは棒を持つて、後で戰ふといふ。

一七、田村

女鹿本、及び小瀧本にあり。田村丸の鈴鹿山の立烏帽子退治のことは、舞の本の「未來記」などにも一寸見えてゐるが、これは寧ろ流布の物語によつたものであらう。

たむら（女鹿本を底本とし、これに小瀧本を參照す。）

（言立）御ん前に罷立つたる強者は、如何なる者と思ふらん、我ハ都に皇しよくし奉る、いなせの太郎田村ときひとの其の嫡子、田村ときむねとは某が事、君よりの宣旨にて、勢州鈴鹿山に住居なすたてえぼしと申せしが、鬼神をなぐれば、日頃祈りし清水の、利生あらたに蒙りて、鬼神を討たばやと存じゆ。

（謠）南無や大慈大悲のえ・觀世音菩薩、日頃は利生のえ現はれず、今度は利生のえたび給へ、かし衆生濟度の願なれば、とても叶はぬ事ならば、鬼神の手につきたんまへかし、大慈大悲のえ・觀世音菩薩、さう〳〵念ぎゆへば、勢州鈴鹿山にも着いてゆ、如何に鬼神聞き給へ、汝如きに名乘るべきにはなけれども、汝討たんがそのために、罷り是まで來りたりゆが、とう〳〵腹を切るものか、出合ひ勝負をなすものか命を取らんばならんと申されけり。

（言立）ほの〴〵とあかしの浦の朝きりに、島隱れゆく舟をしぞ思ふ。

（考異）（一）次に、小瀧本には左の言立あり。

△言立はやしのゝめと見へゆへ、勢州鈴鹿山さして急がばやと存ゆ

（二）汝……來りたりゆが一平生てんをうひおとし奉る稻瀨の田村時宗と

第五十五圖　杉澤の大江山（一）

る客僧たち、急でとく〳〵おん戻りゆへ。

ヤアラー我をは誰と思ふらん、都にかくれなき、源頼光、渡部の綱にてゆが、鬼神に捕られし姫共を、都に返すその爲に、これ迄參りゆほどに、鬼神のあり所を言懇ろに仰せゆへ。

と、この間に女は幕前に立ち、二人の武士は中央に相對しつゝ扇をふり、踏みかへ足をして場所をかへることがある。

それはまことかうれしさよ、その儀ならば語るべし、この川上をのぼり給へてごらんぜや、るりの宮殿主すだれ、いらかをならべ立ち給ふ、しせつのせつを學びつゝ、てつの御所とぞ名をつけて、くろがねにて館立て、その内よく〳〵ごらんぜよ、酒呑童子の有樣は、色うす紅く背丈きく、かみはかむろに押みだし、髪のあひだに角生えて、見れば中々おそろしや、身の毛もよだつばかりなり、よく〳〵忍んで打ち給へ、おいとま申す、さらばとて、奥をさしてぞ歸りけり。

と女は入る。「ヤッサッサ」と、二人は扇を置き、太刀を拔き、前一文字にし、左右ときるところに、鬼が出る。しやぐま、二本の角のある鬼面、胸當、袖無羽織風のもの、まはしの仕度で、腕も、脛もむき出しであるが、兩腕を布でわざと縛つてゐるのは、昔の舞の仕度の床しい點を殘してゐるのであらう。

鬼は「ワオー」と叫びつゝ相對し、二人は太刀を右肩にして、逆に大まはりをする。三人とも同じ型に舞ふのであるが、鬼はわざと型を崩して荒びつゝ舞ふ。

第五十六圖　杉澤の大江山（二）

とゞ、鬼は追ひこまれる。二人は刀をかついだまゝ舞ひつゝめぐる。

とゞ、幕前にならび、太刀を收めて扇をとる。

（二）いばら木それを見るよりも、惡きわつはの言事かな、人めづらしき折からに、あますまじとぞ懸りけり、ハイエー

と、一舞ひあり、きまつて入る。

（考異）（一）このキリのうた「ほとゝぎす、なきつるかたをながむれば、たゞありあけのつきぞのこれる」（女鹿本）

尙女鹿本のは、或箇所は小瀧のに近く、又他の箇所は杉澤のに似てゐる。目立つた異同はキリの歌だけである。

（三）黒森の大江山

詞章は殘つてゐないが、こゝにも「大江山」はあつた。

はじめ直面の武士が四人出る、これらは後で衣裳をかへて白衣白袴になる。姫一人、それから鬼は都合で澤山出る。酒呑童子、とらくま童子、茨木童子などと各々名乘る。これらは棒を持つて、後で戰ふといふ。

一七、田村

女鹿本、及び小瀧本にあり。田村丸の鈴鹿山の立烏帽子退治のことは、舞の本の「未來記」などにも一寸見えてゐるが、これは寧ろ流布の物語によつたものであらう。

たむら（女鹿本を底本とし、これに小瀧本を參照す。）

（言立）御前に罷立つたる强者は、如何なる者と思ふらん、平城天皇しよくし奉る、いなせの太郎田村ときひとの其の嫡子、田村ときむねとは某が事、君よりの宣旨にて、勢州鈴鹿山に住居なすたてえほしと申せしが、鬼神なれば、日頃祈りし清水の、利生あらたに蒙りて、鬼神を討たばやと存じゆ。

（謠）南無や大慈大悲の・えゝ・觀世音菩薩、日頃は利生のえ現はれず、今度は利生のえたび給へ、かし衆生濟度の願なれば、とても叶はぬ事ならば、鬼神の・手につき・たんまへかし、大慈大悲の・えゝ・觀世音菩薩、さう〳〵急きゆへば、勢州鈴鹿山にも着いて、如何に鬼神聞き給へ、汝如きに名乘るべきにはなけれども、汝討たんがそのために、罷り是まで來りたりゆが、とう〳〵腹を切るものか、出合ひ勝負をなすものか命を取らんぼならんと申されけり。

「ほのゝ〳〵とあかしの浦の朝きりに、島隱れゆく舟をしぞ思ふ。」

（考異）（一）次に、小瀧本には左の言立あり。

（言立）はやしのゝめと見へゆへ、勢州鈴鹿山さして急がばやと存ず。

（二）汝……來りたりゆが一平生てんをうひおとし奉る稻瀨の田村時宗と

はさて某がことにては、然るに君のせんぎにて鈴鹿山すまひなす鬼神を打手にさし遣はされ、

一八、てづか

豐川本にあり、羅生門の一部をとつて、書き直したものと思はれる。

てづか　貳人

へいよ〳〵いそぎ行ほどに、手塚の森に付にけり。

へ元暦元年三月十八日の事なるに、てつが森にきぢんか住み、其時の打手には、忝も、あさひなのしよふけん向けられたり、されとも鬼神は變化の物なれば、塵や木の葉にうちまじはり、其かたち更に見へず、あまの岩戸に引こもり、御たくせん次第にうつて御目にかけばやと存じ候。

一九、景政

杉澤のひやまにあり。これは多分幸若の「八島」に、「たとへ事にては候はねども、鎌倉のごん五郎かげ正は、くりや川の城にて、とりのうみの彌三郎に、ゆんでの眼を射させ、その矢をぬかで、をりかけ三日三夜もつてまはり、たふの矢をいおほせてこそ、今鎌倉の御りやうの宮といははれ給ふと承れ」とあるのに據つてつくつたものと思ふ。

景政

かけ謠　朝日さす、夕日かゞやく大寺に、櫻色なる兒は八人。

君を始めて拜むには、榮ふる松こそ目出度さよ。ハイエー

と、しやぐま、白鉢巻、直面、襦袢の左肩ぬぎ、袴、胸當、袴、手差、はゞき、帶刀のものが出、囃子に合せてその場に足踏みをすることがある。左足を前に伸べて反り、足をかへて坐すことあり、一舞ひあると、正先にきまる。このとき同樣の仕度のものがもう一人出て相對し、手を伸し合ひ、足をあげ合ひ、拍子に合せて足ぶみをし合ふこと、入り代り合ひになることなどがあり、やがて謠りとなる。兩人は扇を振り合ふ。

まひうた　景政は／＼、かゝる小武者に手を負はせ、いたはしや、はやかはに景政殿の手にかゝり、あしたの露とさい後なり、アッとばかりに最後なり、景政それを見るよりも、小高き所にとび上り、我をば誰と思ふらん、八幡太郎義家は十二年のたゝかひに、くりや川をば城にして、鳥の海彌三郎に、ゆん手の眼をいられ、その矢をぬかず三日もつてめぐりしが、とうの矢をい返し、名を世にあげたりし、相模の國の住人、鎌倉のごんご郎景政とは、扨汝我事にては、景政はそこを引くなや、受けて見よやといふまゝに、三尺三寸の大太刀をまつこうにさしかざし、大ぜいにわつて入り、太刀のつばおと、くつわの音、山のくづるゝ如く也。

と、この間に太刀を拔き、太刀を肩に　扇を左右にして振あり、場所もかへる、次に扇を置き、その場にめぐり合ひ、足踏みのことあり、太刀をもつて左右を切り合ふこと、左足を出し、エイ／＼の掛聲で踏み合ふことなどあり、とゞ坐して刀を前にし、開いてなほり、逆にめぐり、左膝を立てゝ太刀を合せ、足をかへ、立つてその場にめぐり等を繰返しとゞ一人入ると、他の一人が殘つて舞ふ。

第五十七圖　杉澤の景政

東西南北、さしからんで、もみにもんでぞたゝかひし、景政大勢に手をおはせ、村々ばつと追ひちらし、ヤイエー

と一舞ひあり、手をあげて、きまり、尙一舞あつて坐し、拜して入る。

二〇、景清

興屋及び杉澤にあり。これは幸若の「景清」に出てゐるらしく、興屋のはともかくも要をとつて語り直してゐるに對し、杉澤のひやまのは、それの詞章を出鱈目にひきちぎつて綴り合せたもの、樣である。――崩れたといふよりも、もと／＼がい、加減であつたのではないかと思はれる。ひやまが主として據つてゐる一節の原文は左の如くである。

あこうあまりの悲しさに、二人の若の手をひいて、合の障子をはたとたて、れんちう深く入りにけり、かげきよこの由見るよりも、あらおかしのあこうがふるまひやたとへばをにの大將、はちめん大王が岩を疊んで四十餘丈に築地をつき、黑金の門を

はさて某がことにても、然るに君のせんぎにて鈴鹿山すまひなす鬼神を打手にさし遣はされ、

一八、てづか

豐川本にあり、羅生門の一部をとつて、書き直したものと思はれる。

てつか　武人

（いよ〳〵いそぎ行ほどに、手塚の森に付にけり。

（元暦元年三月十八日の事なるに、てつが森にきちんか住み、其時の打手には、奈も、あさひなのしよふけん向けられたり、されとも鬼神は變化の物なれは、塵や木の葉にうちまじはり、其かたち更に見へず、あまの岩戸に引こもり、御たくせん次第にうつて御目にかけばやと存じ候。

一九、景政

杉澤のひやまにあり。これは多分幸若の「八島」に、「たとへ事にては候はねども、鎌倉のごん五郎かけ正は、くりや川の域にて、とりのうみの彌三郎に、ゆんでの眼を射させ、その矢をぬかで、をりかけ三日三夜もつてまはり、たふの矢をいおほせてこそ、今鎌倉の御りやうの宮といははれ給ふと承れ」とあるのに據つてつくつたものと思ふ。

景政

かけ孟　朝日さす、夕日かゝやく大寺に、櫻色なる見は八人。君を始めて拜むには、袈ふる松こそ目出度さよ。ハイエー

と、しやぐま、白絲奏、直面、獨祥の左肩ぬき、襦、胸當、袴、手盞、はゞき、帶刀のものが出、囃子に合せてその場に足踏みをすることがある。左足を前に伸べて反り、足をかへて坐すことあり、一舞ひあると、正先にきまる。このとき同樣の仕度のものがもう一人出て相對し、手を伸し合ひ、足をあげ合ひ、拍子に合せて足ふみをし合ふこと、入り代り合ひになることなどがあり、やがて語りとなる。兩人は扇を振り合ふ。

まひうた　景政は〳〵、かゝる小武者に手を負はせ、いたはしや、はやかはに景政殿の手にかゝり、あしたの露とさい後なり、アツとばかりに最後なり、景政それを見るよりも、小高き所にとび上り、我をば誰と思ふらん、八幡太郎義家は十二年のたゝかひに、くりや川をば城にして、鳥の海彌三郎に、ゆん手の眼をいられ、その矢をぬかず三日もつてめぐりしが、とうの矢をい返し、名を世にあげたりし、相模の國の住人、鎌倉のごんご郎景政とは、扨汝我事にては、景政はそこを引くなや、受けて見よやといふまゝに、三尺三寸の大太刀をまつこうにさしかざし、大ぜいにわつて入り、太刀のつばおと、くつわの音、山のくつるゝ如く也。

と、この間に太刀を拔き、太刀を肩に　扇を左右にして振あり、場所もかへる、次に扇を置き、その場にめぐり合ひ、足踏みのことあり、太刀をもつて左右を切り合ふこと、左足を出し、エイ〳〵の掛聲で踏み合ふことなどあり、とゞ坐して刀を前にし、開いてなほり、逆にめぐり、左膝を立てゝ太刀を合せ、足をかへ、立つてその場にめぐり等を繰返しとゞ一人入ると、他の一人が殘つて舞ふ。

圖五十七　杉澤の景政

東西南北、さしからんで、もみにもんでぞた、かひし、景政大勢に手をおはせ、村々はつと追ひちらし、ヤイエー

と一舞ひあり、手をあげて、きまり、尙一舞あつて坐し、拜して入る。

二〇、景清

興屋及び杉澤にあり。これは幸若の「景清」に出てゐるらしく、興屋のはともかくも要をとつて語り直してゐるに對し、杉澤のひやまのは、それの詞章を出鱈目にひきちぎつて綴り合せたもの、樣である――崩れたといふよりも、もと〳〵かい、加減であつたのではないかと思はれる。ひやまが主として據つてゐる一節の原文は左の如くである。

あこわうあまの郎しさに、二人の若の手をひいて、御の障子をはたとたて、れんちう深く入りにけり、かげきよこの出見るよりも、あらおかしのあこわうがふるまひやたとへばをにの大將、はちめん大王が岩を疊んで四十餘丈に築地をつき、黑金の門を

たてたりとも、かげきよほどのつはものが、など一方打破らであるべきぞ、いはんや紙障子の一重やぶらんことはやすけれども、ひごろの情、とうざのあしやく、九年つれたるなさけに、わごぜは心變るとも、かげきよはこゝろかはるまじ。

尙、興屋本の前段と後段とは、場所も戰も別である。

（一）杉澤の景清

景　清

第五十八圖　杉澤の景清

かけうた　この殿の門に咲いたる姫小松、ところよかれと榮ふ松かな。

君を始めて拜むには、榮ふる松こそめでたさよ　ハイエー

と、烏帽子、桃色鉢卷、直面、褶袴、裃、胸當、袴、手差、脚袴、帶刀のものが一人、扇をとつて出る。手を伸すこと、左膝を折り右足を伸べること等型の如く、そして、トントントントントントンと足踏みをする。

かたり　景清はゝゝ（と左足を出して扇を左右にする）妻のあこやにたばかられ、我妻のあこやは、寺に參ると申せども、寺には參らず、はち面大王は岩を切つて、八万よじゆんにたゝみあげ、（と扇を上に、左手をその下にしてたゝむ如き振あり）くろがね門をたてるたり、先づ一方を破るべし、（「ヤッサッサッサ」と、扇をおき、太刀をぬいて、左右をきつて振あり。）景清は障子の一重二重は物でなし、日頃のなさけと申せども、あこや心はかはるとも、景清こゝろはかはるまじ。

と、謠に合せ、太刀の振色々あり、謠がきれると、尙一舞あり、幕前に拜して入る。終りに笛が入る、約十二分。

（二）興屋本の影清

兜、褶袴、大口、帶刀、扇の影清と、も一人の男とが出る。

影　清

はるかの野邊の下よりも、四拾余りの男めが、ほふがむりして御めんと云て通つゝ、重たゝ此よし急度見て、たゝ今の人足ハ、平家のおち入道惡七兵衛影清成、前の野邊ニも追出し、打て取れとのおふせ成、いつれもはやるくわんとむしや、いちとにはたりと、とりまかり、かけきよこたいてさんゆ、禮のあさ丸するとぬき、火はなをちらしてたゝこふたり。

二　番

おふこふ御前ニまかり立たるつはものをば、いかなるものと思召、我こそや、平家のおち入道惡七兵衛影清成り、たいらの御世ハ皆ほろひ、今ハけんじの御世と成り、よりともら、一太刀うらミんか其ために、清水寺にも罷しか、影清おもての門ヤ出見れハ、見の重藏御かのことニよせ來たり、妻のあくやも二心、二人の子供を差ころし、今ハこふよと云まゝに、なきなたひつさいて出たりけり。

三、高　時

杉澤のひやまにあり。

三、高　　時　　三、東下り平太

高　時

かけ歌で、しやぐま、直面、他はいつもの武士の支度のものが一人、扇をとつて出、はじめは囃子のみで舞ひ、やがて謠となり、この謠がきれると、又囃子のみで舞ふ、次にかたりになり、高時は、向つて右手向に中央に立ち、左手を腰に、扇を左右にし、又それとは反對向にもなる。

高時はゝゝ、後生す、めんそのために、三年が間、送らせ給ふ、衆生（しゆじやう）病死の習ひとて、終に果敢なくならせたり、スサー

其元に進み出たる兵（つはもの）は、いかなる者と思ふらん、さゝわか長者佐長（すけなが）が郎黨、あましの十郎義國とは我事にてゆ、いぜんくがんの山さしきもんどうのその意恨によりて、今どのせんぎをたのみ、打手を指し向ひ、高時あらん限りは物の數にて數ならず、拍子そろへてきらんに、あのゑしやくも有るべきや、いさみにいさんでかゝりけり。

ハイエー

とこの間に刀を拔いでふると、幕をかゝげ「オー」とおらびつゝ、鬼（支度は大江山の鬼と同じ）が出て、武士にからむ。約十分のもの。

三、東下り平太

興屋本にあり。定光は、兜、タナ、鎧、長刀、扇、平太はしやぐま、褶袴、袴、褌、太刀、扇の支度。この二人の者が三度背中合せになることあり、あと切合をするといふ。

たてたりとも、かげきよほどのつはものが、など一方打破らであるべきぞ、いはんや紙障子の一重やぶらんことはやすけれども、ひごろの情、とうざの糸しやく、九年つれたるなさけに、わこせは心變るとも、かげきよはこゝろかはるまじ。

尙、興屋本の前段と後段とは、場所も戰も別である。

（一）杉澤の景清

景　清

第五十八圖　杉澤の景清

かけうた　この殿の門に咲いたる姫小松、ところよかれと榮ふ松かな。

君を始めて拜むには、榮ふる松こそめでたさよ　ハイエー

と、烏帽子、桃色鉢卷、直面、褶袴、裃、胸當、袴、手差、脚袴、帶刀のものが一人、扇をとつて出る。手を伸すこと、左膝を折り右足を伸べること等型の如く、そして、トントントントントントンと足踏みをする。

かたり　景清は〳〵（と左足を出して扇を左右にする）妻のあこやにたばかられ、我妻のあこやは、寺に參ると申せども、寺には參らず、はら面大王は岩を切つて、八万よじゆんにたゝみあげ、（と扇を上に、左手をその下にしてたゝむ如き振あり）くろがね門をたてゐたり、先づ一方を破るべし、（ヤッサッサッサ」と、扇をおき、太刀をぬいて、左右をきつて振あり。）景清は障子の一重二重は物でなし、日頃のなさけと申せども、あこや心はかはるとも、景清こゝろはかはるまじ。

と、謠に合せ、太刀の振色々あり、謠がきれると、尙一舞あり、幕前に拜して入る。終りに笛が入る、約十二分。

（二）興屋本の影清

兜、鎧袴、太日、帶刀、扇の影清と、も一人の男とが出る。

影　清

はるかの野邊の下よりも、四拾余りの男めが、ほふがむりして御めんと云て通つゝ、重た、此よし急度見て、たゝ今の人足ハ、平家のおち入道惡じ兵衛影清成、前の野邊ニも追出し、打て取れとのおふせ成、いつれもはやるくわんとむしや、いちとにはたりと、とりまかり、かけきよこたいてさん仆、總のあさ丸するとぬき、火はなをちらしてたゝこふたり。

二　番

おふこふ御前ニまかり立たるつはものをば、いかなるものと思召、我こそや、平家のおち入道惡じ兵衛影清成り、たいらの御世ハ皆ほろひ、今ハけんじの御世と成り、よりともら、一太刀うらミんか其ために、清水寺にも罷しか、影清おもての門ヤ出見れハ、見の重藏御かのことニよせ來たり、妻のあくやも二心、二人の子供を差ころし、今ハこふまと云まゝに、なきなたひつさいて出たりけり。

三、高　時

杉澤のひやまにあり。

三、高　時　三、東下り平太

高　時

かけ歌で、しやぐま、直面、他はいつもの武士の支度のものが一人、扇をとつて出、はじめは囃子のみで舞ひ、やがて謠となり、この謠がきれると、又囃子のみで舞ふ、次にかたりになり、高時は、向つて右手向に中央に立ち、左手を腰に、扇を左右にし、又それとは反對向にもなる。

高時は〳〵、後生す、めんそのために、三年が間、送らせ給ふ、業生（ゆしやう）病死の習ひとて、終に果敢なくならせたり、スサー

其元に進み出たる（こたち）兵は、いかなる者と思ふらん、さゝわか長者佐長（すけなが）が郎黨、あましの十郎義國とは我事にてけ、いぜんくがんの山ざしきもんどうのその意恨によりて、今どのせんぎをたのみ、打手を指し向ひ、高時あらん限りは物の數にて數ならず、拍子そろへてきらんに、あのゑしやくも有るべきや、いさみにいさんでかゝりけり。

ハイエー

とこの間に刀を拔いでふると、幕をかゝげ「オー」とおらびつゝ、鬼（支度は大江山の鬼と同じ）が出て、武士にからむ。約十分のもの。

三、東下り平太

興屋本にあり。定光は、兜、タナ、鎧、長刀、扇、平太はしやぐま、褶袴、袴、襷、太刀、扇の支度。この二人の者が三度背中合せになることあり、あと切合をするといふ。

あつま下り平太

幕掛　あつまにおもむくたひのそら〳〵
さら〳〵〳〵とも出たりけり。
云たて　おふこふ御前ニ罷たつたるつわものをは、いかなる物と思召、我六原の住人の、お野への平太ニ両け、あとよりてきハよせ来たり、是ニしばらく待申さん。
定みつ　おふこふ御前ニ罷立たるつはものをば、いかなるものと思召、我けんじのみうち成り、うすいの定水とハ我事成り、おの野への平太に父を打れしむねんさに、是迄追かけ来タれしや、いつくにおち行申共、ぬかしまいとのよぶこゑに、平太と名乗りて出たりけり。

三、大田合戰

西長野本及白岩本にあり。

大田合戰（傍書は白岩本に依る異同とす）

幕出　漸々急き行程に〳〵、大田か城にぞ付にける。
同　漸々急きゆくほとに〳〵、なほすみか城にぞ付にけり。
○是はなをすみか城、今日のひらの仇は誰々そ、臼井の定光已すへだけ、我こそは源蟻津守頼光身内、うらべのすいだけ、いざ勝負あれ、己レなをすみ、手なみを見せんとかや。

四、ちかひ足

興屋本及び最上の釜淵にあり、しやぐま、襠袴、褌、袴、帶刀、扇の者の舞といふ。

ちかひ足（興屋本）

幕掛　たにやゝこしの藤の花〳〵
さら〳〵〳〵とも出たりけり。
云たて　齋藤のさいもん北野の十郎か内にかや、齋藤の左衛門北野の十郎か内てなし、まつた門ちかゑニ両け、何とちんぢ、かくす共、内て御はらめさろふか、出て打ちんなさろふか、早々どうどふぬかしやもふさん、まつたしはらぐまだせ玉ふ。
釜淵ではたゞ社門と題してゐる。左の如くである。

社門

幕出し　かだきは向ひの舟場なり〳〵、さえらさーとは出でられたり。
と幕より出る。四方固め（これは刀を持つて舞ふ）の後
こん御前に立つたる社門をば、如何なる社門と思召す、之は齋藤の左衛門北野雪衛とて、朝夕胸にも賣子あり、早打過きて、げにしれどうは秋の日の習ひとて、おどろは暮れて候ほどに、此の家の宅に立寄りて、一夜の宿を御借り候。
ノーノーこなたも御出で候、人目を忍ぶ春にて候程に、奥なる座敷を御借候。
一才心得たり。
暫くして、長刀を持つて又一人が出る。
ヤーラ齋藤の左衛門なる北野十郎は家にかや
齋藤ノ左衛門なる北野十郎は家になし、まつたかど間違ひで候
ヤーラかどまがひには候はず、とく〳〵出で打死なさらしか、早々逃かしは申すまい。まつた暫く立たせ給ひ、あまだぞろ〳〵引連れ、上や下へと切るなれば、たがひに勝負は見えける。

三五、川　ち

興屋本にあり、しやぐま、直面、襠袴、褌、袴、扇のもの一人の舞といふ。

川　ち

幕掛　あゑふ川佐藤の藤の花〳〵
さら〳〵〳〵とも出たりけり
云たて　ならち川ちか来れしか、御そふが山の浦門其まゝつまニかたられてたちおんとりてわきばさゝ、川ちかさいしよにつきにけり。

三六、かねふさ

女鹿本にあり。

かねふさ

かねふさや〳〵、急ぎ館にお着きやる。今は子供の花いくさ、ソラかねふさや〳〵、今は最後と見えにけり。
こえもしよこさきや、くらしみつのもり、とや〳〵もりの、うやむやのせき。

三七、すんはし

興屋本にあり。
しやぐま、直面、帶刀のもの一人が出て舞ふ。いそがはしい舞であるといふ。

すんはし

幕掛　たにやゝこしの藤の花〳〵
さらさら〳〵〳〵とも出たりけり

言たて　すんばしや〳〵、すまんとすふたふにやいけ、峯のこゑ澤邊に舟をうかべつゝ、なをかすか、なを、かすか、なを、翁なに、ふねを、ゆづる、日も、其今の、かたぢ、をば五本、そふお、ちや三本、りん、ごの、しよや、ごやに、其時、よいの、つたいし實の御寺をばさふさつのこゑぞ、たのもしや。

三八、四人舞

杉澤ひやまの廢曲の一つである。四人舞とだけで詳しくは不明であるが、文句は、幸若舞曲などにも出てくる四節のうたひである。便宜上、こゝに收める。

舞謠　ハイサノ〳〵ノヽ、南は爰そはまに池をほられたり、池の中に三つの島をつかれたり、ライホシヨイシチヨドテ、島より六字の玉のそり橋うちかけて、橋の下には、となへくはん者かうちわ舟浦島太郎が釣の舟、五色の糸につなはなく、じやうらくじやうの風ふけば、みきによりてつながるゝ。ハツサツサ

三九、品ごき太郎

興屋と小瀧と最上に傳へてゐる。

（一）興屋のすなごき太郎

、、すなは品で、この題名は或る卑猥な意味を持つものである。番樂舞の滑稽なもの、一つで、バンドウ番樂（道化番樂の意）とも言ふ。手拭の頭巾、直面、襦袢の着流し、裸掛けの奴の風をしたものが、その鼻先に尾（ヲタバ）を下げ、扇をとつて舞ふといふ。

すなごき太郎
太郎〳〵　はんかく太郎　すなごき太郎　やふ〳〵〳〵〳〵　よいそれ〳〵〳〵〳〵　はいそれ〳〵〳〵〳〵。

（二）小瀧のすなごき太郎

此處のは實演にも接し得た。舞手がよかつたせいもあるが、これは決して下品なものではなく、寧ろ傑れた小品であるとさへ思つた。即ちこれは身振舞振によつて、遣る方もない鬱悒をよく寫し出してゐた樣に思ふ。

すなごき太郎
〈太郎〳〵〳〵〳〵ヤー　ばんがく太郎　すなごき太郎ヤー　そら〳〵〳〵〳〵　よいさノ〳〵〳〵

と幕をあげ、小鈴をつけた頭巾、頰冠り、道化面、襦袢、裸がけ、紺のづぼん、手差、白足袋の支度に、股に白毛の毫をつけた者が扇をとつ

第五十八圖

右　同

第五十九圖

（謠　六）郎太きごす品

て出る。腰振あり、扇をかいこむ様な振あり、これを左の側にかいこみ、又右の側にかいこむ、もだへる様な振あり、坐して、しようことのない振あり、以上を順に四方に繰返し、幕向に振あつた後仰になることあり、左右に徒然な振あつて、立上ると、扇で前をかくし、仰に向くこと、左右にとび、右足をあげること、前をかくしてのび上ること等、色々ありとゞ「そりや〳〵〳〵」のかけ聲で中腰にその場にめぐつて入る。約四分程の舞である。

（三）最上の品ごき太郎

最上郡の品ごき太郎には、幕出し歌になほ一聯の詞章を傳へてゐた。釜淵と平枝とでは小異があるが、先づ平枝のを誌してみると左の如くである。（頬冠り、道化面、襦袢、裲、ゾぼんといふ山男風の支度に、木にさいはいをつけたものを腰に下げ、扇を採つて出る。左は幕内の樂屋方が唱へる。）

〈そりや〳〵、それ〳〵、拍子の風俗で、起きやがり小法師のやつこらさとは、しやきとん〳〵、鍛冶屋の拍子か、やすりの音か、さしたさゝんのひのをつる、腰に鞘ばかりとや、しとんとさしこんだりや、筑後筑前、肥後肥前、日向大隅薩摩の歷に立つたる馬の尾までも、すなごいたりや、すなごき太郎と囃されたり、そりや〳〵

（これで舞人が出ると、左の囃子がかゝる。）

ソリヤノ〳〵〳〵〳〵ヤー　ヨイソリヤ〳〵〳〵　ハイソリヤ〳〵〳〵　ステテン〳〵〳〵……

釜淵では頬冠り、道化面、襦袢、裲がけ、（背中に脊虫の樣に瘤をつくる。）股引の支度の者が、刀の鞘ばかりを腰に帶び、扇をとつて出る。

幕出〈東西東西トハ、コン御前ニ罷リ出ヅベキ者如何ナル者トハ思召ス、筑後筑前肥後肥前、大隅薩摩ノ守ノ馬尾ニ住ンダル足毛馬ノケ性ノ尾マデスナゴイタリヤ、スナゴイタリ、スナゴキ太郎ト名ヲツケテ、腰ニハストント鞘許リ、サシタサヽンノヒノヲツリヒノモサマ〳〵多クアル、信夫文字摺、川スゞリ、惠比須ノ神ハ宮マツル、浦島太郎ハ釣ノ舟、アハー、ホリガ出タ〳〵、黄金ノ音デ、チヨーチヨート、バン〳〵〳〵デハ目出度キヤ、ガダ〳〵馬ニテ橋渡リ、キチヤチヤン、チヤンテハミソサゞエ、デン〳〵チヤキ〳〵鍛冶屋ノ拍子、キチヤチヤン〳〵デハチヤチヤキノ拍子デ、ソロ〳〵若衆、シツカリタノミマス。（と舞人が出る）

ヤーレソツツオコ　ソツツオコヤー

三〇、さるがく太郎

小瀧に傳ふ。前曲同樣の道化面をかぶつた者が、背中に猿子をお

ぶひ、丁度守をする樣な格好で、體をふりつゝ、舞ふといふ。別名「猿番樂」とも言つた。幕出歌は「君よはじめて」。よよい〳〵と舞ふ。

興屋で「さるわか」と言つたのがこの舞らしい。

V　神　舞

今假に、神々の出る舞を、神舞の名に一括しておく。これは山伏神樂には勿論、番樂にも見受けられるもので、詞章は舞曲にならつてつくられたものであらうが、大體は神樂のものが取入れられたものと見ていゝ樣である。詞章のないもゝ中に、寧ろ奇古なものがある。

この章にも詳しい諸本對照の原稿を準備したが、これをそのまゝ版におこすことは流石に遠慮されるので、この章に於ては、必要のもの以外は、大體代表的なものを擧げ、これに各所の異同を略記するにとゞめる。猿樂の能にあつては、神舞がもとをなしてゐるにひきかへ、これらは舞曲とは別個のものと思はる故、かうした方法をとることにもさ程の殘り惜しさを感じないからである。

一、岩　戸　開

この曲は、岩戸開の故事そのものを仕組んだものではなく、要するに、御神樂の由來を說いた語りものに振がついたものであつたと思ふ。田子・葛卷の流では、これを舞とはせず、座揃に、おつとめとして興行してゐるのは、一段の古風であつた。（座揃の項參照）ともかくもこの語りは、非常に古いものに筋を引いてゐるもゝ樣である。岩戸の故事を舞ふ例へば太々神樂の岩戸開などは新らしいものに過ぎない。

附記　三河の神樂にあつた「若子の注連」といふのは、神佛混淆に綴られてはゐるが、やはりこの御神樂の由來を語つた同類の語りものであつた。異本が多い由であるが、私が採集した北設樂郡豐根村大字三澤字山内の傳書のものは、「抑〻神樂と申へ」といふ冒頭を以て說き出してゐる。（古賀立の文第書の記註によれば、これを、扇子を持ち、手を叩いて語つたものゝ樣である。—「花祭」後編）

山伏神樂には殆ど各所に傳があり、番樂には、二階、荒澤、石神等に傳へられてゐた。

はじめに大償のを誌す。此處のは餘程舞臺化されてはゐるが、「オウノウ鋼まりたまへ、千代の御神樂の由來をくはしく尋ぬるに云々」の長々しい沙門の語りは、これが古い語りものに筋を引いてゐるものであることを明かに示してゐよう。

岩　戸　（大償本）

幕出し、扇の雲張り、

樂屋へイヨホ、エ　ハァ岩戸出し　ハァヨイ〳〵〳〵ソコヨーハァ

光のかげもエンヤハァヨ、イヨヨイ

と、幕を押出し、幕内の足踏みあり、やがて兜・面・千早・袴・前帶の翁が、鉾先に似た小劍を帶び、右手に扇をとつて出る。翁式の振があつて、浮き沈みをし、袖なども返して一舞あると、拍子が變り、小劍をとり出して右手に持ち、左手に莟め扇を持つて四方を拜する振がある。

胴前へセンヨホエハイ　ほのぼのと　ハァヨイ〳〵〳〵ソコヨイ

ほめてたてたる　エンヤハァ　ヨ、イヨヨイ　（以下囃子同じ）

へなにごとも　かの、みやまは　へくまのやま　ふじのけむりの

へおとにきく　いはでがやまを　へするひろの　かのめをするて

へこ、ふめば　あいなるまつも　へくじのてよ　いつもきりくじ

へぬさたつる　こ、もたかまの

九宇の手へ九宇の手よ〳〵　手にとりそへて　おがむればエへ　四方の神はうけてよろこぶエへ

と、幕前に立つと、左の長々しい語りになる。この間翁は、扇と小劍とで浮き沈みをしつゝ進み退つて身振がある。

樂屋へォウノウしづまりたまへ、千代の御神樂の由來をくはしく尋ぬるに、天地ひらけて國常立のみことより、相つゞいて天神七代目のみことは南より男の子いて給ふを、いざなぎのみことと申し北より女いで給ひしを、いざなみの命と申し、さるによつて、今のよに、男の子をなむ子といふ、女を北の方と申すなり、かのいざなぎいざなみの命、あまのうきはしに立ちたまひて、あを海ばらへ玉のさかほこさしおろし、東西南北へうち向ひ、かきせぐつて見たまへば、これになし、中央へうち向ひかきせぐつて見たまへば、粟よね程の島こそ一つ出て來りたり、かの島だいせんせかいに合せて、粟よねほどなりとて、あはぢ島ともつけられたり、重ねて行なはせたまへば、芦の葉のごとくなりとて、芦原國ともつけられたり、いさなぎの命のたまはく、島ありといへども、人間なくして彼の島成就しがたし、吾既に草木國土を產むといへども未だ天が下の主たるべきものを產まず、天か下の主たるものをうまむと誓ひたまひて、第一にもうけしおん子をば、大ひるめの貴命と名づけ、第二月讀の命、第三蛭子の命、第四素盞嗚の尊と申す、是すなはち地神五代のはじめとして、百わう百代、源平藤橘四家の流れもこの末なり、さるによつて、神は人の親たり、人また神の子たるべし、然るに彼の素盞嗚の尊、仕業はなはだあぢきなくましまして、姉君の大ひるめのむつへさま〳〵のあだをなさしめ給ふにより、大ひるめのむつの命は、天の岩屋へ閉籠らせたまへば、國の中常暗となり、神等のその苦しむことは限りなし、ときに八百萬の神等天の八瑞川原へ集り給ひて、その祈るべきことをはからふ、こゝに高みむすびの命の御子天の思兼の命は、おもむばかり深き神にましまして、深くはかり遠く思ひて、長鳴き

鳥を鳴かしめ、天の岩戸のおん前に榊の枝に玉鏡幣をとりかけそなへば、天兒屋根の命は、天つ祝詞をあげたまふ。天のうづめの命は、手にちまきの鉾をもつて、わざをぎをしたまへば、諸神等は、庭火をたき、樂器をそろへて、み神樂のしらべを奉れば、このとき忽ち神の怒りをとき奉る。岩戸を少し開かせたまへば、八百萬の神等力を得て、面白しおもしろしとのたまふにより中にも手力男命、扉の脇にたゞずみたまひて、扉をとつて投げさせたまへば、神もいでさせたまふなり、おほひるめのむつの命は、このときより天照大神と稱し奉る。

と、語りきれて、翁は浮き沈みをしつゝ激しく舞ひ、胴前に立つと、鬘・白式の荒面・ぬぎだれ・白の千早・袴の太力男命が出て、翁と向ひ合に振あり、入れかはりになり、袖を返し合ひつゝ振あり、又入れかはりになり、翁が右手、太力男が左手に、共に胴前に幕向きに立つたとき樂屋へセンヨヘエ　わかみこのネー　笹とり添へておがむれば　ハァ〳〵ハイ　おがむれば　ハァハイネラ〳〵ヨイ　四方の神は受けてよろこぶ〳〵　エヘハイ　オモシロエヘ

と、樂屋の歌がかゝつて、鈿女の命が、黑頭巾、かんざし、女面、振袖、紫色の千早の支度で、右手に鈴、左手に幣を持つて出る。一めぐりして正面で足踏あり、その場にめぐり、同樣に以下四方を向いて足踏がある。(このとき幕に帶を一本垂れておく。)

胴前へなにとて松は　千代をさかゆる〳〵　ハイ　オモシロエヘ

へあつまりたまへ八百の神々〳〵　〃

へまうすごきとうはかなふなるもの〳〵　〃

次に太力男の命が

手力男へ天の岩戸ひらくればェヘ

と叫びつゝ進み出て、幕を開き、先に掛けておいた帶を以て幕を絞り上げると、中に鬘・かんざし・女面・振袖・扇の天照大神を中央に、その左右に兜・神面・千早・袴の天思兼命及び天津兒屋根命が、各々弓矢を持つて床几に腰をかけてゐる。手力男命はもとの位置にかへり、鈿女命はなほゆるく舞つてゐる。

胴前へ岩戸出し、光のかげをもかはらねど〳〵　しりくめ繩のしるしなるもの〳〵　エヘハイ　オモシロエヘ

へ岩戸をあけし神のいきほひ　エヘハイ　オモシロエヘ

と、こゝで舞臺の兩神は面をとり、鈿女命も面と千早とをとり、幕内の神の一人も同じく面をとつて交り、こゝにこれら四人が舞臺に向ひ合ひに座し、やがてくづしの御神樂を舞ふ。

場所をかへ、足踏あり、その場にめぐり、幕に向つて右手向の四人縱一列となり、四方に分れ、その場にめぐつて正面向の縱一列になり、四方に分れ、同樣、幕に向つて左縱一列、次に同樣幕向の一列になる。タタタを踏むことあり、これで幕を下げる。四人は中腰にその場にめぐり、翁であつた者は胴前に、他の三人は幕前に振あり、三人は左右に拜して入ると、翁であつた者のみが後に殘り、なほ一振あつて入る。約二十七分。尙鈿女命は全然出ないこともあるといふ。

くづし舞の歌

胴前へ調子をそろへ　うたをこそこへ〳〵　エヘハイオモシロエヘ

へ七重の雲をあけてでらさむ〳〵　〃

へいづれの神はすがたなるもの〳〵　〃

へなにとて松は千代をさかゆる〳〵　〃

へぎをむの神と名をばよばれむ〳〵　〃

よねづくらひ

胴前へこのみかぐらはゆらいあるもの〳〵　〃

へこひぞつもりてふちとなるらむ〳〵　〃

異傳　(一)黑森神樂には、長さ一尺、直徑七分の黑塗の軸に卷きつけられた卷物があり、その裏書に「神道大社敎黑森神樂講社社長權大講義藤原朝臣昌諄謹寫」と誌され、神樂の折にこの卷物を持つて歩いたと言つてゐるが、これに書きつけられてゐたのが「巖戸開ノ辭」と題するこの語りであつた。これは岳本のものに殆ど同じであつたが、尙この卷物には「巖戸開ノ辭」の次に、「御神樂由來」と題する、「神代ノ昔高天原無月夕須佐之男命天照大御神ヲ云々」と書出した同樣の文があつた。又上坂氏本にも「ゆはとののりさんばミかぐら」と題する大筋右の辭に同じものが誌されてゐた。

(二)同じ黑森の流でも、下岩泉の詞章がやゝ變つてゐた。これは左の如くである。

岩戸開詞　(下岩泉本)

天明と、天地岩戸を立出て、神子舞仕ル、抑敬白奉、昔方、大白靈乃祭トハ、我が要也、衆生利益の、ために、衆身を白く顯すなり、此島が、泥の海となりし時、天の遥ぼこ、取をろし、日本六十餘州と、書印、其時、能印權現杯者、日本山々嶽々、山の星情(ゆかたち、二三行分略して不載)御眼をさまさせ(同上)

御悅の御託宣たれたもふ。

應々東方ヲ、稻荷ト云風吹來て、大日靈の聲を、吹さらはんトかやのふ、應々南方ヲ稻荷と云鋼降り來て大日靈の聲を切拂はんトかやのふ、辭拾武人の、神樂男、八人の八乙女を以て、天の岩戸に相詰、七日七夜の御神樂を上させ給バ、其時戸隱大明神、石の戸びらへ、手を置て、ふいやつと引たふし、尾張の國熱田が浦ゐなげさせ給バ、花の城土ト成り給ふ。

○神謠に曰

△天明と　天の岩戸を押開き、謠バ開く、天の岩戸

△月ト日ト二体の法を豪に、月こそ登りて闇を照しやう。

○あら難有や、五社の大明神の、御神樂、大日靈の聲の御託宣に依而、今ハ後は神明を信仰仕、神明を信仰の、霊ゐ諸願成就、家内安全、息災安穩のために、力社の、大明神、御神樂諸願成就とおんバやし、御聽もん

(三)和野では、はじめ狩二人が出て舞ひ、これが入ると女神一柱が出る。次に荒形(太力男)が出て舞つてゐると、女神が蛇になつて顏を出す。荒形がこれを退治して、舞下りを舞つて入る。次にみかぐらとなり、荒形一人、春日、八幡、黑面の三番叟の都合四體が出る。岩戸開の祝詞あり、途中で天照大神が出、皆々大神を中に圍んで舞ふといふ。右はどうやら嚴水樂と岩戸開とが一つになつたものらしい。

(四)小鎧では清祓の舞が濟むと、舞人は「次なるは岩戸入」と言葉をかけて入る。間もなく、「八雲立、出雲八重垣」の歌で、二人の命が出る。この二人が神歌をかけて舞ふ。次に太力男が出て、「よもの神々あつめば

やと存ずる」と言ひ、「今出てくるのは天の兒屋根・太玉、鈿女、思兼」と一々紹介する。次に岩戸開ののりとがあり、祝ひの歌として

〈東より小松のかげよりいづる日は　東は淨土、西は極樂

〈けさの日は　こがねにましたる朝日かな　七重の雲を分けて照らそう

〈月も日も　西には西にとおいれある　西にもやらう　こゝもてらそう

等の神歌がかゝり、皆々は舞臺を大まはりにめぐつて入る。次に鳥舞になり、この鳥舞が入ると、須佐男命や稻田姫が出て、以下大蛇退治の舞になるといふ。

(五)遠野では、清祓、岩戸開、鳥舞が一諸になつてゐることは「清祓」や「鳥舞」の項で述べた通りである。八幡神樂及野崎神樂の演じた所によると、「清祓」を舞つて荒面の者が幕間に立つと、そのまゝ「鄕々神世と申率は」以下の語りになり、荒面の者はこれを語り終へてそのまゝ入つた。これが岩戸開であるといふ。これは語りものとしての岩戸開の、却つて古風を行くものであらう。

(六)番樂の二階では、はじめ二人が出て舞ひ、次に沙門が出、次に女面の者が出て舞ふといふ。左に二階本の詞章を誌しておく。

岩　戸　開　(二階本)

幕出〈東山こまつかきわけ、いづる日ハ、神代の春の始なり。

あさ姫の〳〵　てらし始むる國土にハ、四方の神〳〵舞ひ遊ぶ、四方の神々あそぶらむ。

沙門〈おふこ、御前にまかり出たる者をハ、いかなる者そと思召す、我ハ是、伊弉諾、伊弉册の本地をかたる沙門にて候。

〈夫我か朝の始と申ハ、天地開闢國常立尊より相始り、天神七代伊弉諾伊弉册の尊と申奉り、二人の御神、磐座、彼の御神、一女三男有り、伊弉諾伊弉册の思よふにハ、二人の子にハ、何にをか與ひ玉ふとて、一女天照太神にハ、月日の相を與ひ玉ふ、二男素盞嗚の尊にハ、神の相をあたひ玉ふ、其時天照太神は、神の相をもつへきとて、いつに、月日の相をあたひ玉ふの無念さよとて、天の岩戸を引たてゝ神は後なくなり玉へは常夜闇の世とはやなりぬ、其時伊弉諾伊弉册ハ、こハ不思儀のことなりとて、七からの釜鬲をそなひ、圓浮壇金を以つて、廻り八尺、厚さ四寸の鏡を鑄立て見奉れハ、天照大神ハ、天の岩戸に引籠らせ玉ふなり、さらハ、神をいさめ申さんとて、八人の花の八乙女、五人の神樂をのゝ、雪の袖をかへし、木綿花をさゝげつゝ、神慮をすゝしめ奉る、されども其甲斐さらになし、八百萬神達、岩戸の前にて、是をなげき、神樂を奏して舞ひ玉へハ、あら面白やと、妙なる、御聲のきこひさせ玉ふなり、天照太神其時に、岩戸を少しひらき玉へハ、東目んで見え玉ふ、其時八人の花の八乙女、五人の神樂おのゝハ、ていとうさつ〳〵鈴のよそ聲にて、七日七夜程ハうちはやし玉へハ、天照太神戸隱の明神を近付、天の岩戸を押開き、日月ともに出させ玉へハ、又とこ闇の雲はれて、日月光り耀ハ是ぞ目出度始なり、きのふまでもけふまでも、常夜闇の世となりしもの、今日ハちとせの白妙の里と一首の哥に書ばかり、上中人のひと〳〵、御なり御しづまり有つて、能きに御聽聞候へ。

〈伊勢國、高天ヶ原に神遊、うたひばひらく、天の磐戸。

〈天の岩戸に神遊、あらはれたまふ天照太神。

三、山神舞

山伏神樂に於て、この舞を傳へてゐない所はない。又どこでもこれを式舞の中に數へて、特に重い曲としてゐる。番樂でも、大抵の所には傳へてゐた、又、この舞は、保呂羽山其他の神道の神樂にもあつて、やはり重い曲とされてゐる。

内容は、山神の本地を語り、年の豐作を祈り、惡魔を祓つて舞ふといふものらしく、足の踏み方に種々の難かしい法がある。又この舞の時には、舞人は、たとへ他の場合にはつけなくとも、手に必ず九字をつける。

古風を殘してゐる所では、最後に舞ひつゝ、幣束を家の棟に投げ上げることがある。これを御幣申し、或は幣束收めと稱し、大切な祈禱としてゐる。

〔附記〕こゝ邊では山の神を信仰すること厚く、その祭りを怠らない。十二月十二日がその祭日に當つてゐるが、當日は山神へ上げるとて、神棚に米の粉の團子十二箇を生のまゝ供へたり、一萬の人達が集り、神酒を設けて山神のお棚を拜したりする。春の山始めにも、山神に對する同樣の祭りを行ふ。

次には先づ大償の山神の舞の型を誌しておく。語りは極く簡略なものになつてゐる。

山　神　(大償本)

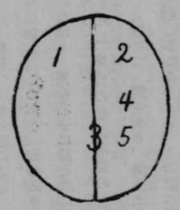
出し樂屋〈サンエ　〈エ山の神　ヨウサンエ　〈エ山の神サンヤ　ハアヨイ〳〵〳〵　イヨヨイ　ヨヨヨイ　イヨヨイ　ソコヨイ　ヨイコレサツサノヨイ

と、幕を僅かに上げて、樂屋方の足踏があり、幕を押し出すと、樂屋方と胴方との歌になる。

樂屋胴前〈センヨイほのほのと　いでてあそばむせう　サンヤ　ハアヨイ〳〵〳〵　ヨイコレサツサノヨイ

と、鳥兜・阿の面(岳では吽の面)・ぬぎだれの上に千早・袴の仕度の山神が出て、片膝を立て、片足を伸してきまり、次に立つて拜する。かくて神哥に合せ、足の踏み方が色々あつて暫く舞ふのであるが、その主要な振を誌してみると左の如くである。

(1)白米を盛つた盆をとり、舞ひつゝ米を四方に撒く。



六三の足ぶみ

(2)次に太刀の柄に手をかけ、六三の足踏あり、はじめこれを右足で、次に左足で、次に右足で、都合三度踏む。(これは法印神樂でいふ三の足である。)

(3)次に扇を開き持つて舞ふ。遠さ扇の手あり、扇の左右をとつても舞ふ。

(4)次に千早をぬぎ(中は襦袢のぬぎだれに右肩より左脇への赤の片襷)太刀の柄に手をかけて一舞あり、次に太刀を拔き、足踏みをしつゝ舞ふ。次に遠さ太刀とて、太刀を遠手にとつて舞ふ。

(5)次に幕前に後向に坐して幕を冠り、鳥兜や面をとり、しやぐま、鉢巻、直面となり、右手に鈴、左手に太刀を採つて舞ふ。太刀のぬき足である。

(6)次に太刀を置き、幣束と鈴とを左手に、扇を右手にとつて幕前に振あり、とゞ立つと樂屋の語りになる。尙、以上の舞の囃し歌は左の如くである。

胴前〈センヤエハイ　おのづがひふみしづめてサンヤ　ハアヨイ〳〵〳〵　ヨイコレサッサノヨイ　(以下囃子言葉は右に同じ)

〈さむのけはらひ　〈島をめぐれば　〈四方淨土踏みしづめて

〈九字の手よ　いつもきりくじ

〈さんぐをとり拜み申せば　四方の神々受けて喜ぶ

〈寄せ足よ〳〵　(早拍子)

〈六三な　あげて九つ踏みそめて惡魔をはらふ、不淨を守らむ　おもしろよほー

太刀のぬき足〈あくまをはらふ

次に、左の語りの間、扇をまはしつゝ色々に振かある。胴前の囃し歌には囃子がかぶせられ、舞人はその度毎に胴前に進み出て舞ひ、語りで幕前になほる。

語り樂屋〈さら〳〵と天くだります山の神、和合の利益いやましにける

胴前〈おもしろしおむ聲

樂屋〈センヤおもしろし、山の神の由來をくはしくたづぬるに、山祇の命とはみづからがこと

胴前〈おもしろしおむ聲

樂屋〈センヤおもしろしみづからは一年に一度、二年にふたゞび降るべくにてはなけれども、岳々のこしをゆうじめぐらせ給ふハみづからはこと

胴前〈おもしろしおむ聲

樂屋〈センヤおもしろし、すわ盜賊の難、太刀打流矢來つて見ゆるとも、今日(夜神樂の折は今夜)まつらせ給ふ大旦那小旦那の御祈禱にあいちかつてとらすべし

と、扇をつぼめて腰にさし、鈴を右手に、幣(麻)を左手にとつて色々に舞ふ。この舞を、麻のぬき足、三下り、麻打ち等と稱す。次に胴前になほり、幣を右手に鈴と共に持ち、左手は腰にして

舞人のかけうた〈萬代の松の落葉のかげしげみ

と歌ひつゝ幣を振り、跳び上り、その場にめぐり、幣を右に左に立てる樣な振がある。と、この歌の後を胴取が受けて、

胴前〈君をぞ祈る常磐堅磐に〳〵

と歌ふ。その囃子がある間、舞人は足踏をし、又跳上つては幣を右に左に立てる樣に振があつて舞ふ。次も同樣である。

舞人〈榊とる　み山の奥に遠ければ

胴前〈このぬさぐさに神のまします〳〵

舞人〈東方にはあきふさがりはなきものを

胴前〈いりさせたまへひめむつの神〳〵

舞人〈山の神は、育つはいづくと人問はゞ

胴前〈とやまがさきの榊葉のもと

と、よねづくらひといふ振になり、

胴前〈ぬさたつるこゝも高天の原なればく〳〵　集りたまへ、八百の神々　エヘハイオモシロエヘ

〈とやまがさきのさかきばのもと〳〵エヘ、ハイオモシロエヘ

と、こゝで扇を開き、これを左手に、鈴を右手に持ち、拍子が變ると共に、舞あり、四方を拜し、陰の足踏(はじめ爪先をつけ、次に踵をつける)があつて坐し、次に扇の上に幣を乘せ、左右に拜して入る。約三十六分のものであつた。

異傳　(一)觀萬寺では、ざい・赤面・前十字の襷掛・ぬきだれ・袴の支度で出る。舞ひ方にも小異があつた。即ちその大要は左の如くである。持物がない時には手に印を結んで舞ふ。

(1)左・右・左の六三の足踏。(2)米を撒くゞ(3)扇舞。(4)太刀舞。(5)面をとる。(6)右手に鈴、左手に太刀をとつて舞ふ。(7)二本太刀の舞。

(二)黑森諸本では、雲綿のが比較的とゝのつて居り、語りも詳しい。雲綿でもこの舞を重いものとし、この舞が濟むまでは婦人は神樂を見ることが出來ないとされてゐた。少くとも、この舞が出る折には、婦人には退いてもらつた樣である。次にこの詞章を誌しておく。

山の神のほうがい(雲綿本)

一かんごえ　山の神

一まく出　山の神　山の神　さいやー

一面白し　面白し　千夜　面白し　面白し　面白し　千夜　面白し

されば山の神の御本地を、くわしくたづねあらはし申に、もとは是、面白し　面白し　千夜　面白し

されば山の神の父親の御神名をば、ならば大王と申也、母親の御神名をば、金毘羅歳義ごぜんと申也、面白し面白し　千夜面白し

かれこれ御ふさいとさため、山々嶽々のみやうぢしたもうほとの目出度さよ、面白し面白し　千夜面白し

されば山の神は、十二人の御子をもたせ給が、十貳人の御子に、十貳の御神名をつけさせ給ほとの目出度さよ、面白し面白し　千夜面白し

まんつ太良ハ子、治良ハ丑、三良は寅、四良ハ卯、五良辰、六良ハ巳、七良ハ午、八良ハ未、九良ハ申、十良ハ酉、戌、亥とて、十貳の御子に十貳のほうをゆんつり奉、面白し、面白し、千夜面白し

我は是、川にかんび、かけをうつすべき身てハなけれとも、このとの、あめがふせやの、中の間に、面白し面白し、千夜面白し

壹年に壹度、貳年ニ貳度、三年に三度ばし神をしやうじ入れ申ほとの目出たさよ、面白し面白し　千夜面白し

いかならんめう、ほうさん、ものいもないし、そんち、ちゆうよう、ことなく、やんもう、やくなんごと、なく、たちうちかたなに、ゆやのこころを、きたんて、めぐれとも、あいし、しそいて、とらすべし面白し面白し、千夜面白し

夜のおとろき事無、晝のさわき事無、順の枕にかしぶき無、ますみの鏡にくもり無、箱にちり無、からのようどうおたやかに、百貳十四年の間壽命息災安穩と、守てとらすべし、是てよくよく、心みたまいば、たいたんなよう。

はつれう、山の神、そたつわいつくて、おく山てよう、とやまがさきの榊ばかもとよー。

三九五 ばつれう、しらたいをもては納ル長のみかぐら、長納たりわ、長のみ神樂、長のみかぐらよう

はつれう、東方南方西方北方中央げかいに、いんもうには、あけふさがれば、きらざるもの、向ふ矢先悪魔たまらつ、悪魔たまらつよー

尙、畳綿には左の樣な舞の順序があつた。

幕の内、出端、舞九字、立なほり、にはおひ（下岩泉では＝ハヲリと云ふ）、庭廻り（「にはめぐれ」の掛聲がかゝる）、順逆（「左よりめぐれ」「右よりめぐれ」の掛聲がかゝる）、寅ばせろ、九字の手、早口、六三の足、三の足、鶏とさぎ足（下岩泉では鶏ノさけ足といふ）、おがみ手、とりかへし、わがほう、さごの手、つくばよね（下岩泉本にはなほ、にわハリ、兩返し、駒のおりひざ、四方淨土、ヲサメヲゲ等の名稱が見えてゐる。）

右の六三はヘンバイ足（踵をつけ、次に爪先を下す）を九つに踏むものであつた。（黒森の方では五つに踏むがこちらでは九つに踏むといふ）又、三の足は、六三の半分に踏むとも言はれ、これらはやはり右、左、右と踏まれる。

この山神舞の折に、畳綿では特にじんばい或はけんばいといふのを踏むことがある。これを踏めば、その場所には三年間草木が生えないと言はれ又踏み損ふと足が折れるとも言はれてゐる。それで神樂には滅多に踏まず是だけを師匠の者が、病人の祈禱等の折に、劔を抜いて踏んだ。又九字の足の踏み方も秘傳で、滅多に人には許さなかつたと云ふが、鈴木翁が特に型を示して下すつた所によると、これは筑前京都郡の岩戸神樂の五行の舞のうちの「八專の地割」に踏まれるけんばい、又陸前の法印神樂でいふキリの足等の踏み方（はじめ踵をつけ、後爪先をつける）を以て、九つに踏むのであつた。

尙、この舞の舞下りの段になると、人々は撞て用意の、米の中に一厘錢を入れたものを一握み、散供（さんく）と稱して舞庭に向つて撒いたものであるが、これらの多くは舞臺にとゞかず、見物同志の間に落ちた。皆々はこれを爭つて拾ひ集め、米は後で御飯に入れて炊き、一厘錢はお守りにしたといふ。

（三）田子ではこの舞の折、榊（實は桃の枝で、南方にさした枝をとつてつくる。その長さは二尺五寸と定つてゐたらしい。）を家の棟に投げ上げることがある。但しこれは、餘程度胸のいゝ人でないとしない。即ち榊が收まれば、その家では酒を買つて祝ふ。收まるものは一度で收まり、一度で收まらないものは、幾度やつても收まらないといふ。收まらないのは凶とされてゐる。この舞に限つて大抵午前中に舞はれる。詞章はこれまでのと異つてゐるところがあるので、左に誌しておく。

山之神　宮舞　榊葉共（田子本）

三九六 榊取　榊の御山と問げれバ　外山がさきの榊葉がもと

御本神祭文之哥

さら〳〵と沖來る涙にこと問はよう

さればとよ　浪は早かれ　磯は靜かなりよう

○山之神の御本神よバ委敷讀上奉るよう

○山の神の御父のおみなよバ　ならば大王と申奉よう

○山の神の御母の御身名よバ金毘羅大御前と申奉るよう

○山の神と申は勢大く足高く色白く、はら廣く、抑も人間に似てましますよう

○山の神の御平產とありし時、山はどこ山奥の山外、山か崎の小笹の根にて御平產あるそよう

○十二人の盞子を設け持せ給ふなりよふ

○產湯とてありし時、朝の露を集めて、白銀の葉蔵に小金の柄杓で熱きぬるきをうめ合せて產湯かけさせ給ふなりよう

○產飯とてありし時、粟のよねを三石三斗、米のよねを三石三斗、合せて六石六斗の其の米を、產飯と奉るよう

○產衣とてありし時、綾千疋、錦千疋、綾錦袖にて九尋、半背立にて十二尋、半疋の針迚三針はり中つけさせ給ふなりよう

○產名とありし時、先づ一番に太郎王子よバ子丑寅卯辰巳午迄つけさせ給ふなりよう

○二番に次郎王子よバ、未申酉戌亥迄つけさせ給ふなりよう

○十二人のおん子に十二の山を分け渡し與い取らするそよう

第六十一圖　中野の山神舞（北村古心氏寄贈）

○御み抜に、あれたる外堂は有つて、參る驚者を歳一年に一度（たび）二年に二度仇をなすとよ

○此家の大旦那の中の伏せ屋の間に來るとも其上棟に來ると見る共、立折刀つげ爲法師の政り事何事も悪しき事も能き事と相違いて守らするよう

○ハイサ、　開塞てあるとも、重くとも、輕くの誓、此の榊葉よう

榊を登せて見れば、三の山を戴いて、旦那を守る不代の神、旦那繁昌家内安全當所繁昌、子孫繁榮、息災延命と敬て白す。

（四）葛巻では、この舞に限つて大抵神樂のあつた翌朝のお舞立になる前に即ち午前中に舞ふものとされてゐた。この舞を舞ふには約一時間を要した。この間は、この座にゐるものは、膝も崩してはいけないとされてゐた。

はじめ山神は面をつけずに出、次につけて舞ひ、又とつて舞ふ。この間に、米をまくこと、特殊な、七五三の踏方をすること等があり、最後に、背中に背負つてゐに、やはりさかきと稱せられてゐた桃の枝をとつて、拍子にかゝつて屋の棟に投げ上げ、これを屋根裏に突きさす。この附近には所々に、この桃の枝のさゝつてゐる家が、今もあるとのことである。この桃の枝は、やはり二尺五寸長さのもので、これに二尺長さの四垂をつける。その先は燒いて、二寸位の所を鋏く研いでおく。仕損じても、三度まではやりなほすことが出來たが、それでも落ちると「さかき收まらず」と言つて、

ばつれう、しらたいをもては納ル長のみかぐら、長納たりわ、長のみ神樂、長のみかぐらよう

はつれう、東方南方西方北方中央けかいに、いんもうには、あけふさかれば、きらざるもの、向ふ矢先悪魔たまらつ、悪魔たまらつよー

尚、髪絹には左の様な舞の順序があつた。

幕の内、出端、舞九字、立たほり、にはおひ（下岩泉では＝ハツリと云ふ）、座廻り（「にはめぐれ」の掛詞がかゝる）、順逆（「左よりめぐれ」「右よりめぐれ」の掛詞がかゝる）、寅ばせろ、九字の手、早日、六三の足、三の足、鶴とさき足（下岩泉では鶴ノさけ足といふ）、おがみ手、とりかへし、わがほう、さゝの手、つくばはね（下岩泉本にはなほ、にわハリ、雨返し、駒のおりひざ、四方浄土、ノサメノゲ等の名稱が見えてゐる。）

右の六三はヘンバイ足（跡をつけ、次に爪先を下す）を九つに踏むものであつた（聖森の方では五つに踏むがこちらでは九つに踏なといふ）又、三の足は、六三の半分に踏むとも言はれ、これらはやはり右、左、右と踏まれる。

この山神舞の折に、髪絹では特にじんばい或はけんばいといふのを踏むことがある。これを踏めば、その場所には三年間草木が生えないと言はれ又踏み損ふと足が折れるとも言はれてゐる。それで神樂には減多に踏まず是だけを師匠の者等、病人の所謂等の折に、鉢を抜いて踏んだ。又九字の足の踏み方も秘傳で、減多に人には許さなかつたと云ふが、鈴木管が持に制を示して下すつた所によると、これは筑前京都郡の岩戸神樂の五行の舞のうちの「八專の地割」に踏まれるけんばい、又陸前の法印神樂でいふキリの足等の踏み方（はごめ跡をつけ、後爪先をつける）を以て、九つに踏むのであつた。

尚、この舞の舞下りの段になると、人々は榊で用意の、米の中に一厘錢を入れたものを一握み、散供と稱して舞庭に向つて撒いたものであるが、これらの多くは舞楽にとゞかず、見物同志の間に落ちた。皆々はこれを拾つて拾ひ集め、米は後で御度に入れて炊き、一厘錢はお守りにしたといふ。

（十）田子ではこの舞の折、榊（實は桃の枝で、南方にさした枝をとつてつくる。その長さは二尺五寸と定つてゐたらしい。）を家の棟に投げ上げることがある。但しこれは、餘程度胸のいゝ人でないとしない。即ち榊が取まれば、その家では酒を買つて祝ふ。取まるものは一度で取まり、一度で取まらないものは、幾度やつても取まらないといふ。取まらないのは因とされてゐる。この舞に限つて大抵午前中に舞はれる。詞章はこれまでのと異つてゐるところがあるので、左に誌しておく。

山之神　宮舞　榊葉共（田子本）

榊取　榊の御山と問ければ　外山がさきの榊葉かもと

即本神祭文之哥

さゝ〳〵と神來る涙にこと問はよう

さればとよ　涙は早かれ　魂は静かなりよう

○山之神の御本神よバ委敷讃上奉るよう

○山の神の御父のおみなよバ　ならば大上と申奉よう

○山の神の御母の御身名よバ金毘羅大御前と申奉るよう

○山の神と申は勢大く足高く色白く、はら廣く、抑も人間に似てましますよう

○山の神の御平産とありし時、山はどこ山裏の山外、山か崎の小笹の根にて御平産あるそよう

○十二人の盞子を設け持せ給ふたりよふ

○産湯とてありし時、朝の露を集めて、白銀の葉版に小金の柄杓で掬きぬるきをうめ合せて産湯かけさせ給ふなりよう

○産飯とてありし時、粟のよねを三石三斗、米のよねを三石三斗、合せて六石六斗の其の米を、産飯と奉るよう

○産衣とてありし時、綾千疋、錦千疋、綾錦袖にて九尋、半青立にて十二尋、半親の針迚三針はり申つけさせ給ふなりよう

○産名とありし時、先づ一番に太郎王子よバ子丑寅卯辰巳午迄つけさせ給ふなりよう

○二番に次郎王子よバ、未申酉戌亥迄つけさせ給ふなりよう

○十二人のおん子に十二の山を分け渡し與い取らするそよう

第六十一圖　中野の山神舞（北村古心氏寄贈）

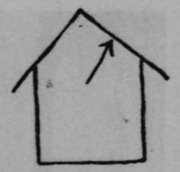
○御み抜に、あれたる外堂は右つて、受る驚者を歳一年に一度（たゞ）二年に二度仇をなすとよ

○此家の大旦那の中の伏せ屋の間に來るとも其上棟に來ると見る共、立折刀つげ爲法師の政り事何事も悪しき事も能き事と相違いて守らするよう

○ハイサ、　開來てあるとも、重くとも、輕くの誓、此の榊葉よう

榊を登せて見れば、三の山を戴いて、旦那を守る不代の神、旦那繁昌家内安全富所繁昌、子孫繁榮、息災延命と敬て白す。

（四）蒐卷では、この舞に限つて大抵神樂のあつた翌朝のお舞立になる前に即ち午前中に舞ふものとされてゐた。この舞を舞ふには約一時間を要した。この間は、この座にゐるものは、膝も崩してはいけないとされてゐた。はじめ山神は面をつけずに出、次につけて舞ひ、又とつて舞ふ。この間に、米をまくこと、特殊な、七五三の踏方をすること等があり、最後に、背中に背負つてゐに、やはりさかきと稱せられてゐた桃の枝をとつて、拍子にかゝつて屋の棟に投げ上げ、これを屋根裏に突きさす。この附近には所々に、この桃の枝のさゝつてゐる家が、今もあるとのことである。この桃の枝は、やはり二尺五寸長さのもので、これに二尺長さの四乘をつける。その先は燒いて、二寸位の所を鋭く研いでおく。仕損じても、三度まではやりなほすことが出來たが、それでも落ちると「さかき取まらず」と言つて、



これは何かの不幸の前兆である樣に考へられてゐた。

(四四) 小中野ではやはり兜を冠るといふが、中野ではかぶらない。鉢卷に面の支度で出、後にはその面もとる。中切後に米を撒き、最後に榊の木の幣束を投げる。別に山神幣を持つて舞ふこともある。

(寫眞第六十一圖に見る中野の山神のこの支度は、小山の神のそれと混同してゐるのではないかと思ふ。)

(四五) 荒澤の台本には「山神舞」と名稱のみ見えて「山之神舞神唄略是ニ」とあり、詞章は誌されてなかつた。鳥兜、直面、襷袢、袴、幣束、太刀二本の支度の者が舞ふ。舞ふ前に鹽と水と米とを撒くことがある。

(四六) 興屋でも同樣の支度に蓆をかけた者が太刀を二本とつて出て、四方固めをしてから宙返り等をするといふ。台本にはたゞ「さいやふ　山の神、やまてそたつハ山のかみさいやふ」とのみあつた。

(四七) 富根では幾日か演ずるうちの最後の日の最後に舞はれる。鳥兜、直面、黑襷の仕度に、太刀を兩方にさして出る。鹽を入れた盆を持つて、舞ひ方色々あり、とゞ鹽を撒く。場所を淸めるのであるといふ。

(四八) 比立内ではやはり最後に演ずるので、しめきりとも言ふ。(注連を切るわけではない) ぬぎだれ、千早、指に力紙、錫杖、扇の支度に、米を入れた盆を持つて舞ひ、米を撒き、又そのまゝ「盆舞」をする。

(四九) 上母饅でも最後に舞ふ。幸屋淺では、山の字に諸むことがあるといふ。

(五〇) 山谷ではたゞ「武士舞」と言つてゐた。新藥祝等には、やはり榊の枝に四垂をつけたものを、家の棟に投げ上げる。

(五一) 石神でも、この舞だけは畫演ずる。何か所願がある時や、山の神祭り等に特に演ずるといふ。鉢卷、直面、ぬぎだれ、袴、扇、錫杖の支度の者が出て、樹に米を入れて持ち、これを撒き、又鹽と水とを入れたものや、御神酒を入れたものなどを持つて舞ふ。六三、五調子等の諸み方あり、最後に幣束に御神酒をひたして持ち、これを舞の拍子にのせて家の棟に投げ上げる。

三、榊　葉

黑森派のもの、及び中妻に傳へてゐる。これは言はゞ山神舞の異傳、若しくはその替の型ともいふべきものであらうが、(田子ではその異名の樣に考へてゐる) 黑森、中妻共に兩者を合せ傳へてゐる所を見れば、別曲としておいていゝかと思ふ。(黑森では榊迎とも榊舞とも言ふ。)

黑森の舞ひ方は左の如くである。

鳥兜・直面・ぬぎだれ・襷・廣帶・袴・白足袋の支度の者が、扇と鈴とを右手に、幣を左手に採つて出て神前に拜し、一舞あり、次に幣を胴のしらべ糸にさして、扇と鈴とで舞ひ、次に扇を右手に、左手は袂をとつて舞ひ、次に幣と鈴と扇とで舞ひ、次に鈴と幣とで舞ひ、次に幣のみで舞ふ。かくて再び神前に拜し、扇を開いて持ち、鹽を振り、錫杖で神酒を胴に捧げ、又鹽を振り、拍手し、拜し、又立つて一舞ある。次に幣をとり、胴方に拜し、神前に拜する。これは黑森派の、幣を屋の棟に上げる舞ではないかと思ふ。その神哥は左の如くである。(口承による。)

(五二) 榊葉に　いふとりして、きりむすぶ、身にはけがれの雲霧もなし

(五三) はらうには　あきふさがりにきらいなく　向ふ矢先に惡魔たまらん

(五四) 扇取り、鈴取り添へて拜むれば、拜めや神も　利生あるもの

(五五) 渡さばや　雲にかけはし渡さばやと〳〵

(五六) 諸鈴を　手にとり持ちて拜むには　拜めば神も　利生あるもの

(五七) 法華經や　よまりし法華經　貴とさよ〳〵

(五八) 榊葉を　のぼせてみれや　みづの山　日那繁昌と祝ひ申せば

異傳 (一) この舞は、和野、雲綿其他にも、山神舞と共に傳へられてゐる。和野では、鳥兜、襷袢、ぬぎだれ、袴の支度のもの一人が、右手に錫杖と扇、左手に幣束を持つて舞ふ。長い骨の折れる舞であるといふ。神哥がある。

(二) 雲綿や大川のも同上の支度で、持物も同じである。雲綿では、一人若しくは二人や三人でも舞ふといふ。

(三) 中妻本にも、同樣の神歌が誌されてゐるに過ぎない。

四、小山の神

小山の神は、山神の裏舞として舞はれてゐる。山神舞を一寸簡單にした樣な舞ひ方である。道化化したものとも言ふ。羽山本に誌されてゐる詞章は左の如くである。

(五九) 小山の神（羽山本）

さら〳〵と天降りますあめのみや　和光の利益いやまさりけり

さんや面白し　小山の神の由來を委敷尋ぬるに　いろよきかだちこふらいのごん社面白し、さんやあやにます大山の神は三貫三百三十三文、小山の神ハ貝の三文

(旭又本には「大山の神にハ三百三十三文、此小山の神には御酒三盃」とあり。)

異傳 (一) 大貢では、ざい、道化面、ぬぎだれ、千早、襷、裁著、脚袢の支度の者が、手に九字をし、扇、鈴木、麻太刀等をとつて舞ふ。はじめ米を撒くとて、自分が噛んでから撒き、少し滑稽に六三を踏み、扇舞が濟んで千早をとり、太刀舞になるが、太刀がすぐには拔けない滑稽等がある。その後、語りになる。

(二) 幸田では非常に滑稽に舞ふといふ。ざい、口の尖つた道化面、ぬぎだれ、千早、襷、ふんごみ、脚袢の支度に瓢を腰に下げて出るが、この瓢が道化の材料にもなる。又噛差を拔くとき、その緒を解かずに足をかけて引くので、切れて拔けける。これが四五寸長さの陽物であつたりする。散供、幣束舞等、大鹿山の神舞と同樣に舞ふ。

(三) 和野でも、スリコギ棒樣のものを、腰に太刀の樣にさして舞ふといふ。

(四) 遠野野崎のものが、實演に接し得た唯一のものであつたが、これは「山男〳〵さんやー」といふ暴出しで出、一舞あつて後面をとり、無手、扇、太刀、二本太刀等によつて色々に舞ふものであつた。

五、八幡舞

八幡神の由來をたづね、弓矢の神德をたゝへ、四方若しくは五方に矢を射るといふのであるが、やはり惡魔拂の祈禱の舞とされて居り、その分布も廣い。大償のは左の如くである。

八幡舞（大償本）

樂屋で笛の合圖があると、幕出しなしに、直ちに囃子がはじまり、舞人二人が出る。烏兜、直面、ぬきだれ、片襷、袴の支度、弓を持ち、矢を二本さす。一舞ひあり、

胴前（四〇二）〈八幡宮は　ゐがきのうちに弓はりて〳〵　四方矢さきに惡魔射おろす〳〵　ハエオモシロエヘ　ホラエ

〈いづれの神はすがたなるもの〳〵　ハエオモシロエヘ　ホラエ

と、次に扇を右手に開き持つて舞ひ、次に別に左手に弓と鈴とを持つて舞ふ。

からみくづし　〈調子をそろへ　歌をこそこへ〳〵　ハエオモシロエ〉

〈七重の雲はあけてططらさむ〳〵　〃

〈千代ふる神はこゝはあはいこと〳〵　〃

と、早拍子のぬき足を舞ひ終へて向ひ合に坐すと、樂屋の語りになる。樂屋〈さら〳〵と天降りますやはた神和合のりやくいやましにける

胴前〈おもしろしおんぜい（と囃子が入り、又やむ）

樂屋〈センヤおもしろし、八幡大神の由來をくはしくたづぬるに、應神天皇とは、宇佐神社なるを以て、八幡大神とは自らはこと

と囃子になり、立つて、弓を左に、矢を右に持ち、同樣早拍子に舞ふ。

さうして烏兜の垂をしきりに上げる。

舞人〈八幡大神弓矢をつがへ

胴前〈四方矢先に惡魔射おとす　エヘハイオモシロエヘ（繰返す）

と、この歌のうちに矢を東西に、又南北に射る。

次に坐し、扇を開いて左手に、鈴を右手に持ち、兩人は並んで四方に拜し、扇をつぼめ、これを一文字にして左右に拜して入る。約十五分の舞であつた。

よねづくらひ

胴前（四〇三）〈ほそく立つ　富士の煙につながれて〳〵　流れもやらぬ浮きるしまかな〳〵

〈集りたまへ　八百の神々〳〵

異傳　（一）岳のは大償のと同樣であるが、圓萬寺のには、舞にも詞章にも小異があつた。卽ち言立の前半は後から入れ換へたものらしく、これは謠曲「弓八幡」のはじめの上歌が取られて、それが崩れたまゝになつてゐるものであつた。烏兜・面・ぬきだれ・襷・袴の者が二人、弓を腰にし、扇をとつて相續いて出、向ひ合ひになり、扇を合せ、入れ代るとすぐ言立になる。この言立の間に、謠に合せて三の足を左右左と踏むことがあり、後扇を振りつゝめぐつて場所をかへる。次に言立が濟むと兩人は幕向に坐して面をとり、次に鈴を右手に、弓を左手に持つて向ひ合に舞ふ。この舞の間に矢を射ることあり、次に兩人は並んで四方を拜することあり、次に又向ひ合ひに、扇と鈴とで舞ふ。

六、自讃弓

八幡の裏舞に、大償では裏八幡、若しくは自讃弓（地讃めカ）と稱する舞を舞ふ。舞ひ方は大體表八幡とも同樣らしいが、これは古曲であらう。詞章に、興屋及荒澤番樂の「地神舞」のそれに似た一節がある。

自讃弓（大償本）

裝束＝兜、ぬきだれ、前帶、袴。持物＝扇、鈴木、弓矢。

樂屋の笛の合圖で胴前の囃子があり、やがて舞手二人が出て向ひ合に坐し、拍子を聞いて適當の所より舞ひ出す。

胴前（四〇四）〈やはた山　ゐがきのうちに弓張りて〳〵　四方矢さきに惡魔射おとす〳〵エヘ

〈なにとて松は千代をさかゆる〳〵

からめくづし

〈ちようしをそろへうたをこそこへ〳〵

〈七重の雲はあけてططらさむ〳〵

〈こひぞつもりてふちとなるらむ〳〵

〈千代ふる神はこゝはまへとぞ〳〵

ぬき足（扇・鈴木）舞の切り

樂屋〈さら〳〵と下り給ふハ　あやにます、色よきを飾り、齊來のおむ座面白し。

胴前〈面白しおむ聲

樂屋〈大乘示現の世の始めゝ〳〵　この地を一度踏む人は、三千歲まで榮えたり〳〵

南殿を守るハ八咫烏、佛法弘むるその地にハ、らつかいかくる族をたて、日天しやごの玉をふりそふ〳〵

抑〻武者を繪にかゝば、田名邊の五太夫繪にかけや、しほうや內の宮、三島の明神きにつめやとおむそへたまふには、惡魔をはらふ神器には、弓矢にしくはなきものよ〳〵

弓には桃の木の弓、弦には松の葉と杉の葉をより合はせて弦にかけ、矢には北野のよしではいだりしは、惡魔をはらふ寶には、弓矢に如くはなきものよ〳〵　惡魔をはらふ不淨を護らむ〳〵エヘハイ　オモシロエヘ

ぬき足（早拍子）

舞人〈惡魔をはらふたからには、弓矢にしくはなきものよ〳〵

胴前〈惡魔をはらふ　不淨をまもらむエヘハイ　オモシロエヘ

以上を繰返す、この折矢を躬る。

胴前へほのぼのとほめてたてたる内裏かな〳〵　四〇五　エヘヨイヨヽイヨイ〳〵　ヤアヘエ　内裏の上に黄金花咲く〳〵エヘ　ハイオモシロエヘ　（と幕に入る）

旭又では表舞同樣の支度の者が四人出て舞ひ、やはり弓を射るといふ。

七、三社舞

中妻本にあり。「岩戸開きせざる時ハ三社舞と申て三人にて御神樂のひやうしにていつしよに立てまふ」とあれば、大體はみかぐら舞であらうが、弓矢を持つ點や、神歌等から察して、先の八幡舞と同樣のものと考へてよいらしい。

三　社　舞（中妻本）

一かく出歌へありかたや　四〇六　三社の神は舞遊ふ　あし原國ハ豐なるへし

一八幡山　守かきの氏のゆゝ持しやさきにあくまたまらじ

一春日山國も豐の春日山　國もゆたかの神そまし〳〵

傳　アトハそてかさ斗りぬきてゝな御神樂手のこらす末迄舞へし　色々口

一八幡山　四〇七　守かけのうしの八重樓　花はちるとも　内こもらさし

これハかく出し

始に扇子の手、鈴の手迄ハ弓と矢を以て舞ふへし、次にハ扇子と鈴にて御神樂の手を末迄舞

葛卷にも似よりの舞あり、こゝでは、鳥兜二人の者が弓矢をとつて舞つたといふ。

八、小弓の舞

山伏神樂の八幡舞に當るものを、番樂では小弓の舞といひ、鳥海山の北麓にこれを傳へてゐる。

荒澤では、しやぐま・襦袢・褌・袴の支度の者が、弓矢を持ち、二人で舞ふ。惡魔拂の舞であるといふ。坂の下では、兜、鎧の者二人が弓矢を持つて舞ふ。次には興屋の詞章を誌す。

小　弓　舞（興屋本）

幕掛　四〇八　七日能、七日能々七日能、はまのまさごの數よりも、なほ久しきの神のみよかな、おんもしろや、よんもの神々集りたんまい面白やあん

舞哥　はいやふ、八幡殿ハ弓ニ上手の神なれば、柳のうらをまどとしてや、おれハいれ共、また柳本や〳〵

同哥　はゑや、八幡殿ハ、弓と矢とすゞを手にもち舞なれバや、いかなる神もうけてよろこぶ〳〵やふ

弓射歌　はゑや東方より來る惡魔に、矢先揃へて射拂へばや、何拂おふや、げどふ拂おふや、むごふ矢先ニ惡魔來らず、惡魔かよはず

此哥東方南方西方北方天地也

こちよしん　さんばそふひよし　五ひよし

異傳　小瀧に傳へてゐる「トンボウ」といふ舞は、變つた型を持つてはゐるが、他で言ふ「小弓の舞」であつたと思ふ。トンボウは東方かと思ふが、西方も南方も北方もないのは恐らく、崩れてゐるのであらう。これは「東方より來る惡魔に」（興屋・二階）であつたと思ふ。烏兜、襦袢、褌、袴のもの二人が出て、向ひ合つて舞ふ。手に弓と妹張（はゞはり）、或は矢を持つ。直面が正しいと言ふが、實演には男女の面を冠つた。凡て地拍子で舞ふ。靜かな舞であつた。各座に反閉樣の踏み方がある。

トンボウ

△かさゝぎのハエー　四〇九　わたせる橋にハエー　おく霜のハエー　白きを見ればハエー　夜ぞふけにけるハエー

△奥山にハエー　四一〇　紅葉ふみわけハエー　鳴く鹿のハエー　聲聞く時ぞハエー　秋は悲しきハエー

「ふみわけ」は舞の手の踏み分けにも通じ、かく歌ひ、その場にめぐつてはトン〳〵〳〵と踏み分けつゝ次の座に移る。

「聲聞く時ぞ」の折には既に持物を置き、一振あり、次の掛歌（囃子が入る）で持物をとり、くづし舞風の舞を舞ひ、各座になほりつゝ弓を射る。

掛歌

△トンボウヤ　日山の弓（一本には「破魔の弓」とあるらしい）つるかけ玉へ　そら射玉へや

△いかきの弓　元山のつる　弦かけ玉へ　そら射玉へや

△トンボウは　日山の弓　元山のつる　つるかけ玉へ　そら射玉へや

△てんや　ゆみむかふ矢先に惡魔來らず〳〵エンヤ　二回返し

とゞ兩人は幕前に並び、惡魔來らずの歌で進み出、その場にめぐり、そのまゝ退つて入る。約五分程の舞であつた。

九、畑播き

遠野で畑播きと云ひ、黑森方で粟播きといふのは、岩戸開の後につく道化舞であると言はれてゐる。八幡神樂では道化舞ながらこれを式舞の一つに數へてゐる。

飯豐では、「はあはだけまき」といふ幕出しで、赤い裏布などのある着物を裏返しに着て尻を端折り、腰に年縄の叢をはさみ、手に鍬を持つた頬冠り、茶色の道化面の百姓姿の者が出、年始めの祝ひなどを述べて色々ある。とゞ畑を耕し、扇を持つて粟の種を播くこなしがあり、又草取りの眞似などあり、とゞ粟が稔つた體でこれを刈り取る仕草があつた後この取入れを賣りつけて、その賣つた代物を以て伊勢參宮をするといふことを演ずる。胴取を相手にして色々滑稽を交へて演ずるといふ。

附馬牛本には、仕草をする折に胴取がうたつたらしい畑播きの歌といふのが筆錄されてゐた。

畑　播　き　の　歌

○これヲ見ロ、見るとそのまゝ目が出きた、きのより今日は、空も晴れけり〳〵

○拜むには、神も拜めや御利生あるや、拜めや神も、御利生あるもの〳〵

○うねをきる、きりてさぐりて平めて、種播きをこし、育つよきもの〳〵

○種を播く、播いて收めて、拜むには、をがめや神も、御利生あるもの〳〵

○畑を播く、播いて育て、平めて、てがさをせや、ほなみよきもの〳〵

○うねを踏む、踏んで收めて、平めて、てがさハよきわ、秋は實をとる〳〵

○ほのぼのと、ほめて建てたる內裏かな、內裏のうつに、小金花咲く〳〵

○八幡山、いがきの內に、弓張りて、四方矢先に、惡魔たまらつ、惡魔射をろし

○百丸は、頭に雪をナ、いたゞいて、長き命、保つ嬉しき〳〵

長綿、和野でもこの舞のことを申してゐた。岩戸開の祝ひとして、その後に演ずるものといふ。

一〇、五　穀

大償、晴山、岳、大出、圓萬寺等に傳へてゐるが、この曲に限つて各所詞章も舞も區々である。晴山では女神、男神及狐面の者が出、最後の御神樂に他の一人が加はる。大償では荒面、男神、女神及狐面の者、圓萬寺では男神、女神、狐面、及もう一柱の男神、岳では荒面の者及女神、大出では荒面の者及狐面の者が夫々出る。さうして最後は何れも御神樂舞に收める。詞章は五穀の成り立ちを說いたものであるが、最も流布してゐるのが、旭又・大償金次郎氏・晴山（新）・岳・羽山の諸本にあるもので、他に、金次郎氏本にある別傳、圓萬寺本のもの、晴山の古本にあるもの等がある。これらのうち、晴山の古本にあるのが最も古いらしく、これは一人稱の語りの體裁をなして居り、他は似よりのものであるが、恐らくはこの晴山風のものをちゞめ、且つこれを登場人物の銘々の語り風になほしたものであらうと思はれる。とまれこの兩者は、劇化（正確には能化）のあとが辿られて興味があるので、左には比較的詞章のとゝのつてゐる金次郎氏本（別傳）のものを先づ誌し、その後に晴山古本のものを書き添へておく。

（大償で曾てこの舞を舞つてゐたとき、劍が折れて飛んだことがあつた。そのため、一時大償ではこの舞が絕えたのを、後に岳のを移して傳へたといふが、晴山に古傳があつて、大償にこれがないのはこのためかと思はれる。）

五　穀（金次郎氏本）

幕出（四一四）いづくさの、たなつものまてそなへつゝ、きよらかなるを納受したまへ

〈おうわれハ天照神の勅をかうむり、ふと玉の尊たり、あし原の中津國にうけもちの神はあるときく、しかるに月夜見尊をつかはすといへども、この命あしき神なりとてうけもちの神をがいせしむ、いまなんじ天熊人、あし原の中津國へ行て、受持の神を見參るべしの

〈おう其のぎならあし原の中津國へ下り申そよの

〈おうみことのりによつて、あし原の中津國へ行て見たまへば、うけもちの神既にまかれり、其神のいたゞきに牛馬なれり、ひたいの上に粟なれり、まゆの上に蠶なれり、目の內に稗なれり、腹の上に稻なれり、ほとに麥及び大豆小豆なれり、これによつてやつがれことごとくとりもちゆいて君に奉らん

〈おう天照御神へけんじ奉れば、大いに喜ばしめたまいて、今より後、青ひとくさのはんでゆくべきものなりとて、はだつものを及びたなつものをわかつ、これによつて受もちの神をば稻荷大明神と官位をとらせ、五穀の神に祭べし、狐は稻荷のしそんとなつて、五穀を守護し申すべし、千代の御神樂そうすべし

晴山本のは大部分平假名で書いてあるが、今は便宜上、漢字交りに改めておく。

五　穀（晴山本）

よふせんやふ、五草の、ナ種のたねの末葉迄、いなりのかみのめくみなりけり

〈のふ〳〵靜まりたまへ、そも〳〵天照御神高天原にましまして、月讀の命に申して宣はく、豐葦原の中つ國に保食の神あり、いまし行きてみよと宣ふば、月讀の命ハ、詔を受け、卽ちゆひてみ玉ふに、保食の神やとり玉へ口がよろこんで、まつりのいやのため、山に向ふに、毛の柔物毛の麁物口より出す、またをふのかはらにむかいしかば、甘き柔辛き柔口より出す、大海原にむかいしかば、鹽の廣物鹽の狹物口より出す、これをもととりのいくゑのうへにたてまつるニ、月讀E見玉へて、穢はしや、いましかロより出すものをわれに與へ喰ふべぎやとのたまいて、卽ち劍を拔いてうちまかつて御神へ返事を申す、御神聞召して、いましかをもいあしき神なり、今日より相見まじと宣へて、夜日を隔ててめくり玉ふ、その後天熊人を遣はし、いましゆいてみよと宣ふに、保食まかりしかたちに、五いろのたねならびに蠶を生みいたしたり、熊人これを取り歸りて皇御神ゑ捧き奉れば、よいかな〳〵と宣いて、蒼人くさの食ふていくべきものなりと宣ひ、稻穗をもつて田なつものとし、粟稗麥豆をもつて畑つものとなして、あまの村きみをさため、あめのをさ田にをよび天のさな田をはしめ田なつ畑つ五いろのたなものを播きたまふ、天地のそたてやしのふを神と國土との業なれば、卽ち秋の千五百と繁る惠みに惠んで民の榮い樂しむは、ひとへに保食の神の慈しみなり、これによつて五穀の惣神稻荷大明神と崇め奉る、本朝衣食のそしきことなれハ、八百萬の神達、神集いに集い玉いて、千代の御神樂ヲ奏すべし。

二、水神舞

岳、及び大償の流に傳へてゐる。左には岳のを誌す。

水　神　舞（岳本）

幕出し（ヨーホー清水がたゞ（と囃子が入る）

胴取（清水がたゞ

と、鳥兜・若面・ぬぎだれ・右肩より左脇への赤襷・上に千早・袴・帶刀・背に幣束の支度の龍神が出て舞ふ。はじめ右の袖を左手にとつて出てそのまゝ舞ひ、次に袖を離して扇を右手に持つて舞ひ、次に扇を收め、無手で反閉樣の足踏をし、次に兩袖を返し、これをなほし、タタタを踏みつゝ早拍子に舞ふ。次に背の幣をとり、これを左手に、右手には鈴をとつて舞ふ。かくて幕前になほると、鈴を收め、幣のみをとり、次の語りにつれて、龍神は幣を振りつゝ仕草をする。

（おふ我ハ是、日本六十餘州の龍神の總王、屏風が岡の大王たり。

（と進み出て太鼓を幣もてトンとたゝき、幕前になほる）我住家の由來を委敷尋ぬるに、瀧の其數三萬三十三瀧（と正面で幣を左右に振り）清水の其數粟の米三石三斗ニ四ッ餘つてゆへば、壹寸の清水に五分の主をはなし、貳寸の清水に壹寸のぬしをはなし、壹寸貳寸とは申せども（と進み出、太鼓をトンと叩き）駒のひづめの蹴上の跡に至る迄、主の無き所ハなし（と幕前になほり、幣をさとならし、踏みかへ足あり、以下にも時々同樣の振がある。）我あまだのけんぞくを普無し川の水上に召集め、神の氏子へたゞりをなさんとし給へば、其頃八百萬の大神ハ、七日七夜舞遊ばせたまへバ、日本六十餘州の清水瀧の水絶へて無し、如何成御神にも合奉り、水壹合さつけらるべくにハ、千代の御神樂に如くはなし、千代の御神樂を奏すべし

と進み出て太鼓を幣もてトンとたゝき、幕前になほると、胴取の歌となり、龍神は鈴をとり出して胴前になほる。この時幕をかゝげて、ザイ・赤の鬼面・千早・袴の者が轉び出て左肘をついてねまり、龍神と相對す。これは龍神の眷族の鬼である。龍神は左右に行き來し、鬼は袖を使つてひよいと跳びなどし、互に入れかはることもある。この時更に幕上に鉾が出て、幕出しがあり、鳥兜・赤面・襷袢・襦袴の經津主命が、鉾と扇とを採つて出、鬼を中にして龍神と相對す。一まはりして入かはりになると、とゞ兩者は、龍神を向つて左にして幕前になほり、次の問答をする。

龍神口上　おゝそれにましますハ如何なるおん神にてましますぞよのふ（と幣を振つて經津主命にこなしあり、）

經津主言事　おふ我ハ是日本武双經津主の命たり、汝は如何成る者にてゆぞよのふ（と扇でこなしがある。）

龍神口上　おふ我ハ是日本六十餘州の龍神の惣王、屏風が岡の大王たり、我數多の眷族を普無し河の水上へ召集め、神の氏子ニたゞりをなさんとし給へば、其頃八百萬の御神ハ、七日七夜舞遊ばせたまへバ、日本六十餘州の清水瀧の水絶へて無し、如何成御神にも合奉り、水壹合さつけらるべくにハ、千代の御神樂に如くはなし、千代の御神樂を奏すべし、姿をかへて、神遊し給へ

と、此時、鳥兜・頬じめ・振袖・ぬぎだれ・右肩より左脇への片襷・帶刀のもの二人が出る。皆々手じめをする。扨て以上の四人が四角に居て、胴前、幕前と向ひ合に坐し、その場に千早と面とをとり、左に扇を開き持ち、右に鈴木をとつてなほり、これよりみかぐら舞になる。その次第を序に誌してみると左の如くである。

1、右手に鈴木、左手に扇をとり、その場にめぐり、タタタを踏み、入れかはりにもなる。

2、次に右手に扇をとり、左手は刀の柄にかけ、早拍子にタタタを踏み、或は扇を左手に、又右手に持ちかへることもあつてはげしく舞ふ。

3、次に太刀と鞘とを兩手に持ち（二本太刀の總）これを色々に使ひ、タタタを踏みつゝはげしい振がある。太刀を逆手にとることもあり、その場にめぐつてきつととまること等もある。

4、次に幣束をとり、これを兩手に持つて、皆々中に合せて順にめぐり、又四方になつて向ひ合ひ、幣を右に左に立てる振あり、神哥の掛合あり等の振を繰返す。

5、次に拍子が變ると坐し、鈴を右手に、幣を左手にとつて立ち、四人一列に幕前に並び、左右に拜し、持物を置いて入る。通じて約三十分の舞である。

異傳　晴山本の水神は、一角仙人を題材としたもので、前者とは全く別である。これは謠曲のを書なほしたものらしい。

はじめ女面の者が出て一舞あり、そこへ男面の者が出て、右の女に命を含める。次に仙人や龍神が出る。女と仙人とで酒を飲むときは、二人で相舞をするか、若しくは坐して女が酒を勸めるかする。後者の場合には、胴前から銅鉢子を借り受け、これを盃に擬するか、或は扇を以て盃にするといふ。酒は瓢に入れて、腰にして出る。詞章は省略する。

三、五大龍王

この舞はつひ實演に接したことがなかつた。例の四季相尅の所望分をつくつたもので、大償によれば、女は鬘・女面・かんざし・振袖・ぬぎだれの支度、男三人（傳承のまゝ）ば、ざい・面・ぬぎだれ・袴の支度、ぼんでんたいしやくは尉姿に槍を持つて出るといふ。山伏神樂の各所にあり、異同も多いが、左には大償の、佐々木守衛氏本のを一種だけ記錄しておく。

五輪體　龍　王（大償本）

（四一五）伊勢の國、岩戸の前に神掟び、をりきて遊べや、神のきゐんさよ

〈のう〳〵靜まりたまへ、是ゞ西方に當て國あり、なづけて天竺と申、彼の國數萬歳の其昔、御門をおわします、はんご大王と申奉り、四人王子にひとりの姫宮をもうけたもう、先づ太郎の王子ハ、東に立せ玉ふ、次郎王子ハ南に立せ玉ふ、三郎の王子、西に立せ玉ふ、四郎の王子ハ北に立せ玉ふ、壹人の姫宮ハ中央に立せ玉ふといへとも、預り玉ふ月なし、此事父王にうかゞへ玉へば、姫にハゆちるべき寶あり、先づ一番にハ五尺のかみかつら、是をいたゞけバ、いかなる見にぐき女も、けわつ美女となる、二番ひしゆうへゆころも暑日あつからじ、かんにもさむからじ、三番にハ村雲のつるぎ、是をおぶれハ、惡魔ハ四千里か外にしりそくなり、此三つの神寶を我にたまハるといへども、姫せいちやうしてつら〳〵考ふるに、夫、世界の寶たるものハ月にこゆるものなし、願ハくハ我にもつかさとり月をたまヒれといへとも四人の王子達聞玉ハず、是によつて、ごふ川の水上に四萬のけぞく共を召集め、戰の上勝負をけつせんと、先太郎の王子ハるり糸をどしの大よろひ、兜、同じ毛の旗を差上げ玉へて、九萬餘騎を引ごして、王舍城の東に陣をとらせ玉ふ、次郎の王子ハひいどをとしの大よろいかぶと、同じ毛の旗をさし上玉へて九萬餘騎を引越して、王舍城の南に陣をとらせたもふ、三郎の王子ハ白糸をとし大よろいかぶと同じけの旗をさし上たまへて七萬餘騎を引くして王舍城の西に陣を取らせたもふ、四郎の王子ハ黑糸をとし大よろいかぶど、同じ毛の旗さし上玉へて五萬餘騎を引くして、王舍城の北に陣をとらせ、壹人の姫宮、黄糸をとしの大よろいかぶど同じ毛の旗さし上たまひて、壹萬餘騎を引越して王舍城の中央に陣をとらせたまへて、こゞをせとふし戰ひたり。

〈をふ我れハこれほんたい釋の使者、門淨の博士たり、陣場にはやく着にけり。

〈我ハこれ梵天帝釋のししやもんちやうのはかせたり、すかるごう河の水五色にかわて流るゝを帝釋不思議に思召、占なヒせ玉へバ

ごう川の水上に五體龍の戰あると占得たり、是に依て、某かしに、善にはからひすゞめよとの勅上を蒙つて小、四人の王子達申事あり聞たまへ（○ならん〳〵〳〵〳〵）

〈まつ太郎王子春三月九十日の處、十八日をば姫宮ハとらすべし、のごつて七十二日を所持すへし、太郎王子も聞たまへ（○ならん〳〵〳〵〳〵）

〈次郎の王子夏三月九十日のところ、十八日をば姫宮に取らすべし、殘つて七十二日所持すべし、次郎の王子も聞たまへ（○ならん〳〵〳〵）

〈三郎の王子秋三月九十日のところ、十八日をば姫宮ハとらすへし、のごつて七十二日をしよぢすべし、三郎の王子も聞たまへ（○ならん〳〵〳〵〳〵）

〈四郎の王子ハ冬三月九十日の處、十八日をバ姫宮ハとらすべし、のごつて七十二日を所持すべし、四郎王子も聞たまへ（○同上）

〈是四人王子たちき、玉へ、三年に一へんの閏月をばうろとなつけ、此もんじやうにとらすべし、太刀をも弓をもおさめたまへ、大平樂の神掟びしたまへ。

三、稻田姫

この曲は、岳、大償、圓萬寺、遠野等にあり、岳では裏舞の一番に、鳥舞の代りにこの舞を出してゐる。實演に接し得たのは、この岳のもののみであつた。これは例の大蛇退治を仕組んだもので、最後はやはり例のくづしの御神樂舞に收めてゐる。こゝには岳の臺本のみを誌しておく。

稻田姫之舞（岳）

幕出し〈せんやはあ　稻田姫

素盞嗚言ふ　能々物申さん

あしなつち口上　如何成御神ニテましますぞよのふ

素盞嗚言ふ　おふ我ハ是日本無双素盞嗚命たり、壹夜の宿を貸給へ

あしなづち口上　御宿爲レ參とふハゆへども、我が家に大事のゆへば、とふゞ〳〵何方へも御通りゆへ

素盞嗚言ふ　我が家に大事のゆとハ、如何成る事に而ゆぞよのふ

あしなつち口上　おふ我ハ是足なつち、手なつち夫婦ニテゆ、御覽之ごとく稻田姫とて、姫を壹人持ゆが、是よりも北ニ當つて千丈の谷あり、かの谷にこそ頭ハ八ツ角ハ十六、背みね二十尋の大蛇の住んでゆが、あの名ヲ山田のおろちといゑり、かの大蛇我か姫に心を掛、食な〳〵通へゆ、最早日暮ニ罷り成ゆ得ば、氣色替て見へゆ、今や大蛇の來るべし、とふ〳〵何方へも御通りゆへ

素盞嗚言ふ　おふ其義なら、我れ神力を以て大蛇をしづめてとらすべ

し、千代の御神樂奏すべし

（大蛇を程なくしつめたり、千代之御神樂奏すべし

一四、巖永姫

これは黒森派のものにあるが、實演には接してゐない。

巖永姫うたひ（上坂氏本）

よを〳〵急ぎゆくほとに、ひの河上に着きにけり〳〵

さん候、自を、如何なる女と、思召、とをつに名も高き、岩永姫と名つけたり國津神にてましますが、帝に少しの意趣ありて、出雲の國、ひの河上にまし〳〵て、八つの頭を顯して、八岐の大蛇となりにけり。承れば、まことやら、當社熱田の明神に、天の寶劍納る由をも承り、かの寶劍をうばはんと、ナカメ○形を夜ひと、あらはして、庭の内にと、入りにけり〳〵

巖永姫の二のきり

おを我れこそは、日本武の尊にてましますか、當社に收めをきしは天の草薙の劍なり。然るに岩永姫、ゆはとに少しの、意趣ありて、出雲の國、ひの河上にましまして、八つの頭を顯はして、八岐の大蛇となりにけり、然るに天照すめ大神の弟、素佐嗚尊は、神計を以て、かの大蛇を退治せしが、また〳〵その靈殘つて、形をひめと顯して、奪ひとつたる樣子、承はつて候やの、我れ裝束を改め、かの寶劍を取かへし、再び、當所に納め奉らん。

岩永姫の退治

高天の原に神止ります、すめぢかみろけ〳〵のみことを以て、天津祝詞の太祝詞かくのら罪といふ罪科といふ科をあらたまことのよし、諸々の神達、さを鹿の八つの御耳を振立て聞召さんと申す。とをかみえみたみ、かんこんしんそん、りこんだけん、破ひたまへ、清めたまへ。

一五、天　王

岳、大僧の流に傳へてゐる「牛頭天王」とも「疫神退治」とも呼ばれる奇古な舞である。岳、大僧とも、舞ひ方は同樣であつたが、次には岳のものを、大略の振ともに誌しておく。

天　王（岳本）

幕出し（エーエンヤー　我れ賴む

と、胴前の囃子一しきりあつてきると、ざい・阡面・ぬぎだれ・千早・帶刀・鉾の仕度の天王が、扇を腰にさし、細杖をついて出る。しばらく色々に舞つてゐるうち、再び、

（よほ、　われたのむ—

の幕出しがかゝつて、鳥兜・阡面・千早・袴の蘇民將來が、幣を背にさし、扇を開き持つて出、兩人は見合ひつゝ舞ふ。やがて舞收めると、次の問答になる。

樂屋（天王）（おふそれに見得ゆハ　如何成者にてゆぞよのふ

胴前（蘇民）（おゝ我は是蘇民將來と申者にてゆ、夫にましますは如何成御神にて、何地へ渡らせ給ふぞよのふ（と右足を一歩前にする。）

樂屋（おふ我ハ是れ牛頭天王なり、我がよふそふは、頭にこふきうを頂き、兩角鉞どなるが故に、後宮今になし、然れ共内には慈悲廣大を施し、外には朝祭り事を怠らさるに依て、五日の風吹け共枝をならさず、十日の雨降れ共、土くれをおかさず、五穀ハまかざるに生じ、七珍な求めざるに來り、國家不入にして民安樂の床に据ぶ也。此故ヲ以て天體より南海龍王の乙姫を我にたまふに依而、南海へ渡り申すぞよのふ。

と、天王は扇をよろしく振る。

胴（おふさんゆ、南海へは其道のり八萬里也（と少し前こゞみになり扇を振り）君未だ三萬里にも及ばず、南海へは海上にて、車馬の通路なし、さあらば刹那に數萬里を走る寶船の君へ奉らん（と一歩進み出る。）

樂屋（さらば所望申にてゆ

と振になる。胴の神歌あり、入れかはり合ひ、又入れかはり合つて天王は入る。蘇民は幕前になほり、鉾をとり出し、振りつゝその場にめぐり、めぐりかへし、一舞あると

幕出し（謹請再拜〳〵エーヤハーわれたのむ

と天王が再び出る、扇を前にし、刀の柄に左手をかける。蘇民は胴前に行き、中腰にその場にめぐる。丁度その時、天王の向つて左手に、鳥兜・赤面・袴・帶刀の者と、鳥兜・女面・ぬぎだれ・帶刀の者とが出る。

胴（おゝそれにまします數多の御神ハ、如何成大神にて渡らせ給ふぞよのふ

樂屋（おふこれなるは（と幕前の三人は振あり、天王は扇を收めて幣を持ち、他の二人は扇を開いて持つ）此のはりさい女の生める八生神我か子也、其神此所を通りし時、此國の主を名付て、こたんと云臣下、皆らみもをりよふの類也。我豈宿を乞へ共入れず、かへつてたんかする故に、此度こたんのふみ潰す也、然れ共汝ハ慈悲心深きに依り、汝に宿れり、是に依而汝が娘こたんなぬぴたりと云へ共、桃の木の札に秘文の書、投入れなば、助け得さすべしのふ。

胴（おふ其儀ならこたんの退治し給ふべしのふ

と胴取の神歌となり、女面の者は入り、つゞいて蘇民も入る。次に赤面の者が胴前に進み出て、幕前の天王と相對す。左手は刀の柄にかけ、右手には木製の鉾を持つ。

樂屋（おふ謹請再拜々々吐普加身依身多女、坎艮震そんりこんだけん、我ひ給へ清め玉ふ、神の軍を始むべし

と、一振あり、天王は進み出、兩人は胴前に、幕向に立つと、ザイ・

猿面・縫ぐるみの者が、撞木を持つて出る。入れかはり、又入れかはり合つて向ひ合ひ、拜し、又拜し、天王に打かゝり、又赤面の者にも打つてかゝるが、そのまゝ入る。

次に黑道化面・赤褌袴・尻端折・づぼんの者が、俵を鉾につつかけて擔ぎ、弓矢をとつて出る。

出ると入れかはりになり、胴前に坐す。或は鞠んで俵を下す。次に、この者は坐したまゝ天王に、次に赤面の者に弓を向ける。が、すぐ赤面の者に拂はれる。次に撰から矢をとり出して弓につがへ、左足を立てゝ天王に、又右足を立てゝ赤面の者に射ようとするが、これも赤面の者に拂はれる。そこで天に向つて指したとき、その弓矢を赤面の者にとり上げられる。

次に天王に鉾を突出すが拂はれ、赤面の者に突き出すとこれを摑まへられて引かれ、撥いでやらじとするが、たぢ〳〵になつて俵の側にころぶ。あかめをすることあり、又色々ある。

次に撞木（金槌の體）をとり、二人に打つてかゝるが、同樣赤面の者に奪ひ取られる。（或は笏を取り出して、前にそちこちと翳すが、後から抱きすくめられてとられる）

次に俵の中より折を取り出し、先づ研ぐ振があり、次にこれを揮つて切りかゝらうとするが、これもすぐに取り上げられる。次に箆を取り出し、これを胴前に投げ、その前に立膝つて、通せんぼをする。赤面の者は押して通つて是をとりあげ、幕かげにやる。

次に俵から杓子を取り出し、これを吸ぐ振があつてくる〳〵廻す。若しくは兩人に打かゝるが、やはりこれもとり上げられる。最後に俵をすつかり引冠つて縮まつて坐してゐると、この俵も引き剝かれるのである

が、剝いでみると、その中に、頭の上に後生大事に立てゝ持つてゐたのが卽ち金勢棒（或はスリコギ棒）である。道化は慌てゝ跳び上り、囃子に合せてこれを打振り〳〵入る。

以上は型のある獸劇風にゆつくりとやるのであつて、まことに珍妙な間の狂言といふべきである。これで魑魅魍魎を殘らず退治した體である。

次に天王は幕前に出て、兩者は相對す。

樂屋へ惡鬼こたん、ちみ亡靈を靜めたり、とぐ〳〵出て神旋びし給へ

と胴の神哥となり、以前の女面の者と蘇民とが出て、ゆるく踏みかへ足をしつゝ一まはりし、蘇民は一人胴前に、天王・赤面・女面の三者は幕前に並ぶ。次に樂屋の言立につれて三人の振がある。

〈惡鬼こたん、ちみ亡靈を靜めたり、今より後ハ汝此國の主たるべし、我末代のきやう役神となつて、八王子と諸共に、國々に入る。内にハ秘文の札を納め、外には五節の祭禮をおこなひ、蘇民將來ハ子孫とならば、誓つて疫病災難の除け取らすべしのふ。

胴前〈おふ其儀なら、千代の御神樂奏すべし

と、蘇民の振あり、すぐ胴前の神歌となり、四人は踏みかへ足でめぐり、四方に分れ、各々幕向に止り、坐して烏兜、面、及び千早をとり、前結びの鉢卷、ぬぎだれ、右肩より左脇への片襷となり、互に向ひ合つてこれよりくづしの御神樂舞を舞ふ。

一六、尊　揃

岳流では「尊揃」、大償流では何れも「四神の尊の舞」としてゐる。大償では、兜・男面・襦袢・右肩ぬぎ・袴・扇・鈴の支度の者二人と、兜・かんざし・女面・振袖・右肩ぬぎ・扇・鈴の支度のもの一人とが出る。左には羽山本の詞章を誌しておく。

尊　揃　の　哥（羽山本）

日本開闢國常立の尊より、伊弉諾伊弉册の尊迄、天神七代相續き、地神五代の始をば天照大神と申奉る、鑑端草賣不合の尊迄、地神五代相續き、人皇の始をば神武天皇と申奉ル、神武天皇〻以來、四海泰平にして國家豐に治り玉ふ由來を委敷尋ぬるに、本朝は大已貴ノ命ノ守護せしめ玉ふ所に、天照大神より度々御所望ありといふと御返事ニも不及りしが、ある時武甕槌命、勅使として被遣ゆ得ば、大已貴の尊大剛無双といへとも武甕槌の尊のいせいニおそれ、そふなぐ國家を天照大神に奉り、あまてるおん神大ニ悅はしめ玉へて、今〻後二心なぎ印ハ如何ニとありければ、いまより後二心なき印しなりとて、おい手の判を奉り、今が世迄も天子にそなハり、神靈寶劍内侍所とて、三種の神器の其中にしんしといへるはこれなり、てがだといへる事此みよ〻も始れり。天照大神おふぎによろこばしめ玉へて、高天ヶ原ニ八百萬のおん神めし集め、千代の御神樂そふし玉ふ。御神樂の役ハだそふ、きねの尊ハ然ルべし、鼓ハ如何ニ、しやがら龍王、とりわけ拍子ハ大事たり、拍子の役ハたそふ、おしおみの尊然ルべし、おふそのぎならちよの御神樂ヲそふし玉へ

一七、惡神退治

大償・旭又・岳・及び遠野に傳へてゐる。「尊揃」の異傳である。左には仙臺市に於ける公演の際見學した大償のものを誌しておく。

惡　神　退　治（大償本）

天の星の命（實比）　裝束ー甲・面・ぬぎだれ・袴。持物ー太刀、鈴木・扇・手に九字。

天の若彥・みくまの大神　裝束ー甲・面・ぬぎだれ・褌・袴。持物ー弓矢・太刀。

經津主命・建御雷の命　裝束ーざい・面・ぬぎだれ・袴。持物ー太刀・扇。

大已貴の命・事代主命　裝束ーざい・面・ぬぎだれ・褌・袴。持物ー太刀

出し樂屋へオヽサエハエしづ〳〵と　ハヽイしづしづとサシエー

と囃子あり、天の星命が一人出て、色々に舞ふ。（この舞は美しい番樂風のものであつた。）

次に、天の若彥、みくまの大神が出て舞つて入る。胴前の掛聲が「惡靈をば〳〵」と四回程あり、次に、經津主、建御雷が出て舞ふ。次に大

巳貴及事代主が出て、兩者の戰ひの舞あり、これが濟んで後、次の語りになる。

樂屋へのう〳〵しづまりたまへ、抑々天照大神のおん子、おしほみの命、天祖高產靈の命のおん娘をめどり玉ひて、瓊々杵の尊を產みたまふ、天祖たかみむすびの命ののたまはく、皇御孫瓊々杵の尊を豐葦原の中つ國のきみにせんと思ふ、然るに彼の國に多く子はえ、螢火の輝く惡き神あり、また草木もものいふことあればとて、八十諸神等を召しつどひ問ふてのたまはく、我が葦原の中つ國のあしきものをばはらひ平げせしめんと思ふ、然るにたれをかつかはしよからんやとのたまひて、八十諸神等の申さく、あめのほしの命はこれ神のすぐれたるなればとて、彼れに心見たまはざる、にけんやとのたまひて、我が葦原國を平げべしとて向けたまへども、この神三とせに及んでかへりごと申さゞるによつて、重ねてみくまの大神、天の若彦彼等がたけき神なればとて、彼に天のかご弓天のはゞ矢を賜はりて、葦原國を平げべしとて向けたまへども、これもなほかへりごと申さゞるによつて、この後ふつ主の命、たけみか槌の命これまさによからんやとのたまひて、葦原國を平げべしとて向けられけるに、彼のふつ主の命、たけみか槌の命は、猛勇をふるひ神變手だてをもつて、中つ國をこど〳〵くに平げて、大巳貴の命、事代主の命は國を、天照大神へ奉り、この以來岩穗に果はなり、枯木に花の咲かんまで日本へ魔をなさずとの、あらゆるよこしまなるあしき神惡魔より、おしてをうけとり、今が代までも天子にをさまりたまふ、手形といへるの始なり、神璽寶劍ないし所、三種の神器のその一つ、神璽といへるはこれなり、安らけく平けく安國と定まれば、千代のみ神樂奏すべし

と、次にくづしの御神樂舞になる。

一八、天　降

天孫降臨のことをつくつたもので、これも大償と岳の流に傳へてゐる。大償によれば、猿田彦の命、天のうづめの命、天のおんひの命、天のくつしの命等が出て、最後をやはり御神樂舞に收める。左には大償本の詞章を誌す。

天　降（大償本）

出し樂屋へ（四一六）イヨウエー朝香山、かげさへ見ゆる山の井の、淺くは人を思ふものかな〳〵

同　へオヽサンエー天降り〳〵　サンエー

と、猿田彦の命が出て舞ふ。この荒舞をねりと言ふ。やがて舞をきり中央に立つと左の幕出しがかゝり、三神が出る。

出し樂屋へセンヤハエ　ハア天降り

胴前樂屋へ天のむら雲、そでふれて〳〵、センヤハエ、うつせる水は高千穗の峯〳〵

と、一まはりし、三神は幕の根に、猿田彦は胴前に立つ。

樂屋へのう〳〵鎭りたまへ、われはこれ天の御日の命、天のうづめの命、天のくしつの命たり、天祖高皇產靈の命ののたまはく、すめ御孫瓊々杵の尊を、豐葦原の中つ國の君にせんとのたまひて、則ちわれはこれ天津ひもろぎ、天つ岩坂を押し立て、我が御孫の爲に祝ひまつらんと天照大神な即ちやさかにの曲玉、やたの鏡、くさなぎの劍、三種の神器を賜はりて、天の磐くらをおし放ち、天の八重雲を伊豆の千別に千別けて、天降ります道に、汝はかごふること、なんの故ぞや、その事のよし、問ひ來れとの詔にてゆゝぞよの

猿田彦胴前へオヽ中々さんゆゝ、われはこれ、猿田彦大神たり、今すめ御孫瓊々杵の尊の天降らせ給ふを、我れ神通にさとり、しよちの導きせんなそのために、これに現れたり

三神樂屋へオヽその儀ならそのことの由、瓊々杵の尊へ奏するなり、瓊々杵の尊は、日向の高千穗の嶽に天降らせ給ひて、住居を奠めましますは、天が下を治め給へ

猿田彦樂屋へオヽその儀なら、千代の御神樂奏すべし

と、皆々面をとり、千早をぬいで、くづしの舞を舞ふ。

一九、西の宮

これは海彦山彦の說話を舞に仕組んだものの序をなす舞であつたらしい。中妻本には浦島とある。黑森の舞ひ方は左の如くである。

幕出しで、左折の烏帽子・面・千早・襷掛・袴のえびすが、右手に扇、左手に釣竿をとつて出て、謠のこなしをやはらかに舞ふ。やがて歌になり扇を水平にして一まはりし「いざさら釣を垂れん」と釣竿を前にして立膝になる。胴前の早口の言立で立ち、振あり、中途でぶしになると、ゆるく振あり、立膝に坐す。かくて囃子になると、はげしく振あり、足拍子も踏む。そのうちに釣竿の糸をほぐし、釣を試みる。とゞ胴前に坐し、竿を胴にかけてえさをつけるこなしあり、立つて扇を翳し見、立膝になつて胴前に釣を垂れる。糸を引かれる體あり、竿を上げると、赤い鯛がかゝつてくる。鯛はびち〳〵とはね上がる體。これを捕へてとゞめをさすこと等色々あり、とゞ坐して扇の上に鯛を上げて拜し、次に釣竿をかせに色々あつて入る。約十五分程のものである。その詞章は、左の如くである。

ゑびす哥ひ（西口氏本）

よふ〳〵いそき行ほとにいせかはまちにつきにける

○生ハわたなべ、津の國かんざき浦のうらへのとふちが其子ニ両、太郎が君とハ我事よ、四方に四万の藏を立、寶に取てハふそくなし、いせちまや、ミばちまとて船人の、四つのゑびすをしたかひ

て、あらぎなゝ風しつかにて、いざゝらつりををろさんや。
おゝかほとたつときゝたらせ川へ、つりををろさせたもふ老人な
物ヲしつてをろさせたもふか、まつた物ヲしらんてをろさせたも
ふか、其つりとをどふ上たまひ
なあに〳〵こなたの事ヲのたもふか、こなたのことをのたまハゞ
神ニより両のをんちかひ、人により両のをんことば、千年べしか
のきやうゑ物をしらんなり
さよふニ両もましまさハ、そうれい、津の國ハ、西宮のよふす、
そつとおん物かたりけへかしのふ
そうれ、津の國ハ西の宮のよふすそつとかたり聞こふとの仰かや
そうれ津の國西の宮のゑびすニ両ヒたらせたまひしか、今ハ大日
如來のけしんかや、玉ハ三千年が間ニ両めくれ共、壹つの玉ハ西
にむこうてひかります、天下太平、たまほくのかのきよぐれひハ
西の宮、たれををろかにまもらんや
さよふニ両もましまさハ、其つりとを〳〵たれたまひ、
白金のつりさをに小金（こがね）のひよた針をまけさせて、いさゝらつりを
をろさんや。

この舞は、濱の人達には大いに歡迎されるらしく、異傳も多い。

二〇、龍宮渡り

これは海彦山彦の說話を仕組んだもので、早池峯籠に傳へてゐる。實演には接してゐないが、岳に依れば、色々の海の魔物が出てくるといふ。大償では、翁、彦火、化性の者（道化面、或は恐ろしい面をつけた者か三頭位）、豐玉姫等が出て、最後をみかぐら舞に收めるといふ。

尙岳ではこの舞を「安產舞」と言つてゐるが、これは誤りらしい。即ち、岳、羽山の兩本とも、「海安全」といふ言立を間違へて、「汝安產」と言つてゐるが、岳ではそのまゝ目出度い所からこれをとつて題名としたらしい。次には岳の詞章を誌しておく。

（安產）龍宮渡り（舞）岳（岳・羽山の兩本を校合せるもの）

幕出し　わだつみのそことも知らぬ鹽つゝをすぐなる御代の翁なり
へおふ我ハ是、わたつゝの鹽つゝをの翁と申者にてけが、夫地神五
代之始め、天照大神と申せしハ、伊弉諾伊弉册命の御子ニテ、大
日靈貴と申奉る也、御生れ付うるはしく、國の内に照り耀き給ふ。
おん息の内より生れ出で玉ふ御神を、天の忍穗耳の尊と申奉る。
夫ゑ三代ニ至りて、瓊々杵の命と申奉るハ、高天原ゑ天下らせ給
ふ其御子彦火々出見の命と申せしハ、此海邊ニ御出有て釣をたれ
玉ふ由を承りけ間我此尊に逢ひ奉り御心ヲなくさめ申さんと思ひ

是ニ両釣をたれ待受申さんと存じけ、と翁言ふ、
尊出て言ふやう　へ夫天地開け始りしより天神七代地神四代ニ至リテ
彦火々出見の尊とハ我が事也、夫れニたゝつみし者ハ如何成者ニ
両けぞよのふ
翁言ふ　へおふさんけ、夫にまします御神ハ彦火々出見尊にてましま
すかや、我ハ是、わたつみの鹽つゝをの翁と申者にてけか、承れ
ハ此海邊ハ御出有て、釣りをたれ御慰みある由ヲ承り、我海路の
しるべをも仕らんと是迄參りてけ
尊云ふ　おふ其義なら汝ニ尋たき事のけ、扨もこの神ほのすそりの
尊の釣針を我れかりそめなから釣をたれしに彼の針を魚にとられ
此由を兄尊に樣々に申せ共猶もとの針をはだる、さあらは海中ニ
入て尋ねんとハ思共、そゝともしらぬ事にてけ間、汝海路の道引
し玉ふべしのふ
翁言ふ　おふ其儀ならわたつみの都ニ御入有て龍神を賴み御尋け得
バ釣針ハ尋出すべし、然共龍宮へハ其道のり數萬里の海上にて、
車馬の行路なし、其間種々の化生の者共數多有て、中々叶まじく
にてけ
尊言ふ　おふ其儀なら我神力を以て化生の者をしつめ申すべし、海
路の道引し玉ふべしのふ、
翁言ふ　さらばこうおんわたり候へ

化生の幕出し　波路はるかにへだて來て〳〵廣き眞砂に着ニけり
（此間樣々の化生の者出る）
ヲ、我神力を以て化生の者共不殘しつめたり、わたつみの都ニ渡
り申ぞよのふ
女言　是は、龍宮わたつみの豐玉姫と申者にて候おふ夫にまします
ハ如何なる御神ニてましますぞよのふ。
尊言　おふ我ハ是、天孫地神四代彦火々出見尊とハ我が事也、我釣
針を魚ニ取られ、是迄たつね來るなり、彼の釣針をたつねえさす
べしのふ
女言　おふ是こそハ御尋けの釣針なり、あかめと申魚の口よりもとめ
たり、是ニても見尊おんいかりあらば、鹽滿鹽干の二つの此玉を
捧奉らん
見尊言　おふ我ハ是彦火々出見尊の兄ほのすそりの尊たり、汝かは
からへを以て釣針諸共二つの玉を得たり、今より後ハ汝安產の守
護神となつて、子孫繁昌と守るべし、千代の御神樂奏すべし

尙羽山本には、龍宮渡神哥として、別に左の樣な四首の神哥を誌してゐる。

龍宮渡神哥

海（四一七）すみの　底ともしらぬ鹽つゝを　すぐなる道を行く如くなり
はかつなぎ（四一八）　よわいを延る明け暮れの　長き月日の光りなりけり

四一九 濁りなき　心の水のいつみまで〻老いせぬよハい汲てするなり
四二〇 くりかへす　玉のつるべのかげならば　ながき命を汲てするなり

三、龍　神

裴綿本はりやう神とし、遠野の野崎本は浦島狂言、中里本は浦島太郎と誌してゐる。下岩泉本には題名がない。龍神は乙姫の親を言ふらしい。狂言風に演ぜられたかと思ふが、これは前の西の宮と龍宮渡りとを書き改めた樣な作になつてゐる。さうして彦火火出見尊を、浦島に替へてゐる。又狂言釣女の前の形は、或はこれに似たものではなかつたかと思はれる。左には裴綿本のを誌す。これは「えびす」につゞけて誌してあつた。その一段目は、「えびす」の詞を簡略にした樣なものである。

りやう神」（裴綿本）

かんどえ　いせのくに
まく出　たかまがはらのにゐつくり　たかまがはらのにゐつくり　これも神代のはしめ也
一おーかほと貴きみたらし川に何とて龍神釣下けた、おー我れゐ是西の宮の翁ニ両ヰが、西の宮の釣に両ヰはゞ、西の宮のようそうをそんと御物語ヰ得かせのう、おう我れ是幼少より釣いし事を好み、伊勢がひたみが浦松が沖にてこぎいたし、こゝに壹つの島有て島へんちてびわとなる、

びわへんちて辨ざい天と成る、今は辨天もろともに、寶天に守らせ給
同　貳ばんうたい
おゝ、我ゐ是、津の國かんたが浦、うらとーちの其子ニ両、浦島太郎とハけに我事よ、今日は日もよし、吉日とさだめ、舟卸しを仕り、なきさに出、海中をはるかに見わたせば、海中もしづしづとしづまり、まづ時分もよしと、壹ばんに釣を下げたまいば、ゑほし、ひたたれをつりあけたもう、貳ばんにつりさけたまへば、こ金の銚子、かわらけをつりあげたまふ、げにげに、ふしきとおもつて、三番につりさげたまへば、女壹人、つりあげ玉ふ、其時女のくちびらき仕ヰ
おー我は是、海中に、かくれもなき、かい中壹の龍神のつかいの女にて御座ヰ、おん身樣、天が下タにならびなき美男と承り、我れと一諸に此海中に入られ可しとの、使ひの女ニ両御座ヰ
おー何として〳〵此の海中に入る事かのふまち
さんもニ両わヰ得共、かづの寶をさつけるとのつかひ也、かならず〳〵じたいましますなよ
おーさらば〳〵と海中さして急がるゝ。
龍神のうたい
まく出　今日は日もよし吉日と定め、婚入なんとを仕る
浦島出る
一都をば、只かりそめに立出て、いつか故郷に歸るやら
女出る
一親の仰せに從ふて、おやの仰に從ふて、契りし事の目出度さよ
一龍神のうたひ　今日は日もよし吉日と定め、婚入なんとを仕る。親子は一世、夫婦は貳世、契りし事の目出度さよ
一浦島がいふ　おー汝に語り聞かせる事が御入りヰ
一そうはなにわの事を仰せヰ
一おー汝と契りし時の約束は、鳥の頭に白毛のさすまで、まつたいり豆に花の咲く迄、まつたかれ木に花の咲く迄の約束、いとま申ぞ、わが女房
一御身樣故郷に御歸りましますか、故郷に御歸りましまさば、御身樣に、得さするものが御入ヰ。
一そは何わの事を仰せヰ。
一此箱と申は、萬年封じ玉手箱、まつた不開の箱とも申也、必ずく〳〵あけましますなよ
一おー我れ是とちーニ両も、わするとも聞たならば、後生はよつく問うてたびたまへ、おー名殘惜しの我が女房、天に仰がれ、地に伏して、都の空の末までも、戀ひつ戀がれつ、せん方なきのありさま。

三、龍　神　三、みあらか　三、惡魔退治

三、みあらか

これは晴山本による。他に傳承はない。

みあらか

四二一 ほのぼのと、ほめて建てたる内裏かな、内裏の上に黄金花咲くへのふ〳〵靜まり玉へ、そも〳〵我が朝神武天皇の昔迄、世の民の有樣、巣に住み、穴に棲むことをならはしとせり、ときに天皇、天の富の命にみことのりして曰く、天が下の蒼生、すずかの災厄に苦しむこと、ちんしやうらい憂うる所なり、汝よろしく工匠をえらみ、みあらかをつくり、あをひとくさの家をもつくるべしと、此の時に富の命、則ちみことのりをうけ、たをきほいの命、ひこさぢの命におふせて、山林をきりひらき、すみやかにみあらかをつくり、天皇をうつし奉り、またしもあをひとくさ家をもつくりそめたまふ。これ今の世の民のゑをりのはじめなり、やすらきく、平らきく、千代のみかくら奏すべし。

三、惡　魔　退　治

長脛彦の誅伐をつくる。この舞は大償にだけあり。はじめ、ざい

面ぬぎだれ・禰・棒の者が二人、後から兜・千早・麻の者が一人出て舞ひ、終りをやはり御神樂舞に收める。

悪　魔　退　治（金次郎氏本）

幕出　オ、サイエー悪魔をば〳〵サイエー、謹請再拜々々、ぬさたつる、こゝも高天の原なれば、集りたまへ四方の神々

〈おうそれに見えけは、如何なる者にてけぞや、おーわれはこれ、みづをみの命、うますまずの命にてけ、それにまします御神は如何なる御神にてけぞよのよ、おーわれはこれ、神武天皇なり、ながすね彦をちうばつせしめんがために、これにあらはれたり、その儀なら我らもともに參るべし、その儀なら天神地祇を祈り、じんくんれんを心にかまへべし、謹請再拜々々トウカミイミカミカンコンシンソンリコンダケン祓ひ玉へきよめたまへ、かみの戰をはじめたり。（惡魔出る。又男神出る）

〈只今出でさせ玉ふ御神は如何なる御神にてけぞよのふ、おーわれはこれ天の富の命にてけ、只今の由來をくわしくたづねべし。そも〳〵このあけ津島ハ日の神の國なるによつて日をかたとり、日本日本とは申すなり。大日るめの天照大神よりおしほみの命、にゝきの命、彦ほゝて見の命、うがやふきあわせつの命まで地神五代すべてゆうをたもつ、天が下をしろしめし事を合せて二百三十三万二千四百六十四歳也、うがやふきあわせつの命は、わだつみの神のむすめ、玉依姫をきさきとし玉ひて、かんやまとゆうわ、れ彦の命をうみたもう、このかんやまとゆはゝれ彦の命、初て人のかたちなりとて、神武天皇となつけまつり奉り、此れ人皇第一代百を百代のその初めなり、まことに人のはじめなりとて、都はやまとの國かし原の、そこつ岩ねに宮柱しとしきたつ高まの原につぎ高つして天津しつぎをしろしめし、馬島じの命ハ天の御寶を奉り、宮らかの内にはとくさの神寶をあかめ納る、天の富の命ハ天の神のゆうごとをもうしそうじてないしき申ぎ、今のだいりのおうどうおうぎをしる事此の時よりもこと〴〵くにはしまるなり、ぶし者べの初めなりとて大六天皇まをうのばつそん、長すね彦のつぐてきのしじうとして、おうひおうばへまごくにせんと國中を、をうきしる事この事神武天皇きこしめし、やしからざる事どおぼしめしこれをごづいどうどうして、すなわち御身をかたどり三種の神ぎをはいし、天神神ぎを御ぬり神くんでんを心にたまへて、みつからしづじんをなし玉ふ、くめぶのどうりみづをんの命、ぶぐおうのすぐれ馬しまじの命ハぎおん中ぎよう、たつまち長すね彦を、ちうばつあり長す根彦の兄の中ばん、其のつみのすくなければとて、とうくねの國そこの國そとがはまへはらへたまへて、そのほかあらゆる國々のちようてきどもをみな中ばつなし玉も、これ三種の寶のしんどくとして、君か代は千代萬歳と納まれば、

千代の御神樂そうすべし。

二四、三　韓

神功皇后の三韓御遠征を仕組んだものである。大償流及び羽山、圓萬寺等に傳ふ。異同が多いが左には旭又本のもののみを誌す。

三　韓　の　舞（旭又本）

幕出〈もろこしの月のわかたに

〈きん請さいはい〳〵、天神地祇八百萬の神達速に來現し玉ふべしのふ

〈をふちよぐじやうを蒙り諸神みな常陸の鹿嶋に集つてけか、あどべの磯等かいかに此神見へはんべらず、是ハ何樣故あるらん、速に庭火をたき榊の枝にあをにき手白にきてをかけ、神樂さいばらをそふしたまへ

〈を夫に見へけハいかなるものにてけぞよのふ

○をふ我ハ是あとべの磯等にてけ、我海中を利せんかため久しく海底に止り、か、る異形となり、やんごとなき御神前へ參らん事のはつかしさに、今迄參り兼けへとも、妙なる御神樂の感に堪かねはづをもわすれ身をも省ず、此御庭へ參りけそよのふ。

〈のふ〳〵聞玉へ諸神達を請じ奉ること別儀の子細けこず、この度新羅高麗百濟をたへぢせんため唐利道翁の一卷を傳へたり、然れとも未た武備足れりとせず、汝いそら龍城へ行て兩顆の玉を借來るべしのふ

○をゝ其儀なら吾龍城へ下り申ぞよのふ

○をふ命を請奉り龍城へゆきて鹽水玉と鹽ひる玉をかりきたりすみやかに君に奉らん

〈神功皇后の御腹にハ、八幡太神宿らせたまへて、五つ月にならせ玉へハ高羅明神はからひ玉ひて、よろいの脇立造出し玉ふ。住吉諏訪の二神をハ副將脾將の二軍となし、其余の大小の諸神達ハ一万余艘に打乘玉い、三かんさしてぞ漕寄玉ふ、三かんの兵どもハ是を見るより、數万の兵船押出し玉ひ、秘術つくしてたゝかいけれハ、皇后則ち鹽滿玉と鹽ひる玉を行ハせ玉へバ、三かんのつゞものども、なみにおぼれてうせにけり。

二五、衣　更　着（伊賀）

荒澤では、きさらぎ、二階や興屋ではいかといふ。きさらぎは二月であるが、いかの意は明かでない。左には荒澤のを誌す。

衣　更　着（荒澤本）

幕出し〈立來る浪ハ颯々と、蹴立て〳〵、南無御神体とハ現ハれたり

と、幕下に兩袖を出して振る。幕をつき出し、なほし、かくて、しやぐま、赤の荒面、千早、大口の者が出て、袖をとり、左右に振あつて舞ふ。大まはりをして幕前に至り、右袖をかつぎ、仰ぎ、その場にめぐり次に左袖をかつぐ。次に一まはりして次の座になほり、同樣ある。かくて幕前に立つと語りになる。

中言立 〈神功皇后八幡山のことハりハ、有かと思へハ彼の白雲にさつと居合せゆ、世に〳〵不思議と存候、我こそハ本地八幡大菩薩の御神躰にてましますか、結跏趺座に座を組んて、日本六拾六ケ國、只壹ト目ニ見えんやさあ

と、囃子となり、同樣に袖を振りつゝ一舞あり、幕前に立つと囃子を打とめ、次に、次の歌にかぶせて囃子となり、袖を振りつゝ振がある。歌がきれて囃子のみになると、更にはげしい振で舞ふ。かくて幕前に拜して入る。

〈衣更着やゝ〳〵、初卯の神樂面白や、諷や〳〵神の誘ふ、返す〳〵も歌ふたり。

切 實に〳〵忘れて有り、實に末世と有ながら、數有る玉のいとふの印、獸類鬢も松吹風も、南無御神躰とあらハれたり。

異傳 二階ではしやぐま・牙の出てゐる鬼面・直垂・大口の支度で出、袖をとる外、何も持たずに舞ふ。興屋でも同じ支度の者が出た。面はロをあけた赤色の面である。坂の下でも同樣で、こゝではこれを鬼舞とも言ふ。田子で「とらのロ」といふのがこの舞らしい。舌を出した面を用ひるといふ。

三六、すわのいか

仙北諸本に詞章がある。次には西長野本のを誌す。

すわのいか

幕出〈あの山影此山かげ、しんらん大王とは自が事也

〈日本な堂々寺々高野信濃迄も拜むに拜んでゆ得共、未た諏訪の御社を拜まずにてゆ、あれ〳〵御覽ゆへの、あれに一村林と見えけるは、諏訪の御社ニてゆ、どう〳〵と落る瀧の水をまひて六月一とひに田を作り、七月廿七日ニハ諏訪の御祭りニてゆ、諏訪の御祭に合するを以て、砂子坂共申なり、又白幡の明神共申也、白幡の明神の御神体を拜みたぐハ、吹笛も吹上げ、打鼓も打上げ、忝いやはつとおんはやし可被成くゆ

〈中にも諏訪のみまさ山參りの數々にしなんの色々衣明山のはに何物かぬがすべきか、ぬがさるべきか、しんらん大王とは自ヵ事也

三七、地神舞

鳥海山麓の番樂に傳ふ。地を踏みつゝ、舞ふらしい。古曲であつたと思ふ。左には興屋本のを誌し、尙異傳を皆誌しておく。

地神舞（興屋本）

神神は、舞揺、笛とひよしハそろへつゝ、いさめし神ハ舞揺〳〵

舞詞 さゑや、地神のいさめし舞なれバや、笛どひよしの揃つゝや、いさめし神ハ舞をしつかに〳〵

此詞ハ四方かため

さゑやふ面白や面白や、此のとんの、此庭に、まんたらよんねのよねなれハ、足原ちよんちやのよねふりて、ふゑふ、まけ共〳〵つきもせす、此地を一地とふむ人ハ、七千歳迄さかゑたもふ、万年歳迄、さかゑたもふ、おゝ夫、はれさ〳〵、はれ〳〵〳〵ふさ、さ。

次ハはやにしま

異傳 (一) 荒澤本には、幕出歌のみが左の樣にあつた。

地神舞（荒澤本）

〈神々や、深き淫ひしあそぶにハ、笛と拍子を打揃ひ、いさめし神ハ舞あそぶ

然し口承によつて次の歌を得た。これは舞歌であるといふ。

〈面白や〳〵、かの殿の此の庭に、まんだらよに米ふりて、蓋原長者の米なれば、まけども〳〵盡きもせず、かのじよを一じと踏む人は、七千歳まで榮えたり、萬千歳まで榮えたり、アイヤアラ、地神のいさめし舞なれば、笛と拍子を打揃へ、いさめし神は舞遊ぶ。

(二) 二階本には左の樣にある。

地神舞（二階本）

まく出早ミしま〈神々の、御樂を揃、あそぶには、笛と拍子を、そろへつゝ、いさミし神は、舞揺ぶ〳〵

早ミしま〈こゝハどこ、なるとのにゐのたちところ〳〵、千代ふる神は、是はまひとり〳〵、おもしろや引

御調子〈こゝはとこ、なるとのにゐの立ところ、千世ふる神ハ、これはまひとり

(三) 最上の釜淵に傳へてゐる詞章は左の如くである。

ジジ舞（最上本）

地神ノイサメシ舞ナレバヤ、笛ト拍子ヲ揃ヘッ、ヨ、イサメシカミヲ 舞ヨスマカニヤ〳〵〳〵、アイサーサ〳〵

オモシロヤ、コノ殿ノコノ庭ニ、マンザラ米ニ米降リテ、カシワラ長者ノ米マケバ、マケドモ〳〵盡キモセズ、コノジヲ一ニト踏ム人ハ、七千歳マデ榮ヘ給フ、萬年歳マデ榮ヘ給フ アラサー

(四) 尙、坂の下では、作祭りに、「地の神の舞」とて舞ふといふ。二人出る由である。

三八、木賊刈

黒森及和野に傳へてゐる。黒森の傳は左の如くである。

幕出歌で、幕を少し上げ、幕下に足踏が色々あり、尙舞人の持物を少し幕下より見せる。一旦幕を下し、やがて雌雄の鳥兜・直面・振袖・ぬぎだれの仕度の者が二人、右手に鎌、左手に稻穗を採つて續いて出る。胴

前と幕前とに向ひ合ひに腰を下し、鎌を前にし、稻穗を腰につけて拜し合ふこと二度あり、次に立つて舞ふ。この舞が色々あり、左右に木鍬を刈る樣な振も入る。後に持物を置き、別につぼめた扇と鈴とをとつて舞ひ、次に扇を開いて舞ひ、次に鈴を置き、鹽をとつて、舞ひつゝ鹽をまく。次に再び鈴をとり、一舞あつて入る。約九分のもの。

尙、和野では、一人は烏兜・直面・襦袢のぬぎだれ・袴の男委、他は烏兜・直面・振袖のぬぎだれ・帶の女委で、各〻薙を左手に、鎌を右手に持つて舞ふといふ。

二九、綾遊び

黑森流のものにある。

(一) 黑森のは、烏兜・千早・袴の者二人が、各〻綾を兩手に二本持つて出、入れ交りにもなつて舞ふ。特別の神歌はない。

(二) 大川では「さんや綾遊び」といふ幕出しで出、山の神舞の拍子で舞ふといふ。綾竹を互に打合せたりすることがある。

(三) 長綿や和野にも傳がある。何れも烏兜・襦袢・ぬぎだれ・袴の者二人が綾竹を持つて舞ふといふ。

三〇、ささわき

(一) 晴山では「ささわきよー、笹とりそへておがむれば」といふ幕出しで出る。語りはない。岳では笹刷と云ひ、笹を持つて舞ふといふ。

(二) 白澤神樂でもささわりと言ひ、こゝでは、前結鉢卷・直面・襦袢のぬぎだれ・襷・袴の者が、二人、茶め扇と笹とを採つて續いて出、相對し、持物を合せ、又場所を換へつゝ舞ふ。胴取は神歌を歌ふ。次に扇を開いて舞ひ、最後に四方を拜して一旦入り、すぐ、一人が再び扇と鈴とを採つて出て、舞ひつゝ鈴を手玉にとることなどあり、次に鈴を置いて扇のみで舞ひ、同じくこれを手玉にとることなどがあり、尙、みかぐら風の舞を舞つて入る。

三一、哥の父・哥の母

晴山本に左の神哥あり。但し舞の樣子は不明である。

哥の父

〈八雲たつ、いづも八重垣つまこめに、八重垣たつる、その八重垣を

母〈あさかやま、かけさい見へる山の井の、あさぐハ人ハおもふものかな

三二、袖からみ

興屋本にあり。左の幕掛の歌のみが誌されてゐる。

幕掛　君か初ておかむれば〳〵

さら〳〵〳〵と出たりけり

第六十二圖　杉澤の猩々

三三、神保舞

同じく興屋本にあり左の樣に誌されてゐる。

にしまにて舞也、はやにしまにて舞也

夫ゑ五ひよし

三四、猩々

杉澤、女鹿、興屋、小瀧等に傳ふ。杉澤の猩々は左の如くである。

猩々（杉澤本）

「この殿の乾の隅に」、「君をはじめておがむには」のかけうたあり、しやぐま・桃色縮緬・素面の、常の番樂姿のものが出て、手を伸し、いつもの振がある。「ハイランダラ、」で太刀をぬき、一舞あると、太刀を小脇にしてトンボをきることあり、又トンボをきり、太刀をたてゝその刄先を見やることあり、これを「ハイランダラ、」の囃子で四方にする。笛も入る。かくて、太刀をくわいで、逆立ちをすることあり、とゞ順に三まはり舞樂をめぐつて入る。約九分。

ハイエー　ハツサ　だゝだご〳〵〳〵　エ、　だゞゞ　エ、　だゞゞ

それ猩々と申せしは、大酒呑のことなれば、七合入なる杯に、七斗五升まで納めたり、せう〳〵せんと納めたり、ハイランだら、ハイランだら、

異傳　(一) 女鹿では柄の長い柄杓を持つて舞ひ、後に太刀を採ると云ふ。

猩々（女鹿本）

それ猩々や、〳〵と申せし人は、たいせんうんの事なれば、七合入れの盃で、ひきかへ〳〵呑むほど、猩々にさんごくほされけり。

(二) 小瀧でもやはり鶏がりつゝ舞ふといふ。

前と幕前とに向ひ合ひに腰を下し、鎌を前にし、稲穂を腰につけて拜し合ふこと二度あり、次に立つて舞ふ。この舞が色々あり、左右に木鉞を刈る樣な振も入る。後に持物を置き、別につほめた扇と鈴とをとつて舞ひ、次に扇を開いて舞ひ、次に鈴を置き、鹽をとつて、舞ひつゝ鹽をまく。次に再び鈴をとり、一舞あつて入る。約九分のもの。

尙、和野では、一人は鳥兜・直面・襦袢のぬきだれ・帶の女姿で、各〻榊を左手に、鎌を右手に持つて舞ふといふ。

二九、綾遊び

黑森流のものにある。

(一) 黑森のは、鳥兜・千早・袴の者二人が、各〻綾を兩手に二本持つて出、入れ交りにもなつて舞ふ。特別の神歌はない。

(二) 大川では「さんや綾遊び」といふ幕出しで出、山の神舞の扣子で舞ふといふ。綾竹を互に打合せたりすることがある。

(三) 畳綿や和野にも傳がある。何れも鳥兜・襦袢・ぬきだれ・袴の者二人が綾竹を持つて舞ふといふ。

三〇、さゝわき

(一) 晴山では「さゝわきよー、笹とりそへておがむれば」といふ幕出しで出る。語りはない。岳では笹燈と云ひ、笹を持つて舞ふといふ。

(二) 白澤神樂でもさゝわりと言ひ、こゝでは、前結鉢卷・直面・襦袢のぬきだれ・襷・袴の者が、二人、菅め扇と笹とを採つて繞いて出、相對し、持物を合せ、又場所を換へつゝ舞ふ。胴取は神歌を歌ふ。次に扇を開いて舞ひ、最後に四方を拜して一旦入り、すぐ、一人が再び扇と鈴とを採つて出て、舞ひつゝ鈴を手玉にとることなどあり、次に鈴を置いて扇のみで舞ひ、同じくこれを手玉にとることなどがあり、尙、みかぐら風の舞を舞つて入る。

三一、哥の父・哥の母

晴山本に左の神哥あり。但し舞の樣子は不明である。

哥の父

〈八雲たつ、いづも八重垣つまごめに、八重垣たつる、その八重垣を

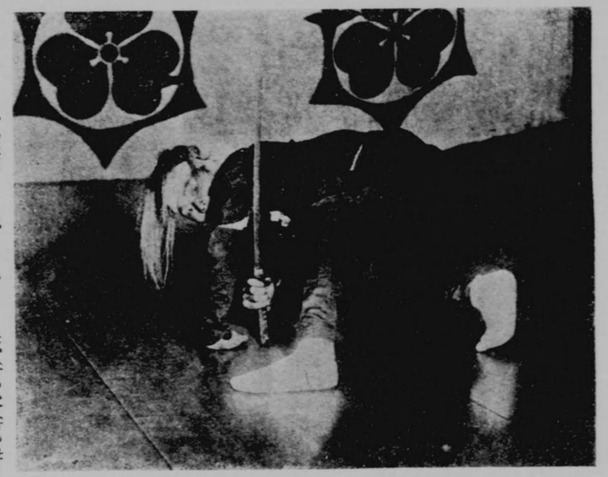
母〈あさかやま、かげさい見へる山の井の、あさく、八人ハ思もふものかな

三二、袖からみ

興屋本にあり。左の幕掛の歌のみが誌されてゐる。

幕掛　君か初でおかむれば〳〵

さら〳〵〳〵と出たりけり



第六十二圖　杉澤の猩々

三三、神保舞

同じく興屋本にあり左の樣に誌されてゐる。

にしまにて舞也、はやにしまにて舞也

夫ゑ五ひよし

三四、猩々

杉澤、女鹿、興屋、小瀧等に傳ふ。杉澤の猩々は左の如くである。

猩々（杉澤本）

「この殿の乾の隅に」、「君をはじめておがむにほ」のかけうたあり、しやぐま・桃色鉢卷・素面の、常の番樂姿のものが出て、手を伸し、いつもの振がある。「ハイランダラ、」で太刀をぬき、一舞あると、太刀を小脇にしてトンボをきることあり、又トンボをきり、太刀をたてゝその刄先を見やることあり、これを「ハイランダラ、」の囃子で四方にする。笛も入る。かくて、太刀をくわいで、逆立ちをすることあり、とゞ順に三まはり舞樂をめぐつて入る。約九分。

ハイエー　ハツサ　だゝ、だゞ〳〵〳〵　ち、　だゞゞ　ち、　だゞゞ

それ猩々と申せしは、大酒呑のことなれば、七合入なる杯に、七十五升まで納めたり、せう〳〵せんと納めたり、ハイランだら、ハイランだら、

異傳　(一) 女鹿では柄の長い柄杓を持つて舞ひ、後に太刀を採ると云ふ。

猩々（女鹿本）

それ猩々や、〳〵と申せし人は、たいせんうんの主なれば、七合入れめ盃で、ひきかへ〳〵呑むほど、猩々にさんこうはされけり。

(二) 小瀧でもやはり鈴がりつゝ舞ふといふ。

猩　々（小龍本）

△是猩々の申せしようは、大人のおんことなれば、七合入のおん杯で、ひきかへ〳〵ほすほどに、猩々に三度ほされけり

△ハイララララ、舞たり舞ふたりや、品やかに舞ふたりや、舞ふたりもたりやコロコロコロコロ〳〵

（廿）興屋本には左の如くある。

そ　ふ　じ　よ（興屋本）

幕掛　たにやミ越の藤の花〳〵、さら〳〵〳〵とも出たりけり

ぶたて　そもふ、そふおよと申すへそふもふ、一七十年のごだいを引かい〳〵ほされたり、そふぢよふせんにほされたり

三五、小獅子舞

岳の菅原氏本には左の如く書きとめられてゐる。

小　獅　子　舞（菅原氏本）

まく出し　〈鞍馬山ぎにつきにけり

〈ダンツクツクタダンツクチ〳〵〳〵

此舞ハ、だきくるま、くゝり、ざるむぐり等、二人にて舞ふなり。

異傳　（一）大償では、鉢卷・直面・褌袴のぬぎだれ・扉・袴・扇一本の者が二人出て舞ひ、後に扇を置いて、色々輯楽式の舞があるといふ。二人が抱き合つて、くる〳〵とひつくり返つたりなどする。この舞は小中野にもあつた。

（二）上母懸や富根等にある「車角力」は、「八島」とこの舞とが一諸になつたものらしい。（八島參照）

（三）又、女鹿でカタジシ、或は鋼（つゝが）の舞といふのは、二本の太刀を持ち、轉んだり起きたりするものの由である。

×

荒　舞

以下に主として荒舞を輯めてみる。

三六、注　連　切

大償では、必ずしも最後には舞はない。美しい奇古な型を傳へてゐる。

〈しめきりな、サンヤ

といふ幕出欲で、幕を大いにゆり、幕下の足踏もあつて、鬘・赤の荒形面・ぬぎだれ・袴・帶刀のものが、つぼめ扇を二本とつてこれが十字に交差される樣に兩手を拡んで持ち、太刀の柄を長くしてこれに今のまゝの兩手をかけて出る。くびをククと振ることあり、右足を一歩左方に綾に踏みこんで、そのまゝ送り足をして順に大まはりに舞臺をめぐる。手も足も十字なのである。次にその場に順逆にめぐり、きまり、足拍子を踏むことなどあり、又足を綾にし、送り足をしつゝ大まはりに舞臺をめぐる。二まはりして、中央に出ると又踏み方が色々あつて、その場にも順逆にめぐる。かくて又大まはりをし、以上の振を繰りかへす。

次に組んだ兩手をハラと離し、正面に出て兩扇をひらき、風を入れつゞ綾の送り足で大めぐりをし、更に大めぐりをする。

次に兩扇を色々に使ひ、足踏みもあつて荒く舞ふ。きまつては大まはりをし、身づくろひをする。兩扇を小脇にして舞ふこともある。とゞ、足拍子を大いに踏みつゝ舞ひ、中央にチャッときまると、扇を捨てゝ入る。以上で十一分。そのまゝ囃子が續く。

次に後見の者が出て、綱を幕に向つて左寄りに幕とは丁字形に張る。幕の方を後見が持ち、他の方は、附近の柱を利用して結んでおく。この綱には中程の二ヶ所に四垂をつけておく。やがて、

〈あまよのみかげ〳〵

といふ幕内と胴取との掛合の囃子言葉があり、幕をかゝげて、先の者が棒を持つて出る。この棒を右脇にかゝへてきまり、これより棒の使ひ樣が色々ある。

次に棒を置き、太刀を抜き、これを大上段にかまへて大まはりをすることあり、足拍子も踏み、その場にもめぐつて、以下太刀の使ひ方が色々ある。とゞ、綱を見こんで、その場にめぐると、綱を中央より切り、綱の四垂をもとり、拜して入る。以上、前後とも二十二分のものであつた。大層力（ちから）のこもつた姿の美しい舞であつた。

異傳　（一）岳でははじめ鳥兜に荒面をつけた者が出て舞ひ、扇は開かずにしまふ。中入後は鳥兜をとつて、鉢卷、直面になり、扇を開いて舞ひ、次に扇を置いて太刀を抜き、色々に太刀を使ひ、次に兩刀になり、又使ひ方が色々あつて舞ふ。綱を切ることはなかつた。太刀舞がきまれば、太刀をおいて入る。菅原氏本には、「七五三舞、まく出し」云立なし）

一、せんやしめきりよ　さんや　サ、、、、、タダ〳〵シク〳〵〳〵〳〵〳〵　此處ハ兩刀兩扇壹人ニテ舞なり」と誌されてゐる。

（二）遠野にもこの舞があつた。八幡でははじめ面をつけて出、くづしの折に面をとる。即ち、ザイ・鉢卷姿になり、太刀を二本とり、使ひ方が色々あつて舞ふ。宙返もする。又飯豐では、ザイ・荒面・詰袴・小禪の者が出て舞ひ、やはりくづしで面をとる。はじめ扇二本で舞ひ、後に太刀を採つて舞ふ。尙飯豐には別に「二人注連切」といふのもあるが、これは兜（垂あり）・荒面・千早・袴・ボンデン・太刀の者が出てくづしでやはり面と千早とをとり、詰袴姿になり、後で注連繩を切るといふのであつた。これはやはり後見が出て、舞臺に張り渡したものを一人で切るのである。大抵最後に舞はれる。

八幡本には三ヶ所に「七五三切」の詞章が誌してあるが、「壹人七五三」といふのが、右の荒舞に當るらしい。〈しめぎりを　なにとたゝ　さんや」といふのである。言立のあるのは、多分岩戸の注連に引合せて後から詞章をつくつたものらしい。みかぐらの起りなどを說いたものである。こゝには省略する。

（三）中野の注連切には、最後に鳥兜・赤面のものが出て、張り渡した注連繩を切つて舞ふ。小中野でも同樣に舞ふらしいが、こちらでは舞臺の四方の注連繩を切る。それ故民家で注連を張らずに演ずるときには、この舞は出ない。

（廿）次に中妻本の詞章を誌しておく。

注　連　切（中妻本）

一かく出の哥　常陸帶（四三六）、神に御ゑん結ひ初め　今とけあふそ、神の御心

さんや、まく出を〳〵、さんや　と出る

次ニ　あめ日のミかけ　あまよのミかけを拂へたまへ　きよめ玉へ　これにてせめ出る　ノ〳〵〳〵　口傳有

(四六)尙、番樂の石神では、鉢卷・直面・ぬぎだれ・袴の者が、はじめ扇と鍋杖とをとつて舞ひ、次に太刀を持つて舞ふ。宙返りもする。最後に注連繩を切るのであるが、これは切る眞似だけをするといふ。

三七、普　將

岳の普將は左の如くであつた。

〈さんや、ふしようじんナ〳〵

といふ幕出歌で、鈴木が二つ幕下より出、幕を腰の高さに上げてゆるがし、幕内の足踏あつてもとになほす。早拍子の樂が囃される、やがて兜（垂あり）・黑の口あき面・繻袢のぬぎだれ・襷・袴・手差・手に丸字の支度の者が、太刀二本を左右の腰に帶び、鈴木を二本兩手にとつて出て、激しい振がある。首を左右にし、鈴木を左右にさし、その場にめぐり、伏し、首をおこし、なほつてめぐること等あり、これを東西南北にし、跳び上ること、兩垂を上げること等あり、とゞきまつて幕前に寄り、坐して幕を冠る。以上約七分、囃子がなほつゞき、笛が入る。

扨て、幕を冠つた舞人は、兜と面とをとり、前結びの鉢卷になり、扇を開き持ち、幕を排して立上る。この間約二分、棟の送り足（右足を一歩棟に左足の前に出し、次に左足を右足の後に送り、次に右足を進め、左足を送る、この樣にして進む）で順にめぐり、振あり、地段歌を踏み、又タタタを踏みつゝその場にもめぐつて激しく振がある。とゞチヤッと樂を切ると共に舞もきまり、扇を置き、一刀を拔いて送り足で順にめぐる。とゞ太刀をはげしく振ることあり、タタタも踏み、逆にその場にもめぐり、タと舞をきめる。次に兩刀になり、この太刀を逆手にもとり、タタタを踏みつゝその場にもめぐり、使ひ方が色々にあつて舞ふ。ぐるぐるめぐりもする。これは恐らくこれ以上は企て及ぶまいと思はれる早拍子の舞であつたことが強く印象に殘つてゐる。とゞ兩刀を置いて入る。後の舞は約六分であつた。

菅原本の書き留めは左の如くである。

武　將　殿　舞　まく出し

一さんや、武將殿よさんや、ダクダクシクシク〳〵〳〵

此處ハしめきりに似て舞方ちがふなり

異傳　(一)大體のも、兜・ぬぎだれ・襷・袴の荒形の者一人の舞で、鈴木二つ、扇二本、太刀二振を次々に採つて舞ふといふ。

(二)夏屋では鬼面の者が出た故不正鬼とも言つたらしい。夏屋本の詞章は左の如くである。

荒舞　不　正　マク出

▲サツイヤウ　不正鬼ヤウ　サツイヤウ

▲ガダウ出テヤウ　サツイヤウ

▲四方ヲジヤウドウ　サツイヤウ

ロウダウサンナウ　サツイヤア

(三)黑森にももとあつたが、これは注連切舞のことであらうと古老が談つてゐた。兩者の舞はやはり似てゐたらしい。

(四)中妻本に誌されてゐる詞章は、左の如くである。

扶　桑（中妻本）

一かく出の哥　四二七　吳國より　惡魔の風の吹き來るを　それ吹き戻す　伊勢の神風

さんや　まくいてを〳〵　さんや　さんや　ふしやう神〳〵　さんや

ほねを折つて舞ふべし

(五)尙、中野で「一人荒神」と言つてゐる舞は、左の樣な幕出しで出る。

〈ふうしよう荒神はよー〳〵さんやー　胴取かへす。

三八、三寶荒神

やはり荒舞であつたらしい。

(一)遠野には、附馬牛本と遠野本とに詞章が見えてゐるが、これらは後から作られたものらしい。附馬牛本のを念のため誌しておく。

三　寶　荒　神（附馬牛本）

○をふまかり出來る三寶大荒神申寒ル本體ヲ委しくたつぬるに、○西南北に大小不動明王、けろ地神、比者門天王、辨財天、大黑天、宇加ノ神、是を荒神變化なり、御身を拜す寒れハ、八面き立形つハ金銀なり、左ノ第一手ニ鈴ヲ持ツ、第二手ニハ三尺の寶劍を持、第三手には上ヱノ弓ヲ持、次キにはかぐの矢をひさき寒り、惡鬼惡魔拂、諸病惡敵退散、御祈禱敬白。

(二)中妻本に詞章の見える「荒神」は果して三寶荒神であつたかどうかは不明であるが、假にこゝに收めておく。

荒　神（中妻本）

一かく出の哥　四二八　あら神の　しやふする宮にあやはへて　錦をのべて　こさとふませふ

舞樣口傳有物也

初めを已り共にみな四方切さこの時なとハ猶々氣を付へし

幣狂ひなとにハまことに氣を付へき神樂也。とう取共に口傳あり。

(三)田子のは「法を結べば」などいふかけうたがかゝる。肩車に乘ることもあるといふ故、二人出たらしい。

三九、藥　師

田子や小中野に傳へてゐる。田子の傳は左の如くである。

〈エンヤハー　藥師の舞は〳〵　ヤイソリヤ

といふかけ歌で、幕をふるはし、鉢卷・直面・繻袢・襷がけ・袴のものが兩刀をとつて出、その場に順逆にめぐり、除の足（はじめ爪先をつけ、次に踵をつける）を右、左で踏む、これを順逆にめぐつては、四方に向つてする、次に太刀を十字にかまへて退り、宙返りをし、右足、次に左足で除の足を踏み、次の座に向つて太刀を十字にして宙返りをする。このことを四方に繰返す。

次に四本の太刀をとり、これを先づ四方に置き、內兩刀をとつて順逆にめぐりつゝ振あり、宙返りもする、次にこの太刀を置いて、他の兩刀をとり、同じく振あり、次に、一本太刀になり、同樣順逆にめぐりつゝ振あり、宙返りもし、次に太刀を喉に擬して宙返りをする。次に太刀を

置き、袖をとつて舞ひ、次に四本の太刀をとつて、片手に兩刀づゝ持ち、その場にめぐりつゝ振あり、とゞ宙返りをすると、持物をおき、扇をとつて開き、順逆に大いにめぐりつゝ一舞あつて入る。約十三分の舞であつた。

この折に歌はれるかけうたは、左の如くである。

かけうた〈樂師の舞は　〈樂師の舞は、ハイソリヤヤイ

〈拍子をそろへてな〳〵ナハイソレー

〈えんや　ハじうじやくめぐりはナーノ〳〵　ハイソラヤー

尙舞の樣子は不明であるが、小中野には蒼前舞といふ荒舞もあつた。

四〇、いのり

石神で「いのり」といふ舞は、後鉢卷・直面・褊衿のぬぎだれ・褌・袴・帶刀（鎧をつけず）の者の荒舞で、鍋杖に扇をとつて舞ふといふ。

四一、三本劔

小中野にあり。

幕出し〈インヨー三本劔はヨートナー　サイヤー

と幕出歌があると、胴取がそれを受けて歌ひ、やがて、ざい・荒形面・褊衿・袴のものが太刀を左右にさし、もう一本は拔身を背負つて無手で出、逆に一まはりすると幕をとつてゆする。足の踏み方色々あり、腕くみをし、或は手に印を結び、その場にめぐつてめぐりかへし、跳ぶことなどもあつて色々に舞ふ。とゞ幕向に座すと、面をとり、前結びの鉢巻をし、太刀を三本とつて鞘を拂ひ、これを上圖の如く組んで前に置いたまゝ、先づ立つてびつこ引にめぐり、又色々踏み方があつて舞ふ。手には印を結ぶ。宙返りもする。やがて、一本の太刀の鞘中に紙をくるみ、これを口にくはへ、他の兩刀を逆手に持ち、宙返り屢度ある。次に太刀を色々に使つて舞ひ、その場にもめぐり、びつこ引をすることもある。次に太刀を胸の前に十字にして、とんぼをきることあり、次に口の太刀をとつて置き、二本劔を色々に使ひ、又十字にして前に跳んで宙返つたりする。次に一本劔になり、太刀を前方に一文字にしてかへることが幾度もある。太刀の使ひ方の自由な美しい舞であつた。約十四分のもの。

尙、五本劔といふのもある。

四二、龍天

兩天ともいふ。古い修正會の記錄（中右記、長秋記、兵範記、玉葉等）に「龍天・毘沙門・鬼」等と見えてゐるこの龍天は、思ふに同じ法兜師らが、やはり劔や鈴（或は錫杖）を採つて舞つたものであらう。この名はさうした古い舞の名を受けてゐると思はれる。一體荒舞は、何れも比較的古い傳統を持つものらしい。

中野の實演の振は左の如くであつた。

〈エシヤー　兩天な〳〵サンヤー

と幕出歌あり、胴取がこれを受けると、幕から扇が出て一振ある。次にもう一度同じ歌がかゝつて、後鉢卷・黑紋付・褌・袴・帶刀のもの二人が、手には力紙をつけて出る、向ひ合ひ、左右をきつて入れかはりになり、又入れかはり合ひ、太刀の柄に手をかけ、掛け聲をしつゝ踏み方が色々あつて舞ふ。反閉足に似た踏み方もある。又びつこ引に踏むこともある。次に向ひ合に坐し、扇を開いて右手に持つと、立ち上り、向ひ合になり、又背中合せにもなり、背中合せに付いて足踏みをすることもある。次に再び坐して、太刀をとり、振あつて立ち、入れかはりになり、太刀を拔き、又入れかはり合ひ、背中合せに付いて踏み方がある。かくて一まはりし、太刀を互にとり合つて順にめぐり、びつこを引きつゝ太刀をくゞり、又くゞり合ふことあり、更に色々にくゞり合ふ。又とり合つたまゝ順逆にめぐり合ふこともあり、とゞ一人が入ると、後に一人が殘り、二本劔になり、色々に劔を振り、逆手にとることなどもあり、その場にめぐり、めぐりかへしつゝ舞ひ、とゞ胴前に拜するのをとめとして入る。

約十分のものである。

大償や岳では、鬘・面・褊衿のぬぎだれ・褌・袴の者二人が、互に太刀を取り合つて舞ふ。

黑森では、ざいをつけた兩人の者が、鈴を採つて舞ふといふ。

四三、宮鎭

（一）中妻本に左の詞章あり。

四〇、いのり　四一、三本　四三、龍天　四三、宮鎭　四四、いつくさ

宮　鎭　但二人にて舞（山本氏書込の註に「男面・ヤセ面」とあり。）

四三九一八雲立いつも八重かきつまごめに　八重垣こむる　その八重垣を

次ニ　さんや　宮鎭〳〵さんや　舞やう口傳有

（二）夏屋本には左の樣にある。

荒舞　庭　雀　マク出

▲サツイヤウ　庭雀ヤウ　サツイヤア

▲ガウダウ出テヤウ　サツイヤア

▲四方ヲジヤウドウ　巡　サツイヤア

▲シモウ　メウグウリ　サツイヤア

角

（三）遠野の八幡本には左の樣に見えてゐる。

宮　す　ゝ　め

四三〇きこゞより　惡魔風ハ吹き來り〳〵　又吹きもどし　伊勢の神風〳〵

いや宮すゞめ〳〵　さんや

四四、いつくさ

旭又で「いつくさ」と言つた舞は、大償の普將に似てゐるが、荒面を冠り、又二人出る點が異る。即ち、兜・荒面・褊衿のぬぎだれ・褌・袴の者二人が、扇・鈴・太刀等を次々にとつて舞ふ。

又遠野の飯豐にもこれに似た舞があつて、こゝではこれを「ふしよう」と言つてゐた。けれども普將は、別に一人荒神の名もある位であるから、

やはり一人舞が正しいかと思はれる。假面のは、しやぐま・荒面・つめ蓬・草摺のもの二人が出て、鈴・扇・太刀を次々に採つて舞ふ。

四五、勢　劍

中妻本に左の詞章あり。

勢　劍　但三人ニテ舞

一かく出の哥　四三一　ゆるくとも　よもやぬけしの要石　鹿島の神のあらんかきりハ

舞やう口傳いろ〳〵有

大償では「てづるぎ」といふ。髪・面・襦袢のぬぎだれ・褌・袴の者三人が太刀をとつて舞ふ。

岳では「勢劍」と言ひ、同樣の仕度のものが同じく三人出て、互に太刀をとり合ひ、これをくゞり合ひなどして舞ふといふ。

尙この舞は小槌にもあつた。

四六、さ　ん　じ

大償には、別に「さんじ」といふ舞もある。これは「三神」であらうかといふ。兜・直面・襦袢のぬぎだれ・褌・袴のもの三人が出て、劍舞があるといふ故、何れは勢劍に似た舞であつたらしい。

この舞の名稱は、菅原氏寫本の旭又神樂の中にも「サンジ」とある。

又羽山神樂でいふ「三人りうでん」といふのは、やはりこの種の舞であつたかと思はれる。

四七、三　人　立

番樂に傳へてゐる。立は太刀であらう。

(一) 興屋では「君をはじめておがむには」の幕出で、しやぐま・直面・襦袢・づぼん・帶刀のもの三人が、はじめ荅め扇をとつて出、中に合せ合ふことなどがあつて舞ひ、次に扇を開いて舞ふ。次いで太刀舞になり、こゝに各々が太刀をとり合ひ、三角形になり、この太刀を互にくゞることがある。くる〳〵と風車の如くにも連續にくゞり合ふ。約九分のものであつた。

(二) 荒澤のも同樣の三人の太刀舞であつた。

(三) 二階本には、その囃子歌も、左の樣に誌されてゐた。

三　人　立（二階本）

幕出ヘ七日ゆく〳〵　四三二　濱の砂の數よりも　猶も久しき　神代（かみよ）御代かや　面白や

囃子ヘソレヤはゑ〳〵　そこなゐヘ　ソレヤはゑ　ソレヤはゑ　さアさ〳〵　ソレヤはゑ〳〵

二人目ヘ妥も高天ヶ原なれハ、集り玉ヘ四方の神々　面白や

ヘソレヤはヘ〳〵　そこなゐゑ　ソレヤはゑ　ソレヤはゑ　さアさ〳〵

第六十三圖

杵　舞（中野）

（北村古心氏寄贈）

ソレヤはいソ〳〵

三人目へそれにつけても　面白や

〈ソレヤはゑ〳〵、そこな已へ、ソレやはゑ、ソレヤはゑ　さアさ〳〵、

そこな已へ、ソレヤはゑ、ソレヤはゑ、さアさ〳〵、そこな已へ、ソレヤ

はゑ〳〵、ソレヤはゑ、さアさ〳〵、そこな已へ、ソレヤはれアさゝ

ソレヤはゑ〳〵

舞戻〈ソレヤはゑ　さアさ〳〵、ソレヤ〳〵

〈そこな已へ、はれアさゝ

三番拍子〈ヱンさアさ〳〵〳〵〳〵

〈小廻り、　三番叟拍子、　小廻り

〈三番叟拍子、　小廻りして舞もとし

御にてくゞる時〈はれがすさ〳〵〳〵〳〵

四八、盆　舞

(一) 大貫では、二人舞」といふ。鉢巻・直垂・ぬきだれ・襷・袴の者が、両手に盆二つを持つて舞ふ。(この盆に米を盛ることはない。)

(二) 退又では「おしき舞」といふ。両手に盆を揆つて舞ひ、そのまゝ宙返りをすることなどもある。

(三) 岳でも「おしき舞」といふ。やはり盆を両手に揆つて舞ふ。

(四) 幾野の野崎では「能野路は、音無川に水汁して」といふ歌で、鉢巻・直垂・袴袴のぬきだれ・片襷・袴の者が、扇をとつて出、左右をきりつゝ一舞ひあり、次に扇を收めて、盆二つを掌にのせ、幾度かその場に順逆にめぐつた。次に片手を高く上げ、他の手を低くし、その手を反對にし、この上下を交互にしつゝ四面にまはり、次に盆を両手にのせたまゝこれを落さずに暴向に宙返りをし、次に腕向に同じく宙返りをし、もう一度づゝこれを繰返す。次に盆一つを持つて、神歌に合せて盆の曲取りをし、次に盆二つを小脇にして、左右をきりつゝ一舞ひありそのまゝ入つた。

約九分のものであつた。

(五) 和野では、四角な盆のことを、へげといふので、この舞を、へげ舞と言ふ。やはり宙返りなどをする(今は絶えた。)

(六) 比立内では、山神舞の終りがこの盆舞になるといふ(山神舞の項参照)

(七) 其他、黒森、田子、中野等にもこの舞が残つてゐる。

四九、杵（キネ）　舞

(一) 田子では、宿元などにある有合せの手杵（キネ）(中くびれのもの)を利用する。鉢巻・縞袴・襷がけ・袴の者が、この杵をとつて舞ひ、次にこの杵のくびれに足をかけてこれに乗り、とん〳〵と跳んで平衡をとる。高足に乗つた具合である。扇をとり、手廻しにもなる。次に降りて、この杵をとつて振りまはす、上に高く投げ上ることもある。曾てこの杵が投げ上げられた拍子に梁に上り、しばし止つて又落ちて來たのを見事に受けとめて大喝采を博したことがあつたといふ。

(二) 中野の杵舞には、赤間の桜の使ひわけの様な曲芸が入つてゐた。即ちはじめ杵を幕より轉ばして出し、次に扇と剣とが幕下より出て、振がある。次に一旦幕を下し、やがて朝結の鉢巻・揆色の上衣・襷・袴のものが太刀を左肩にかつぎ、右手に扇をとつて出て、その場にめぐりつゝはげ

「ソレヤはい〳〵」

三人目へそれにつけても　面白や

へソレヤはゑ〳〵、そこなヒへ、ソレやはゑ、ソレヤはゑ　さアさ〳〵、

「そこなヒへ、ソレヤはゑ、ソレヤはゑ、さアさ〳〵そこなヒへ、ソレヤ

はゑ〳〵、ソレヤはゑ、さアさ〳〵、そこなヒへ、ソレヤはれアさゝ

ソレヤはゑ〳〵

舞戻へソレヤはゑ　さアさ〳〵〳〵〳〵

へそこなヒへ、はれアささ

三番拍子へエンさアさ〳〵〳〵〳〵

へ小廻り（こまは）、　三番叟拍子、　小廻り

へ三番叟拍子、　小廻りして舞もとし

御にてくゞる時へはれがすさ〳〵〳〵〳〵

四八、盆　舞

(一) 大館では、「踊舞」といふ。鉢巻・直垂・ぬぎだれ・襷・袴の者が、兩手に盆二つを持つて舞ふ。（この盆に米を盛ることはない。）

(二) 旭又では「おしき舞」といふ。兩手に盆を採つて舞ひ、そのまゝ宙返りをすることなどもある。

(三) 岳でも「おしき舞」といふ。やはり盆を兩手に採つて舞ふ。

(四) 遠野の野崎では、「能野路は、音無川にナ水汁して」といふ歌で、鉢巻・直垂・麻裃のぬぎだれ・片襷・袴の者が、扇をとつて出、左右をきりつゝ一舞ひあり、次に扇を收めて、盆二つを掌にのせ、幾度かその場に順逆にめぐつた。次に片手を高く上げ、他の手を低くし、その手を反對にし、この上下を交互にしつゝ四面にまはり、次に盆を兩手にのせたまゝこれを落さずに幕向に宙返りをし、次に胴向に同じく宙返りをし、もう一度づゝこれを繰返す。次に盆一つを持つて、神歌に合せて盆の曲取りをし、次に盆二つを小脇にして、左右をきりつゝ一舞ひありそのまゝ入つた。

(五) 和野では、四角な盆のことを、へげ、といふので、この舞を、へげ舞と言ふ。やはり宙返りなどをする（今は絶えた。）

(六) 比立内では、山神舞の終りがこの盆舞になるといふ（山神舞の項參照）

(七) 其他、黒森、田子、中野等にもこの舞が殘つてゐる。

四九、杵（キネ）　舞

(一) 田子では、宿元などにある有合せの手杵（キネ）（中くびれのもの）を利用する。鉢巻・襷杵・襷がけ・袴の者が、この杵をとつて舞ひ、次にこの杵のくびれに足をかけてこれに乘り、とん〳〵と跳んで平衡をとる。高足に乘つた具合である。扇をとり、手離しにもなる。次に降りて、この杵を投げ上とつて振りまはす、上に高く投げ上ることもある。曾てこの杵が投げ上げられた拍子に樂に上り、しばし止つて又落ちて來たのを見事に受けとめて大喝采を博したことがあつたといふ。

(二) 中野の杵舞には、赤間の杼（ヒ）の使ひわけの樣な曲藝が入つてゐた。即ちはじめ杵を幕より轉ばして出し、次に扇と劍とが幕下より出て、振がある。次に一旦幕を下し、やがて前結の鉢巻・桃色の上衣・襷・袴のものが太刀を左肩にかつぎ、右手に扇をとつて出て、その場にめぐりつゝはげ

しく舞ふ。次に扇を置いて二本太刀になり、この太刀を色々に振つて舞ふ。この折には「劍の拍子」といふ拍子が囃される。曲舞は皆この拍子で舞ふといふ。次に一本太刀になり、この太刀を兩手に一文字にとつてこれをひよいと跳び越え、太刀を離さず、仰になり、背中より太刀を上にまはしてもとにかへることなどがある。次に再び扇と太刀とを持つて大まはりをし、まはりかへし、次に杵をとる。

(1)この杵を高く投げ上げては手に受けとり、右肩にかついではくる〳〵とその場にめぐり又めぐりかへす。この杵を肩越しに左肩にし、又右肩にもどし、めぐることがあつてなほると、

(2)この杵を前にし、手頸を中心にして、これをくる〳〵と水車の如くにまはす、これを右手、左手とする。しかもその場にめぐりつゝする。次に杵を右肩にかつぐと、まはりもどしを幾回もする。

(3)次に右腕を上げ、その上より下へと、右腕の上を杵を轉ばす。「赤間」で杵を轉ばしたのと同樣である。たゞこれは、腕、胴體から足の先まで轉ばし、最後に落さない樣にこれを受取る。次に杵を前方に水車の如くまはすことあり。杵をかついでまはりもどしをし、次に左腕に對しても同樣にする。次に右手に、左手に、水車の振がある。

(4)次に杵を腰のまはりにして、右から後へ、左へ、前へとおくつて、ぐる〳〵とまはす。次に杵を肩にかついでまはりもどしをし、このとき袴の股立をとる。

(5)次に杵をとつて、足の間をくゞすことあり、右後から前へ、又左後から前へと出す。逆順にめぐつて、早目に又このことがある。

次にまはりもどしをし、

(6)次に、先の逆、卽ち前から左右外へと出す。このこと緩急二度ある。

(7)次に、足袋につばをつけて、杵のくびれに乘り、とん〳〵と跳びつゝ平衡をとり、領の扇をとり出して開き、手離しになり、扇もてあふぐ。かくて杵を降り、拜して入る。約十七分のものであつた。

(三)和野では、鉢卷・直面・羽織・袴の者が出て舞ひ、一旦入り、次に羽織をぬぎ、襷がけになつて再び出、杵をとつて舞ふ。然し曲藝風のことはない。

(四)大川では、杵を曲藝風に使ふ、最後は扇舞、後に道化がつくといふ。

(五)七つものに杵が出る所には、もとこの舞があつたのだと思ふ。

五、笠　舞

小中野では頭に菅笠を冠り、兩手に唐傘を一本宛持つが、これはやはり石神や田子の傳の樣に、三つとも菅笠であるのが古風であると思ふ。

(一)小中野では傘舞といふ。「傘を手に持ちあらはれたり。」といふ幕出歌で、幕下より落めた傘が一本出、幕かげの者がこれを一文字に幕と共にとつて一振あり、これを引込める。

やがて前結の鉢卷・錦織の着物（たゞの縞袴であることもあるゞ）裃・袴のものが、傘を一本つぼめたまゝ持つて出、この傘を中に立てゝその場めぐりをしたり、びつこ引に跳んだりすることがあり、とんぼを切ることも兩三度ある。とゞ傘を開き、右足を伸べてきまり、又立つてその場にめぐり、この傘を開き持つたまゝ三度宙返りをする。

次に二本傘になり、右手の傘を前に立て、左手の傘は、柄を小脇にかゝへて、廣げた方を背にする。この左右の位置の條件をかへ、又かへてもとにし、順逆にめぐり、又びつこ引でもめぐる。次に、この二本の傘をとつたまゝ三度とんぼを切る。

次に菅笠をかぶり、小刀をその中程に紙を卷いて口に咬ぎ、二本傘を前同樣にしつゝ、順逆にめぐり、びつこ引をすることなどあり、とゞ四度程とんぼをきる。次に傘をつぼめ菅笠をとり、つぼめた二本の傘も一つにして持ち、宙返りをして入る。約九分のものであつた。

(二)石神では三階といふ。鉢卷・ぬぎだれ・袴の者が菅笠を冠り、兩手に一つ宛菅笠を持つて舞ふ。三階笠の意である。宙返りをすることもある。

第六十四圖　小中野の傘舞（上野氏寄贈）

西明寺でも、これを「三階」と言つた。

(三)田子の傳も右同樣である。宙返りもする。

Ⅵ　權現舞・神送り・諸式

權現の獅子頭をまはすあらゆる場合の式を左に輯めておく。卽ち舞曲の前後に演ぜられる權現舞、門打ち、舞込み、神送り、舞立ち、七つもの、後夜の遊び、新築祝、墓獅子、其他の特殊の獅子舞等に亘つてである。

一、權現舞

葛卷、田子、小中野、檜木、荒澤、興屋等では、舞曲の始まる前に、必ず權現をまはす。これは、惡魔拂ひを最初にするといふことの外に、舞臺淸めをも兼ねてゐるらしい。

又、岳、大償、圓万寺、遠野等では、神樂の最後に獅子を舞はす。これは、これを以て火伏せの祈禱をし、あげものをほめるのである。

門打には、この權現舞の型を以てそのまゝ戸毎にまはす。左には實演に接し得た舞臺の權現舞を主にして誌す。

しく舞ふ。次に扇を置いて二本太刀になり、この太刀を色々に振つて舞ふ。この折には「劍の拍子」といふ拍子が囃される。曲舞は皆この拍子で舞ふといふ。次に一本太刀になり、この太刀を兩手に一文字にとつてこれをひよいと跳び越え、太刀を離さず、仰になり、背中より太刀を上にまはしてもとにかへることなどがある。次に再び扇と太刀とを持つて大まはりをし、まはりかへし、次に杵をとる。

(1)この杵を高く投げ上げては手に受けとり、右肩にかついでぼくる〳〵とその場にめぐり又めぐりかへす。この杵を肩越しに左肩にし、又右肩にもどし、めぐることがあつてなほると、

(2)この杵を前にし、手頭を中心にして、これをくる〳〵と水車の如くにまはす、これを右手、左手とする。しかもその場にめぐりつゝする。

次に杵を右肩にかつぐと、まはりもどしを幾回もする。

(3)次に右腕を上げ、その上より下へと、右腕の上を杵を轉ばす。「赤間」で杵を轉ばしたのと同樣である。たゞこれは、腕、胴體から足の先まで轉ばし、最後に落さない樣にこれを受取る。次に杵を前方に水車の如くまはすことあり。杵をかついでまはりもどしをし、次に左腕に對しても同樣にする。次に右手に、左手に、水車の振がある。

(4)次に杵を腰のまはりにして、右から後へ、左へ、前へとおくつて、ぐる〳〵とまはす。次に杵を肩にかついでまはりもどしをし、このとき袴の股立をとる。

(5)次に杵をとつて、足の間をくゞすことあり、右後から前へ、又左後から前へと出す。逆順にめぐつて、早目に又このことがある。

次にまはりもどしをし、

(6)次に、先の逆、即ち前から左右外へと出す。このこと緩急二度ある。

(7)次に、足袋につはをつけて、杵のくびれに乘り、とん〳〵と跳びつゝ平衡をとり、領の扇をとり出して開き、手離しになり、扇もてあふぐ。

かくて杵を降り、拜して入る。約十七分のものであつた。

(8)和野では、鉢卷・直面・羽織・袴の者が出て舞ひ、一旦入り、次に羽織をぬき、烏帽子がけになつて再び出、杵をとつて舞ふ。然し曲藝風のことはない。

(9)大川では、杵を曲藝風に使ふ、最後は扇舞、後に道化がつくといふ。

(10)七つものに杵が出る所には、もとこの舞があつたのだと思ふ。

五〇、笠舞

小中野では頭に菅笠を冠り、兩手に唐傘を一本宛持つが、これはやはり石神や田子の傳の樣に、三つとも菅笠であるのが古風であると思ふ。

(一)小中野では傘舞といふ。傘を手に持ちあらはれたり。「といふ幕出歌で、幕下より落めた傘が一本出、幕かげの者がこれを一文字に幕と共にとつて一振あり、これを引込める。

やがて前結の鉢卷・錦織の着物（たゞの袴裃であることもある。）烏帽・袴のものが、傘を一本つほめたまゝ持つて出、この傘を中に立てゝその場めぐりをしたり、びつこ引に跳んだりすることがあり、とんぼを切ることも兩三度ある。とゞ傘を開き、右足を伸べてきまり、又立つてその場にめぐり、この傘を開き持つたまゝ三度宙返りをする。

次に二本傘になり、右手の傘は、柄を小脇にかゝへて、腐げた方を背にする。この左右の位置の條件をかへ、又かへてもとにし、順逆にめぐり、又びつこ引でもめぐる。次に、この二本の傘をとつたまゝ三度とんぼを切る。

次に菅笠をかぶり、小刀をその中程に紙を卷いて口に咬き、二本傘を前同樣にしつゝ、順逆にめぐり、びつこ引をすることなどあり、とゞ四度程とんぼをきる。次に傘をつほめ菅笠をとり、つほめた二本の傘も一つにして持ち、宙返りをして入る。約九分のものであつた。

(二)石神では三階といふ。鉢卷・ぬきだれ・袴の者が菅笠を冠り、兩手に一つ短菅笠を持つて舞ふ。三階笠の意である。宙返りをすることもある。

第六十四圖　小中野の傘舞（上野氏寄贈）

西明寺でも、これを「三階」と言つた。

(三)田子の傳も右同樣である。宙返りもする。

二　權現舞・神送り・諸式

權現の獅子頭をまはすあらゆる場合の式を左に輯めておく。即ち舞曲の前後に演ぜられる權現舞、門打ち、舞込み、神送り、舞立ち、じつもの、後食の遊び、新築祝、草獅子、其他の特殊の獅子舞等に亘つてである。

一、權現舞

葛卷、田子、小中野、檜木、荒澤、興屋等では、舞曲の始まる前に、必ず權現をまはす。これは、惡魔拂ひを最初にするといふことの外に、舞臺淸めをも兼ねてゐるらしい。

又、岳、大償、圓力寺、遠野等では、神樂の最後に獅子を舞はす。これは、これを以て火伏せの祈禱をし、あけものをほめるのである。

門打には、この權現舞の型を以てそのまゝ戸口にまはす。左には實演に接し得た舞臺の權現舞を主にして誌す。

（一）大償・岳の權現舞

神遊びの際にはその最後に舞はれる。

權現舞の囃子があつて、はじめ・前結びの鉢卷・直垂・ぬきだれ・右肩より左脇への片襷・袴・帶刀のものが、太刀の柄に手をかけ、扇をとつて出る。

舞人が「御祈禱に」と、一句を歌へば、胴取がその後を受ける。つぼめ扇を空にはふり、これを受け、扇を開き、その場にめぐり、扇を左にとり、右にとり、車にまはし等の振あり、神哥の一句を唱へ乍ら激しく舞ふ。

次に扇を左手に、鈴木を右手に持ち、その場にめぐり、めぐりかへし、鈴木を宙にはふつては取り等あり、色々に舞ふ。この舞を下舞と言ふ。

やがて一人が獅子を捧持して出、幕前に畏つてゐる。下舞をなほつゞける。

やがて鈴木を置き、扇のみで舞ふ。扇をつぼめ、宙に投げて取ること等あり。

次に扇と太刀とを置くと、權現は立ち、順にめぐり、下舞のものは之を拜し、次に逆にめぐり、又拜する。

次に頭をとつて持ち、捧持者は尾をとり、かくて頭をふり、順にめぐり、齒打をする。

次に幕にくるまり、伸びて齒打をし、卷き戻しをする。

次に獅子頭を冠り、きまり、齒打をし、一まはりしてぢつとなつた所に老人が出る。獅子は幕前に、老人はその正面に立つて獅子を拜み、老人は神哥を唱へて拜し、順に舞臺を一まはりする。獅子はその後に、齒打をしつゝついてまはる。老人は又正面で拜し、神哥をうたひ、拜し、次に厠前より、奉納の米を盆に盛つたものをとり、これを捧げ持つて老人が神哥をうたひ乍ら獅子に向ひ、撒米し、拜し、順に一まはりし、獅子もまはり、正面で拜し、米を收める。

次に御神酒をさゝげ、一まはりして正面で拜し、これを置き、次に水槽に柄杓を添へたものを老人がとつてまはる。次に槽を置き、柄杓に水を汲んで拜すると、これを獅子にくはひさせる。老人がこの獅子を導き、舞臺を外れて、常居や臺所の方にまで行き、爐や火鉢やかまど等に水を少しづゝかけてまはる。最後に殘つた水全部を、屋の棟にかけて、再び舞臺に出、老人は柄杓を戻し、拜して入る。

あと獅子は伸びて齒打をし、一めぐりして頭を外し、拜して入る。

右は大償の舞ひ方を誌したのであるが、岳のも右と全く同じである。

扨て門打の際は、豫め權現の訪れを知り、家々では水槽に水を滿たして戸口に出しておく。權現は先づ庭先で下舞を舞ひ、次に權現の頭を舞はし、最後にお米、其他のあげもの及び水を讃め、次に權現は水を入れた柄杓を銜へ、家の中に入つて行つて、その家にあるだけの爐をめぐり、柄杓の水を僅かづゝ夫々にかけてまはる。最後に家の入口に殘りの水全部をかけ、以上を火伏せの祈禱とする。又家々の所望によつては、弱き子の衣裳を食べてやつたり、その頭をかぢつてやつたりもする。これは、大償・岳とも、同じである。

上げものの讃め歌といふのが、大償、岳の諸本にある。左に大償本を底本にして誌しておく。

上げもの、ほめ歌

晴山本には、「權現の歌」として、米・麻麥・大豆・粟・酒・衣類・帶・大刀・水（三首）・糸・煙草の都合十三首を誌し、岳口承には、米・錢・水（二首）・豆・小豆・煙草・酒の都合八首あり、菅原氏本には、米・粟・大豆・糸・衣・刀等の十六首がある。今大償本を底本にして誌す（但し細かい異同は省略する。）

米　四七五 こ の 米 四七六 を　まくたび毎に神々は　和合の利益いやましにける

同　四七六 おさゞ米　あさわの米をおしまいて　いつもよからう　祝ひ申すぞ

▲（白米をさらり〳〵と押まいて　何もよかれといひい申ぞ〳〵晴）

栗　四七七 ▲（御祈禱にまつ花米をおしまいて　いつもよかれ祝ひ申せや、菅）

稗　四七八 山畑につくりあらしのおのこ草　あはのなると誰かいふらむ

豆　四七九 五草の種つものまで供へつゝ　清らかなるを納受したまへ

蕎麥　四八〇 三しま米手にとりそへて拜れば　四方の神は受けてよろこぶ

稻穗　四八一 あまのさだなが田の稻ほ下しつゝ　めぐみも深き大年の神

煙草　四八二 松島や色よきたばこをそなへつゝ　和合の利益いやましにける

▲松島やおしまがうらのしまたばこ　ふくらくふいてしまめぐりせうや（岳）

▲松島や色よきたばこをあけろかし　ふぐりとふいて國の土産（晴）

稚子（これは子供達がよく育つ樣にと、權現に頭などを噛んでもらうときの歌であらう）

みどりご四八三をいだきそだてしあはれみも　親にもまさる情とぞきく

同　四八四 惡魔をば七つ五つにきりたてゝ　みつつじにこそきりぞすておく

同　四八五 他國より惡魔風をもふきくれば　惡魔なはらふ伊勢の神かぜ

同　四八六 天地に二つみたまはあらはれて　人を助くるつかひたのもし

水　四八七 この水をいづくの水と人とはゞ　七澤こえて七瀧の水

▲（右の歌の代りに）いふき山いふやましますいふき山　おろちのどくのさむる山井〳〵（晴）

同　四八八 水はしら氷のはりに雪のけた　霜のむなぎに露のふきくさ

▲水柱、氷の棟に雪の桁　雨の垂木に露のふきくさ（羽）

▲水はしら　氷のたるきに水はりて　霜のむなぎにいすゝかしこし（岳）

同　四八九 しつかなるもとの社のたまり水　たまりの水に神をみるらむ

▲（右の歌の代りに）へちはやふる神代のみよの水なれば、にこりけかれを見よそ清むる〳〵（晴）

▲へにこりなき心の水のいつみまて　老せぬ齡くみてしるなり（菅）

▲へ五十鈴川清き流れにやすらひて　二つ岩根にしきしかしこし（岳）

酒　四九〇 みかのはら天のかむざきみてもりて　しろかみそむる神のおほみき

▲みかの原あまのかん酒みてもれば　ひらかにやどるうづのおふみぎ（羽）

▲（尙この歌あり）この御酒はいかなる御酒だと思召す、晉に聞えし加賀の菊酒（野崎本）

衣類　ぬれ[四九一]きぬを神にさしあげ拜むれば　惡魔をはらふ三柱の神

（次の三首は晴山本にあるもの）

帶　〈神世より[四九二]　むすび定めし二つおび　とぐにとかれぬ神ハぬるかな〳〵

太刀〈出[四九三]雲路や　いづも八重垣つまこめて　くだす劍に罪ぞきれける〳〵

▲（右の歌の代りに）〈此刀文殊のつくりし刀なり　やいはの鰒あけて通ふせや（菅）

糸〈あを[四九四]やきの糸よりさけてよりさけて　よりさけたりや青やきの糸〳〵

▲（右の歌の代りに）〈白糸をよる程ならバとまれかし　糸になさけのよるにこそあれ（菅）

（次の一首は岳本にあるもの）

錢〈ふる[四九五]やなるさしも棟木も金となる　まして垂木は小金なるもの

×

尙大儀には、獅子の舞ひ方の一つに、しとげ獅子といふのがある。これは庭に白を出し、一人が杵を持つて搗く振あり、他の一人が〈らなどを持つて餅をこねる振があるところに獅子が出て、餅を食べようとする所を演ずるといふ。何かの祝ひごとに出るらしい。

興屋・小瀧・田子等の花ほめ

あげものゝほめ歌ついでに、番樂にある「花ほめ」のことを誌しておく。但しこれは權現についてゐるものといふわけではない。

興屋では一人の者が木の枝に樣々の短册、萬年香といふお菓子、其他の花に似た菓子、書き出し等を下げたものを持つて出て一舞ひあり、次の樣な口上を言ふ。

〈とらのをか（八重櫻の名）ふげんそか、とらのおすみの唖櫻、鹽釜の花、如何でこれにまさるまい、そのため御禮左樣々々

又、小瀧では左の樣に謠ふ。

〈皆さん喜ぶは稻の花、先づは東西、われらよろこぶはこの花。

田子では扇をとつて一舞あると、左の樣に歌つた。

〈たゞかぐらは花だもの、花だによりて臙宜は喜ぶ、しいざの臙宜も見ては喜ぶ。（花の披露あり）

〈花神[四九六]子の左の袂に菊しめて、菊諸共に久しかるべし。

又富根でもあげものを持ち、これに扇をとり添へて舞ふ。これを花舞と言つた。

（二）砂子澤の獅子舞

砂子澤では、獅子の額の皺〰〰を、意味は不明であるが、ごんくろうと言ふ。こゝの獅子舞の足の踏み方は特にやかましい。獅子を冠つてから、中頃のお米をあげることのある前に、「水叶」といふ字を書く樣に踏む。これあつて火伏せになるのだといふ。又、丸字と稱し、丸つに踏んで丸字を切ることもある。これが惡魔拂であるといふ。神哥を三つか五つか或は七つの數程歌ふ。

（三）圓萬寺の獅子舞

こゝのは後の田子の舞ひ方に似てゐる。もとは同じ舞であつたと思はれるが、此處ではやはり神樂の最終に舞ふ。

鉢卷・右から左への片摩・袴・帶・刀のものが、扇を開き持ち、太刀の柄に手をかけて出、扇の曲取りなど色々あり、次に扇を著め、又曲取りあり、これを腰にさし、無手になつて兩手に印を結び、進み退り、順にめぐり等して舞ふ。

次に太刀と扇とをとつて前に置き、獅子の頭を拜んで兩手にとり、齒打をさせつゝ三方に拜み、順にその場にめぐつて幕をからみ、又からみかへしをすることなどがある。

次に獅子頭を冠り、高く伸び、下し、幕をからみ、又からみかへしをする。

次に別當が出る。盆に米を盛つたものを持ち、これに幣束を持ち添へ、順にめぐり、米をつまんでは獅子に撒きかけ、拜む。獅子は齒打をしつゝ大いに狂ふ。

次に別當は白布を持ち、順に一めぐりし、獅子に向つてぢつとなつてゐると、獅子もしばらくぢつとする。この間に神哥がうたはれる。次に獅子は口をあけ、別當は是に布の片はしをくわいさせる。

別當はその場に一めぐりし、獅子は布をする〳〵とたゞる。次に別當は扇を持つて振あり、獅子にその扇を食べさせる。

次に同樣にして太刀を食べさせる。

次に一振あり、獅子は先づ扇を吐き出し、次に折つて束ねた布を吐き出し、次に太刀を吐き出す。これらを一々別當が受取る。

次に獅子は立つて高く伸び、齒打をすることあり、囃子を打とめると、別當は獅子を拜んで入る。

（四）遠野の獅子

遠野の獅子も以上のとは僅かの形式の相違があつた。

八幡の獅子

こゝでは下舞を略し、はじめ獅子を捧げたものと、獅子を冠る者とが出る。獅子方は先づ獅子に向つて拜み、兩手に印を結ぶことあり、入れかはつて同じくし、次に獅子を戴き、とり、右に左にかざしつゝ振がある。獅子を捧げてゐたものはその尾をとる。

扱て獅子は高く伸び、齒打をしつゝ左右に激しく振がある。その場にもめぐつて尙激しく狂はせることあり、そのうちに別當が、水槽を携へて出る。

胴前で獅子に向ひ、神歌を一つ出し、獅子に幣をくはへさせる。周圍の一同が、別當の神哥を受けて合唱する。獅子は幣をくはへて一振あり、次に「この酒は」と別當の歌一句あり、一同はこれを受けて合唱し、獅子はその御酒を呑む樣なこなしがある。次に別當は拜し、「惡魔を」と歌ひつゝ順に一めぐりし、一同は神哥を受けて合唱する。胴前で又別當が歌ふと、受けて一同が歌ふ。

これで獅子はその場にめぐり、頭を高くして振あり、又同當が歌を出して順に一めぐりする。これで同當は拜して退る。

次に舞人は獅子頭を冠り、大きく左右に振がある。次に帶をくはへ、一めぐりし、胴前で首をふり、帶をおとし、頭を外し、齒打あり、次に鳴居や柱を噛みまはる。

次に神樂の幕を外し、神上げの神歌を幾つか一同で歌ふ。獅子は家の中で一舞ひし、次に舞臺に戻つて一振あり、舞ひ收めると獅子頭をたゝみ、太鼓を伏せて、その上に獅子を安置する。かくて一同は最後の神のほせの哥（神送りの項參照）をうたひ、やがて打とめとする。

野崎の獅子

野崎のは右の八幡のと小異があつた。

（はい　この家は

と神歌をかけつゝ、前結びの鉢卷・襷袴・片襷・袴の下舞の者が三人出て、幕前に二人、胴前に一人居て相對し、神哥を歌ふ。

はじめはつぼめ扇で舞ひ、次に扇を開いて舞ひ、次に鈴を右手に、扇を左手に持ち、神歌を出しては鈴を投げとることなどがあり、場所を色々に變へて舞ふ。

とゞ三人は正面向に並び、一振あつて拜して入る。以上が下舞であるといふ。

尤も一故老の傳へてゐる所によれば、獅子頭の出てゐる前で、はじめ三賓に太刀を敷せたものを持つて舞ひ、次に着物か帶かを疊んだものを同じく三賓に敷せ、これに幣束を持ち添へて舞ひ、次に獅子を舞はせるといふ。

やがて權現を捧持せる者、及び權現を冠る者が出る。前者は平服、後者は平服に片襷の支度である。胴取は胴を輪からみに打ちつゝ神送りの神歌（神送りの項參照）をうたふ。

これで權現を冠る者が、前結びの鉢卷になり、獅子をとり、齒打をさせつゝ一まはりし、幕を卷き、卷きかへし、齒打あり、又小まはりし、胴前に高く伸び、卷いて卷きかへし等をする。

かくて神哥を歌ひ、舞ひつゝ、帶をくはへ、柄杓をくはへることあり、「ハー神のほせ」の神歌で、獅子は臺所の方にまで行き、盧に水をかけ、軒場にもかけることなどがあつて舞を終へる。

尚、本式には、權現は雌雄の二頭が出るといふ。

（五）田子の獅子舞

こゝでは舞曲を神樂とは言はずに、獅子舞と總稱してゐる程で、その最初には必ずこの權現を舞はす。門打の際にも、この通りを、はじめから演ずる。尤も門打の際には、身固めの折に差出されるものを一々食べてやるので、相當に時間がかゝるといふ。

平服の者一人が出て、舞臺の、幕に向つて左手の机の上に安置してある獅子頭に對し拜禮し、これを取り、胴取の右手の隅に行つて蹲り、これを捧持してゐる。

續いて鉢卷・襷袴・帶刀のものが苔め扇を採つて出、胴取に相對し、右膝を立てゝ控へる。胴前の神哥あり、舞人はやがて立つてその場にめぐり、めぐり返し、扇を投げ取ることあり、次に扇を開いて同樣に舞ひ、扇を左にとり、右にとる。次に又扇をつぼめて振あり、次に扇を開き、兩手に印を結んで舞ふ。

次にしゞき帶をとり、これを投げ上げてとることあり、次にこの帶を獅子頭に一寸かけ、すぐとつて、その兩端を結び合せ、これを右肩から左側へ片襷にかける。次に太刀をとつて一振あり、その太刀を拔き、鞘も左手にとり、その場にめぐりなど一舞あつて太刀を收め、拜し、これを胴前に置く。

次に袖をとつてその場にめぐり、めぐりかへし、一振あつて權現に向ひ、拜し、拍手し、更に手をついて拜す。以上が地舞である。

次に獅子頭を兩手にとる。今迄捧持してゐたものは、その尾をとる。かくて兩手にとつたまゝ獅子を色々にまはす。始終齒打をし、めぐつてはめぐりかへし、獅子の幕を己が身にからんではほぐすことあり、とゞ胴前に至り、胴取に向つて齒打をしつゝ激しく狂ふ。この時は胴も強く打鳴らす。足踏みも色々あり、片膝をつくこともある。又再び幕をからみ、からみかへすことがある。

次に兩人は獅子を冠る。この時紋付などを着た老人（別當）が、太刀を右手に、扇を左手に採つて出、一振あると、獅子はこれに對して荒れた振がある。次に老人が扇を開き、これに太刀を敷せて差出す。獅子はこれを見込んで齒打一しきりあり、とゞこの太刀をくはへ、胴前に背伸びをし、くとたてがみを拂ひ、ぢつとなり、次に頭を上げてその場に遂に順にめぐり、又はげしく頭を上げ下げして振あり、次に太刀を吐き、齒打をし、尚色々に舞つてとめとする。もとはやはり太刀以外にも色々飲み込んだことゝ思ふ。又撒米のこともあつた筈である。とゞ頭を外すと、これを以前の所に供へ、なほ一舞ある。老人は獅子頭に對し、拜をして退る。

權現の舞ひ方は、きび〳〵として美しかつた。以上約三十分。次に田子本にあるこの折の神哥を誌しておく。

權現舞神樂歌（傍書は一本に據る）

門九七御新綺には千代の御神樂舞遊ぶ　參らせたりや重ねかさねに〳〵
うゝなこ四九八祭す　濯か鳴すや山男　ならした後を君に讓らうや
門九九幸福と　高天原に神遊ぶ　斫て闢る天の岩戸に
五〇〇新玉や年の始の年男　米打まいて御堂をひらこうや
五〇一新玉や年の始の門松を〳〵　迎へて參る峯の若松
五〇二新玉や年の始のとしなよバ〳〵　七重にはいて祝ひ申せバ

手綱の歌

五〇三伊勢之國の長者ひくる踊る駒　踊ると見せて手綱よりかけ
五〇四青柳の糸よりかけて　よりかけたりや　青柳のいと
五〇五しんさくは　今こそ入ります長濱に　あしげの駒に手綱振り立て〳〵
五〇六顧詩草は　雪の下から急きます　何よりいそぐ　まんさくのはな〳〵
五〇七拜め〳〵と唯拜め　拜めば神は利生成もの〳〵

鋼の哥

五〇八あの鋼　いか成鍛冶は打そめて　文殊の鍛冶はうとう國かな
五〇九東より　小金に增たる旭さし　七重の雲を後で明そうや
五一〇鋼より　鋼の山のひげ男　やいばの鋼　分で　とらふや〳〵
五一一御保神をあそばせ申せば面白し　なほしほ〳〵と幸のさと〳〵
五一二左より右へと廻る神なれば　のうまくさまく祝ひとゞまる〳〵

外獅子の哥（口を前に向けて舞はす）

五一三 小夜ふけて、向ひの浦を見渡せバ、悦び山のよついはの松
五一四 ひきかへて　なむあみまするさをりなし　さをらのはつにさをりくまなく
〳〵

内獅子の哥（權現を自分の方に向けて舞はす）

五一五 沖の波のあしげの駒にさも似たり　乘鎭めたりや　かもの鳥かな

（これが濟むと非常にはげしい舞になる）

砂米哥（獅子をかぶると、すぐ洗米をふつて別當が出る。）

五一六 砂米は　天から上るの砂なれば　米一
五一七 砂米は　天から上りの砂なれば　又まく砂は祝ひとゞまる
五一八 いさご米　をんじを護る米なれバ　惡魔を流し福が入ります
五一九 なよれ〳〵と唯なよれ　なよるは神の御幣なるもの
五二〇 神子の掌に　すゞ取りさげて拜むには　四方の神は受てよろこぶ
五二一 身堅めは　おうつる長ずるおゞします　熱田の明神ねぎて長ずる〳〵
五二二 白銀を柄杓にまけて水汲めば　水よば汲まぬ　さよに社汲む
五二三 もたり〳〵　しゝもてくたる　もたりや　ハア
五二四 みとり子は　いだき育てゝ立いるな　親も增る神の情ぞと聞

今朝晝晩始の哥

（此處ハ朝ノ風ト晝ハバ晝ノ頃ト余ハコレニナラ〈）

朝の頃吹來る風ゞあやの風　神風ならバなほや風吹く

（六）夏屋本の「獅子之法界」

黑森の古老の談によれば、もと「西の小路」といふ舞ひ方あり、

この折には權現の緣起を唱へて舞つたものであるといふ。この權現の緣起といふのは、思ふに、夏屋本に見えてゐる左の樣なものであつたらう。

獅子之法界

△抑此之御獅子ト申ワソモ、唐土ノスイシヤクニテモマシマサス、我朝之スイシヤクニテモ、マシマサス、是ヨリモ五天竺ニ、リヨウソウカイト申ホラニ、ソモ黑獅子青獅子金成獅子トテミツノバンジヤカアラワレタモウ、クロキシシヲハ、クマノゝ權現ノ御スイシヤクトモイワイ奉ル、アヲキシシヲハ、ハグロノ權現ノ御スイシヤクトモユワイ奉、金ナルシシワ國々郡々先マイリタメイ處ニワ、バントウワハンカコク、ツクシワ、キンセイコゴノクニ、寺ノシヤウモ四拾四處、川ノ性モ四十四處、合テ八十八ケ處カトコロニワ、ベツブトコウリヲ、トトノエテ、マツヲソウタイ、ヲンミ耳フタツノアイタ、ツンモウラク、ツンモウラクト、モウテマイルコソ、メテタサヨ。

ネコデノ小太郎トノワ、ヨキヒニセンジヲトリ地ヲ引平ラク、ナワヲハリ、ツクリタテタル君ノ、ヲダイリナレハ、イカデカコレニ、マサルベシ、ヲウヒキテモノニトリテワ、トレトレソ、ヲナチロウトウタマワラハ、ヨキロウトウヲ、タマワルベシ、ヲナジキヌヲ、タマワラハ、ミノキヌノ上品ヲ、ハシラソロイテ、タマワルベシ、ヲナジヘイシヲ給タルハラヘイジニクチツツマセ、センモニセンモ給、ヲサカツキニトリテワ、トレトレソ、アウレニミエソウロウ、クスノキノ、モト打ゴキノ、ヨニヲウケキヲ、トリイタシ、ヲサカナニ、トリテワ、ドレトレソ、ナツトウノヒツタレノ、サトノ、ヲトナヲトナノ、エイクワノ花ノ、ヒラキマメ、ヲサクトリニワトレトレソ、ハナコソキクコソ、ツボムコソ、サユワイサント、ゴユワイコント、ヲシトメイヒキトウメイ、シンコロロツハイ、タベソウライハ、獅子ワ西ノコウジヲ舞イサブロウ、猫手ノ小太郎トノワ、サケニエッテネッテ、チコウテ東ノコウジヲマイサブロウ、ソレソレハヤシテ、タビタマイ、シンジンノトノタチ。

此獅子ノ、コノシシノ、モウタルチヤウシワ、トレドレソ、シウマウカ、コマウカ、リヨウラカ、イリヒヲ、カエスワ、マンボウカ、シンナンダゲノザンザラキ、ナカノリヤウテ、トウムソ、トウムゴソ、ドウリヨ、こカイレバ、トウムゾ、モタリモタリ〳〵〳〵〳〵。

〔附記〕　萬卷傳書の「神樂ニ可動次第」中にも、「獅子ノ本懷ヲ設ク事」といふのがある。（附錄參照）

（七）和野の獅子舞

和野には、門打の折に、最初に謠をかけて舞ふ舞がある。これは烏帽子・直面・千早のものが扇と錫杖とをとつて、權現舞の拍子で舞ふのである。次に下舞あり、同じく扇と錫杖とを持つた者が、はじめは一人、次に二人出て舞ふ。次に權現の頭を冠つた舞になるといふ。

（八）下岩泉本の權現神哥

下岩泉本には、左の神歌が見えてゐる。

權現神歌

五二五 一おぼすなの、立見ル門ハ、よろづよし、よろづがよいバ、さゆわいもよし。
五二六 一祝イにハ、初花よねヲ、うぢまいテ、イツモよかれと、就申せハ
五二七 一あおやげノ、いとおハ、かけニ、よりかけテ、よりかけたりや、あおやけノ糸
五二八 一門わきノ
五二九 一あさのころ、あやの風か、吹來り、神風ならバ、なもや黑吹ケ
五三〇 一よろそらや、七夜ノ星ハノもれとも　神のうちとハ、くもりあらされ
五三一 一たキノせつ
五三二 一日ハくれる、かしまハいそぐ、もかみ川、おかまてトうる、白イトの瀧
五三三 一神みちハ、ちみちかもむみち、みち七ツ、中なるみちハかみのかよみち

第六十五圖　中野の權現舞
（北村古心氏寄贈）

五三二一神のぼり、こうたか山ハ、くもはれて、のぼらてあすべよ（ママ）乃神々

（九）中野本の權現舞

中野の神樂に於て、權現舞の折に歌はれる神哥は、左の如くである。（日本民俗二ノ十二）

權現舞の歌

○百八の數珠さら〳〵と押揉んで　祈れば叶ふ幸の里
○我が法は天より劍はおそろしや　日頃の惡魔はらひ申せば
○厚取るうらのエデこそ目出度けれ　末廣かれとよくは書いたり
○舞ならば　舞こそ舞はれ和に　舞出る鳥のなをやかるさうに
　此處で舞手は禪を懸ける
○ヨヲナガヒクにをどるとも　をどると見せて手綱よりかけ
○大黑の衣の袖は廣ければ　結ぶにあまる千代の喜
○うぶすなを　手に取り初めて拜むには　拜むは神の利生なるもの
○左○より右に廻るチィの神　チイ早かれと利生早かれ
○幸や高天の原に神遊ぶ　うたへば開ける天の岩戸に
　此處にて前打（齒打）の舞になる
○遠寺の圍垣の内の八重櫻　花は散れども（開）内を散らさず
○重くとも輕くはのぼる不動坂　藥師の淨土ヒグ
○熊野路のキリヒの御山の椰の葉を　片手に持ちて那智に參らう
○御新禱に　千代の御神樂まゐらする　まゐらせたるは　かさね〳〵に
○おさご米セショーを守る米なれば　尙まくさごは祝ひ止まる

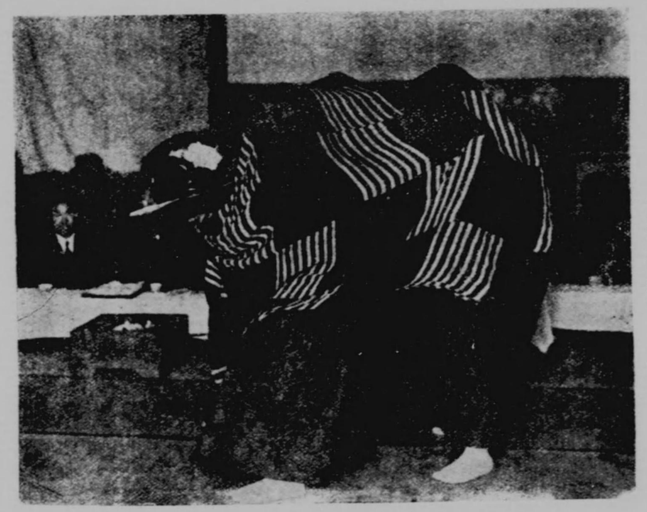
モウタリ
○舞うたり〳〵　獅子參て舞うたり　あやのこぢから獅子ァ出て參る
　身固の歌（このとき獅子に頭などを嚙んで貰ふ。）
○身固（五四七）には　誰か請じるおはします　熱田の宮の神を請じる
○狄（五四八）奉や　シメの神にあらはれて　惡魔は外に福を入れます
　あふりあげ（激しく體を屈伸さす）
○青柳（五四九）の糸よりかけてよりかけて　よりかけたるは青柳のいと
○青柳（五五〇）の横より高くおいのぼり　いかなる神はなほやかるべし

（一〇）檜木熊野宮の權現舞

鉢巻・紋付・袴（藁なし）の者が、扇と數珠とを採つて出、地舞を舞つて後獅子を冠る。次いでもう一人の同じ支度の者が出て、その尾をとる。

權現舞歌（武本は鈴木氏本、傍書は杉山氏本による異同とす）

五五一イヤアハア、幸ひはヤ　高天ヶ原に神遊ぶ　哥へばあくる　天の岩戸に〳〵
五五二イヤアハア、御新禱にハ　千代のヤ御神樂參らする　參らせたりや重ね重ねに〳〵
五五三イヤアハア、神子の手に　鈴取添へて拜むには　四方の神ハ　受けて喜ぶ〳〵
五五四イヤアハア、扇取る　うらのヤ身こそ目出度けれ　末廣よしと（檜ば畫い）居場かへたり〳〵
五五五イヤアハア、舞ひまはヤ　舞こそ舞ふべきやひらかに　野邊きやう鳥の羽をヤのすとり〳〵
五五六イヤアハア、此家の四ッなる角の松鏡（增）　くもりハまさで　光りごそまし（す）〳〵
五五七イヤアハア、御船主や　八重のや鹽風こぎ分けて　檜櫂を立て　こぐは早船〳〵
五五八イヤアハア、山の神　育つハ何國奥山（の）に　外山が先きの榊葉の本（もと）〳〵
五五九イヤアハア、百八のヤ珠數さら〳〵と押もんで、祈ハ叶ふ幸ひの里〳〵
五六〇イヤアハア、我がほふハヤ　天から劍（つるぎ）おそろしや　日頃（ひごろ）の惡魔拂ふと申せば　進むと申し〳〵
五六一イヤアハア、（内獅子は下ぶくの）（巴紋ハ外獅子の印に拂はれて）　日頃の惡魔拂ふと申せば　進むと申
五六二イヤアハア、檜現堂ハ立よる門（ごと）ハ萬ずよし（目出度けり子孫はんじやうと守り給や）祈りもそや（ママ）
五六三イヤアハア、（右）左より右へ廻る智惠の神　智惠里（ちえうり）神ハ利生はやかる〳〵
五六四イヤアハア、沖の浪　芦毛の駒にそもにたり　乘りそろへたるかもめ鳥かや〳〵
五六五おもくとも　かるくや登る不動坂　諸行堂を見るニ付ても〳〵
五六六イヤアハア、熊のでハ　きりめのうやまなぎのハも　片手にさげて先に參へろふや！〳〵
五六七おさご（おさぐ）米はせ（セ）ショーを守る米なれば　乃ふまくさくハ祝ひとゝまる〳〵
五六八（蘇の）糸　豐つるぎにも猶まさり　日頃の惡魔拂ふと申せば　進むと申し
五六九イヤアハア、身がために　たれよかしやうずるおはします！熱田の宮の神ハしやうずる〳〵



第六十五圖　中野の權現舞
（北村古心氏寄贈）

神のぼす、こうたか山ハ、くもはれて、のほらてあすべよ　乃神々

（九）中野本の權現舞

中野の神樂に於て、權現舞の折に歌はれる神哥は、左の如くである。（日本民俗二ノ十二）

權　現　舞　の　歌

○百八の數珠さら〳〵と押揉んで　祈れば叶ふ幸の里
○我が法は天より劍はおそろしや　日頃の惡魔はらひ申せば
○榊取るうらのエデこそ目出度けれ　末廣かれとよくは書いたり
○舞ならば　舞こそ舞はれ和に　舞出る鳥のなをやかるさうに
此處で舞手は裸を懸ける
○ヨワナガヒクにをどるとも　をどると見せて手綱よりかけ
○大黑の衣の袖は廣ければ　結ぶにあまる千代の喜
○ぶすなを　手に取り初めて拜むには　拜むは神の利生なるもの
○左より右に廻るチイの神　チイ早かれと利生早かれ
○幸や高天の原に神遊ぶ　うたへば開ける天の岩戸に
此處にて前打、（鬪打）の舞になる
○遠寺の閼伽の内の八重櫻　花は散れども（間）を散らさず
○重くとも輕くはのぼる不動坂　藥師の淨土ヒダ
○能野路のキヲヒの御山の椰の葉を　片手に持ちて那智に參らう
○御祈禱に　千代の御神樂まゐらする　まゐらせたるは　かさね〳〵に
○おさご米センヨーを守る米なれば　尚まくさごは祝ひ止まる

モウタリ
○舞うたり〳〵　獅子參て舞うたり　あやのこゝから獅子ア出て參る
身固の歌　このとき獅子に頭などを噛んで貰ふ。）
○身固には　誰か請じるおはします　熱田の宮の神を請じる
○伏拜や　シメの神にあらはれて　惡魔は外に福を入れます
あふりあげ（激しく體を振伸ます）
○青柳の糸よりかけてよりかけて　よりかけたるは青柳のいと
○青柳の嶺より高くおいのぼり　いかなる神はなほやかるべし

（一〇）檜木熊野宮の權現舞

鉢巻・紋付・袴（傳なし）の者が、扇と數珠とを採つて出、地舞を舞つて後獅子を冠る。次いでもう一人の同じ支度の者が出て、その尾をとる。

權　現　舞　歌（武本は鈴木氏本、傍書は杉山氏本による異同とす）

〈イヤアハア、幸ひはヤ　高天ヶ原に神遊ぶ　ヨヘばあくる　天の岩戸に〳〵
〈イヤアハア、御所瘞にハ　千代のヤ御神樂參らする　參らせたりや重ね重ねに〳〵
〈イヤアハア、神子の手に　鈴取添へて拜むには　四方の神ハ　受けて喜ぶ〳〵
〈イヤアハア、扇取る　うらのヤ身こそ目出度けれ　末廣よしと居場かへ　檜ば畫いたり〳〵

一、權　現　舞

〈イヤアハア、舞ひまはゞ　舞こそ舞ふべきやとらかに　野邊きやう鳥の羽をヤのすとり〳〵
〈イヤアハア、此家の四ツなる角の松鏡　增　くもりハまさで　光りこそまし〳〵
〈イヤアハア、御船玉や　八重のヤ鹽風こぎ分けて　檜櫂を立て　こぐは早船〳〵
〈イヤアハア、山の神　育つハ何國奥山に　外山が先きの椿葉の木〳〵
〈イヤアハア、百八のヤ珠數さら〳〵と押もんで、祈ハ叶ふ幸ひの里〳〵
〈イヤアハア、我がはふハヤ　天から倒おそろしや　日頃の惡魔拂ふと申せば　進むと申し〳〵
〈イヤアハア、白納ハ外獅子の印に拂はれて　日頃の惡魔拂ふと申せば　進むと申し〳〵（内獅子は下ぐくの）
〈イヤアハア、權現堂ハ立よる門ハ萬ずよし　祈れハ叶ふ幸ひ祈りもそや（マヽ）の里〳〵（右　左に）
〈イヤアハア、左より右へ廻る智惠の神　智惠里神ハ利生はやかる〳〵
〈イヤアハア、沖の浪　背毛の駒にそもにたり　乘るそろへたるかもめ鳥かや〳〵
〈おもくとも　かるくや登る不動坂　諸行堂を見る二付ても〳〵
〈イヤアハア、民のてハ　きりめのうやまなぎのハも　片手にさげて先に參へろふや〳〵
〈おさぐ米（はせ）お千行守る米なれは　乃ふまくさぐハ祝ひとゝまる〳〵
〈麻の糸　惡つるきにも猶まさり　日頃の惡魔拂ふと申せば　進むと申し
〈イヤアハア、身がために　たれよかしやうずるおはします　熱田の宮の神ハしやうずる〳〵